

# 小野文庫所蔵忍頂寺務宛書簡目録・解題（附・差出人氏名リスト）

内田 宗 一

## 解題

本稿は、大阪大学附属図書館蔵小野文庫<sup>422</sup>（「忍頂寺務宛書簡」）の目録である。小野文庫<sup>422</sup>（「忍頂寺務宛書簡」）に含まれる忍頂寺務宛書簡計一三六五点を差出人氏名および差出日付によって配列して番号を付し、さらに個々の書簡に関する情報を整理してまとめた。忍頂寺文庫・小野文庫には、小野文庫<sup>422</sup>（「忍頂寺務宛書簡」）に含まれる以外にも、個別の資料の間に挟み込まれるなどして忍頂寺務宛の書簡が保管されているケースがあるが、そうしたものは今回の対象に含めていない。

小野文庫<sup>422</sup>（「忍頂寺務宛書簡」）の概要や収蔵の経緯については内田（二〇〇七）で述べているので、参照されたい。要点のみ再度簡潔に述べると、小野文庫の書簡資料の受け入れにあたっては、書簡が忍頂寺務自身およびその周囲の人々のプライベートに関わる内容を含んでいる可能性を考慮し、差出人別の整理が一通りなされた段階で、務の令嬢で本資料の旧蔵者である小野麗子氏に差出人リストの点検を依頼、親戚や個人的な知友から差し出された書簡を選別して小野氏に返却し、それ以外の書簡を大阪大学に収蔵するという手続きを踏んだ。ただ、小野氏にとっても、差出人の氏名のみで判断を下すことは困難な作業であったため、結果的には、研究や著述活動とは関わらない、私的な関係にもとづくと思われる人物から

の書簡もあわせて含みこむ構成となっている。また、資料点数について、内田（二〇〇七）では受け入れ時の資料にもとづき一三八八点と、青田ほか（二〇〇八）では一三六六点と、それぞれ報告していたが、その後の調査の過程で、受け入れ時の数え違いを訂正したり、忍頂寺務以外の者に宛てた書簡が一部混入していたのを区別して整理したりした結果、最終的には冒頭に述べた通りの一三六五点となった。

小野文庫<sup>422</sup>（「忍頂寺務宛書簡」）に収められる書簡資料の形状の上での特徴として注意が必要なのは、封書の大半に関して切手部分が切り取られており、消印が欠落してしまっているという点である。そのために書簡の差出年月が不明となっているものも多い。なお、切手が切り取られた封筒の表面に、小野麗子氏らしき筆跡で鉛筆によって年月が書き入れられているものもあるが、中には書簡の内容と合わない誤った記載もあるので、慎重に判断することが必要である。

差出人は、連名で記されている差出人も含めて数えると、個人名のみで二〇〇名を超える。具体的な氏名を一部抜き出してみると、飯島花月、石川巖、石割松太郎、伊原敏郎、頼原退蔵、尾崎久弥、川嶋禾舟、河竹繁俊、五世清元延寿太夫、齋藤昌三、菅竹浦、関根正直、反町茂雄、高野辰之、坪内逍遙、中村幸彦、南木芳太郎、野間光辰、八代目坂東三津五郎、英十

三、藤井乙男、藤田徳太郎、水谷不倒、三田村鳶魚、宮武外骨、森銃三、祐田善雄、若月保治、渡辺霞亭など、錚々たる面々である。近世文学・歌謡研究者を中心に、蔵書家や古書店主、芸能関係者など幅広い顔ぶれが並んでいる。これらのうちで書簡点数が最も多いのは三田村鳶魚で、一四九点を数える。その差出年月も、大正一三（一九二四）年二月から昭和二五（一九五〇）年三月にかけてと長きにわたっており、務と鳶魚との深いつながりが窺われる。なお、鳶魚に関しては、本報告書所収の内田宗一「書簡資料から見ると忍頂寺務」でも述べたように、天理大学附属天理図書館にも務宛書簡が四〇点所蔵されており、両者をあわせて参照することで情報を補完しあうことが可能である。務のみならず鳶魚の活動のありようを知る上でも貴重な資料となるであろう。

小野文庫<sup>422</sup>「忍頂寺務宛書簡」所収書簡の差出年月は、明治三七（一九〇四）年一二月から務の死の翌年にあたる昭和二七（一九五二）年一月までとほぼ半世紀にわたる。明治三十七年は務が洲本中学校を卒業した年であり、期間のみを見れば、務が故郷の淡路を離れて神戸高等商業学校へ進学して以降の人生を広くカバーしていることとなる。ただし、書簡の点数は時期によって大きく差があり、明治から大正前半にかけての書簡は割合としてはごく少ない。分量的に中心をなすのは、大正一三（一九二四）年に、務が『大江戸之研究 延寿清話』を発売して著述活動を本格的に開始して以降のものである。

書簡の内容は多岐にわたるが、本公募共同研究のテーマである近世風俗文化学の形成という観点から眺めた場合には、

近世風俗文化学に関わる人々の交流・ネットワークの様相  
忍頂寺務の蔵書形成過程

という大きく二点を考察する上において、極めて高い資料的価値を認める

ことができる。

の近世風俗文化学に関わる人々の交流・ネットワークの様相の分析という点に関しては、差出人と務との二者の間での交友のありようが分かるのはもちろんのこと、書簡中に出てくる差出人以外の人物に関する話題に注目することによって、務がどのようにして研究者や蔵書家たちとの間に人脈を広げていったのか、その過程を確認できるケースが多く存在するという点も興味深い。

まず、前者の差出人と務との間の直接的な交友による人脈の広がりという点から言えば、『大江戸之研究 延寿清話』創刊号（大正一三年三月）の送付に対する、幅広い人々からの礼状が多数収められている点が注目される。さらに精査していくと、創刊号を送付するに際し、例えば、三田村鳶魚に対しては崇文堂気付、関根正直に対しては明治書院気付と書肆を経由して、和田萬吉に対しては務が和田の勤務先と誤認していた東京音楽学校宛に送られていたことが、それぞれの書簡の中の言辞から判明する。このことは、務と彼らとの接点がそれまでにはまだなく、『大江戸之研究 延寿清話』創刊号の発送時に務が彼らの自宅住所を把握していなかったことを示していると考えられる。雑誌の創刊を機に、務が面識の有無に関わらず著名な研究者たちに自らの研究成果を広く送付し、斯界における人脈を積極的に築き上げようとしていた姿勢が読み取れるのである。

一方、後者の差出人以外の人物に関する話題という点で注目される書簡としては、例えば、飯島花月からの書簡が挙げられる。務と飯島との交友には、間に紹介者として湯朝竹山人の存在のあったことが飯島の書簡から確認されるが、さらにその飯島は、務に対して川柳研究家・母袋未知庵の紹介状を書いており、それをきっかけに務と母袋との交友が始まり、両者の間で書簡のやりとりがなされたり、母袋から務へ雑誌・著書の寄贈がな

されたりするようになっていくという流れを看取することができる。また、務と邦楽研究者・英十三との交友では、ここでも当初はやはり湯朝竹山人が紹介者として介在していたこと、英が務を高野辰之、岡野知十、岡野馨、西山吟平らに引き合わせる機会を作ろうとしていたことなどが、英の書簡から確認される。そのほか、これらの場合とは反対に、務が他の二者を結びつける接点となっていたことが分かるケースもある。例えば、高野辰之と南木芳太郎は、南木所蔵の稀本『落葉集』巻六を高野編の『日本歌謡集成』に翻刻して収録するに際し、行き違いが起こって南木が高野に対して憤慨するに至ったのを、務が両者と書簡で連絡を取り合い、間を取り持つて事態を収拾させたということが、高野・南木両者の書簡より読み取れる。

なお、天理大学附属天理図書館蔵の忍頂寺務宛高野辰之書簡によれば、この一件の後、高野が関西へ出向いた折に南木を訪問し、南木の蔵書を閲覧したことが報告されており、務の配慮が実を結んだことが確認される。書簡の内容面についてもう一点、忍頂寺務の蔵書形成過程を考察する材料として活用する観点から、その注目される点を述べておきたい。小野文庫<sup>422</sup>〔忍頂寺務宛書簡〕には、書店から書籍を購入した際の出荷案内や請求書、領収書の類が含まれており、それらに記された情報から、個々の書籍について、いつ、どこから入手したのかが分かるケースが複数認められる。また、書籍の貸借に関わる書簡からも、遅くともその時点までに務が当該書籍を入手していたという事実が把握できたり、小野文庫に多く存する務自身の筆写による古典籍写本の原本をいつの時期にどのような経路で誰から借りたのかを明らかにできたりするケースも存する。こうした情報の蓄積から、務の集書の実態の一端を明らかにすることが可能となるのである。さらに、こうした書籍の入手に関わる情報とは反対に、

書簡資料の中に存する務からの蔵書寄贈に対する礼状等を通じて、蔵書の流出に関わる情報について把握することもできる。なお、蔵書の流出に関しては、尾崎久弥の書簡で、務旧蔵の洒落本や吉原細見が本郷の古書肆・南陽堂書房を通じて市場に出回っているとの証言が述べられており、寄贈以外に古書肆に売却されることもあったことが確認される。忍頂寺務の旧蔵書は、現在その多くが大阪大学附属図書館蔵の忍頂寺文庫・小野文庫に収められ、そのほか、天理大学附属天理図書館、神戸市立図書館、成田山仏教図書館へもまとまった寄贈が確認される（神戸市立図書館、成田山仏教図書館への寄贈の詳細は、本報告書所収の川端咲子「神戸市立図書館蔵忍頂寺務旧蔵本について」、山本和明「成田山仏教図書館蔵忍頂寺務旧蔵本について」参照）。こうした、現時点で所在が確認される以外の旧蔵書をも考慮に含めた上で務の蔵書の全体像や集書の志向を考えようとした場合、書簡資料の記載を参照することによって、欠けた情報を一定程度補完することも可能となるのである。

以上、小野文庫蔵の書簡資料の全体像について概観してきた。これらの書簡資料が、大正末から昭和二〇年代前半にかけての時期における近世文学・歌謡研究者や蔵書家たち相互の交流やネットワークのありようを理解する上で、また、忍頂寺務の蔵書形成の過程を考究する上で、貴重な資料となりうるということが明らかにされたと思われる。今後は、この膨大な情報の中から個別の事象をすくいあげ、具体的に詳細を検討する作業を積み重ねていくことが必要となる。本目録がそうした作業を行う上でのツールとして活用され、近世風俗文化の今後の発展に寄与する部分があれば幸いである。なお、書簡目録の情報については、本報告書の附録（CD-ROM）にもその全データを収めているので、検索のための手段として活用されたい。

## 参考文献

- 青田寿美・飯倉洋一・内田宗一・福田安典・山本和明・鷲原知良(二〇二一)、「仙台忍頂寺家所蔵資料目録」(『調査研究報告』三一、人間文化研究機構国文学研究資料館調査収集事業部)
- 青田寿美・内田宗一・大内瑞恵・太田路枝・神林尚子・佐山美佳・丹羽みさと(二〇〇八)、「大阪大学附属図書館蔵 小野文庫目録」(『調査研究報告』二八、人間文化研究機構国文学研究資料館調査収集事業部)
- 青田寿美・内田宗一・尾崎千佳・川端咲子・近衛典子・富田志津子・福田安典(責任編集)・正木ゆみ・鷲原知良(一九九八)、「文学部創立五十周年記念 忍頂寺文庫特輯」(『語文』第七〇輯)
- 内田宗一(二〇〇七)、「小野文庫蔵忍頂寺務宛て書簡について 調査の中間報告と考察」(二〇〇六年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)研究成果報告書『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』二)
- 〔付記〕本目録の内容には、研究会における発表等を通じてプロジェクトメンバーから得た情報も反映している。特に青田寿美氏からは数多くの有益な御教示をいただいた。記して深謝申し上げる。

## 凡例

- 一 本目録は、以下の九項目からなる。
- |      |       |         |      |
|------|-------|---------|------|
| 番号   | 差出人氏名 | 差出人氏名読み | 差出日付 |
| 消印日付 | 宛先住所  | 形態      | 内容   |
|      |       |         | 備考   |
- 本稿では、煩瑣になることを避けるため、上掲の九項目中、丸数字の七項目のみを掲出した。別途、本報告書の附録として付したCD-ROMに、全情報を収めた「小野文庫所蔵忍頂寺務宛書簡目録」を収録した。
- 一 封書の場合、一つの封筒内に複数の書簡を収めたものも認められるが、これらについては全体で一点と数えた。個々の書簡に関する情報は「内容」欄に記載した。
- 一 番号は差出人氏名の五十音順による配列に従って付し、差出人氏名の記載がないもの、差出人氏名が未判読のものは後へ配した。ただし、差出人氏名の読みについては推定のものも含む。同一の差出人の内部は差出日付・消印日付にもとづき、差出時期の早いものから順に配列した。差出時期が確定できないものは後へ配した。
- 一 差出人氏名の表記は、当該書簡における表記を基本として、新字体と旧字体とを併用した。姓あるいは名のみで立項しているものは、書簡の差出人氏名としてその部分しか記されていないことを示す。連名で出された書簡については、二名連名の場合は両名の氏名を「・」でつないで示し、三名以上のもは筆頭の差出人氏名のみを示して後ろに「ほか」と記した。書店からの書簡で、店主名が併記されているものについては、書店名を項目として立て、店主名はその後ろに( )に入れて示した。
- 一 同一の差出人が、本名・号・筆名・芸名など異なる複数の名義で差し出している場合は一つの項目にまとめた。この場合、項目としては号・筆名を立てることを原則とし、本名は目録の最初の出現項目において( )に入れて示した。なお、本名・号・筆名・芸名のいずれと

も、小野文庫<sup>422</sup>〔忍頂寺務宛書簡〕の中に確認できるバリエーションの範囲内で示すことを原則としたが、一般に広く知られている呼称がそこで使用されていない場合には補って表示した。

例 三田村鳶魚

……小野文庫所蔵書簡では全て本名の「三田村玄龍」名義

坂東三津五郎〔8代目〕

……小野文庫所蔵書簡では「坂東八十助〔3代目〕」「坂東衰

助〔6代目〕」名義

― 差出日付については、書簡に記載されている情報のほか、消印日付、当該書簡の内容、他の書簡との関連、宛先住所、差出住所、郵便料金等から推定した内容も反映させている。年月日に不明の部分がある場合には、その箇所<sup>xx</sup>を入れた。差出日が年月日を確定できないような形で記載されている書簡については、原文のまま引用して表示した(例、「大正五年秋」「八月下旬星期二天上午」など)。封筒と便箋とで記された差出日付が異なる場合には、両方の日付を併記した。

― 封書で、封筒内に複数の書簡をまとめて収めている場合は、封筒と対応する書簡の差出日付を「差出日付」欄に代表させて示し、個々の書簡の差出日付は「内容」欄に記載した。複数の書簡のうちいずれが封筒と対応しているか判然としない場合は、年次がより詳しく確定できるものを代表させて表示した。

― 消印日付について、印影に不鮮明な部分がある場合には、その箇所に<sup>xx</sup>を入れた。速達、転送などで複数の消印が捺されている場合には、両方の日付を併記し、注記を( )に入れて示した。消印部分が切手とも切り取られていて確認できない場合には「欠落」と表示し、それ以外の消印日付が確認できないケースについては、具体的な説明を記した。

― 形態は、封書、ハガキの別を示した。それ以外のケースについては、それぞれ説明を記した。

― 内容には、それぞれの書簡の記載内容を要約して記載した。封書の場合は、内容物(便箋、原稿用紙、印刷物、伝票、写真など)とその数量もあわせて記した。封書で、封筒内に複数の書簡をまとめて収めている場合は、丸囲み数字で個々に番号を付し、差出日付もしくは消印日付を示した上で、それぞれの内容を述べた。掲載順は、封筒と対応する書簡を差出日付の先後に関わらず一番目に掲出し、二番目以降は差出時期の早いものから順に配列した。差出時期が確定できないものは後へ配した。

― 備考には、差出人や書簡内容に関する補足情報を記載した。具体的には、差出人の所属や経歴、書簡の差出年月日推定の根拠、内容的な関連を有する書簡の情報、書簡内容と関連する務著述、書簡内容からその時点で務が所蔵していたことが確認できる書目などの情報である。なお、務著述の記載に際し、個々の著述における著者名としては、各種の号(「忍頂寺静村」「淡路島守」等)が使用されている場合もあるが、全て「忍頂寺務」名義に統一して示した。また、現在における務旧蔵本の所蔵機関が確認できる場合は、あわせてその情報も記した。

― 備考における三田村鳶魚の日記の引用は、『三田村鳶魚全集』第二六・二七巻(中央公論社)によった。

― 差出人名、内容について、未判読の箇所は『』で示した。

― 論文は「」、典籍・単行本・紙誌名は『』で括った。ただし、細見・瓦版の類は、一般名詞として扱うこととし括弧で括らずに掲げた。

― 本目録における書簡内容に関わる記載は、個人の名譽を傷つけたり人格を侵害したりしない範囲内において行い、書簡の差出人及び書簡内で言及される人物に対して十分に配慮した。

― 小野文庫蔵の書簡資料の中には、差出人の書き癖が非常に強く、読解が困難なものも多く存する。本目録の記載内容についても誤読にもとづく情報が混じている恐れの見えきれない面があるが、その責は全て内田が負うものである。

番号	差出人氏名	差出日付	消印日付	形態	内容	備考
1	青木泰	昭和25 / 2 / 17	欠落	封書	印刷物1点。役職異動の通知。	青木泰の役職は兵庫県教育委員会事務局社会教育課長。
2	青柳秀雄	昭和9 / 1 / 1	昭和9 / 1 / 9	ハガキ	昭和9年賀状。	青柳秀雄は『佐渡研究』発行者。
3	青柳秀雄	昭和12 / 1 / 1	昭和12 / 1 / 1	ハガキ	昭和12年賀状	
4	青柳秀雄	昭和14 / 6 / 17	昭和14 / 6 / 18	封書	便箋5枚。書物貸借の礼状。「湘南」という人物の著述に関する意見を述べる。「湘南」が言及する相馬御風の随筆がいつの『中央公論』に発表されたかは、齋藤昌三に尋ねればすぐ分かる。同じく書中に出てくる碧梧桐・紅葉山人について佐渡を訪れた年次を参考情報として記す。青柳の見解としては、「あの原稿」は湘南のものではない。失礼ながら書留送料を同封したとあり。	
5	青柳秀雄	なし	昭和15 / 8 / 1	ハガキ	『陳書』11の礼状。	絵ハガキ（文部省指定名勝地沢崎灯台）。
6	秋田佐喜子 ほか	昭和15 / 10 / 25	昭和15 / 10 / 25	ハガキ	秋田信太郎死亡通知。	秋田佐喜子は秋田信太郎の妻。
7	秋庭太郎	昭和12 / 4 / 23	欠落	封書	巻紙1枚。秋庭の著書を送付したことに對する務の礼状を受け取った旨の報告。昨年ラジオの放送を拝聴した。拙著『演劇史』出来、郵送した。	秋庭太郎『東都明治演劇史』は昭和12年刊行につき、昭和12年の書簡と推定。なお、成田山仏教図書館には、秋庭太郎『明治の演劇』（昭和12年3月）の務旧蔵著者謹呈本が蔵される（本報告書所収の山本論考参照）。
8	秋庭太郎	昭和12 / 5 / 17	昭和12 / 5 / 17	ハガキ	礼状を受け取った旨の報告。先だってもお噂を若月先生から聞いた。中学	



- 24 天野正一 なし 昭和22 / 4 / 19 八ガキ 差出人住所「城崎温泉 天野写真」。
- 25 天野泰三郎 昭和26 / 3 / 23 昭和26 / 3 / 23 封書 便箋2枚。見舞状。早川氏より、務が中風で養生していると聞いた。戦後の全ての事情が原因と愚察する。一度お尋ねしたいが遠方ゆえ難しい。自分も69才になったが、口だけは元気である。若主人若奥様へも宜しく御鶴声下されたい。
- 26 荒木 大正14 / 11 / 1 大正14 / 11 / 3 八ガキ 『延寿清話』9の礼状。清元好きの小生、いつも面白く拝見している。大切に保存したい。
- 27 荒木伊兵衛 なし 昭和7 / 1 / 1 八ガキ 昭和7年賀状。
- 28 有山麓園 大正15 / 1 / 1 大正15 / 1 / 2 八ガキ 大正15年賀状。
- 29 有山麓園 昭和3 / 1 / 25 昭和3 / 1 / 25 八ガキ 雑誌惠贈の礼状。『俳三昧』3月号への寄稿依頼。
- 30 飯島花月 なし 大正13 / 12 / 4 八ガキ 雑誌送付の礼状。尊名と御研究誌についてはかねて拝承している。竹山人からも紹介の書面を受け取っていたところ、図らずも御研究誌の贈与を受け、感謝。昨夜旅行先より帰宅したところである。
- (保作)
- 絵八ガキ(釜山新棧橋)。  
明治18年に継いだとのこと。  
本名は晋、柳下亭種員の号を  
『俳三昧』の記事によると、  
踊の流派『中に綴じこまれる  
『俳三昧』の編集者。小野471『舞  
筋西工入』。大阪の老舗書店。  
『古本屋』発行元。  
差出人住所「平民文学社内」。  
差出人住所「大坂心斎橋八幡  
堂」。



31 飯島花月 大正13 / 12 / 12 大正13 / 12 / 12 封書 大正13 / 12 / 12付…便箋4枚。御惠贈の『延寿清話』2冊拜見、面白く『延寿清話』6に本書簡の翻

有益。ふと心づき8代目団十郎の死絵をひろげて別紙のようになつたらぬものを書いた。お笑い草に差し出す。竹山人に会う機会があれば宜しく伝えてほしい。以下、「八世団十郎の死について」と題する文章(便箋3枚分)。

大正13 / 12 / 17付…原稿用紙2枚。14日付書状拝受。『延寿清話』3冊、

書入れある底本用のものをいただき感謝。以下、務論考に対する意見・感想を述べる(加保茶、薄雲年代記、8代目団十郎など)。十返舎一九の2

代目が2名あることを承知して『書物往来』の拙稿の疑問氷解、訂正補記を申し送る。俳人の森無黄氏曰く、清元「山帰り」は最も爛熟した江戸下

町式情調を表現した名作である、あれへ注釈を施してもらいたい、『初冠』

(森氏主筆の俳諧雑誌)へ載せたいと数年前に注文されたが約束を果たさ

ずにいる。蔵書が少なく、また図書館のない地では考证めかしたことは隔靴搔痒の憾みのみで意に任せず、とくくなまけて打過ごしている。近頃の様

様に古本ことに軟派ものが高くなつては手も足も出さず、失望している。

8代目団十郎に関する意見・考察。ふと思ひ付き『追善三升孝子』を繙読したところ、8代目書置の手紙の末に「団栗は風を梢の別れ哉」の句あり。

しかし、この書置も作者の擬作であろう。ただ法名に「浄菴信士」とあるのは信頼できると思う。また、『追善明烏夢物語』の末に記される戒名は

後から付け加わった4字があり、市川家に伝わる正しい戒名は「浄菴信士」である。「つしる富士難波に残す旅の空」の句は辞世として一番広く伝播

した句と解せられるが、これももちろん代作ではないか。

加保茶ほかに関する意見、資料の紹介。「山帰り」注釈は何分早速の手際

に参りかね、いつ出来るやら自信もない。他日御垂教をいただく機会があれば。所蔵都々逸本(絵入、嘉永頃か)に、「あすは又あすの花さく朝兒

33 飯島花月 なし 大正13 / 12 / 24 ハガキ

32 飯島花月 なし 大正13 / 12 / 18 ハガキ

34 飯島花月 大正14 / 3 / 13 大正14 / 3 / 13 ハガキ

『延寿清話』6の礼状。相変わらず興味津津、一気呵成に読了した。拙稿を御掲出下され光栄である。杜撰が多く、赧顏の至りである。

35 飯島花月 大正14 / 3 / 16 大正14 / 3 / 16 ハガキ

意見交換（8代目団十郎など）。ハガキの御通信で、8代目団十郎の戒名につき、伊原青々園（敏郎）氏の調査の大意を御報告、感謝。おかげで最早間違ないことが判明し、喜んでいゝ。早速ノートへ追補しておく。

36 飯島花月 大正14 / 7 / 13 大正14 / 7 / 13 封書

便箋2枚、ハガキ切れ端1点。『清元研究』1の礼状、感想など。『清元研究』創刊号の御惠投、感謝。「梅の春」の御考証、益を得ることが少なくない、感謝。四方に関し、疑問点を別紙に書いて差出す。御示教を得られれば幸甚である。2号以下は発行元へ自分から直接注文する。

37 飯島花月 大正14 / 8 / xx xx / 8 / 5 ハガキ

飯島花月からの大正14年7月22日消印ハガキの切れ端を同封。四方の赤についての御懇示、感謝。貴状によって「四方の赤」は銘酒の名と確定してよいことが判明した。

38 飯島花月 大正15 / 3 / 2 大正15 / 3 / 2 封書

『清元清話』8御惠贈、感謝。また「四方の赤」につき再示の貴状、種々高教拝承した。「四方の赤」は灌水の俗名でないかとお考えは肯けるものではないか。以下、『浮世風呂』お屋敷勤めの下女の詞にある「四方の味噌（おむし）」について考証。1週間ほど前、大阪の出口米吉氏が来遊した。

書簡中の「清元清話」第八冊が『延寿清話』8（大正14年7月）と目されること、書簡36（飯島花月）に同封の大正14年7月22日消印ハガキ切れ端と関連する話題であることから、大正14年と推定。

便箋2枚。「人にひろはれ」の小唄、御通信感謝。竹山人からも通信があり、双方のお便りを取りまとめ別稿に書いてみた。「北州」の文句「露打かけの菊かさね、菊のませたる禿菊」菊の3字重ねは別に意味があるとも思わない。『延寿清話』を独力で編纂することは容易でない。殊に『清元研究』も少なからず御加勢の様子、それらのお骨折りを考えると、双方行

39 飯島花月 大正15 / 3 / 23 なし(擦し忘れか) ハガキ

うよりむしろ『延寿清話』を廃し、その力を一方の研究に注いで一層内容の充実を図ってはどうか。両誌の編纂や出版費に関する内情を知らずに遠慮ない意見を申し上げた。失礼の段は御寛恕を願う。

40 飯島花月 大正15 / 7 / 2 大正15 / 7 / 2 ハガキ

『清元研究』12の礼状。感想・意見など。「なまいだくなんまいだ」のあたりは唄念仏の節であろう。帝劇で十六夜清心を見た。延寿の清元は申し分なく結構だった。12号に高橋さんの追分節の研究、すこぶる有益と敬服した。信濃追分として伝えられている唄を50首ほど書き留めておいた。入用の節は写して送る。小室節というもの、信州小諸が淵源地というのは異説があるようだ。これもどなたかの考証を承りたいものだ。

41 飯島花月 大正15 / 7 / 19 大正15 / 7 / 20 封書

原稿用紙2枚。18日付務書簡への返信。清元「山帰り」の御注釈(『清元研究』13)いよいよ御発表の由、待遠しく思う。お尋ねの「砂こし云々」の句の作者は不明。少年時代に祖父から聞かされた句で、意味はすだれをこしてくる涼風がいかにも砂漉しにしたような清涼な感じがあるというだけのことと思う。貴示されたことには関係ないように思うが、いかがか。「ぐにやへもまはる親玉のかへり道」の句、蛭子省三さんの解説の通りだろうと思うが、中山富三郎の綽名「グニヤ富」と団十郎(多分5代目か)の住居とを利かせた作であるかもしれない。ただし、確かめた上でないと何とも断定しかねる。追分節唄は若干解説を書き添えて出したく執筆している。遠からず送るのでよろしく御加筆、お取り捨てを願う。田中栞君の噂を承った。一之瀬君の祖父は上田に住居していて、当地月窓寺に祖先の墓があると、一ノ(マ)瀬さんより直話に承った。その後、同寺の墓地を

42 飯島花月 大正15 / 8 / 2 大正15 / 8 / 2

封書

心掛けているが古臺は発見できていない。

便箋2枚。一昨日旅行から帰宅、ハガキを拝見した。『清元研究』13の「山帰り」御評釈を拝見。ゆきとどいた御考証、大いに溜飲を下げた。追分節の原稿に対し御回示を賜り恐縮。高橋掬太郎氏「追分節の研究」を見て益を受けることと少なくない。『俗謡を尋ねて』という旅行案内の小冊子を旅中に買い求め一読したところ、追分節について解説があり、自分の稿はこれを踏襲したと言われる恐れがあると危ぶむ。『清元研究』13に掲出の「川柳江戸歌舞伎」中の「まひくつふり清元をかたるやう」の柳雨君の解説は腑に落ちない。

43 飯島花月 大正15 / 9 / 3 大正15 / 9 / 3

ハガキ

昨日、上京の汽車の中で『清元研究』14を通読、「吉原雀」の御注釈敬読した。昨夜、書林の店頭で近刊の竹山人『小唄漫考』及び某氏著『民謡をたづねて』の二書を発見、追分節についてかなり詳しく記述がある。自分の既稿の大半は両書に尽きており、何となく剽窃踏襲のきらいがある。甚だ心苦しいが、幸い、まだ紙上に掲載されていないので、あの稿は没却してほしい。御面倒をかけ恐縮に思う。尊台より藤尾さんその他へしかるべく交渉してほしい。明後日頃帰国の予定につき、用向きは国元自宅まで。

44 飯島花月 大正15 / 9 / 20 大正15 / 9 / 20

ハガキ

追分節原稿わざわざ御返却、余計なお手数をかけ、恐縮。あわせて貴示の趣、拝承した。何とか再考したい。藤尾さんにも御迷惑をかけた。よろしく伝えてほしい。『延寿清話』御惠投、感謝。相変わらず御精力、敬服。 筆。  
絵ハガキ（日本美術院第八回 美術展覧会出品 小林古径氏）。

45 飯島花月 大正15 / 10 / 1 欠落 封書

便箋3枚。『清元研究』15拝見、「玉兔」の御講釈いつもながら面白く拝読。思い出すままを別紙に書いてみた。竹山人『小唄漫考』をざっと繙いたが、あまり感服する好資料もなく、中途で止めた。近頃、古い刊行物をろくに補訂もせず表題のみ替えて売り出すのは悪い弊だと思う。三田村さんの『上野と浅草』が「芝」を加えて再版したことなどはまだ罪の少ない方である。以下、便箋2枚に「玉兔」中の詞章に関する考察を箇条書きで示す。

46 飯島花月 なし 昭和2/2/9 ハガキ

「双六」注釈(『清元研究』19)に対する感想、意見。この度は「双六」という珍しい題材で大いに興味をひかれた。心付いた点を申し上げる。以下、末段「二ツあまつて」云々の釈に対する意見が述べられる。

47 飯島花月 昭和2/4/12 昭和2/4/12 ハガキ

意見交換。尊書、当地へ転送されて拝受した。財界混乱の火の手が、どうやらそちらへ飛火した御様子。3、4日東京に滞在ののち、明日夕刻までには帰国する。「たねふくへ評釈」は刊行会の注文で気に染まないものを執筆し、赤面千万。以下、箇条書きで注釈に関する意見を述べる。「太夫さじき」についての御教示感謝。『延寿清話』いよいよ御刊行の由、長い御丹精の御著述、清元隆盛の折柄、世間から歓迎されると思う。薄雲と団十郎のこと、愚見を採用してもらい、かたじけない。実は何を申し上げたか、確かな記憶がない。尚、薄雲については「川柳随筆」の一部として愚稿を『声』誌に投稿した。多分4月号に掲載されると思う。

48 飯島花月 昭和2/9/14 昭和2/9/14 ハガキ

「大原盃」の考証資料を示して下さい、感謝。資料類は一度は通読していたが、記憶もなく、再読も煩わしく打過ぎていたところ、御教示によって判明した。名称もやはり京の大原より出たことに決定してよいと思う。

49 飯島花月 昭和2/10/11 昭和2/10/11 封書

便箋2枚。出張と繁務のため返事が延引し申し訳ない。「種ふくべ」に関する御教示、感謝。貴示中「のら狐」の句は御解説の通りと思う。「つめるより」「はだしにて」「雲のうへ」の3句は、なお考えさせていただく。諸兄からも懇切な教示を得ている。いずれ一括して諸家の説を補正として出してもらつつもり。御承知おき願う。お尋ねの「よし原」の句、家蔵の『柳樽拾遺』原本にも第三、秋の部に「よし原の背ほねへともす人たかり」とある。「ともす」「とぼす」は畢竟同語である。吉原の句はただ仲之町の中央通りを背骨にたとえたまでで、「とぼす(燃す)」までを考えるに及ばないと思う。「腹へとぼす」「背へとぼす」など考えると狂句的な解釈になってしまう。ついでに「とぼす」についておかしい話がある。以下、『鳩

50 飯島花月 昭和3/7/18 なし(郵送でな封書

いたため)  
…モタイ)光雄氏二託入。

51 飯島花月 昭和4/1/28 昭和4/1/xx 封書

便箋3枚。「潮来節文献」御印行御贈与、感謝。いたこ節については自分も一文献を調査、当時若干収集したが責稿には及ばない。自分も瓦版を2、3所蔵。「小倉いたこ」は小倉百人一首を題材としたもの。同じ版元の歌謡書、手許に3、4種あり。高野博士『歌謡集成』へ貴重な材料を御提供、感謝。『魚籃先生春遊記』附編にある50首の俗謡、俗謡とあるだけで、いたこともよしこのともない。また往々に字足らずの歌がある。ただ、東奥の僻地に天明時代に江戸言葉の俗歌が行われたのも不思議である。いたこ以外にこんな謡があつたとも思われない。先年、土浦の書肆で売っているいたこぶしの小冊子数種を友人に頼んで買い受け、一読したが、いずれも現代のどどいつ節に謡うものらしく、取るに足らず失望した。

小野文庫には母袋未知庵(光雄)の書簡が44点、著書が3点所蔵される(小野文庫<sup>23</sup>、川柳江の島土産、小野文庫<sup>24</sup>、川柳蕎麦の花、小野文庫<sup>241</sup>、川柳桶公記<sup>24</sup>)。

書簡中の「潮来節文献」とは、忍頂寺務「潮来節の文献と」笑本板古猫<sup>2</sup>(『書物の趣味』<sup>3</sup>、昭和3年12月)と推測される。本書簡の内容は小野文庫<sup>410</sup>「潮来文献」に抄録されている。

52 飯島花月 なし 昭和4/2/5 ハガキ

仰せにより調べて見たら、いたこぶしの瓦版は「五色いたこ」他1種だけしか持ち合わせがない。それも合綴ものを高野博士へ貸借中、戻り次第送付する。他1種は題名を忘れた、多分お手元にある品で珍しくはないと思う。先年茨城から取りよせた小冊子数部を合冊、これはありふれた昔の唄を少々集めただけで何の変哲もないものだが、地理などの調べに多少役に立つかと考え、別封で送る。

53 飯島花月 昭和4/2/10 昭和4/2/11 ハガキ 書留小包で「いたこ雑綴」御返送、拝受した。

54 飯島花月 昭和4/7/1 昭和4/7/1 ハガキ 高野博士『歌謡集成』非常な努力で竣成。その後発見の諸資料による補遺

55 飯島花月 昭和4/7/8 昭和4/7/8 封書

編の続刊を切望する。8月頃帰省して立ち寄ると通信あり。その節に初めて対面したい。同博士より返送された雑謡(いたこ、その他)綴込1冊を別便で送る。つまらないもので格別役にも立たないだろうが、御高覧を。便箋2枚。「雑謡合綴一冊」返送、受領。吉原細見について、宝永2年版一枚刷り(石川流宣の絵)の写しを所持している。三浦屋は高尾、薄雲、小紫あり。その他、大黒舞、大黒舞唄の考証ともなるうが、いまだ調査の暇がない。『高尾考』や『高尾年代記』、雀庵の『高尾追々考』など、いずれも宝永6年の細見は引用するが、2年のものは初めて発見したものかと思つて写しておいた。必要であれば送つて御覧に入れる。追記あり「此外に明和辰年横本細見一冊所蔵す」、「文化(五)、文政七」のもの数冊あり」。

絵八ガキ(信濃天竜峡)。

56 飯島花月 昭和4/7/21 昭和4/7/21 八ガキ  
57 飯島花月 昭和4/12/12 昭和4/12/12 封書

「細見写言冊」返送、受領。  
便箋4枚。宝永2年細見を別紙に写して貴覧に入れる。小しづかあり、あしたづの名は見えない。小生所蔵の細見では、明和9年より古いものはない。明和9年は貴示の宝暦11年のものよりさらに11年後なので別紙書き抜きの通り、これには小しづかもあしたづも、その他宝永に見えていた妓名を伝える者は1人もいない。次に、「瓦版いたこにつき、仰せ越しの段、拝承した。自分は『文献志林』に一文を草した。多分第3輯に載るだろう、御笑覧を。別紙として、便箋2枚分の、宝永2年『新板吉原細見図大全』、明和9年春『細見新嬉楼』の写しを同封。

58 飯島花月 昭和5/5/30 昭和5/5/30 封書

便箋2枚。多年御研鑽『清元研究』をこの度春陽堂より御発刊、御恵投感謝。竹山人より御発刊の由を承つて間もなく御恵与に預つた。先般紹介した母袋青年、錦地の銀行を辞し帰郷した、在神中に御示教を受け悦んでいる、小生からもお礼申し上げます。

59 飯島花月 昭和6/1/12 昭和6/1/12 八ガキ

『上方』創刊号送付の礼状。恐らくは京阪地方始めての好刊、諸大家の御執筆、歓迎されるべき珍誌。長く続刊することを祈る。南木氏へよろしく。

60	飯島花月	なし	欠落	封書	巻紙1枚。留守に失礼して書籍を返却する、感謝。先日御光来があつたが伊勢旅行で留守に於いて失礼した。28日、法然院へはなるべく出るつもりだが、近衛公あるいはこの日に図書館へ来館との話もあり、その場合は不参加となる。「竹一色の俳諧」を写して同送する。	書簡中にある「竹一色の俳諧」の写しは現存せず。
61	飯塚友一郎	大正13 / 4 / 16	大正13 / 4 / 16	ハガキ	『延寿清話』（恐らく2号）の礼状。	飯塚は東京府会議員・弁護士（事務所住所「東京駅前丸の内ビルディング」）。弁護士業務の傍ら演劇研究を行い、後には演劇研究に専念。坪内逍遙の養女の夫。昭和12年賀状には「日本大学芸術科」とあり。
62	飯塚友一郎	大正13 / 4 / 20	大正13 / 4 / 21	ハガキ	『延寿清話』1の礼状。	絵ハガキ（江之嶋海岸 片瀬海水浴）。
63	飯塚友一郎	大正13 / 11 / 5	大正13 / 11 / 5	ハガキ	『延寿清話』4の礼状。	
64	飯塚友一郎	大正14 / 1 / 1	大正14 / 1 / 1	ハガキ	大正14年賀状。	
65	飯塚友一郎	大正15 / 1 / 1	大正15 / 1 / xx	ハガキ	大正15年賀状。	
66	飯塚友一郎	大正15 / 8 / 12	大正15 / 8 / 13	ハガキ	暑中見舞。書中に未だ拝眉の機を得ていない旨を記す。相州腰越の別宅からの差出。	絵ハガキ（片瀬川より見たる富士山）。
67	飯塚友一郎	昭和3 / 1 / xx	昭和3 / 1 / 7	ハガキ	昭和3年賀状。	
68	飯塚友一郎	なし	昭和6 / 1 / 7	ハガキ	昭和6年賀状。	
69	飯塚友一郎	昭和8 / 1 / 9	昭和8 / 1 / 9	ハガキ	喪中につき年賀欠礼の挨拶。	
70	飯塚友一郎	昭和12 / 1 / 1	昭和12 / 1 / 1	ハガキ	昭和12年賀状。	
71	井口政治	なし	大正13 / 7 / 2	ハガキ	『江戸会誌』は、役に立つならば平素のお礼として手元に差し置いてほしい。田村西男、町田博三、中内蝶二、平山芦江、高澤初風の諸氏にも御覧に入れてい	絵ハガキ（あら川遊園 大池（川村新聞店読者大納涼会））。井口の勤務先は「神田駿河台鈴



72 井口政治 昭和4/3/xx 昭和4/3/25 八ガキ 転居通知。

73 井口政治 昭和12/1/1 昭和12/1/1 八ガキ 昭和12年賀状。

74 井口政治 昭和17/4/5 欠落 封書 便箋3枚。延寿太夫の口述を筆記。昨春は都新聞に連載した。これを出版するに当たり、太夫より貴下の清元の注釈を頭注として利用したいとの強い希望がある。春陽堂『清元研究』および『江戸読本』から抜粋することの許可を願う。

都新聞の連載は昭和16年1月から約2ヶ月につき、本書簡は昭和17年と判断。封筒表面に小野麗子氏らしき文字で「大切に」と注記。

75 井口政治 昭和17/4/10 欠落 封書 便箋1枚。清元注釈の利用の許可を与えたことに対する礼状。

絵八ガキ（京都東山温泉庭園の一部）。

76 井口政治 なし 昭和17/8/10 八ガキ 務宅訪問の礼状。

製本注文、感謝。『柳下草』を半紙本に仕立て直すのは惜しい。補修としてはどうか。

住所は「神田小川町3.9」。

77 池上幸二郎 昭和14/2/xx 昭和14/3/9 八ガキ

封書 便箋1枚、伝票1枚。和本の補修・帙製作の代金請求。補修を行った書物は『柳下草』(虫)、『耳鳥斎画譜』(虫・帙)、『五大力芥』(手鑑)、打・帙、『佐渡俚謡註解』(表紙付)、『外蕃通略』(表紙付)、『瑠璃盃』(直し)の6点。

忍頂寺文庫C 66『^狂/歌V柳下草』、忍頂寺文庫G 86『佐渡俚謡註解』、忍頂寺文庫H 59『外蕃通略』、忍頂寺文庫B 57『京/土産 瑠璃盃』。天理大学附属天理図書館蔵。『五大力菩薩手鏡』(忍頂寺務旧蔵、仙台忍頂寺家蔵。『静村文庫書目』の該書の欄には「昭和二十四年

92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79
池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華	池田松華
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
大正5/2/28	大正5/2/28	大正5/2/28	大正5/2/28	大正5/2/28	大正5/2/28	大正5/2/28	大正5/2/26	大正5/2/26	大正5/2/26	大正5/2/26	大正5/2/26	大正5/2/26	大正5/2/26
八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ	八ガキ
(第14)	(第13)	(第12)	(第11)	(第10)	(第9)	(第8)	(第7)	(第6)	(第5)	(第4)	(第3)	(第2)	

堂)  
(叢雲、立

東京で小早川秋声、内田良平、頭山満、佐々木、小川運平らと面会したことを全15枚の八ガキに連続して絵で描く。(第1)

野間寄贈」と書入れあり。『五大力菩薩手鏡』は、忍頂寺務「花街本に就て」(『書物往来』12、大正14年9月)に紹介あり。『耳鳥齋画譜』。

池田松華は画家。書簡79、102は「松華」名義、書簡103、137は「立堂」名義。

八ガキ中に「頭山満」「佐々木安五郎」「池田松華」「内田良平」「小早川秋声」の似顔絵。八ガキ中に「蒙古王」(「佐々木安五郎」)の似顔絵。八ガキ中に「小川運平」の似顔絵。

93 池田松華 なし 大正5/2/28 八ガキ

(第15)

巻紙1枚。「文晁の幡」は先方の要求が贅を極めたため断った。松華が立ち上げる画会についての話題。画会に要する諸豪傑の書、120点を依頼済み。

「画会の方の筆者」として「頭山満翁、三浦將軍、孫逸山、宮崎滔天、内田良平、佐々木蒙古、伊東知也、田鍋安之助、佃信夫、小川運平、鶴崎鷲城、譚人鳳、財部熊次郎、寺尾博士、犬養毅、戸水寛人、杉浦博士、小久保喜七」の名が見える。

巻紙1枚。尾崎行武来訪の報告。尾崎より「頗る有益なる事業」の話あり、それを務へ紹介する。「面会の段取り」。

95 池田松華 大正5/3/3 欠落 封書

尾崎行武は「尾崎法相令弟」とのこと。書簡94(池田松華)

と同じ封筒・巻紙で、「前便発送後尾崎法相令弟行武氏来訪せられ」とあることから、大正5年と推定。

96 池田松華 なし 大正5/3/19 封書

半紙2枚、印刷物1点。志貴山行きの電車時刻の確認。三宮発午前5時08分、玉川氏より伝言を受けた。先日の軸2本持参、会った折に務に預ける。

竹露氏箱書の儀、菓子料として1円先生に贈る、その他は一切不要。井上以文堂に頼めば訳ない。橋本閑雪君の方は箱さえ揃えてもらえば来神次第いつでもよろしい。『現代美術』という刊行物を出す計画があるので贊助を願う。同封別紙、松華が興した「蘭陵王画会」への贊助の依頼物(印刷)。

「南北合派の画家池田松華は国士として又た知名の人なり現に立憲国民党に党籍を有す而して画伯は数々支那に遊びて専ら明末清初の画風を研究す嘗て日露之役起るや卒先筆

97	池田松華	なし	大正5 / 4 / 16	封書	巻紙1枚、半紙1枚。松華と小早川秋声との旅行（有馬・三田）の次第を 絵手紙で報告。務も同道の予定が、急遽行けなくなったとのこと。 旅先の京都からの近況報告。小早川秋声と毎日ともに飛び回っている。秋 声、昨今の心理状態、大いによい。山本天立星画伯の画会を応援するため に京都へ来て1週間、明日須磨へ帰る。	を提げて軍に従ひ其の描写せ る処当時の戦時画報。日露戦 争記。東京日々新聞等の紙上 に活躍す」とあり。
98	池田松華	なし	大正5 / 4 / 28	ハガキ	巻紙1枚、半紙1枚。松華と小早川秋声との旅行（有馬・三田）の次第を 絵手紙で報告。務も同道の予定が、急遽行けなくなったとのこと。 旅先の京都からの近況報告。小早川秋声と毎日ともに飛び回っている。秋 声、昨今の心理状態、大いによい。山本天立星画伯の画会を応援するため に京都へ来て1週間、明日須磨へ帰る。	巻紙が松華の筆で、半紙が小 早川秋声の筆か。
99	池田松華	なし	大正5 / 5 / 4	ハガキ	神戸へ出かけた折の話を絵入りで報告。今朝神戸に用があつてきた。店の 小僧が書物を読んでいた。感心と盗み見ると「鞭声肅々……」、このよう に豪傑気分が養われるかと、嬉しく感じた。	絵ハガキ（忍頂寺務氏所蔵池 田松華氏筆）の松の絵の屏風。
100	池田松華	なし	大正5 / 5 / 16	ハガキ	転居の通知と近況報告。	絵ハガキ（忍頂寺務氏所蔵池 田松華氏筆）の松の絵の屏風。
101	池田松華	大正五年秋	大正5 / 9 / 3	ハガキ	立憲国民党脱党の報告、今後は政治的な行動に関与しない。画道に専心す る。号を「松華」から「叢雲」へ改める。	
102	池田松華	xx / xx / 16	xx / 2 / 16	封書	巻紙1枚。礼状。一昨日は誠に感謝、昨朝大阪へ来て内田君と会合した。 内田君に一枚書かせておく。御笑納下されたい。	
103	池田立堂	なし	大正6 / 12 / 13	ハガキ	潤筆料惠投の礼。画の表装代は13円50銭。	絵ハガキ（忍頂寺務氏所蔵池 田松華氏筆）の松の絵の屏風。
104	池田立堂	なし	大正6 / 12 / 19	ハガキ	書留郵便拝受。もう2、3日で屏風揮毫完了。	絵ハガキ（忍頂寺務氏所蔵池 田松華氏筆）の松の絵の屏風。
105	池田立堂	大正7 / 1 / 14	大正7 / 1 / 14	封書	巻紙1枚。中国行き計画について。景勝地の見学、写生の勉強、書の収 集など、2ヶ月あれば充分だろう。最近帰朝した内藤湖南氏にも相談して 具体的な計画を定めるつもりである。兵庫の表具屋にある書について、譚 鶴崎鷺城、内田良平、佐々木	書簡中に出てくる人物名は、 譚人鳳、頭山満、伊東知也、 鶴崎鷺城、内田良平、佐々木

106 池田立堂 大正7/1/31 大正7/1/xx 封書

のも頭山のもない、山、田中、伊東、佐々木、内田、鶴崎、大崎、志賀 蒙古、志賀友吉らを指すか。など約20枚ほどであることを確かめた。これはどうするか、放っておくか。

巻紙1枚。昨日も内田氏方で中国行きの協議、帰国者からの話を聞いた。

時局問題や気候から、やはり振り出しは上海とする。以下、旅程を説明。

時局の関係上、なるべく早く、2月20日頃の船を利用したい。ついではその前に上京して博文館にも交渉し、黒龍会の連中とも打ち合わせをしたい。

来る5日に出発、京都に内藤湖南博士を訪問(原田氏の言うように朝日新聞の添状を持参して)、その足で上京。務が10日に上京するまでに松本

楓湖翁に揮毫を依頼、11日に務と訪ね、画を持って帰れるよう取り計らう。

頭山翁とも打ち合わせし、務と会見させる。12日頃大阪へ汽車で行き、20

日頃までの間に船で出発。以下、旅の予算の話。次に名刀小鍛冶は本阿

弥光遜の折紙をつけさせるのがよいだろうとのこと。ただし、彼の刀は本

阿弥家で研がせる必要あり。研料は25円、折紙料は10円でよかるつと内田

氏は言う。早くて3ヶ月、永くて6ヶ月を要する。広重というのは新刀と

のこと。古刀にも広重というものはあるが、大したものではないとのこと。

便箋3枚。上海より投函、旅行中の中国より近況報告。危険といわれる羅

浮山も一部踏破、一度ことがあると神経過敏に言いふらすのだろう。長江

へは督軍との交渉もあつて真の実費だけで行ける。安全な経路で旅をして

いく。しかし第一の危険区域である広東省を踏破した自分は、日本の画家

が誰もできない写生をした、これは偏に貴下の後援による賜と思つ。金は

無駄遣いしていない。予算を超えないよう注意している。大阪毎日の通信

画を送っている。中国で買った骨董品を船で送る。到着したら家へ通知し、

清水君か家の誰かに渡してほしい。橋本関雪氏は今長江筋にいと承った。

巻紙1枚。上海より投函、旅行中の中国より近況報告。長江一帯の形勢を

調査した。本日上海の文人画家(全部中国人)の文墨会があり招待されて

107 池田立堂 大正7/4/10 大正7/4/16 封書

(便箋)、大正7  
/4/12(封筒)

108 池田立堂 大正7/4/13 欠落 封書

調査した。本日上海の文人画家(全部中国人)の文墨会があり招待されて

109 池田立堂 八月下旬星期二 大正7/8/27  
天上午 封書

いる。中国内地の旅行は金銭を要する。船代の高さ、護衛の兵士への報酬など。今となっては白状するが、羅浮山麓で賊に襲われ格闘した。中国通の福田眉仙もまだ広東省へは行ったことがない。中国随一の危険区域で、随所に賊難の声を聞く。橋本関雪君は山東へ行ったらしい。願わくば中国旅行を売名の道具とせず徹底的に研究してもらいたい。一両日中に当地出發、次は北京の小貫氏（正金銀行）宛てに通信をしてほしい。

110 池田立堂 大正7/9/22 大正7/9/22 封書

巻紙一枚。昨日はお邪魔した。下命により、上海と九州に書面を出した。広東方面は軍事の機密にも及ぶことであるので、軽々しく広東政府でも口を切らないだろう。かえって藪蛇の憂なきにしもあらずと思う。どうでもこの方面は行って領事等の意見も徴した上での方がよからうと思う。

巻紙一枚。貿易事業に関する意見。浙江省大砲の件は小生は何の交渉も無く分からない。漢陽鉄の件は、これを全部買収するか担保として大借款を成立させるとかいう大問題は国際関係にも及ぶことで、手輕にはいかない。右につき、北京・上海等の同志に調査を命じるようにとの仰せであるが、到底無用のことである。自分としても、一片の書状で、莫逆の友を使うのは忍びがたい。決心の上は、小生が北京、上海へ行かねばなるまいと思う。ただし、北京は今が最好の機会と思う。明後日24日に休暇を利用して拙宅へ御来訪はいかがか。

111 池田立堂 大正7/11/30 大正7/11/xx 封書

巻紙一枚。かねての御下命により、北京の同志に何か中国における事業の確実であるものを選んで通知するよう申し送ったところ、別紙の通り回答があった。明日より東上し、各大臣を訪問する。帰宅の予定は不明。

112 池田立堂 大正7/12/21 大正7/12/22 封書

巻紙一枚。絶交の申し入れがあったが、自分は絶交の意味で書面を差し出

消印が不鮮明で判読が難しいが、大正7年と判断。内容的にも書簡<sup>109</sup>（池田松華）、書簡<sup>110</sup>（池田松華）との関連が認められる。書簡中で述べられる別紙報告書は現存せず。

貿易業に関連する話題か。書

113 池田立堂 大正8/5/23 大正8/5/23 封書

したわけではなく、受け入れない。江蘇浙江の米は見事鈴木の手にとられた。久原は小生を北京へ行かせる金を惜しんで、鉄を逸し米を奪われた。しかし、久原が本気でいくなら、かえって仕事はやりやすくなったとも言える。簡中の記載より、松華はこのとき41才と見られる。

114 池田立堂 大正8/9/25 欠落 封書

便箋1枚。礼状。帝展への出品は必ず入選するだろう。御所蔵品の写真、美麗に撮影ができ、結構。お話した元信の巻はまだ自分の所に借りてあるので、このような立派な写真として撮っておきたいものである。大兄へ渡したい希望がある。これまでは遠慮していた。屏風は裏箔の金屏風二曲一雙箱付きなので、屏風代だけでも200円では少し足りないが、潤筆料を加算してないから誰かしら買い手はある。一度お目にかけて上だと思う。至急御意見を伺いたい。

115 池田立堂 大正8/11/12 大正8/11/12 封書

巻紙1枚。帝展への出品画がお手許に届いていないということで、富島組に照会したところ、別紙のように回答があったがいかかが。なお未だ到着していないか伺います。書簡中にある「別紙」は現存せず。

116 池田立堂 なし 大正9/3/7 大正9/3/7 八ガキ

箱根からの旅行報告。悠々自適に過ごしている。絵八ガキ(相州箱根湯本全景)。

巻紙1枚。選挙騒ぎで人並みに忙しかったため御無沙汰している。御所持の銘

117 池田立堂 大正9/4/3 大正9/4/4 封書

刀「伊藤一文字」を金1000円位で欲しいという人がいるが、お構いにはならないか。至急、思し召しを伺い上げる。

118 池田立堂 大正9/7/3 欠落 封書

巻紙1枚。先便発送後の報告あり。菱田春草の画は手遅れで他に買い取ら 書簡119(池田松華)、書簡120(池

119	池田立堂	なし	大正9 / 7 / 4	封書	巻紙1枚。菱田春草のことは案の定他に売っていたが、一応交渉したところ自分の半切画1枚やればどうやら話がつきそうである。多田氏は今もつて来ないので、自分が先方への交渉を担っている。次に、貴下の刀3本が研ぎ上がった。代金は55円である。	田松華)と関連する内容であることから、大正9年と推定。
120	池田立堂	大正9 / 7 / 15	大正9 / 7 / 16	封書	巻紙1枚。先便で申し上げた富岡鉄斎の画は返事がないので戻した。次に、刀はどうなさるつもりか。何もかもお返事がなくては、神通力のない自分は了解に苦しむ。かつて久原にいた、かの艶福家の栗原氏はいつの間にも消し飛んで今は行方不明らしい。50万と号していた彼の財産もあわれ槿花一朝の夢の跡である。	
121	池田立堂	xx / 2 / 26	欠落	封書	巻紙1枚。持病の発作が突発、両3日間九州出発を見合わせ静養していたが、小康状態となったので直ちに出発する。ついでには前便でも頼んだように、来る29日には自分の代理で中川表具店主人が上西邸へ出向くので、午後1時同邸において会合の手順にて写真屋の出張を頼みたい。カピネ版12葉撮影のこと、襖1面を1枚に撮影のこと、以上2点を下命してほしい。	書簡中に2月29日という月日が登場する。池田松華から来簡が確認できる期間中で閏年ということであれば、大正9年か。
122	池田立堂	xx / 4 / 15	欠落	封書	巻紙1枚。写真屋が別紙のとおり請求書を送ってきた。貴下が話していた撮影料より少し高価のように思われるがいかかが。種版はカピネ12枚で、焼いたのは36枚である。	書簡中にある「別紙」は現存せず。書簡121(池田松華)と関連あるか。
123	池田立堂	xx / 8 / 4	欠落	封書	巻紙1枚。刀剣の手入れの話題。「冬広」が近々研ぎあがると言ってきた。研料・運賃・荷造りと前の「来国光」の手入れと総てで16円だそうである。次に「千手院」「則弘」は上西が買わないので内田氏へ返そうと思うが、何だか未練もある。ついでに買ってはどうか。考えを至急聞かせてほしい。	
124	池田立堂	xx / 8 / 8	欠落	封書	巻紙1枚。別紙のように研・鞘・八バキ等の手入れ一切完備してきた「盛	書簡中にある「別紙」は現存



125 池田立堂 xx / 8 / 11

欠落

封書

光」の刀大小揃い、1本は津田君より50円で、他の1本は松井という人より50円で、2本原価100円で買入れた品だが、自分は昨今都合がよろしくないゆえ、手入料は添えものとして原価の100円で買ってもらえないか。至急お願いする。実は別紙のような手入料代金引替で尼崎駅に到着して、すでに受取期限も過ぎているため至急解決の必要がある。至急お返事願う。「追記」幼名「敬二郎」を「立堂」に改名し許可を得たので申し添える。

126 池田立堂 xx / 8 / 13

欠落

封書

巻紙1枚。「盛光大小」の件につき、前便の封書は御覧になったか。実は本日妻が神戸に用事があり、お店を訪ねたところ、どこかへ移転して引き返してきた。その節、去年お買い上げの刀「泰清」を持参させたのだが、そのまま持ち戻った。多田君でも遣わしてくれば「泰清」をお渡ししたい。なお、また「盛光」の件、至急のお返事を願う。

127 池田立堂 xx / 8 / 30

欠落

封書

巻紙1枚。「冬広」はまだ届かない。4、5日のうちには遅くとも来るだろうと思う。内田氏の方から懇々頼んできたが、やはり「則弘」は見合わせるか。雨の日中に黒龍会の青年連中が出るのだそつで、それで入用なのだと言つ。国家のために働いて入獄した青年だから可愛そつだが。

書入れ「3/6/19 paid」。  
1919年は大正8年。

128 池田立堂 xx / 10 / 8

欠落

封書

巻紙1枚。久原支配人の東京滞在はよほど悠々たるものとみえ、まだ何等の貴酬にも接しない。恐らくは鉄問題行き悩みと愚察する。そつであれば、自分は差し当たっては用のない人物であるので、予ての約束によって10日か11日に当地出発、第3回目九州下りの途につくので、御了承願いたい。今回は大分県知事の許へ行く予定である。

129 池田立堂 xx / 11 / 19

欠落

封書

巻紙1枚。お話しした内田成金と一々晚餐を共にするのは明20日午後5時よりということに決定した。場所は例の丸屋がよからうと井上君も大賛成であるので、当方連中はもつそつ決めている。ぜひお出でを待ち上げている。迄」。

130 池田立堂 xx / 12 / 4

欠落

封書

巻紙1枚。文展見物で獲たものは天神さまとお姫様に中毒したのと、群青と緑青の強烈な色彩に眼性疲労を起こしたのと、それだけで家へ帰った。時に高唄の山水は明日揮毫完了の予定、早速表具屋へ回しておく。頭山満翁の額は、額に仕立ててある分はなかなか手放さない。そこで、画仙紙半截に「不動如山」と題せるものを漸く割愛してもらったものが、自分の手許に到着した。値は20円やってくれとのことと友人に相談したところ、目下頭山翁はなかなか揮毫しないため東京でも30円くらいで商人が売買している有様だから、適当だろうとのことである。右にてよろしければ、早速表具屋を急がせて仕立てさせるので、代金を回してほしい。

131 池田立堂 xx / 12 / 11

xx / 12 / 12

封書

巻紙1枚。刀剣売買の件。「光」の名刀は年末でもあり、李容九建碑の入用もあるので、負けて80円でよいということになった。そこで、先日話したように「三条吉則」(小生)200円、「冬広」(上西)200円で400円になるので、貴下より現金400円を出せば、それで名刀が手に入るがいかかが。もし仰せのように「冬広」200円がかわいそうならば、たしか10何円かで入手の「豊後行平」を出してはどうか。なるべく貴下には在名の立派なものを少しは所持願いたい。その方が、近い将来、刀剣暴騰時代に人に威張って見せられる。

132 池田立堂 xx / 12 / 18

欠落

封書

xx / 12 / 18 付・巻紙1枚。「冬広」の件を内田兄に話したところ大笑いとなり、忍頂寺さんが上西君に売るのが嫌なら拙者が買おう、価格はいくらなら快くお売りになるか何ってくれとのこと。すぐに返事をしてほしい。大正8 / 12 / 17 付・用箋(「法学士 弁護士 濱家熊雄」名入り)1枚。濱家熊雄からの書簡。先日は突然の申し出を御承引、感謝。別封用紙へ貴殿および家主の調印を願う。明後日頃手続きが終了すると思う。只今から松江裁判所へ出張、明後早朝帰宅予定。電話の価格につき聞き及んだところ2150円くらいの見当との由、2000円でお買い取り下さらないだろうか。御相

は書面には「十八日」と記されるのみであるが、書簡131(池田松華)、書簡133(池田松華)との関連から12月と推定。

133 池田立堂 xx / 12 / 19

日付部分印字欠 封書 け

談申し上げる。詳細は御面会の上に譲る。  
巻紙1枚。刀剣売買の件。前便発送後、さらに内田兄と再協議の結果、「冬広」処分法を次の通りに決めた。原価40円ゆえ、この倍額として80円で内田氏が買い取る。そして、内田氏は自分へ世話を20円支払う。即ち、「冬広」は100円で調談、自分も20円もらえ、貴下は倍額80円になる算用で、これで異存はないと思うがいかがか。内田氏は今朝在所へ参り一両日中に帰阪、直ちに上京するため、右の件について至急御一報を願う。よろしければじかに代金を受け取り届ける。

134 池田立堂 xx / xx / 24

欠落 封書

xx / xx / 24 付…原稿用紙2枚。中国旅行につき最近帰朝者とも相談、先日申し上げた旅程を示したところ旅費は500〜600円くらい。それに自宅の生活費2ヶ月分120円くらい、中国の大官連中に接する必要上、フロックコート、外套は必要。もつとも、帰朝後に中国の風景画を20〜30枚も描けば償却できよう。出発はなるべく林公使帰任の時に一緒に出発する。以下、旅程の説明。出発できることが確定したら、内藤湖南氏と協議したい。

は、書簡105〜108（池田松華）の内容との関連から大正7年か。

135 池田立堂 なし

欠落 封書

大正7/7/17付…ハガキ。今晚大阪から九州小倉へ出発、留守を頼む。巻紙1枚。投げやりの返事なしではさらに訳が分からない。ハガキ1枚くらい書いて出しても罰は当たらないだろう。米が入用かどうかの返事が早くほしい。

136 池田立堂 xx / xx / 9

ハガキ

伊勢参宮の報告。次に、刀のこといろいろと感謝、地下の李容九に代わってお礼を申し上げる。

絵ハガキ（伊勢外宮神苑）。書簡131（池田松華）と関連する内容とすれば、1月か。

137 池田立堂 なし

なし（郵送でなため）

ハガキ 上海到着。機関長と自分の写真である。留守宅を頼む。

絵ハガキ（船の機関長と自分の写った写真）。大正7年の中国旅行のものか。宛先住所、切手、消印等がなく、郵便八

138 池長孟 昭和16/3/xx なし(封筒欠) カード 前年の紀元2600年記念開館時のお礼。第2回展観の案内。

139 伊三次 xx/xx/3 なし(郵送でな  
いたため) ハガキ

『延寿清話』上梓を祝う。前からお勧めしようと思っていた。神奈川の台  
についての問い合わせ、位置は昔と変わらない。神奈川駅西北の高台。広  
重の絵と感じがとても似ている。有名な料亭、田中家・丁子屋もここにあ  
る。詳しいことは写真を添えて後便にて。

140 石井貴一郎 昭和13/9/24 欠落 封書

昭和13/9/24付…便箋(石井貴一郎の名入り)2枚。薬代拝受。厄介  
になっているので代価は考えていなかったが、せつかなので頂戴する。  
千葉県の山奥で成功した薬草栽培が、暴風雨で流され種なしになってしま  
った。家伝薬としての可許(ママ)申請もはじめは異議がなかったのが、最  
後に家伝薬ではいかぬと言われ、新製剤ムラノミンとして認可を得た。さ  
らに薬剤師が出征してまた頓挫。ただ、薬剤師さえあればすぐ売り出せる  
準備があるのでよろしく頼む。

昭和13/9/15付…便箋(石井貴一郎の名入り)1枚、用箋1枚。久し  
ぶりの手紙うれしく拝見。御下命の「家伝薬」を早速送付する。姓名占い  
「務元」15画および39画(忍頂寺務元)はよい画数である。家伝薬は警視  
庁の認可を得ているので御声援を願う。同封の用箋に、姓名判断の結果を  
記す。

141 石川巖 大正11/1/1 大正11/1/1 ハガキ 大正11年賀状。

ガキとして投函されたもの  
はない。別書簡に同封して送  
られたものか。

池永孟は池永美術館主。神戸  
陳書会会員。小野文庫197『戯  
曲開国秘譚』の著者。

絵ハガキ(歌謡の一節と月夜  
に船をこぐウサギの絵)。宛名  
面に文章を記載している。宛  
先住所、切手、消印等がなく、  
郵便ハガキとして投函された  
ものではない。

小野麗子氏封筒書入れ「s.s.」  
9/26、便箋裏に務の書入  
れ(金箔の学校)あり。

142 石川巖 なし 大正11/11/3 ハガキ

大変面白い材料御通報、感謝。『浪花今八卦』のあることは知っていたが忍頂寺文庫A11『浪花今八卦』。実物を見なかつたので貴報の点は知らなかつた。出版物、今度の分は希望者不足で弱っている。今度貴殿の方にも余分入用ないか。

143 石川巖 なし 大正14/1/4 封書

原稿用紙(「書物往来原稿用紙」名入り、B5版、23字×10行)3枚。大正14年賀状。昨冬は大勢押しかけ御厚情感謝。帰京後何等御挨拶も申し上げず、本日小唄博士よりのお便りで恐縮している。御諒恕を仰ぐ。其節御珍蔵無数拝覧の栄を得、羨望の至り実に喫驚。引き続きの御収集を翹望。『大江戸の研究』5もまだ手に触れず俗用に忙殺。往来も極めて読者激増、1人ではとてもやりきれず齋藤昌三君を同人の1人とすることを交渉中。年末号はとうとう出ず、新年号と合併と決めた。1月20日頃発売の予定である。何か御寄稿いただけないか。

144 石川巖 昭和3/1/1 ハガキ

昭和3年賀状。「潮来節異種七冊」別送の報告。書物の趣味会御催し羨ましい限り、当日出席したいがどうなるか分からない、欠席の場合はせめて目録だけでも心配りを願う。伊藤氏の書物の趣味は何とか御尽力願いたい。その代わり何か執筆することを予約する。

146 石川巖 昭和4/xx/12 ハガキ

本日珍本2種到着、ありがたく拝見。『南花余芳』は値段もよろしいが本もウブで気に入った。内容はまだ熟読していないが、例の『両巴扨言』の姉妹篇であることは言うまでもなく、珍書である点においては天下二品か。先日、石割氏であったか南木氏本書について紹介されたはず。大切に拝見、撮影させて頂きたく、お許しを乞う。「潮来」考は脱稿のことと思う。楽

「諸家来信抄三」(「書物往来」6、大正14年1月)掲載の務書簡に、務所持本が永田文庫本であること、数部謄写して石川巖、京都大学、成田図書館へ寄付したことが記される。

「小唄博士」とは、湯朝竹山人を指すか。『書物往来』6(昭和6年1月)に、「関西うろつきの記事」と題する大正5年11月下旬から12月上旬にかけての関西行の報告文が掲載される。文中に、「一日神戸の忍頂寺兄を訪ねた」とあり。

『文献志林』1(昭和4年11月)巻頭、石川巖による『南花余芳』紹介記事に「借用した忍頂寺氏本」との記載あり。

よって、本書簡は昭和4年と

147	石川巖	昭和5 / 10 / 10	昭和5 / 10 / 11	ハガキ	しみにしている。竹浦氏東上は見合せられたか、その後消息なし。転居通知。その後は御無沙汰、失礼している。近況を知らせてほしい。竹山人は貴地方面にいないか。	推定。
148	石川巖	昭和6 / 1 / 1	昭和6 / 1 / 1	ハガキ	昭和6年賀状。	差出人に妻子の名を併記。
149	石塚清	大正15 / 4 / 15	大正15 / 4 / 15	封書	海図複製版1枚。両面印刷、海図面の裏側は欧文文章(ポルトガル語か)。海図面に「1595」の記載、欄外余白に「理学博士 山崎直方氏所蔵」と印刷あり。	差出人住所「東京築地海軍水部」。
150	石橋開蔵	なし	大正9 / 9 / 26	ハガキ	大正15 / 4 / 15付(同消印)封書。便箋2枚。『延寿清話』10送付感謝。	
151	石橋鋏太郎	昭和14 / 1 / 1	昭和13 / 12 / 31	ハガキ	第10冊が出来たので廃刊しようかとどうかと御考慮の由だが、有料としてぜひ続刊を願う。拝読して大いに啓発されている。別封で古い海図の複製を送付する。	絵ハガキ(第1回国勢調査)。 ハガキ料金額面部「大日本帝国郵便 愛国 昭和十二年 2+3」。
152	石割タキほか	昭和11 / 6 / 29	昭和11 / 6 / 29	ハガキ	石割松太郎死亡通知。	石割タキは石割松太郎の妻。 友人の一人に伊原敏郎の名あり。
153	石割松太郎	昭和4 / 10 / 23	昭和4 / 10 / 23	封書	巻紙1枚。つまらぬ雑誌『演芸月刊』を送付したが御閲覧下さったか。まことに恥ずかしい出来栄えだが、本人は案外真面目である。さて誠に御馴染も薄いのに勝手なお願ひであるが、右月刊へ何か御研究の声曲もの高文を頂戴したい。御多忙とは思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。	忍頂寺務「上方の潮来節に就て」(『演芸月刊』6、昭和4年11月)。
154	石割松太郎	昭和4 / 10 / 29	昭和4 / 10 / 29	ハガキ	早速に高文を頂戴し、忝い。御題材も結構と思う。ただ、御本名を掲げられないのを不本意に思うが、余儀なき御都合かと思う。	
155	石割松太郎	なし	昭和6 / 11 / 1	ハガキ	「古書籍に関する座談会」の案内。11月1日午後5時より大阪美術倶楽	発起人は石割松太郎、黒崎貞

ほか9名

部（淡路町御堂筋角）、会費2円、夕飯の用意あり。御所蔵の稀本を御持  
参願いたい。

枝、高安六郎、佐谷孫二郎、  
河野孝二郎、岸本稲巖、竹内  
文平、頼（？）原退蔵、中野康  
章、杉本要。

156 磯ヶ谷紫江 大正13/11/28 大正13/11/28 ハガキ 雑誌5冊落掌、うれしく拝見。「扇座墨河」について他に考証を発見すれ  
ば報告する。樽屋萬小の菩提所はどこか伺いたい。大口屋の菩提所に大口  
屋暁雨の墓石は見えない。

蘇）。

157 磯ヶ谷紫江 大正13/12/14 大正13/12/14 ハガキ 蘭州の墓に関して書いた内容につき、知十翁「玉菊とその三味線」の記載  
に基づき取り消す。風邪引で閉口している。雑誌18号には家の法号を全  
部載せるつもり。

神田万世橋附近）。

158 磯ヶ谷紫江 大正15/1/24 大正15/1/25 ハガキ お手紙拝見、研究誌は早速届ける。今西に頂戴した作品はそのうち届け  
る。

萩原宗固）。

159 磯ヶ谷紫江 大正15/2/11 大正15/2/11 ハガキ 研究誌の外に「墓蹟」という雑誌を今月より隔月で発行する。目的は全国  
の墓蹟の調査であり、諸家の玉稿を集めたい。墓に関せずとも史料になる  
べきものなら何でもよい。何か原稿を頂戴することはできないか。

絵八ガキ（紫江拓本集 其三…  
萩原宗固）。

160 磯ヶ谷紫江 なし 昭和2/1/17 ハガキ 本日川越で国宝類、石器時代遺物を見て只今戻った。高岸拓川翁より竹婦  
人墓の原稿を寄せられたにつき、震災で倒壊した雪斎の墓が拓川氏により  
多院大師堂）。文中に高岸拓  
川の名あり。

依頼。その次の日曜30日には浄心寺へ参る。住職にあつて過去帳を取り調  
べる。

「大礼東京市奉祝」と題して3句記す（印刷）。

161 磯ヶ谷紫江 昭和3/12/13 昭和3/12/13 ハガキ 昭和4年賀状。

馬琴「巷談坡隄庵」巻下の奥  
付を印刷した図柄

162 磯ヶ谷紫江 なし 昭和4/1/1 昭和4/1/1 ハガキ 結婚の報告。

「いそがや」「紫江」の銘入り

163 磯ヶ谷紫江 昭和4/12 昭和4/12/15 ハガキ 「帝都復興事業完成記念」の記念印。文章なし。

164 磯ヶ谷紫江 なし 昭和5/3/26 ハガキ

165	磯ヶ谷紫江	昭和9/5/26	昭和9/5/26	ハガキ	「初代清元延寿太夫百十回忌記念」と題し、初代清元延寿太夫の経歴を印刷文面で述べる。初代清元延寿太夫は本名岡本吉五郎、富本を初代斎宮太夫に学び、文化11年清元の一流をなす。文政8年5月26日、劇場からの帰途に刺殺される。行年49歳。東都深川平野町浄心寺に埋葬される。	の絵ハガキ。
166	磯ヶ谷紫江	昭和11/12/12	昭和11/12/15	封書	印刷物1点、ラベル1枚、新聞記事切り抜き1枚。印刷物には、「故高岸拓川翁建碑」の寄付のお礼と寄付者一覧を記す。務は3円寄付。寄付者に湯朝竹山人、宮尾しげを、鶴岡春三郎等の名あり。ラベルは、「京名物虎屋饅頭」。新聞記事切り抜きは、清元太兵衛死亡記事（務書入れ「昭和十二、二、八、一」。	
167	磯ヶ谷紫江	なし	昭和12/1/1	ハガキ	昭和12年賀状。	
168	磯ヶ谷紫江	なし	昭和12/6/17	封書	原稿用紙（紀伊国屋製、20字×10行）2枚。高岸拓川令妹ユキ子氏がこの20日から月末までのうちに郷里松山に戻る。老年で旅も初めて、郷里松山には神戸で船路をとらねばならない。神戸で乗船の案内を頼みたい。	
169	磯ヶ谷紫江	なし	昭和14/3/3	ハガキ	浅草慶養寺潮江院の墓碑考、再調査したところ、このほど震災区画整理後に不明だった三亭春馬の墓を発見した。	絵ハガキ（国会議事堂らしき建物と鳩の絵）。
170	市場	大正14/4/26	大正14/4/26	ハガキ	昨日名古屋尾崎氏を訪問、軟派の珍資料をたくさん拝見。氏はただ今軟派研究の原稿として小説以外の江戸文書の翻刻目録作成中にて甚だ多忙。	絵ハガキ（名古屋）広小路通り。差出人は、市場直次郎か。パリからの航空便。
171	伊藤述史	昭和9/1/1	昭和8/12/15	封書	印刷物1点。昭和9年賀状。	
172	伊藤長蔵	昭和4/8/23	昭和4/8/23	封書	用箋（「ぐろりあ用箋」名入り）1枚。小林氏の原稿到着。自分は一両日不在だが、一度御来遊御一覽下されたい。その上で出版方法につき御高見を承りたい。	出版社「ぐろりあそさえて」の人物。「書物之趣味」発行人。小野文庫462 小林勝「歌舞伎隈取概観」（ぐろりあそさえて）出版に関わる話題。
173	伊藤長蔵	昭和5/1/1	昭和5/1/1	ハガキ	昭和5年賀状。	



174	伊藤長蔵	昭和6/1/1	昭和6/1/1	ハガキ	昭和6年賀状。
175	伊藤長蔵	昭和10/1/1	昭和10/1/1	ハガキ	昭和10年賀状。
176	伊藤長蔵	昭和12/1/1	昭和12/1/1	ハガキ	昭和12年賀状。
177	伊藤長蔵	昭和13/1/1	昭和13/1/1	ハガキ	昭和13年賀状。
178	伊藤継郎	昭和10/9/xx	なし(封筒欠)	カード	油絵・デッサンの個展(銀座資生堂、9月3日～5日)の案内。
179	伊藤樸堂	昭和18/4/6	昭和18/4/6	ハガキ	昨日は初見参にいろいろと御高説を聴聞し楽しんだ、感謝。『俗談集』開版の心組あり、原稿がまとまった頃、再拜の節いろいろ申し上げたい。少し遅くなるものと考えている。
180	伊藤樸堂	昭和18/4/13	昭和18/4/14	ハガキ	11日付玉章ありがたく落筆。御依頼の児山氏に関する件承知した。本月末まで待つてほしい。10日ほど、大和路・伊勢路へ旅程を定めぬ足まかせの旅に出る予定。調査はできるだけ委しくする心組。
181	稲垣寛一	なし	欠落	ハガキ	復員の報告。電話でいろいろ話を聞いた。奥様は戦時中に亡くなったとのこと、東京では母のようにお世話下さったこと未だに忘れられない、残念である。ついこの間のような気がするがもう10年にもなる。私もあれから間もなく三河屋より米の配給所に行っていたが、その間に出征してつい先日帰った。どうか墓前によく伝えてほしい。自分は東京四谷の三河屋の小僧である。
182	稲垣寛一	なし	欠落	ハガキ	書簡181の続き。
183	稲垣仁山	なし	xx/5/xx	ハガキ	先日は失礼した。その時におっしゃっていた来る5月12日の比叡山行き、天祥院に申し上げたところ都合が悪いとのこと。5月22日から30日までの中で2日ほど都合のよい日をお知らせ下されば幸甚である。
184	井上熊太郎	昭和2/5/10	昭和2/5/10	封書	巻紙1枚。忍頂寺静村(梅谷)に関する墓地・法名等の情報を報告、務の知識に誤りがある旨を指摘する。静村について、貴下書面に箕面山中吉郎

裏に務の鉛筆書入れ。身体のツボについて記したものか。

書簡183(稲垣寛一)と2通が一続きの内容となっている。切手部分が切り取られており、文章に欠落あり。

切手部分が切り取られており、文章に欠落あり。

差出人住所「京都市右京区花園妙心寺町 聖澤院」。

差出人住所「大阪高麗橋式丁目中橋角」。新見寛次「淡路書

193	伊原敏郎	昭和8/1/1	昭和8/1/1	八ガキ	昭和8年賀状
192	伊原敏郎	昭和7/1/1	昭和7/1/1	八ガキ	昭和7年賀状
191	伊原敏郎	なし	昭和3/1/3	八ガキ	昭和3年賀状
190	伊原敏郎	大正14/3/10	欠落	封書	
189	伊原敏郎	大正13/3/25	大正13/3/26	八ガキ	
188	井上書店	昭和10/5/29	昭和10/5/29	八ガキ	領収書。『色里迦陵頻』15円。
187	井上堅	昭和12/7/xx	昭和12/8/5	八ガキ	転居通知。
186	井上堅	昭和9/5/15	昭和9/5/16	八ガキ	上野付近で一杯やったのでお宿に電話しようとしたが、菊富士ホテルは電話帳に載っていなかった。
185	井上堅	昭和6/1/1	昭和6/1/1	八ガキ	昭和6年賀状。

兵衛氏別荘で死去とあるのは誤りであり、墓所は難波の鉄眼寺及び五百羅漢の2箇所にある。法名は法泉信士、明治10年丑11月17日に74歳で没した。9年8月)によれば、井上熊若年は梅谷、後に静村、臨池子、見山子、忍庵等の数号がある。堂島に住居、そこで死去した。他に申し上げたいことも多くあるが、筆では尽くしがたい。御寸暇の節に御光来いただきたく、お待ちしている。

大阪朝日新聞社の絵八ガキ。

井上書店は「東京帝国大学正門前」。忍頂寺文庫G72『色里迦陵頻』。

『延寿清話』1の礼状。  
 巻紙1枚。『延寿清話』の礼状。8代目団十郎の法名につき堀越家の仏壇にあった位牌には「篤誉浄菴實忍信士」とあった。この位牌は7代目団十郎が拵えて高野山と自宅とに納め堀越蔵より8代目の弟の猿蔵までが連記してある。堀越家の実物は一昨年の地震で焼失した。

「一昨年の地震」が関東大震災を指すと判断し、大正14年と推定。小野文庫296『延寿清話』では、第5冊104ページに記載の8代目団十郎の法名を「居士」「信士」と務の筆跡で修正。書簡35(飯島花月)と関連するか。

194	伊原敏郎	昭和9 / 1 / 1	昭和9 / 1 / 1	八ガキ	昭和9年賀状。
195	伊原敏郎	昭和10 / 1 / 1	昭和10 / 1 / 1	八ガキ	昭和10年賀状。
196	伊原敏郎	昭和11 / 1 / 1	昭和11 / 1 / 1	八ガキ	昭和11年賀状。
197	伊原敏郎	昭和12 / 1 / 1	昭和12 / 1 / 1	八ガキ	昭和12年賀状。
198	磐瀬三郎	昭和21 / 5 / 27	xx / 5 / 31	八ガキ	御懇書ありがたく頂戴、未だ拝顔を得ていないが、今後何かと御厄介になることと思う。よろしく御指導を願う。森さんへは早速御芳情の趣をお知らせした。
199	内田治ほか	昭和12 / 7 / 27	なし(封筒欠)	カード	内田良平死亡通知。
200	内田誠	大正14 / 11 / 17	大正14 / 11 / 17	封書	大正14 / 11 / 17付…便箋1枚。御手紙ならびに『清元研究』拝受、感謝。『こつた』内容に対する御注意、感謝。次回には訂正したい。以下、具体的な小唄の歌詞や作者に関する意見交換。 大正14 / 11 / 10付…便箋2枚。『こつた』と題する小唄歌詞集を別便で送付した。お噂は麹町・田中治之助(英十三)より聞いており、先日、『延寿清話』を拝受した。田中氏を通じて送ろうかとも思ったが、田中氏も多用ゆえ直接送った。『こつた』は赤阪で小唄師匠をしている田村という老婦人が多年にわたり写した手控えと、同人から稽古を受けている自分の収集物を加えて編纂した。御心付きの点、注意願いたい。 大正14 / 11 / 23付…便箋1枚。「順三翁絵はがき」と『清元研究』の御送付、感謝。順三翁の写真は珍品、永く愛蔵する。小唄について今後よろしく御指導願いたい。 便箋1枚。『延寿清話』拝読、雛鶴の研究うれしく拝読、狂名の研究は竹浦先生の熱心ほど恐れ入った。巻末の挨拶によれば存続を思案中とのことだが、続々の御発刊を切望する。
201	内田誠	大正15 / 3 / 6	大正15 / 3 / xx	封書	
202	内田良平	昭和7 / 1 / 1	xx / xx / xx	八ガキ	昭和7年賀状。

内田治は内田良平嗣子。友人  
総代として頭山満の名あり。

書簡1226(森銑三)と関連あり。

203	内田魯庵 (貢)	大正13 / 11 / 1	大正13 / 11 / 2	ハガキ	『延寿清話』 每冊惠贈、多謝。取り揃えて永く保存したく、頂戴してない第1冊に残刺があれば御惠送願いたい。
204	江口良橋	昭和26 / 2 / 23	xx / xx / xx	ハガキ	磯町湯屋庄兵衛の寛文4年濟鱗寺鬼簿には寛文3年となっている。濟鱗寺に行き、焼亡したとされていたのが現存していたのを早速一覽したところ、 廠然として寛文3年の条に3月24日云々とあったのでお知らせした。なお、 延宝7年2月21日湯屋やす子息昨夢とあり。
205	江口良橋	xx / 10 / 18	欠落	封書	巻紙1枚。明石柏木系図の件、延引してすまない。実は照合すると北風系図にない人があつて、濟鱗寺過去帳を閲覽してもないので、どうしたものかと思つている。14日の陳書会に欠席されたので寂しかった。禾舟翁の談に『柏木三省翁狂歌賀集』が ありと承つたので見せていただきたい。それと忍頂寺系図ができていればこれもお願いしたいが、いかがか。 事務所移転のお知らせ。
206	江戸時代文 化研究会	昭和5 / 1 / xx	昭和5 / 1 / 25	ハガキ	新事務所の入る市政会館(日比谷公園)の絵ハガキ。
207	頼原退蔵	昭和8 / 1 / 1	昭和8 / 1 / 2	ハガキ	昭和8年賀状。
208	頼原退蔵	昭和9 / 1 / 1	昭和9 / 1 / 2	ハガキ	昭和9年賀状。
209	頼原退蔵	昭和9 / 2 / 14	昭和9 / 2 / 14	ハガキ	東京からの便り、忝い。御栄転のことと思うが、何だかちよつと遠くなつたよな気がする。でも、しばらくということだから、いずれまた関西へ戻ることと思う。ホテルには石割氏も御一緒かと思つ。
210	頼原退蔵	昭和10 / 1 / 1	昭和10 / 1 / 1	ハガキ	昭和10年賀状。
211	頼原退蔵	昭和11 / 1 / 1	昭和11 / 1 / 1	ハガキ	昭和11年賀状。
212	頼原退蔵	昭和12 / 1 / 1	昭和12 / 1 / 1	ハガキ	昭和12年賀状。
213	頼原退蔵	昭和16 / 5 / 5	昭和16 / 5 / 5	ハガキ	『陳書』御惠贈、感謝。玉稿特に興深く拝見、往時の風交雅遊を偲んだ。今朝たまたま到着の『尚古』に所載の忍頂寺梅谷大人の鐘馗煎茶の画に「五月五日草木葉皆靈、静村民」とあり、今日のお便りにふさわしいと一人悦に入った。13、14日頃貴地に参るついでがあるかもしれない。

- 214 頼原退蔵 昭和19/1/24 昭和19/1/25 ハガキ 中村君を通じて借りた『粹言葉』の返却が遅れて申し訳ない。おかげで大いに益を得た。
- 215 頼原退蔵 昭和19/7/8 昭和19/7/10 ハガキ 数日前に中村君が来訪、御惠贈の『陳書』ありがたく拝受、感謝。このよ  
うな時局下ではこのように滋味多き読物はことにありがたい。拝借の『粹  
言葉』を返却に行きたいと思いつながら、何かと取り紛れ失礼している。  
塩見政次死亡通知。10月24日に死亡の旨の報告と告別式の案内。  
塩見政次は大阪垂鉛鋳業株式  
会社専務取締役。
- 216 大阪垂鉛鋳業株式会社 大正5/10/24 なし(封筒欠) カード 昭和11年賀状。
- 217 大阪朝日会館 昭和11/1/1 昭和11/1/1 ハガキ
- 218 大阪朝日新聞 昭和12/5/12 欠落 封書 昭和12/5/12付…便箋3枚、原稿依頼書1枚(ラヂオ批評「聴取者三  
百万突破記念放送」)。5月20日締切。  
昭和12/6/11付…原稿依頼書1枚(「長唄の夕」放送評)。6月15日締  
切。北岸佑吉の署名あり。  
S-11。
- 219 大阪国史会 昭和3/1 昭和3/1/2 封書 印刷物4点(「万葉地理講演会」(1月20日開催)案内、「日下貝塚之碑建  
碑式並記念学術講演会御案内」(1月22日開催)、「堺史蹟講演会」(1月15  
日開催)、「堺市正法寺の案内」)。  
演会の踏査時のものか。  
大阪国史会世話人氏名は「牧  
野安太郎」。案内用紙の裏面に  
務の鉛筆書入れあり(堺史蹟講  
演会の踏査時のものか)。  
大田幸子は神戸史談会会員。  
軍刀の話題、太田陸郎と関係  
あるか。太田陸郎の訃報は『陳  
書』14(昭和17年12月)中に9  
月10日の日付入り記事として  
記載。
- 220 太田幸子・泰 昭和18/5/6 昭和18/5/7 ハガキ 転居通知。印刷文面に自筆で書入れあり。軍刀のことはその後もいろいろ  
講じているが、はかどらず延引している。御容赦を願う。
- 221 太田保一郎 大正13/10/30 大正13/10/30 ハガキ 転居通知。帰郷することとなった。  
(麹町局)、大正 波村字大坪」。

13 / 10 / 31 (喜)

合局)

222 太田陸郎 昭和9 / 3 / 14 昭和9 / 3 / 14 ハガキ 今般上京、伺いたく電話をしたが不在のため失礼。明朝帰神のつもり。本日寸暇があつて相州国分寺跡を訪ねた。一帯野梅の盛りで一日を愉快に送った。過日お願ひした橋本氏の件、御心労をかけた。お心がけだけでありがたい。

223 太田陸郎 昭和11 / 1 / 19 昭和11 / 1 / 19 封書 半紙4枚。昭和11年1月19日開催の陳書会での寄書き計4枚。菅竹浦竹風(前川清二か)・五十崎杏冲(夏次郎)・坂井華溪・久保田積翠(韓七郎)・鷺尾三郎・川嶋禾舟(右次)・中尾巨山(方一)・村上玉兔(菟喜)・神田松南(兵右衛門)・太田陸郎・鷺尾正久の名あり。

224 太田陸郎 なし 昭和12 / 8 / 28 ハガキ 御懇書感謝。一度参趨したいと思いつつ、毎日夜までの仕事。尚陳書会の方は御秘蔵拝借中、不注意より汚損してしまい申し訳ない。

225 太田陸郎 昭和13 / 10 / 18 軍事郵便(日付) ハガキ 中国からの近況報告。やっと汗の生活から解放、元気が出た。武漢に近く、そろそろ冬服景色となる。一帯は赤松地帯、ただしマツタケはないよ。うだ。淡水魚には最近恵まれている。時々陳書会のことなど思ひ出す。

226 太田陸郎 昭和13 / 11 / 27 軍事郵便(日付) 封書 昭和13 / 11 / 27付…便箋1枚、拓本1枚(昭和13年11月3日の記載)。御手紙感謝、下手な拓影の新聞切抜、神戸市報など御投惠感謝。拓本には汗顔。今までは所在を伝えられなかったが、漢口に來た。前進中は永い間文通もたえていたが、最近一度にどっときた。手紙はありがたい。珍書御入手の由、学界のため大慶、うらやましい。過日村井書店が目録を送ってくれた。白雲堂、藤本書店からも送るといつてくれた。注文できなくても見たい。仕事に忙殺されている。もう1ヶ月もすれば多くの店も開かれるだろうが、一刻も早く前進したい。でもここでは毎日寝る時間があり、白米・野菜も食べられ、満足である。気候もそれほど内地と変わらないので安心を。つまり拓本を同封する。菓子のは初めてだろうと思う。拓

軍事郵便。神戸絵図。

なし)

本に「昭和十三年十一月三日 明治節 特別加給品菓子拓影」と記載。

xx / 4 / 8 付・便箋一枚（両面書き）、拓本一枚。中国からの近況報告。

2月26日付の御芳信拝見。小沢氏・谷崎氏の出版広告とともにうれしく思った。読書から離れた生活が苦しい。陳書会もますますさかんで結構。通信を書きたいと思いつながら失礼している。最近御入手の神戸絵図、かつて版本のあるのを川嶋氏から聞いた。元町の変わった気風の人が所有の由。杜牧の詩の景色は支那の野辺に味わえる。有名な黄鶴楼で鶯の声を聞いたと隊員が言っている。春は短く、すぐ夏になる。戦地では酒を飲むのが楽しみ第一だが、自分は酒が飲めない。他の者が酒を飲んでいる時間に手紙や日誌、雑文を書いている。武昌黄鶴楼と漢陽白牙台の古琴堂の瓦当の拓影を同封する。拓本に「武漢攻略戦参加記念 武昌黄鶴楼禹碑廟瓦当 漢陽白牙台古琴堂瓦当 於長江畔 手拓 太田陸郎」と記載。

227 太田陸郎 昭和14/7/7 軍事郵便（日付 封書

なし）

軍事郵便。

228 太田陸郎 xx / 4 / 21 軍事郵便（日付 ハガキ

なし）

中国からの近況報告。御多祥の由、前川老からの便りで承知した。柳絮が雪のように飛ぶ処に幾度目かの春を迎えた。奉公に精進している。

麗子氏書入れ「S-172」。

229 太田陸郎 xx / 5 / 30 軍事郵便（日付 ハガキ

なし）

中国からの近況報告。『陳書』11が到着した。久々に御芳文を拝見、ちょっと菅先生の縄張りに入っているよう、研究の方向が変わったと思う。内地を離れて丸2年、読書とも離れた。少々中国語を読めるようになった。長期戦なので中国を研究しておきたい。

隊名「中支派遣田村部隊気付 松垣舞台太田隊」は書簡230（太

244	大曲駒村	昭和3/3/xx	なし(封筒欠)	カード	富士崎放江・大曲駒村『未摘花通解』頒布案内(印刷、「未」が「未」と誤「齋藤昌三紹介」と齋藤自身
243	石谷柑圃				
242	大谷繞石	昭和7/2/xx	昭7/2/9	ハガキ	印刷物2点(石谷柑圃画 大谷繞石句 合作展覧会)の案内状および目録。
241	大谷繞石	昭和7/1/1	昭7/1/1	ハガキ	広島高等学校退職の通知。
240	大谷繞石	昭和6/1/1	昭6/1/1	ハガキ	昭和6年賀状。
239	大谷繞石	昭和5/1/1	昭5/1/1	ハガキ	昭和5年賀状。
238	大谷繞石	昭和3/1/1	昭3/1/1	ハガキ	昭和3年賀状。
237	大谷繞石	大正15/1/1	大正15/1/1	ハガキ	大正15年賀状。
236	大谷繞石	大正14/3/11	大正14/3/11	ハガキ	『延寿清話』6の礼状。この正月11日に御地へ下東、高田蝶衣君を訪ねていろいろ話をし、大兄のことにも話が及んで、お訪ねしようかと思つたが時間がなくて失礼した。
235	大谷繞石	大正14/1/1	大正14/1/1	ハガキ	『延寿清話』5の礼状。
234	大谷繞石	大正13/11/28	大正13/11/29	ハガキ	『延寿清話』4の礼状。
233	大谷繞石	大正13/11/3	大正13/11/4	ハガキ	『延寿清話』4の礼状。
232	大谷繞石 (正信)	大正13/4/19	大正13/4/20	ハガキ	『延寿清話』1・2の礼状。四高から広島高等学校へ転任した旨をあわせて通知。
231	大竹健二	なし	昭16/12/8	ハガキ	御通知ありがたく拝見、図書館へ行つて早速拝見しようと思つ。お礼申し上げます。
230	太田陸郎	xx/7/24	なし	ハガキ	中国からの近況報告。御懇書感謝。御教示の古書の騰貴には驚いた、原因はどこにあるのか。御高配による軍刀よく切れ、少々刃こぼれしたが3年間愛護、今では新しく巻いた糸も切れ、巻皮も2回修理した。日中130度以上、暑いというより痛い。

田陸郎)と共通。  
軍事郵便。「御地を離れて三年」とあり。昭和16年か。ただし、差出の部隊名「中支派遣田村部隊気付松垣舞台太田隊」は書簡229(太田陸郎)と共通。



(省三、  
九樽道人)

植)。

245 大曲駒村 昭和3/6/11 昭和3/6/11 封書

便箋1枚。『江都一色』につき御教示、感謝。原本には単に序文中北尾氏云々とあるばかりで奥付もないのだが、版元まであるのは誠に珍宝である。『末摘花通解』についてもお気づきの点あればよろしくお願い申し上げる。

の筆跡で書入れ。仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書目』には「九樽道人 方壺散史『末摘花通解』」の記載があつて、「昭和十八年七月 松井氏へ譲渡ス」と書入れあり。

仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書目』には「九樽道人 方壺散史『末摘花通解』」の記載があつて、「昭和十八年七月 松井氏へ譲渡ス」と書入れあり。

247 246 大曲駒村 昭和4/3/16 大曲駒村 昭和4/11/6 なし(封筒欠) 封書 カード

便箋2枚。過般お願いした件、早速快諾いただき光栄である。連中もほぼ20名となり、いよいよ来春発行することになった。何か原稿を本月中に頂戴したい。400字詰2枚で1ページに納まるので6枚くらいお願いしたい。これは菅氏にも伝えてほしい。開店の披露は永井荷風氏に頼んだ。内容は珍書の紹介に限らず江戸研究でも何でも御随意のもので結構。尾崎久弥氏は洒落本の話、梅本塵山氏は幕末通人の話、井上和雄氏は孝経研究、小生はみず紙考等。締切は本月中、もっとも長いものでも苦しくからず。

忍頂寺務「吉原よぶこ鳥」の発見(『赤本屋』1、昭和5年1月)。

248 大曲駒村 昭和5/8/xx 昭和5/8/5 八ガキ

研究発送遅延の詫び状。

249 大曲駒村 昭和6/1/1 昭和6/1/1 八ガキ

昭和6年賀状。

250 大曲駒村 昭和6/6/12 昭和6/6/12 八ガキ

送金拝受の通知。『あかほんや』原稿、25、26日頃までに寄稿をお願いしたい。

251 大曲駒村 昭和8/1/1 昭和8/1/1 八ガキ

昭和8年賀状。

256	大曲駒村	昭和10/1/1	昭和10/1/7	八ガキ	昭和10年賀状
255	大曲駒村	昭和11/1/xx	昭和11/1/11	八ガキ	昭和11年賀状
254	大曲駒村	昭和12/1/1	昭和12/1/1	八ガキ	昭和12年賀状
253	大曲駒村	昭和12/3/31	昭和12/3/31	八ガキ	転居通知
252	大曲駒村	昭和6/6/xx	欠落	封書	印刷物1点、『未摘花通解』二篇下巻の送金依頼。6月15日までに実費の送金がない場合は研究の仲間を遠慮したものと見なす。

257 大曲駒村遺著 顕彰会 昭和26/3/21 xx/xx/xx (投函時)、昭和26/封書 印刷物1点、『誹風未摘花通解』復刻の案内

259	岡信吉	昭和13/1/1	昭和13/1/1	八ガキ	昭和13年賀状
258	小笠原久恒	昭和7/1/1	昭和7/1/1	八ガキ	昭和7年賀状

仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書目』には「九樽道人方壺散史『未摘花通解』」の記載があつて、「昭和十八年七月 松井氏へ譲渡スヨ。」と書入れあり。相棒の富士崎放江が前年の9月9日に逝去したと記す。富士崎放江は昭和5年没であることから、本書簡は昭和6年と判断。推薦者一覧の項に「母袋光雄」と手書きで追加。転送先住所「奈良県生駒町菜畑 小野弘」。忍頂寺文庫G108,115『久恒翁探存』中に小笠原久恒の略歴が掲載される。それによると、小笠原久恒は淡路出身、歌謡研究に従事し、昭和12年没。務は久恒の稿本を所持し、後に神戸市立図書館、成田山、

272	尾崎久弥	大正 14 / 2 / 6	大正 14 / 2 / 7	八ガキ	御研究の御高贈感謝。一度面晤したく、実は昨冬も待つていた。『紅毛の「お亀」に関する洒落本を御購入の由、小生も先月よりお亀についてものしており、今月もちよっとお亀考をちよっと書いた次第。軟派叢書第何編として洒落本数種をまとめたく、このうちに翻刻の御許可をいただ	尾崎久弥書簡は、書簡 954 (藤田徳太郎) にも 2 点同封される。あわせて参照のこと。
271	岡本綺堂	昭和 10 / 1 / 1	昭和 10 / 1 / 1	八ガキ	昭和 10 年賀状。	
270	岡本綺堂	昭和 9 / 1 / 1	昭和 9 / 1 / 1	八ガキ	昭和 9 年賀状。	
269	岡本綺堂	昭和 8 / 6 / xx	昭和 8 / 6 / 1	八ガキ	転居通知。	
268	岡本綺堂	昭和 8 / 1 / 1	昭和 8 / 1 / 1	八ガキ	昭和 8 年賀状。	
267	岡本綺堂	昭和 7 / 1 / 1	昭和 7 / 1 / 1	八ガキ	昭和 7 年賀状。	
266	岡本綺堂	昭和 5 / 1 / 1	昭和 5 / 1 / 1	八ガキ	昭和 5 年賀状。	
265	岡本綺堂	昭和 3 / 1 / 1	昭和 3 / 1 / 1	八ガキ	昭和 3 年賀状。	
264	岡本綺堂	大正 15 / 1 / 1	大正 15 / 1 / 1	八ガキ	大正 15 年賀状。	
263	岡本綺堂 (敬二)	大正 14 / 7 / xx	大正 14 / 7 / 26	八ガキ	転居通知。『延寿清話』のお礼を併記する。	
262	岡村清道 ほか	昭和 15 / 5 / 27	昭和 15 / 5 / 28	八ガキ	4 世清元栄寿太夫死亡通知。5 月 27 日に死亡の旨の報告と告別式の案内。 岡村清道は 5 世清元栄寿太夫。	
261	岡松茂	xx / 2 / 14	xx / 2 / 15	八ガキ	去る 4 日に上京したが、途中腰越の親戚で 4、5 泊して上京した。当地なかなか寒くて思うように活動できない。4、5 件、就職の件を依頼、2、3 は効果があったよう。17、18 日頃帰神。上京以来連日の降雪、御存知の通り悪路には閉口する。 繪八ガキ(東京地下鉄道)うへの駅。	禾舟文庫等に寄贈した。 務著作に『芦分舟』というものがあらしいとの情報だが、確認できず。あるいは『潮来舟』の誤りか。
260	小笠原久恒	昭和 9 / 10 / 14	昭和 9 / 10 / 15	八ガキ	御地「粹古堂」なる古本屋から目録が送付され、その中に貴台御著述『芦分舟』を見出し早速注文したが、すでに売切れと返答があった。ずっと以前の御作と拝察。右差し支えなければ暫時拝借できないか。	

273 尾崎久弥 大正14/2/11 大正14/2/11 八ガキ

けないか。今後とも御説を伺いたい。花月君をお目にかけたい。叢書も思  
うような材料がなく、大兄の御貸与御声援をお願いする。

昨日午後洒落本2冊入手、御貸与の段ありがたく、早速写本にとりかかる  
べく、半月ばかりお貸し置き下されたくお願い申し上げる。3冊合本の方  
面白く、殊に「おカメヤ」というのは珍材料を発見した喜びに堪えない。

274 尾崎久弥 大正14/10/30 大正14/10/30 八ガキ

1日に大阪へ出向くと申したが都合により中止。そのうち阪神へ出向きた  
いとは思つ。先日のお手紙拝見した。全部謄写の件をお引き受け下さり、  
感謝。謄写は平均1日に2冊くらい、少なくとも1ヶ月に50冊は打ち上げ  
るつもり。10冊くらいずつ、まず未翻刻物を送つてほしい。大抵1週間く  
らいでお返しできると思つ。名古屋で筆写、そしてこちらで口絵も写真版  
に撮る。詳しくは後日。『延寿清話』昨日拝見した。

『洒落本集成』への資料提供  
の協力依頼。

275 尾崎久弥 大正15/10/9 欠落 封書

原稿用紙(尾崎用箋)の名入り)4枚。用にかまけて御無沙汰している。  
先月来(29日か)石川氏より兄へというはずの『銚子戯語』を預かつてい  
る。これは小生に他一本あるが欠字があつて校合せせてもらつたため(実は  
注文したが校正用なら貸すとのことで)約束したが、兄御希望と聞き、幸  
い石川本にも欠字があるので他一本と校合して初めて両者にて完本を作り  
上げた。お陰で集成第一巻は恥をかかないですむらしい。第一巻は全校了、  
目下内閲中だが、欠字の補遺は付録にして出す。あなた行きの本の欠字も  
小生が補い、只今別送した。代は直接石川氏へ支払つてほしい。なお『銚  
子戯語』石川本には跋が欠けている。小生借出の外一本には完全にある。  
御希望であれば薄葉にでも写して送ろうか。或いは御希望なら敷き写しに  
して後送する、いかがか。なお小生『集成』も追々捗りつつあるが、まだ  
なかなか材料がない。ついでに御蔵書のうち、大分他よりも融通できたり、  
または自分が買つたりして、どうしても兄の御好意にすぎるものは同封の  
数冊である。そのうち 印の物は、江戸物としてぜひ入れたい。うち『蕩

『清元研究』13未着の話題よ  
り大正15年と推定。忍頂寺文  
庫A93『蕩子笠柱解』、忍頂寺  
文庫A44『匂ひ囊』、忍頂寺文  
庫A121・1・2『意気客初心』、  
忍頂寺文庫A135『青ノ樓 阿  
蘭陀鏡』、忍頂寺文庫B17『願  
懸注文帳』、忍頂寺文庫A136『魂  
胆惣勘定』(附・華里通商考)、  
忍頂寺文庫A71『雑文穿袋』、  
忍頂寺文庫A130・1・2『襍土  
一覽』、忍頂寺文庫A137・1・  
3『水ノ月 ものはなし』、  
忍頂寺文庫A27・1・2『六学

子釜枉解』は小生も1本を得たが、虫がところどころにあり、これは校合問後編青楼女庭訓』、忍頂寺文庫A 65『当世気とり草』、忍頂寺文庫A 124『辰巳世界』、忍頂寺文庫A 138、135『南遊記』、忍頂寺文庫A 125『二もと松』。だけ、またはこのうち内容御存じの兄に御選定願ってもよろしい。小生の考は、第4巻まで江戸の小説物、第5巻は江戸の風俗その他の物、第6巻に上方物を入れたい。上方は長編でもあるから、この中の一部でもいいと思う。『江戸時代』拝見した。『清元研究』13未着、残本があればほしい。研究遅れて、明日は御送付する。4枚目に希望書目の一覧を付す。列峯された書名は以下の通り。「意気客初心」「青楼阿蘭陀鏡」「大磯風俗通」「願懸注文帳」「華里通商考」「淫女皮肉論」「雜文穿袋」「裸土一覽」「水月ものはなし」「青楼女庭訓」「蕩子釜枉解」「当世気転草」「辰巳の世界」「北廓故実内所図会」「南遊記」「句囊」「話のやうだ」「二もと松」。

の該書の欄には「二十五年天理」と書入れあり。忍頂寺務「大江戸研究」の著者より「書物往来」5、大正13年11月）に『淫女皮肉論』を、永田本残部入冊（ママ）で入手したとの報告あり。「諸家来信抄三」（『書物往来』6、大正14年1月）掲載の務書簡に、『淫女皮肉論』の紹介および『水月ものはなし』、『辰巳世界』を大正14年1月11日に大阪で入手したとの報告あり。忍頂寺務「上方の洒落本に就て」（『書物往来』11、大正14年8月）に『南遊記』の紹介あり。忍頂寺務「上方の洒落

276 尾崎久弥 大正15 / 10 / 18 大正15 / 10 / 18

ハガキ

先日のお手紙拝見、よろしく頼む。については、お願いした『清元研究』<sup>13</sup>が欠号にならないか心配、至急送ってくれるよう発行所へ頼んでほしい。

本に就て(二)「『書物往来』  
14、大正14年12月」に『魂胆  
惣勘定(附・華里通商考)』意  
気客初心』の紹介あり。『銚子  
戯語』、『大磯風俗通』、『北廓  
故実内所図会』、『話のやうだ』。

277 尾崎久弥 大正15 / 11 / 26 大正15 / 11 / 27

ハガキ

先日『清元研究』<sup>13</sup>ありがたく入手、お礼申し上げます。本日、只今『本草妓要』上巻1冊入手した。ところがこの本、第4・5丁の2枚が欠丁。

忍頂寺文庫A116'1・2『本草  
妓要』。

278 尾崎久弥 大正15 / 12 / 7 大正15 / 12 / 8

ハガキ

お手許のもの、この上巻ではないか。そうであればこの2丁分だけお知らせ下されたい。小生入手のものは第3丁裏のここ賤妓で切れ、第6丁の六妓の挿絵の前までない。計第4・5丁の2丁分の落、もし御所蔵のものが下巻なら、一層よろしく、2本をあわせて発表したら面白いと思う。

忍頂寺文庫A116'1・2『本草  
妓要』。

279 尾崎久弥 昭和2 / 4 / 18 昭和2 / 4 / 19

ハガキ

先日は御教示、感謝。左の紙魚のあと御蔵書により御教示を得られれば幸いです。左のうち2、3は判読もしたけれど、念のため問い合わせる。以下、『通心神の講釈』より紙魚の箇所を9項目列挙。

忍頂寺文庫A48『かよふ神の  
講釈』。忍頂寺務「大江戸研  
究」の著者より「『書物往来』

280 尾崎久弥 昭和2/8/3 昭和2/8/3 ハガキ

小生では見当つかずお尋ねする。以下、3項目列挙。『めりやす豊年』  
原本只今小生の手許にあり。これは従来活字本はないか。『拾遺枕草子  
花街抄』は本日板本を入手、ただし45円という。高値ではないか、買って  
よろしいか。貴下の写本に年代はないか。同じく小本『色里袂案内』(10  
枚ばかりのもの)入手、この年代を知りたい。この本は、御存じであろう  
が京洛の花街である。

281 尾崎久弥 なし 昭和8/1/1 ハガキ

昭和8年賀状。

282 尾崎久弥 なし 昭和9/1/1 ハガキ

昭和9年賀状。小生の編輯で昨年より『観音』を続刊、「清元の浅草物」  
など原稿を寄せてほしい。

『観音』全号を通じて務の執  
筆記事は確認できず。

283 尾崎久弥 xx/4/4 欠落 封書

原稿用紙(「尾崎用箋」の名入り)1枚、『洒落本集成』校正刷1枚。小生  
の『集成』も第1巻は去年中出版のところ、内閣が出来上がらず遅れてい  
る。目下第2巻の初めの方にかかっている。右のお尋ねのうち、『駅者三  
友』不明の箇所と、跋があればその全文と、折り返し御教示御垂示下され  
ば大幸。同封校正摺は第2巻の初めの方の初校である。御笑覧下されたい。  
この次が『駅者三友』である。

『洒落本集成』第1巻が去年  
中出版のところ遅れていると  
いう話題より、昭和2年か。

284 尾崎久弥 xx/12/5 欠落 封書

原稿用紙(「尾崎用箋」の名入り)2枚。今日は年来の希望を率直に言う。  
あなたの洒落本、吉原細見本など、ちよいちよい最近、私はじめ名古屋の  
小生の友人など買っている(多く楠林の手から)。ついては折角お領けに  
なるのだったら、小生、材料としてどうしても左の数書だけは入用である。  
続けて5作品の名を列挙、『淫女皮肉論』、『雑文穿袋』、『当世気転草』、『南  
遊記』、『匂囊』。失礼ながら、まだ手許にあるだろうか。あるいは御入用

忍頂寺文庫A71『雑文穿袋』、  
忍頂寺文庫A65『当世気とり  
草』、忍頂寺文庫A138『1』5  
『南遊記』、忍頂寺文庫A44『匂  
ひ囊』。天理大学附属天理図書  
館蔵『淫女皮肉論』(忍頂寺務

5、大正13年11月)に『かよ  
ふ神の講釈』を「永田本残部  
入冊(マク)」で入手したとの報  
告あり。

として御保存かもしれないが、特に小生へお領け願えないか。あなたのお  
つしやる値で結構である。挿絵の製版その他のため、どうしても自家用と  
して入用。実はまだ御家蔵本でたくさんあったが、最近これだけにした。  
それからあなたの『穿当珍話』がお手許にあつたら、奥付の全部を教えて  
ほしい。あなたのは京版だと思つ。大阪の宝暦版と印文は一切違わないか。  
なお小生蔵本には「附」というのが3丁あり、全部口合だんだんである。  
これが京版にもあるか。御教示願う。

旧蔵、仙台忍頂寺家蔵『静村  
文庫書目』の該書の欄には、「二  
十五年 天理」と書入れあり。  
忍頂寺務「大江戸研究」の著  
者より「『書物往来』5、大  
正13年11月）に『淫女皮肉論』  
『穿当珍話』を「永田本残部  
入冊（マ）」で入手したとの報  
告あり。ただし、『穿当珍話』  
は忍頂寺文庫・小野文庫には  
所蔵されず。「諸家来信抄三」  
（『書物往来』6、大正14年1  
月）掲載の務書簡に、『淫女皮  
肉論』の紹介あり。忍頂寺務  
「上方の洒落本に就て」（『書  
物往来』11、大正14年8月）  
に『南遊記』の紹介あり。

絵ハガキ（博多名所）九州帝  
国大学工科大学本館）。

差出人住所は、津名郡浦村。

- |     |       |               |               |     |  |
|-----|-------|---------------|---------------|-----|--|
| 285 | 尾崎行武  | 大正7 / 3 / 25  | 大正7 / 3 / 25  | ハガキ | 福岡から近況報告。先日はお邪魔した。小生は昨日午後1時頃、先日お話<br>した炭鉱の件で当地に来た。先日お話の件は早速東京へ書状を送ったので、<br>そのうちに返事があることと思つ。月末までに帰宅するはずである。 |
| 286 | 片 与利  | 大正15 / 4 / 12 | 大正15 / 4 / 13 | ハガキ | 私事、11日の2時半頃に無事に帰ったので御安心を。たびたび罷り出てい<br>るいる御馳走になり、感謝。御土産感謝。預かった品物はたしかに届けた。<br>きく系様へ今日小包送った。着いたら受け取ってほしい。     |
| 287 | 勝本清一郎 | 昭和16 / 8 / 8  | 欠落            | 封書  | 原稿用紙（「勝本清一郎用箋」の名入り）2枚、務の返信下書きを記した<br>便箋1枚。小生、尾崎紅葉全集の編纂委員となっている。第3巻に『鬼桃<br>集顛末』（『書物往来』3、大                   |



295	川嶋禾舟	昭和3 / 10 / 4	xx / xx / xx	ハガキ
294	川嶋禾舟	昭和3 / 9 / 12	昭和3 / 9 / 12	封書
293	川嶋禾舟	昭和3 / 4 / 28	昭和3 / 4 / 29	ハガキ
292	川嶋禾舟 (右次)	昭和2 / 4 / 21	なし	封書
291	川口一郎	大正11 / 1 / 1	xx / xx / xx	ハガキ
290	河合たね	昭和2 / 8 / 25	昭和2 / 8 / 25	ハガキ
289	嘉納純	昭和12 / 1 / 1	昭和12 / 1 / 1	ハガキ
288	嘉納純	昭和6 / 8 / 20	昭和6 / 8 / 20	封書

太郎』を収載することとなった。御承知のように同作品には鬼ヶ島の文字正13年7月)に、解読結果をなるものによる序文がある。かつて『書物往来』誌上で貴下の解読を拝見記した務の書簡全文が引用された。その解答を解題中に引用したので承諾を願いたい。もしその後の再考があつて解読中の文字に多少の変更があれば、改訂版に従いたいのでお伺いする次第である。私は石川巖氏はよく知っている。またこの住所は辰巳屋書店が教えてくれた。

2つ折のカード1枚。印刷文面。病氣見舞に対する礼状。

昭和12年賀状。

過日は突然参上していろいろ御厄介、御馳走、感謝。はじめてお邪魔しながらお言葉に甘えて長話をし、遊園地も見せていただき愉快で喜んでい

大正11年賀状。

香港からの航空便。

昭和2 / 4 / 21付…用箋(「大福海上火災保険株式会社神戸支店」名入り)1枚、写真3枚。過日の絵を接写したもの、いささか鮮明さを欠くが、参考までに送る。さらに鮮明な現像を試みている。「播州室津小五月大祭礼之図」の写真3枚同封。

xx / 5 / 6付…巻紙1枚。例の志筑の件、いろいろとお手数をかけたところ、都合にて謝絶することになった。悪しからず思つてほしい。

松江に來た。例の古本屋はまだ調べていないといつて新規のものを見せず遺憾。他に少数の雑書を求めた。30日に帰神の筈。

用箋(「大福海上火災保険株式会社神戸支店」の名入り)2枚。兵庫音頭の参考として序文写しを送る。2枚目に別記を記す。本書天保9年再版とあるが誰であるか明らかでない。以下、「初代一九」「二代一九(糸井風助)」「二代一九(三亭春馬)」に関する記述。

絵ハガキ(皆生温泉行電車鉄道省線交叉点)。

序文を写したというのは、十返舎一九『復讐 播州舞子浜』か。本書には天保9年の再版本あり。忍頂寺文庫にも所蔵あり(B15)。

4日早朝より急にまた山陰へ來た。行き違ひのことと思つ。6日には帰神 絵ハガキ(新温泉浴槽(女))。

296	川嶋禾舟	昭和3/10/9	昭和3/10/9	ハガキ	岡山、例の本屋に立ち寄ったが、とつちりとん、明治27年刊『神戸細見記』とあったのみ。広島で今日は2、3書店を訪ねる。明日は下関市まで行き何か獲物を探す。12、3日ごろには帰神。	絵ハガキ（広島大本営址）。
297	川嶋禾舟	昭和4/9/18	昭和4/9/18	ハガキ	鉄仙流文献、御厚志感謝。15日以来旅程を重ね、高松へ来た。当地には1冊の古本もない。これより津山市に行き、30日には帰神。龍野では少し買入れたが駄本のみ。	絵ハガキ（栗林公園南庭津筏）。
298	川嶋禾舟	昭和8/11/7	昭和8/11/8	ハガキ	5日夜出発、12、3日頃まで西国南国の秋色を探りつつある。松山から。	絵ハガキ（松山公園（松山城））。
299	川嶋禾舟	昭和8/11/10	昭和8/11/11	ハガキ	宇和島図書館長は熱心な郷土史家、この人より伊達家のお船歌を聞こうと訪問したところ、生憎病で欠勤中、遺憾である。13、4日頃帰神。	絵ハガキ（宇和島市全景）。
300	川嶋禾舟	昭和9/5/6	昭和9/5/6	ハガキ	去る27日、高野山参拝。善男善女と共に聖地を終日巡行、夕方大阪へ帰着。高野では咲き残りの花に逢えた。	絵ハガキ（高野山金堂）。
301	川嶋禾舟	昭和9/8/31	昭和9/9/1	ハガキ	松江から、山陰旅行の報告。新涼の山陰を旅している。本日は大社に参り、松江に八雲館を訪ね、文豪の面影を偲んだ。明日は伯備線で岡山に出る。	絵ハガキ（文豪小泉八雲の旧居（松江））。
302	川嶋禾舟	昭和9/9/13	昭和9/9/14	ハガキ	日光土産、楠公手拭、米。日報と種々御送付感謝。殊に手拭は珍しく、永く保存する。本月末に陳書会開催、会報のこと。菅氏『近世狂歌史』の印刷が遅々として進まないとのこと。	絵ハガキ（染織祭行列絵葉書 江戸時代後期 京女の晴着姿 （公家の奥方））。
303	川嶋禾舟	昭和10/4/28	昭和10/4/28	ハガキ	南朝遺跡と天誅組発源地を巡遊。淡路の古東涼（マ）左衛門の活躍した所。	絵ハガキ（通信文化展覧会）。
304	川嶋禾舟	昭和10/5/3	昭和10/5/3	ハガキ	『江戸時代語研究』3冊並にシーボルト資料展目録拝受。感謝。わざわざ書入れ、丁寧拝謝。月末より山陰を飛脚旅行、今朝帰神。	絵ハガキ（楠公六百年祭記念 觀光博覧会）。小野文庫 <sup>447</sup> 『淡 路仲野安雄翁旧蔵古書籍展観 売立目録』（昭和10年5月22日 展観下見、23日入札）。
305	川嶋禾舟	昭和10/5/23	昭和10/5/23	ハガキ	昨22日仲野安雄本の遺書入札につき、大阪書林クラブへ行った。翁の篤学を知るべき好機会であった。2、3注文したが、果たして入手できるかおぼつかない。触書、地誌、国学、なんでもある。鹿田札元。	

306	川嶋禾舟	昭和10/11/6	昭和10/11/6	ハガキ	みなと祭、第3回となった。ただし年々賑いは衰えている。蜂須賀船唄は金4円を至当と考える旨、申し来たので支払った。去る1日、美囊郡の山奥に味池修居の墓を見てきた。	絵ハガキ（神戸布引水源池）。
307	川嶋禾舟	昭和11/7/10	昭和11/7/10	ハガキ	御船唄を送付する。これは印刷の予定だが、とりあえず御覧に入れる。尾州御船唄未刊の分を拝借したい。（内田注：坂本か）氏の希望につき、お送り願いたい。	絵ハガキ（大三島名所）伊予国大三島国宝館ヨリ安神山ヲ望ム。
308	川嶋禾舟	昭和11/8/2	昭和11/8/2	ハガキ	高野山を登山、3・4日滞在の予定。帰神後、『如何の恭順』の冊子を送付する。	絵ハガキ（高野山奥之院）。
309	川嶋禾舟	昭和11/9/20	昭和11/9/20	ハガキ	通信日より無事着、感謝。送付の切手は預かり、次便で返却するが、この切手は当地にない珍品なので他の品で容赦されたい。本日より阪神地方防空演習に入る。	
310	川嶋禾舟	昭和11/9/25	昭和11/9/26	ハガキ	切手各種拝受、感謝。来月早々に珍々書会を開き、次号発行のこと進捗させたい。何か原稿を寄せてほしい。	絵ハガキ（日本三碑之一多賀城碑 福島蔵）。
311	川嶋禾舟	昭和11/10/17	昭和11/10/17	ハガキ	先日『菊水』を送った。楠公墓のことを書いてある分である。	絵ハガキ（鹿児島）照国神社より市街を望む。小野文庫301『菊水』には該当する号は確認できない。
312	川嶋禾舟	なし	昭和11/10/29	ハガキ	「花電車」と題して「つひく街の夜長の人に交り」の句を記す。	絵ハガキ（大観艦式記念）。
313	川嶋禾舟	なし	昭和11/11/xx	ハガキ	本文なし、絵ハガキの図版とスタンプのみ。	絵ハガキ（高砂善立寺立札 天竺徳兵衛墓所）。
314	川嶋禾舟	なし	昭和12/1/13	ハガキ	「子規居士の墓にしみ入る寒さかな」の句を記す。道後温泉より。	絵ハガキ（松山名勝三津港ノ全景）。
315	川嶋禾舟	昭和14/3/20	昭和14/3/21	ハガキ	秋芳洞に入った。樹下氏来神、夕食後に講演のこと決定、晚餐会のこと相談したい。有志会合、湊川社務所借用と相定めた。	絵ハガキ（秋芳洞奇勝）黄金柱）。
316	川嶋禾舟	昭和15/4/9	昭和15/4/9	ハガキ	8日出発で上京、良い宿である。武藤氏依頼交渉に好都合。午後9時着京、	絵ハガキ（東京湯島天神下）。

- 317 川嶋禾舟 昭和15/5/3 昭和15/5/3 ハガキ  
 駅にタクシーがなく数町徒歩、ようやく流しに乗った。5、6日滞在予定。花水館東京支店玄関前広庭。  
 謄写版による印刷文面。陳書会例会(5月11日)の案内。前川氏の古稀祝  
 寿、鷲尾氏の出版祝も兼ねた。
- 318 川嶋禾舟 昭和16/10/7 昭和16/10/7 ハガキ  
 昨6日に齋藤氏を訪問、『川柳楠公記』は大曲駒村氏の紹介にて引き受け  
 たとの事。小生の『楠公礼賛』にも大いに気があるらしく、目録だけ渡し、  
 『菊水』3部を見本に呈上した。明日出発帰神。 第一鳥居。
- 319 川嶋禾舟 昭和17/8/21 昭和17/8/21 ハガキ  
 玉屋のこといろいろ感謝。宮川氏へ貴下よりハガキにてよろしく礼状を出  
 しておいてほしい。 間。
- 320 川嶋禾舟 昭和18/12/31 昭和18/12/31 封書  
 昭和18/12/31付…用箋(「東町区第四町内会」名入り)1枚。『備前名  
 所記』について岡山池田侯所蔵に属するもの回答を同封した(その内容、  
 務の字で便箋裏面に書き写してあり)。いよいよ経平の真筆と思われる。  
 正修の記事を調べてほしい。従来同人に関する史料は判然としないものが  
 多く、断簡でも貴重だと思う。『陳書』印刷所は多忙を極めており、かつ  
 予定の紙数に達さず、未だ交付していない。目下2、3の執筆者を督促中。  
 昭和18/11/27付…ハガキ。経平『備前名所記』御入手とのこと、同書  
 は同人著述目録には示されている。経平の遺稿遺書などすべて岡山池田家  
 に所蔵のはず。一応照会する。著述も極めて多く、湯浅常山と同時代、『湯  
 土問答』とて和漢の文学に尽し詩記せしものもある由。写本も千巻もある  
 という。天明2年没、年76。『樹下散稿』の記事ありがたく拝承。有益な  
 史料である。『陳書』未だ纏まらず目下督促を重ねている。
- 321 川嶋禾舟 昭和20/6/17 昭和20/6/17 ハガキ  
 去る5日遂に全焼。蔵書も悉く烏有に帰し遺憾千万の至り。去る14日表記  
 (和歌山市和歌浦高松<sup>85</sup>4)へ移転した。当分はここにおいて、おおい  
 借書でもいたし、再び出神の機をねらっている。菅氏蔵書せしめられ(松  
 井氏大希望にて菅未亡人、高尾などを訪問し了解あり)、これもつらい。  
 追って御報するつもりだが、とりあえず御通知申し上げる。

322 川嶋禾舟 昭和20/7/10 昭和20/7/14

封書

便箋2枚、「御香料」の包み紙1枚。務の妻逝去のお悔やみ。小生今晚の空襲は、被害がなかった。拙宅は市の中心から遠く、ほとんど郊外ともいふべき地に在るゆえ安全。ただし待避3時間にわたり閉口の至り。焼夷弾の炎が激しく、家も蔵も焼ける物音すさまじく、この世が燃え尽きるかと思つた。いずれ交通が便利となれば参神のつもりだが、次々と支障相起り、そのためまだ参りかねている。菅氏遺書も高尾が引き取り、彼の手にて全焼したかと思つ。松井氏の希望もあり、西村氏努力にて資金もできていたものを振り切り、高尾が持ち帰り想像のごとく全焼したとすれば、運命は皮肉なものである。

323 川嶋禾舟 昭和20/8/22 XX/XX/XX

ハガキ

戦局一変。先月14日に発信した書留は届いたか。小生は14日に神戸に参り義兄の急逝に会葬、その後帰宅。昨春秋、お手元に拝呈した楠公文献焼失につき、一応拝借して写しておきたいので、ついでに送つてほしい。いづれ少し落ち着いたら9月か10月には出神のつもり。その節お会いしたい。電話復活ともなれば大いに便利だが昨今の状況では全く困りものである。先年拝呈した『黄庵詩文』、お手元に2部あれば1部もらいたい。実は同書編者岡次郎先生全焼、目下長崎市外に帰宅。幸いにお手元に余部があれば寄贈したいと思つ。『国文学人物誌』の著者について取り調べたところ氏名が判然としない。年代と刊行書肆を御報せ下されたい。手がかりをもとめ調査したい。来る12・13日に神戸図書館へ行きたいと思つ。家妻兄の家に1泊のつもり。都合でお伺いしたいと思つが、忙しい日程故、如何とも予定をいたしがたい。

324 川嶋禾舟 昭和20/10/5 XX/XX/XX

ハガキ

「戦局一変」の表現および書簡322（川嶋禾舟）を指す7月14日付の書留の記事より、昭和20年と判断。  
忍頂寺文庫H36『国文学人物志初編』。成田山仏教図書館蔵黄庵詩文（忍頂寺務旧蔵、本報告書所収の山本論考参照）。宛先住所は昭和20年8月以降のもの。差出住所（和歌山市和歌浦高松）は昭和21年6月まで確認でき、同年9月以降は川嶋は和歌山県海草郡西脇野村西ノ庄へ転居している。以上より、昭和20年と推定。2

325

川嶋禾舟

昭和20 / 10 / 17

xx / xx / xx

ハガキ

先日訪ねた後は電車不通、徒歩で大手に帰り、10時半出発で帰宅。その日よりまたまた各地で交通に支障あつたが幸運にも帰れた。御報ありがたく、『漫筆』以下それぞれ所感いたしている。ただし『陳書』は6・7号各1部あるのみなので割愛してほしい。明18日は大和五條へ紙谷氏を訪ねる。

銭ハガキに「料金収納」の印あり。

宛先住所は昭和20年8月以降のもの。差出住所（和歌山市和歌浦高松）は昭和21年6月まで確認でき、同年9月以降は川嶋は和歌山県海草郡西脇野村西ノ庄へ転居している。

ハガキ料金が5銭なのは昭和20年4月から昭和21年7月の期間、よつて本書簡は昭和20年。

326

川嶋禾舟

昭和20 / 10 / 20

xx / xx / xx

ハガキ

惠贈の『兵庫くどき』23冊ならびに『黄庵詩文』拝受、感謝くどきの中にはまだ所有していないものもあり、興味が一段と深い。『黄庵詩文』は拜読の上、岡先生へ送りたい。本日同氏よりも通信あり。18日、大和五條に紙谷氏を訪ね、1日清談にふけた。

成田山仏教図書館蔵『黄庵詩文』（忍頂寺務旧蔵、本報告書所収の山本論考参照）。『兵庫くどき』宛先住所は昭和20年8月以降のもの。差出住所（和歌山市和歌浦高松）は昭和21年6月まで確認でき、同年9月以降は川嶋は和歌山県海草郡西脇野村西ノ庄へ転居している。また、書簡<sup>324</sup>（川嶋禾舟）との関連からも昭和20年と推定。なお、本書簡は2銭官製ハガキに2銭切手を2枚

327

川嶋禾舟

昭和20 / 11 / 2

昭和20 / 11 / 2

ハガキ

『陳書』11冊ありがたく拝受した。10日に岡田氏を訪問する予定。同氏とは面識を持ちたいと思う。交通大不便、少々困却。『国学人物誌』著者氏名と年号までその節承りたいと思う。阪神地方に復帰の工夫努力中。右お礼まで。戦災の身にひた迫るこの冬の重さと飢えを如何にしのごうか。

貼付、計6銭の郵便料金。ハガキ料金が5銭なのは昭和20年4月から昭和21年7月の期間、それ以降は15銭となる。よって本書簡は昭和20年。忍頂寺文庫H36『国学人物志初編』。宛名・文面を印刷済み未使用官製ハガキの両面に紙を糊で貼って記す。

328

川嶋禾舟

昭和20 / 11 / 13

xx / xx / xx

ハガキ

先日お礼状を差し上げたところ、本日森銃三より来信、豊島区長崎町4丁目27に転居の通知。池上幸二郎（製本屋）と共同借家のよし。伊丹岡田氏へ珍書語るも尽きし杉の葉と申し遣わすは如何か。早く阪神間へ帰りたい。塩屋に広い間貸があるが子どものある人はいやという。

宛先住所は昭和20年8月以降のもの。差出住所（和歌山市和歌浦高松）は昭和21年6月まで確認でき、同年9月以降は川嶋は和歌山県海草郡西脇野村西ノ庄へ転居している。小野文庫所蔵の森銃三書簡によれば、昭和20年4月8日付書簡（書簡1224）の差出人住所は「駒込」、昭和21年1月9日付書簡（書簡1225）では「豊島区長崎町」となっており、森の転居は昭和20年のことと判断される。よって、本書簡は昭和20年。

329

川嶋禾舟

昭和20 / 12 / 9

欠落

封書

便箋1枚。桑原氏から回答あり、同封する。十分ではないが、主なる人物

宛先住所は昭和20年8月以降

は判明した、これにて了されたい。和歌山『和歌祭御船歌』は御承知か。全てで28首ある様子、20〜28は小生入手の『紀州文化研究』に掲載されている。1〜19は雑誌編輯者に面会の機会に尋ねようと思う。『先賢遺』は送ってきたか。跋文訂正をいただければありがたい。『神戸和史』、お手をかけ感謝。都合にて播州へ両3日中に参る。

野村西ノ庄へ転居している。  
以上より、昭和20年と推定。

昭和21年賀状。

本月は陳書会不参。4月は出席しようと思う。『含翠堂考』漸くに搜り得た。網干に家を求めて物色中だが見当たらない。然るところ、倅に住友から復帰の交渉があり、都合によつてはこの地を離去するかもしれない。とにかく老年に及び迷惑している。自作の短歌1首、漢詩1首を記す。

より昭和21年と推定。

和歌山藩御船唄37編を収録の写本が今般図書館に寄贈された。最後のものは鯨船で他藩にはないものである。『紀州文化研究』には36編あり。まだ照合していないが、不日借用する依頼をしておいた。小生来る20日の陳書

印刷済み未使用官製ハガキの  
通信面に紙を糊で貼って記す。

会、天気よければ出席するつもり。『紀州文化研究』を持参すべきか、一報を。荷になるほどではないが、少しでも軽い方を望む。

小生去る20日朝出発、昨夕帰宅。不在中御芳書に接し、行き違い残念。ついでには目下図書館移転休館中で写本の借り出しができない。多分本月末まで休館だと思つ。来月12日、伊丹岡田氏の会に刊本写本ともに持参したいと思つ。あるいはそれまでに送付した方がよいか。右借り出しの都合で決定したい。過日御出席なく寂しかった。『網干町史』の編纂を引き受けることになった。

野村西ノ庄へ転居している。  
以上より、昭和21年と推定。

『紀州文化研究』は拝芝の節でよい。多分来る7月の陳書会には行けるか

印刷済み未使用官製ハガキの

331 川嶋禾舟 昭和21 / 1 / 1  
ハガキ 昭和21 / 1 / 4  
330 川嶋禾舟 昭和21 / 3 / 26  
ハガキ xx / xx / 27

332 川嶋禾舟 昭和21 / 4 / 13  
ハガキ 昭和21 / 4 / 14

333 川嶋禾舟 昭和21 / 4 / 25  
ハガキ xx / xx / xx

334 川嶋禾舟 昭和21 / 6 / 24  
ハガキ 欠落



335 川嶋禾舟

昭和21/8/11

xx/xx/xx

ハガキ

と思う。図書館漸く本日から復旧開館、この紙を剥がして御覧下されたい  
 (書簡本文を記した紙の下に、ハガキ本体に印刷された図書館再開と川嶋  
 による記念の講演会の案内文面あり)。大阪創元社から著書出版の交渉が  
 あり、原稿を交付した。そのため約1ヶ月多忙を極めている。近頃殆ど耳  
 が聞こえないようになった。読書のみは、視力が衰えたものの、その楽し  
 み往時に劣らず、否、雑音の入らぬため大いに愉快を加えている。去る16  
 日大和五條に参り旧友4人参会、半日を過ごした。  
 『よぶこ鳥』のこと中村氏に取り次いでほしい。8月は神戸行未定、9月  
 には必ず行く。貴書とは行き違いに7月出版の拙書を差し上げた。9月に  
 は奈良へ参りたいと思う。

通信面に紙を糊で貼って記す。  
 文面の紙を貼った台紙は、和  
 歌山県立図書館で6月22日  
 (土)に行われる川嶋の講演  
 の案内状。6月22日が土曜で  
 あることから、昭和21年と推  
 定。

小野文庫<sup>364</sup>『吉原よぶこ鳥』  
 色里名所独案内(務写)、『吉  
 原呼子鳥』の話題より、昭和  
 21年か。ハガキ料金が15銭な  
 のは昭和21年7月から昭和22  
 年4月の期間、よつて本書簡  
 は昭和21年。絵ハガキ(扶桑  
 百菊譜 古書趣味の会出品の内  
 百足屋文庫蔵)。

336 川嶋禾舟

昭和21/9/5

昭和21/9/6

ハガキ

さて、過日例の甘酒の素、同封あり。御試用下されたい。用法も同封した  
 ので御覧下されたい。昨日大阪に参り、図書館長に『よぶこ鳥』、『源氏物  
 語』などの話をしたところ同館にても希望あり(本年度購入予算4万円)、  
 沖森書店にでも評価をさせては如何との話があった。しかるべくお願いし  
 たい。小生親戚の工学士遺書の処分方法について相談があったため、これ  
 は丸善に評価させ、遺族の方にそれにて承諾あれば引き受けられるとのこ  
 とである。14日の陳書会の通知あり、多分出席する。

印刷済み未使用官製ハガキの  
 通信面に紙を糊で貼って記す。  
 小野文庫<sup>364</sup>『吉原よぶこ鳥』  
 色里名所独案内(務写)。宛  
 名面に務書入れ、原稿紙代  
 三六、送金分。

337 川嶋禾舟

昭和21/9/23

昭和21/9/24

ハガキ

送付の『御船歌』到着、受け取った。小生昨夕帰宅、すぐに雑誌と対照し  
 たところ活字の相違(原本もか)らしきものを多数発見したので後便にて  
 小野文庫<sup>364</sup>『吉原よぶこ鳥』  
 色里名所独案内(務写)、『吉

- 338 川嶋禾舟 昭和21/9/26 欠落 封書  
 (便箋)、昭和21/9/27(封筒)  
 原稿用紙1枚。「き路まくら」と題する歌謡の1節を書写。右1章、目録になし。目録四季の次にあり、鯨歌との間にある。対照すると活字の相違と原本写字の誤りとがある。御都合のとき送付する。来月12日の陳書会には出席のつもり。それより1週間綱干町へ行く予定。図書館へは一応返却、また借り出すことも可能。この手紙を認めた原稿用紙は綱干町で刷らせて沢山あるので、入用なら進上する。
- 339 川嶋禾舟 昭和21/10/22 昭和21/10/23 ハガキ  
 13日神田邸に来会がなかったため、お申し聞きの原稿紙は図書館長に預けておいた。立ち寄って受け取ってほしい。小生はその後綱干町に滞在、明日頃和歌山に帰る予定で、来月はまた綱干町に来る予定(12~16日)。通信は役場気付にしてほしい。
- 340 川嶋禾舟 昭和21/11/3 xx/xx/5 ハガキ  
 今日憲法発布とやらにためてたい日である。原稿紙200枚で36円。あまりよい紙ではない。14日頃には史談会と市文化課との交談会に来るのでわざわざ送金する必要はない。しかし追々耳聾甚しく、出席するか否か思案中。原稿紙代拝受。さて小生去る26日正午ごろお訪ねいたそつかと思つたが、欠礼した。来る14日に西下の予定。『呼子鳥』のことありがたく思う。高く売りたいが法外だと叱られると思うので、一応先方よりの付値を希望した。打開の方法をお考え下されたい。
- 341 川嶋禾舟 昭和21/11/28 昭和21/11/29 ハガキ  
 12月の地震、何の被害もなかった。当地よりは淡路東岸に被害が多かった。伺いが遅くなった。しかし格別の被害もなかったとはめでたいことである。2月下旬になれば少しは寒さも減じるだろう。それ以後でなければ旅行も
- 342 川嶋禾舟 昭和22/1/16 昭和22/1/17 ハガキ  
 原呼子鳥』の話題より、昭和21年か。ハガキ料金が15銭なのは昭和21年7月から昭和22年4月の期間、よつて本書簡は昭和21年。
- 原稿用紙の話題から、また御船歌の照合の話題が書簡<sup>337</sup>(川嶋禾舟)と関連あると判断されるため、昭和21年と推定。
- 絵ハガキ(紀伊・串本 海月温泉旅館 串本節踊)。憲法発布の話題より、昭和21年と判断。  
 小野文庫<sup>364</sup>『吉原よぶこ鳥』(色里名所独案内)(務写)。

343 川嶋禾舟 昭和22/7/15 昭和22/7/15 八ガキ

できない。冬籠りに網干の古文献を取り寄せ披見している。正月5日には加太の粟島神社を見学、いろいろ社宝を見た。先日一寸神戸へ参つたが多忙のため欠礼。さて、予定拝受していた「兵庫くどきに関する御研究」(書物之趣味抜刷)を余分があればもう一部拝受したい。一昨年拝受の分は島田清氏へ貸したところ、同氏希望の報にてそのままになってしまった。特に御割愛のほどお願い申し上げる。

344 川嶋禾舟 昭和22/9/5 昭和22/9/6 封書

野紙(姫路市役所網干支所)1枚、使用済み1円切手(昭和22年9月消印)1枚、「味噌屋板の兵庫節」、島田清氏より返却を受け再読。網干首頭にえびや甚九の改作あり、極めて郷土色濃厚なので全文を町史に収めることとしたい。御参考までに別紙拝呈、御笑覧を願う。これがいつ頃から行われたものか目下取り調べ中。とにかく面白い資料である。月末頃には神戸に参り網干へも行く予定、機会があれば会いたい。

345 川嶋禾舟 昭和24/1/22 欠落 封書

便箋3枚。「飾磨搦染」についての調査報告(『播陽万宝知恵袋』等に所載の説を引用)。思つに搦染は藍染で、一時飾磨付近では藍作が盛んで、藍染に新工夫を施したものではないか。室町末には廃れたらしく、ただ伝説のみが残つたにすぎないか。本月2日、神戸より木村昇三氏(史談会幹事)の来訪あり。久々に近況を聞く。去る14日も生田神社にて新年会を開いたとの趣、会報が近く出るらしい(20日頃という)。小生も出席を求められたが、寒さと遠方とで欠礼。小生無異、月に2、3回和歌山へ参り図書

忍頂寺務「味噌屋板の「兵庫節」に就て」(『書物の趣味』7、昭和7年3月)。  
忍頂寺務「味噌屋板の「兵庫節」に就て」(『書物の趣味』7、昭和7年3月)。  
ある「別紙」は現存せず。使用済み1円切手同封、封筒右上に2箇所残る消印の断片のうち、上方の断片と切手の消印の断片とが符合する。インク色も一致。当該切手に捺された消印により、本書簡は昭和22年9月5日付、同6日消印と推定。

346 川嶋禾舟 昭和26 / 1 / 15 昭和26 / 1 / 17 ハガキ

館に通い、いろいろの図書を借り出している。今日も菅氏の『狂歌書目』を借りてきた。故人を偲びつつ狂歌書の2、3を探している。岡白駒が作った俗謡というものが伝わっているか、或書で見たので御存じか伺いたい。「尚々書」去る16日当地師範学校にて旧藩引継本を一見した。南葵文庫へ行かなかった大部分は同校に保管あり。稀覯本も少なくない。また筆写本も多くある。『寛永行幸図巻』などは大巻物3巻、僅かに巻頭10尺ほどを見たのみ。初めて見るものも多く愉快な半日を過ごした。文化研究会の交渉で、神戸の陳書会のようなものである。但し会員の質は劣り説明が通り終わればどんどん退却する。研究的に見るものは2、3名にすぎない。

天理大学附属天理図書館蔵『翠

箔志』(忍頂寺務旧蔵)。仙台

忍頂寺家蔵『静村文庫書目』

では『翠箔志』の項目に取り

消し線を施した上で、「原本天

理寄贈」と書入れがなされる。

「太田」とは太田陸郎か。

347 川嶋禾舟 なし 昭和26 / 2 / 23 ハガキ

神戸よりの通信で御病気の由、拝承。御容体はいかがか。ひたすら御軽快を祈っている。小生も先月中は高血圧で病院に通ったが幸いに降下、目下無事。御病気ならば、太田書目を返送願いたい。

348 川嶋禾舟 なし 昭和26 / 3 / 1 ハガキ

書目拝受、お手数感謝。病人の様子はいかがか。見舞に行きたいが遠方のため欠礼している。御大切に養生のほど。

349 川嶋禾舟 昭和26 / 3 / 6 昭和26 / 3 / 7 ハガキ

別便小包で粗品を送った。お笑草までに。田舎の住居で誠に失礼、包装も欠礼の至りだが、許してほしい。マルコボーロを森銃三氏へ照会したところ、これは同店の扱いには向かぬとの返事があった。もし御軽快になられたら天理へお話(書面でも)下されば幸いである。余りに風が強くて外出

350 川嶋禾舟 なし 昭和26/3/22 ハガキ 昨年末以来病臥（脳溢血）にて臥床中の渡辺刀水氏は軽快になったといつて自筆のハガキが届いた。今は足尾に在ること。偏に御快癒を祈る。 駒一三七五〇。

351 川嶋禾舟 昭和26/7/4 昭和26/7/4 ハガキ その後の御病状は如何か。貴稿を『金曜』誌上で拝見、御快方のことと思ふ。糸切神社の北が今の郵便局で、私宅はそこから東南へ約10丁もある。

352 川嶋禾舟 xx/2/16 xx/2/16 ハガキ 糸切神社の付近はあまり変わっていないだろう。村役場が神社の東2丁くらい、道の南側にあるのは昔のままだろう。それからはるか南方に学校がある。学校の南と小生宅の近くとに電車の停留所ができています。太田の旧蔵書は神戸大学に買収されることに大体決定、近々学校当局と小生とが太田方に会合、万事決定のこととなった。老体、旅行は迷惑だが、これが最後の務めと奮発して参るつもり。

353 川嶋禾舟 xx/3/28 欠落 封書 過日は態々御光来、何の風情もなく欠礼千万、またお土産拝受、ありがとうございました。お礼申し上げる。同夜お見送りすべきところ、生憎来人に妨げられ本意ながら欠礼した。また、お話しの見 氏のこと御祥報を待っている。 9〜11年頃か。宛先住所より昭和11〜20年頃、

354 川嶋禾舟 なし xx/xx/18 ハガキ 下散稿『正成記事、感謝。この霊碑現存するものは、さほど古雅とも思われない。明極行状とともに元禄頃より少し以前くらいのものかと思われる。光圀公に贈位報告は河内にて発見とあるもそれに相当するもの今日河内にはない。或いは広厳寺のそれを根拠としたものかと思う。同封の紙は、春秋より剥いだ。火に投げいれようとして一寸見出した。 『樹下散稿』の記事あり。同封されたこの紙は現存せず。

資料惠贈の礼。『三忠伝』および目録御惠贈下され正に拝受した。一朝灰燼に帰し遺憾に思っていたところ、御惠贈にて補えた。12、13日神戸へ参り、それから網干に赴き泊、今17日帰宅、御惠贈を拝受した。陳書会、松）は昭和21年6月まで確認でき、同年9月以降は川嶋は

毎月第三土曜日に図書館で開催。

355 川嶋禾舟 xx / 7 / 15 xx / 7 / 15

ハガキ

『川柳語彙』中、「三輪」の項の読めない箇所について御教示を願う。27日は都合をつけてお伴する予定である。

和歌山県海草郡西脇野村西ノ庄へ転居している。本が焼けて遺憾との内容から、昭和20年か。

356 川嶋禾舟 xx / 7 / 21 欠落

封書

巻紙1枚。川柳の件の教示への礼。27日の奈良行きは先方で病人出来、郷里へ急行した由である。8月7日、8日は在宅の由。遺憾だが、天理教のみにて日帰りは大暑中につき見合わせるので海容されたい。同封「大田文写し」を呈上する。これは貞応2年約720年前にあたる。9月彼岸に網干で展覧会と先賢慰霊祭とを執行する予定。見本のような原稿紙は多々ある。御用があれば送付する。『吉原よぶこ鳥』を天理教に納める件。

小野文庫<sup>364</sup>『吉原よぶこ鳥』色里名所独案内（務写）。書簡中にある同封物は現存せず。

357 川嶋禾舟 xx / 8 / 8 欠落

封書

用箋（鉄道関係の記入用紙か）1枚。先月21日発丹波市同行不能のこと申し上げたが、既に御覧になったか。今8日、陳書会のこと寺沢氏より通知受け取ったが、不参。来る18日の史談会には都合にて参るかと思つ。参れば『網干日記』返上する。寺沢氏へ預けておく。これも昨今の暑気でまだ決めかねている。先日網干で『幸若舞の研究』70円、東京から来た書店である。別紙御笑覧下されたい。

書簡中にある「別紙」は現存せず。宛先住所、差出住所（和歌山県海草郡西脇野村西ノ庄住友社宅81号）より、昭和21年から昭和23年頃の時期か。

358 川嶋禾舟 なし xx / xx / xx

ハガキ

前稿（移居儀成）の訂正文。御船歌について和歌山図書館蔵本を別便で郵送した。最後1編の外は前提のものと同様（ただし内容は未検）かと思つ。見終わったら今月末頃までに返送してほしい。14日の陳書会は悪天候のため欠席。

書簡332（川嶋禾舟）の内容と関連があるか。宛先住所、差出住所（和歌山県海草郡西脇野村西ノ庄住友社宅81号）より、昭和21年から昭和23年頃の時期か。ハガキ料金が15銭なのは昭和21年7月から昭和

359 河竹繁俊 大正14/7/9 大正14/7/9

封書

巻紙1枚。いまだ封面の機を得ていないが、毎度『延寿清話』御患贈、感謝。先日「改版の黙阿弥傳」が出来したので送付する。別封で複製の『狂言作者心得書』を送る。

22年4月の期間。

小野文庫193 河竹繁俊『河竹黙阿弥』。貼付の寄贈票に「大正十四年七月六日寄贈セルル」とあり。『狂言作者心得書』複製本は忍頂寺文庫所蔵(E39)、さらにその複製本の表紙と思しきものが仙台忍頂寺家に所蔵される(「仙台忍頂寺家所蔵資料目録」参照、資料名「表紙」)。

360 河竹繁俊 大正15/2/23 大正15/2/23

八ガキ

転居通知。あわせて『清元研究』『延寿清話』の礼を記す。

361 河竹繁俊 昭和3/1/1 昭和3/1/1

八ガキ

昭和3年賀状。

362 河竹繁俊 なし 昭和6/1/1

八ガキ

昭和6年賀状。

363 河竹繁俊 昭和8/1/1 昭和8/1/1

八ガキ

昭和8年賀状。

364 河竹繁俊 昭和12/1/1 昭和12/1/1

八ガキ

昭和12年賀状。

365 河竹繁俊 昭和14/6/25 昭和14/6/28

八ガキ

転居通知。

366 川辺賢武 昭和7/1/1 昭和7/1/2

八ガキ

昭和7年賀状。

367 川辺賢武 昭和23/4/9 xx/4/10

八ガキ

来る18日(第3日曜)午後1時より兵庫区役所区長室にて神戸史談会4月例会を開催する。当日御講話を依頼したい。御都合はいかがか。承諾下さるようなら演題を御一報願う。

川辺賢武は神戸史談会会員。18日が日曜であることから、昭和23年と推定。

368 川辺賢武 昭和23/7/5 昭和23/7/6

封書

「神戸市相生町壹丁目七拾貳番 建家坪数取調図」2枚、英文書面(The Japan Tea Exporting co., LTD用紙)1枚。相生町一丁目の建築見取図の中には「茶撰場」の記載があり、The Japan Tea Exporting co.(日本製茶輸出株式会社)の事業所であると推察される。英文書面は、同事業所の火災保険に関する

369 関西彩壺会 大正15 / 10 / 21 なし(封筒欠)

カード

文書(文書中に相生町住所の記載あり)、契約日は1908年11月23日。  
東京彩壺会よりの招待についての通知。日にちは11月7日(日)、東京ではこの時期、帝展および水戸家人札品陳列あり。彩壺会会場は赤坂区青山南町の根津嘉一郎邸、同家所蔵品の展覧あり。その後、新橋東会見物、懇親晩餐会の予定。

370 喜田哲郎 なし xx / 6 / 5

ハガキ

昨日はお邪魔し、いろいろ御馳走になった、感謝。御家内様によろしく。2人連れで来阪してほしい。 絵ハガキ(場所不明)。

371 北田彦三郎 大正13 / 3 / 28 大正13 / 3 / xx

ハガキ

面識はまだないにも関わらず『延寿清話』1御送付、感謝。趣味津々、大いに快読。爾後発行のときは何卒1本御送付願う。

372 木谷蓬吟 昭和4 / 8 / 18 昭和4 / 8 / 18

封書

便箋1枚、印刷物(「郷土趣味の研究雑誌『大阪人』の発刊」1点。「大阪人」発刊の趣旨説明と原稿の依頼。承認いただける場合は、400字原稿用紙7、8枚を本月末日までに頂戴したい。 木谷蓬吟は「大阪人」社主幹。

373 木谷蓬吟 昭和4 / 9 / 9 xx / xx / xx

封書

便箋1枚。貴稿到着、たしかに拝受、感謝。殊に珍奇な好材料で、まことに興味深い参考史料。食道楽の大阪人は大いに歓迎するだろう。実は締切切迫につき、ほぼ編集も終了、ページ数を測定して残しておいたが、入りきらない。来月号に掲載させてほしい。承諾を願いたい。 忍頂寺務「七十五年前のV大阪料理店名寄せ」(「大阪人」3、昭和4年11月)。

374 木谷蓬吟 昭和12 / 1 / 1 昭和12 / 1 / 1

ハガキ

昭和12年賀状。 差出人に妻子の名を併記。

375 木谷蓬吟 昭和13 / 1 / 1 昭和13 / 1 / 1

ハガキ

昭和13年賀状。 差出人に妻子の名を併記。

376 木谷蓬吟 昭和14 / 1 / 1 昭和14 / 1 / 1

ハガキ

昭和14年賀状。 差出人に妻子の名を併記。

377 樹下快淳 昭和12 / 1 / 1 昭和12 / 1 / 1

ハガキ

昭和12年賀状。 樹下快淳は、小野文庫244「贈正五位古東領左衛門略伝」序文によれば、淡路出身の歴史家で宮内省図書寮編修官。

378 樹下快淳 昭和13 / 7 / xx 昭和13 / 8 / 21

ハガキ

暑中見舞(印刷文面、「鈴木重胤先生学徳顕揚会」名義)。いつぞやの重胤先生詠草、感謝。有志者・有力者へ御助言を願う。



379	樹下快淳	昭和13 / 11 / 25	欠落	封書	印刷物4点（鈴木重胤先生学徳顕揚会）および全集刊行満1周年の挨拶文、『鈴木重胤全集』の案内、入会申込書、『会報』第6回。
380	樹下快淳	昭和14 / 5 / 8	欠落	封書	巻紙1枚。先月の西行の際は御芳情に預かり、感謝。公私取り紛れた折柄、胃の病気で半月ばかり平臥、お礼が遅くなった。その節は松田氏・柳川氏に拝晤を得た。誠にもって一生涯の好印象。これみな尊台の御厚誼によるものと感謝。近く公用で西行、重胤大人の遺跡を訪ねて山口県下へ。昨今元氣恢復、御休神を。いづれ諸彦へも御挨拶申し上げるが、ついでの節にしかるべく申し取りなし下されたい。
381	樹下快淳	昭和14 / 5 / 10	欠落	封書	印刷物4点（昭和14年4月3日湊川神社来席に対する礼状、「鈴木重胤先生学徳顕揚会」および全集刊行満1周年の挨拶文、『会報』第6回、『会報』第8回）。
382	木村三四吾	昭和26 / 2 / 2	昭和26 / 2 / 4	八ガキ	先般御来館の節に言っていた若月保治氏の住居を通知する。「山口県防府市国衛 上司氏方」。
383	清元梅吉 (3世)	昭和15 / 2 / 9	欠落	封書	便箋4枚。昨年5月、年1回発行の『清元流報』なる小冊子を発行。第2号発行につき、玉稿を頂戴したい。その儀については、創刊当時綿谷雪氏に依頼したのだが同氏も多忙でそのままとなり、残念に思っている。別途、創刊号1部お送りする。第2号原稿は本月末日を予定している。
384	清元梅吉 (3世)	昭和15 / 4 / 18	欠落	封書	昭和15 / 4 / 18付…便箋2枚。原稿拝受、感謝。上京の折はぜひ御来遊を。お話を伺いたい。 昭和15 / 4 / 2付…便箋2枚。『清元流報』原稿依頼の件、返書感謝。 他の原稿も大分集まったので、玉稿をなるべく早く頂戴したい。
385	清元栄寿太 夫(4世)	昭和3 / 8 / 6	昭和3 / 8 / 6	八ガキ	転居通知。
386	清元栄寿太	なし	昭和13 / 11 / 8	八ガキ	転居通知。

小野文庫<sup>305</sup>『清元流報』（創刊号1点のみ）。「昨年五月」に創刊号発行という点より、昭和15年と推定。  
『清元流報』2への寄稿が確認される。現在までに所在の確認できていない『清元流報』2に務の未発見論考が掲載されている可能性あり。

394	清元佐登美	xx / 10 / 29	欠落	封書	巻紙1枚。面倒な頼みに早速の返書、感謝。御繁忙の中、恐れ入るがよろ
393	清元佐登美 太夫	xx / 10 / 22	欠落	封書	巻紙1枚。今日本村町へ行ったところ、最早帰邸したとのこと。5、6年前に御編集になった『清元研究』を家元若太夫がぜひ一部買いたいと言ったので各所本屋を調べたが、どこにもないため、どこか心当たりがあったらお知らせ願いたい。春陽堂に尋ねたら絶版になっているとのこと。
392	清元佐登美 太夫(4世) ・清元栄寿	なし	昭和6 / 1 / 31	封書	転居通知。
391	清元延寿太 夫(5世)	昭和6 / 12 / xx	昭和6 / 12 / 23	八ガキ	喪中につき年賀欠礼の挨拶。
390	清元延寿太 夫(5世) ・清元栄寿 太夫(4世)	昭和4 / 7 / 28	昭和4 / 7 / xx	八ガキ	暑中見舞。
389	清元延齋吉	xx / 4 / 12	xx / 4 / 13	八ガキ	久しく御無沙汰、御機嫌の由、うれしく思う。今日、おやじとともに表面(絵八ガキ表面の太宰府天満宮を指すか)へ参詣に来た。景色がよいのであなた様にお目にかけていと噂している。一度長崎へいらっしやい。
388	清元延齋吉 ほか	昭和4 / 8 / 2	昭和4 / 8 / 2	八ガキ	暑中見舞。 差出人住所は、長崎県スウ町。 絵八ガキ(筑前太宰府神社正面)。差出人名は「清元」とし かないが、筆跡と長崎在住を 伺わせる記述から、清元延齋 吉と判断。
387	清元栄寿太 夫(5世)	昭和18 / 5 / 24	昭和18 / 5 / 24	八ガキ	5世清元延寿太夫死亡通知。5月22日に死亡の旨の報告と告別式の案内。

太夫

395 清元太兵衛 なし 昭和8 / 1 / 7

396 清元千歳太 大正6 / 8 / 6 大正6 / 8 / 6

397 清元千歳太 なし xx / xx / 6

398 清元千歳太 なし 大正14 / 1 / 2

399 清元延益き 大正14 / 10 / 30 xx / xx / 30

ぬ

封書

しく頼む。御親切に家元の容体をおたずね下さり、感謝。お蔭様で当今は完全といつていいほどに快癒。只今伊東で静養中。

昭和8年賀状。転居地の住所である旨を書入れ。

その後お伺いすべくところ、都合上、残念ながら参上いたしかねている。ついでには両三日内にお訪ねいたすべく、何卒その節はよろしく願ひ上げる。先日は誠に感謝。早速お手紙差し上げるべくところ、誠に延引した。お恕し下されたい。ついでには、23日より右のところに来ている。

稽古日の連絡。

絵八ガキ（相州酒匂松濤園）。

大正14 / 10 / 30付…巻紙1枚。例の「梅の春」原本はお申し越しの通り9ページである（弘中氏書写の種本の由）。これは麻布区材木町子爵毛利家所蔵で、今は世間に類本なく、大名の道楽仕事なので贅をつくしている。かかる貴重品ゆえ同家では解きほぐして1ページずつ並べて掛物に仕立てている。写真に写すには掛け物のまま1枚だけでは細くなるゆえ、元の通り1ページ9枚に写すのがよい。毛利家出入りの写真師と掛け合つて金額を相談。写真代総額45円、うち15円が種板、30円が9枚1組を3組焼く分の代金。3組のうち、1組はお手許の分、1組は毛利家へ寄贈、残り1組は自分が記念として引き受け自弁する。結論として、35円の御出費で種板9枚と写真9枚入手のこととなる。他1、2軒見積もつたが、出張費等がかえつて高くつく。

日付なし…巻紙1枚。写真ができた。1枚は毛利家へ差し出し、1枚は仰せに随い自分の手許へ頂戴し、1枚をお送りする。御送金の10円は八ツ切り1組10円ということなので写真師へ渡す。右、請取書、毛利家の分と2枚差し出す。種板は写真師が保管、入用なら安く譲るよう掛け合う。もしまた写真の注文がある節は、種板のあることゆえ手間代にて写すと言つ

ているので、念のため申し上げる。翠竹女史のことは分かり次第知らせる。

大正14/11/29付…巻紙1枚。申し越しの写真種板の件、早速掛け合い、1円で引き取った。五ツ切のことを相談したところ、切れるが自然紙中に傷みができるかもしれないとのことなので、その手当をして小包書留で別に差し出した。翠竹女史は長府の儒者中川蕉窓に学び、画は市川米庵の門人で、書の立派なだけでなく漢学ができて詩など上手である。自分にはわからないが、1、2首写して御覧に入れる。(以下、漢詩を2首引用)

大正14/12/7付…巻紙1枚。小為替受領。中川富五郎に面会したところ、同人は中川焦窓(俗名・清左衛門)の次男が分家した、その人の息子。焦窓の孫である。御書面の浦岡 楽氏のことを尋ねたところ、同人も元義公の侍女で、翠竹女史と同じく焦窓の門人だが別人のように思われるとのこと。この人は元藩士の娘で、主公より浦岡の姓を賜り別に一家を興したが、終始御殿奉公のみをした故、着族なく老年に至って隠居を願い、富五郎さんの御宅へ同居して世を終わられたとのこと。今般差し出した写真の原本は、その当時同人が元義公より拝領した品で中川氏の所有。お申し越しの翠竹女史の詩は毛利家職坂野照人(中川さんの上役)の祖父が書いてもらったものである由、坂野さんが話された。かような女学者の履歴の分からないというのは不思議なことゆえ、坂野・中川の兩人へ調べ方御尽力のほど頼んでおいた。また本家公爵毛利家記録所の編纂専門の御方にも手続きを尽くしたので取り調べ方頼んでおいた。

同封書類4点 「小為替金受領証書」(大正14/12/2、書入れ「延益きぬ氏送金」)、「梅の春原版写真吉葉」の領収書(大正14/11/21、清元延益きぬ宛、毛利用達所発行)、「八ツ切」の領収書(有賀写真館、清元延益きぬ宛、大正14/10/12)、「原板」の領収書(有賀写真館、清元延益きぬ宛、大正14/11/27)。

の書簡は、忍頂寺務「梅の春」原刻本の発見に就て」(『書物往来』15、大正15年1月)に引用される。

416	小泉迂外	なし	昭和5 / 1 / 7	八ガキ	昭和5年賀状。
415	小泉迂外	昭和2 / 3 / 7	昭和2 / 3 / 8	八ガキ	地震見舞。
414	小泉迂外	なし	大正15 / 5 / 11	八ガキ	転居通知。
413	小泉迂外	大正15 / 1 / 1	xx / xx / xx	八ガキ	大正15年賀状。
412	小泉迂外	大正14 / 5 / xx	大正14 / 6 / 21	八ガキ	転居通知。『延寿清話』送付の礼。震災で蔵書が灰燼に帰した旨を記す。
411	慶吉	xx / xx / 26	xx / 2 / 26	八ガキ	昨夜は非常の御厚意、感謝。大いに愉快だった。小生の勝手我儘、失礼非礼を平にお免し願う。 三の滝。 絵八ガキ（紀伊熊野）那智山
410	慶吉	なし	大正6 / 7 / 7	八ガキ	つまらぬ表を送付したところ、かえって丁重な御芳墨をいただき恐縮。あの表には県名がおちていたので近く訂正したものを送る。大阪地方の暑さ（鼻）には少々閉口の有様。いずれ涼しくなったら、貴下御得意の「Kiyomoto」を拝聴かたがたお伺いしたい。
409	黒崎羊太郎	昭和12 / 3 / 12	昭和12 / 3 / 12	八ガキ	黒崎貞枝（黒崎奈良之助）死亡通知。3月12日に死亡の旨の報告と葬儀の案内。
408	黒木勘蔵	昭和5 / 1 / 1	昭和5 / 1 / 1	八ガキ	昭和5年賀状。
407	黒木勘蔵	大正15 / 1 / 1	大正15 / 1 / 1	八ガキ	大正15年賀状。
406	黒木勘蔵	大正14 / 11 / 6	大正14 / 11 / 6	八ガキ	『延寿清話』9の礼状。
405	黒木勘蔵	大正14 / 7 / 26	大正14 / 7 / 27	八ガキ	『延寿清話』8の礼状。
404	黒木勘蔵	なし	大正14 / 7 / 14	八ガキ	この度高野博士と共に『元禄歌舞伎傑作集』を刊行、見本を別送する。
403	黒木勘蔵	大正14 / 5 / 22	大正14 / 5 / 22	八ガキ	『清元研究』1の礼状。「梅の春」注釈非常に有益。自分も購読者になる。
402	黒木勘蔵	大正14 / 3 / 10	大正14 / 3 / 11	八ガキ	『延寿清話』7の礼状。
401	黒木勘蔵	大正14 / 1 / 1	大正14 / 1 / 2	八ガキ	大正14年賀状。『延寿清話』送付の礼。
400	黒岩経雄	なし	昭和26 / 3 / 24	八ガキ	古書店（近畿巖松堂書店）の目録。 転送先住所「奈良県生駒町菜畑 小野弘方」。

417	小泉迂外・ 小泉なつを	昭和2 / 10 / xx	昭和2 / 10 / 13	八ガキ	転居通知。
418	弘文荘(反)	なし	昭和23 / 12 / 16	八ガキ	日本橋高島屋で開催の「新興古書会」の案内状。
419	町茂雄) 弘文荘(反)	xx / 1 / 21	欠落	封書	用箋(弘文荘「名入り」)2枚。1月19日付の書簡本日到着。先般お買い上げの『書僧贅筆』1巻は全文『隨筆大成』に入っているとの由、心つかず失礼した。返品の件承知した。取替希望のものとして指定された5点のうち在庫があるのは『賞花吟』『十才子名月詩集』の2点なので別便で送付する。御高覧の上、気に入ったものをおとり下さり、不用のものを返送下されたい。
420	町茂雄) 弘文荘(反)	xx / 9 / 20	xx / xx / xx	八ガキ	東京古典会より、和本唐本通信販売目録の作成・送付のお知らせ。
421	神戸史談会	なし	昭和23 / 12 / xx	八ガキ	神戸史談会12月例会案内。川辺賢武の添え書きあり。
422	神戸史談会	なし	昭和26 / 2 / 8	八ガキ	神戸史談会2月例会案内。
423	神戸史談会	なし	昭和26 / 3 / 13	八ガキ	神戸史談会3月例会案内。
424	神戸史談会	なし	昭和26 / 5 / 22	八ガキ	神戸史談会5月例会案内。
425	神戸史談会	なし	昭和26 / 6 / 12	八ガキ	神戸史談会6月例会案内。
426	神戸史談会	なし	昭和26 / 7 / 15	八ガキ	神戸史談会7月例会案内。
427	神戸史談会	なし	昭和26 / 9 / 3	八ガキ	神戸史談会9月例会案内。
428	神戸史談会	なし	昭和26 / 9 / 19	八ガキ	兵庫県郷土研究連盟秋季総会案内。
429	神戸史談会	なし	昭和26 / 11 / 14	八ガキ	神戸史談会11月例会案内。
430	神戸文化懇 談会	昭和21 / 1 / 7	なし	封書	昭和21 / 1 / 7付…印刷物2点、返信用八ガキ1枚。第2回例会の案内と会則、会員諾否の返信用八ガキ。

昭和21 / 1 / 6付…島本得一差出の八ガキ。新年の挨拶。旧冬は遠路をお越し感謝。近日中に訪問する。西尾夫妻へよろしく。

431	古在由直	昭和3 / 11 / xx	なし(封筒欠)	カード	新館設備と図書復興に関する陳列の案内。	古在由直は東京帝国大学図書館建築委員長。
432	古書交換同 好会	大正14 / 5 / xx	大正14 / 5 / 19	ハガキ	第5回会合のお知らせ。賛成人として、高安吸江、中井浩水、南木萍水、三宅吉之助、石割松太郎、川崎巨泉、山本吐露平、青木平七。	
433	古書交換同 好会	大正14 / 6 / xx	大正14 / 6 / 13	ハガキ	第6回会合のお知らせ。	
434	古書交換同 好会	大正14 / 11 / xx	大正14 / 11 / 10	ハガキ	第9回会合のお知らせ。	
435	小寺融吉・清水和歌	昭和13 / 8 / 15	昭和13 / 8 / 24	ハガキ	暑中見舞。転居通知を兼ねる。	
436	古典文庫	昭和26 / 3 / xx	昭和26 / 4 / 9	ハガキ	未刊文芸資料頒布趣意書。上野図書館所蔵の名家手稿本の翻刻。編輯同人として吉田幸一、浅(マ)倉治彦、安藤菊二の名。第1回配本は『柳亭種彦日記』、以下続刊予定は『宗祇山口下向日記』、『馬琴書簡集』、『馬琴哥集』。	
437	古典文庫	なし	xx / xx / xx	ハガキ	『西鶴研究』3案内、会報(7月)。	『西鶴研究』3の刊行は昭和25年10月。
438	後藤捷一	昭和12 / 1 / 1	昭和12 / 1 / 1	ハガキ	昭和12年賀状。	
439	後藤捷一	なし	昭和13 / 10 / 22	ハガキ	小著贈呈に対し御丁重なる書状、かつ研究資料として貴重な番付御贈与感謝。次は十郎兵衛研究に移りたい。	絵ハガキ(真田幸村墓)。小野文庫172 後藤捷一『一ノ谷戦記』(昭和13年9月)。
440	小西一四三	なし	昭和3 / 11 / 15	ハガキ	御大典を祝す。「京都友仙団奉祝揃衣裳」の意匠の絵ハガキ。	小西一四三は書史会同人。
441	駒田彦之丞	大正12 / 8 / 9	大正12 / 8 / 9	ハガキ	暑中見舞の返事。漢詩を記す。	
442	駒田彦之丞	大正13 / 1 / 1	なし	ハガキ	大正13年賀状。関東大震災にちなんだ漢詩を記す。	差出人住所「東京市下谷区上野花園町17番地 イリー万年筆製作所」。
443	駒田彦之丞	大正15 / 1 / 1	大正15 / 1 / 1	ハガキ	大正15年賀状。漢詩を記す。	

- |     |       |           |                      |     |   |
|-----|-------|-----------|----------------------|-----|---|
| 444 | 駒田彦之丞 | 昭和9/2/14  | 昭和9/2/14             | ハガキ | 駒田住居への交通案内(上野広小路からの道順)。   |
| 445 | 駒田彦之丞 | 昭和9/2/26  | 昭和9/2/26、<br>昭和9/3/4 | ハガキ | 先日は御芳問、また見事なるお土産、感謝。久々に拝肩、話を拝承し傾喜の至り。自然寸暇の節は来訪してほしい。  |
| 446 | 駒田彦之丞 | 昭和11/4/22 | (転送)<br>昭和11/4/22    | ハガキ | 寒気甚だしく小生も久々病気に悩まされ2ヶ月間寒中引き籠ったが目下回復、御安意を。さて次男義、大阪へ転任になった。住みなれた地を離れることになり、遺憾。   |
| 447 | 齋藤昌三  | 大正13/4/23 | 大正13/4/23            | ハガキ | 『延寿清話』送付の礼。実ははじめ鳶魚宛で崇文堂にあった節に拝見、食指を動かしていた。御寄贈下さり大いに光栄。真剣な御研究を見るにつけても吾々の道楽三昧のものなどはお恥ずかしい。同人にも回覧する。   |
| 448 | 齋藤昌三  | 大正13/6/6  | 大正13/6/xx            | ハガキ | 『延寿清話』3の礼状。同人に回覧した。貴誌は当方同人間に回して一同参考にしている。左記の富士崎放江は、ことのほか貴誌に共鳴いたし、余部があれば1部割愛願いたい。昨日地震除りに香取鹿島へ参詣に出かけた。  |
| 449 | 齋藤昌三  | 大正13/6/29 | 大正13/6/29            | 封書  | 何のかのいつも頂くばかりで恐縮。昨日は名のみ知って未だ見たことのない『五色筆』の恵みに預かり、感謝。申し上げるまでもなく、後の祟りのないように、大事の上にも大事をとっていただきたいものである。小生も大正7年に一度筆禍事件を起こしてから、一面に得るところあり、一面大いに大事をとることを痛切に感じた。こういうことは所有者の共同責任にしておくくらいにせねばならない。地方ではそうでもないだろうが、東京は非常に神経の鋭い所で閉口。『書物往來』を見ると、やはりお名前を拝して大いに懐かしい。石川巖君とは常に往復もし、筆禍も一緒だったので心やすくしている。かの雑誌も吾々には興味あるもので今度は永續させたいと思う。先生兎角狷介で角がありすぎるのでいつも失敗するが、今度 |

絵ハガキ(官幣大社香取神宮鳥居前)。大正13年6月11日付富士崎放江書簡(書簡933)では、『延寿清話』送付の礼が述べられている。



- 450 齋藤昌三 大正13/8/19 XX/XX/XX 封書  
 は同志の声援も多いので続くだろうと思う。大阪の須知狭風、福島の高士崎放江ともに御研究を熟読しているようで、大いに感謝していた。  
 便箋1枚。先日はアルプス方面へ御雄飛の御様子、羨ましい。こちらも曾我部俊治君のために決死報告登山をした。留守中に珍籍御割愛、感謝。内容はおもろく浪華方面の記事だけに初見のもの、前のと対照して今回の表装の濃厚も大いに嬉しいものだった、珍重。この種の取扱いは前回も言った通り、所有者各自の責任として充分の大事を取られたい。特に賣下においてはこの御注意方法につき将来の御研究をあるとともに漸次宝庫の御開拓を祈る(関係文書は必ず御焼却のこと、往来文書の如きも)。「いもづる」誌上の御説もあつたので、他の2、3の説とともに一度誌上へ発表させていただくつもりである。 小野文庫<sup>416</sup>『立剣紀行』には
- 451 齋藤昌三 大正13/11/3 大正13/11/3 八ガキ  
 先日は突然の来訪に驚いた。翌日はお訪ねするつもりが雨のまま茅ヶ崎に引き籠り失礼した。一度『延寿清話』のその後を伺いに手紙を差し上げようと思っていた折、せつかく会えたのに伺えずにお別れになった。時間が許せばお訪ねしたい。 美術展覧会出品 老母の像中(村藝)。
- 452 齋藤昌三 大正13/11/11 大正13/11/12 八ガキ  
 『延寿清話』4、感謝。本年度最後の京阪訪問に5日から出かけた。神戸まで行かぬうちに帰宅せねばならない用件ができたために引き返し、残念ながら会えずに戻った。
- 453 齋藤昌三 大正13/12/14 大正13/12/15 八ガキ  
 先日は大勢で厄介や迷惑をかけた、感謝。8日に京都の書物往来会に出席の光栄に浴し、その夜行で帰東。蔵書票の発送・配達で今日まで活動、お礼が遅れた。神戸では実は今少し落ち着いて研究方面や書物の話を承る予定だったが、陽気な先生方が御一座で大分的が外れた。
- 454 齋藤昌三 大正14/1/1 大正14/1/1 八ガキ  
 大正14年賀状。
- 455 齋藤昌三 大正14/3/12 大正14/3/12 八ガキ  
 『延寿清話』6、感謝。届く2、3日前から石川巖と噂をしていた。『書物往来』も今年から2人でやっているが、学者相手でなかなか進行せず閉

466	齊藤昌三	xx / 11 / 2	欠落	封書	<p>口。第7冊も漸く校了で、3日中には出市の予定。</p> <p>『延寿清話』、感謝。心待ちにしていたので、先日も石川巖と噂をしてい</p> <p>た。『書物往来』も明日には発送。これが終わったら関西へも行きたい。</p> <p>『延寿清話』、感謝。先日來、中野猛郎という人から手紙をもらっている。</p> <p>まだ拝顔なし。『愛書趣味』は去月末やっと発刊。青山督太郎君の名簿に</p> <p>あなたの名前がなかったが、問題ないか。14日に可山人と京阪へ、今回も</p> <p>飛脚で、また失礼するかもしれないが、兵庫泊になったら会いたい。</p> <p>雑誌送付、感謝。かねて紹介下さった中野猛郎はそちらへ戻っているか。</p> <p>秘本を3、4点を持って戻ったまま再三の督促に返事もなく、他からの便</p> <p>りでは紛失したと言っているとの話、今後出入りに御注意を。中野氏参上</p> <p>の節は紛失せぬ分は返せとお伝え願えないか。</p> <p>雑誌送付、感謝。もう中止かと案じていた。先日の中野君の件は、将来の</p> <p>注意として言ったことなので、別に心にかけられぬよう。</p> <p>新年の挨拶遠慮の通知。明治文芸研究資料展覧会（昭和2年1月19日）</p> <p>日、銀座松屋呉服店、愛書趣味社主催）の通知。</p> <p>昭和6年賀状。</p> <p>昭和7年賀状。</p> <p>昭和8年賀状。</p> <p>昭和11年賀状。</p> <p>先日の水害はどうだったか。ハガキを書きかけて、住所の変更気づき、</p> <p>そのままにして済まない。久々の便りうれしかった。殊に同姓名の人のあ</p> <p>ることは愉快だった。紹介願って一度会ってみたい。7代目の成田版につ</p> <p>いてはぜひ御寄稿を願いたい。</p> <p>原稿用紙（『愛書趣味社』の名入り）1枚。原稿の送付先の連絡。中西の</p> <p>方へ話が出ていることも先日尾崎から聞いたが、決定的にはなっていない</p> <p>か。</p>
465	齊藤昌三	昭和13 / 8 / 13	昭和13 / 8 / 13	ハガキ	
464	齊藤昌三	昭和11 / 1 / xx	昭和11 / 1 / 1	ハガキ	
463	齊藤昌三	昭和8 / 1 / xx	昭和8 / 1 / 1	ハガキ	
462	齊藤昌三	昭和7 / 1 / xx	昭和7 / 1 / 2	ハガキ	
461	齊藤昌三	昭和6 / 1 / xx	昭和6 / 1 / 1	ハガキ	
460	齊藤昌三	昭和2 / 1 / xx	昭和2 / 1 / 1	ハガキ	
459	齊藤昌三	大正15 / 9 / 22	大正15 / 9 / 22	ハガキ	
458	齊藤昌三	大正15 / 8 / 24	大正15 / 8 / 24	ハガキ	
457	齊藤昌三	大正14 / 11 / xx	大正14 / xx / xx	ハガキ	
456	齊藤昌三	大正14 / 5 / 22	大正14 / 5 / 22	ハガキ	

467 齋藤昌三 なし ハガキ

とのことである。  
豪雨はどうだったか。当方はえらい荒れ方だった。先日は『清元研究』送付、感謝。いつもいい気になって頂いているのが申し訳ないので、何とかせねばと思っている、すまない。月初めに神戸まで行ったが急いでいたのでお目にかからなかった。一昨日石川君へ話に出かけてお噂などして戻った。目下『愛書趣味』の編集で奔走している。

468 齋藤昌三・青山督太郎 大正14/8/xx 大正14/8/17 封書

印刷物1点、返信用ハガキ1枚。『愛書趣味』刊行の案内と配本申し込みの返信用ハガキ（青山督太郎行）。

469 齋藤昌三・青山督太郎 昭和5/1/xx 昭和5/1/3 ハガキ

昭和5年賀状。

470 坂井華溪 なし 昭和12/11/1 ハガキ

務所蔵の資料『みちのかたち』を一昨朝前川老より又借り、『ひむろ』11月号にて全部復刻したい。無断で拝借の件、何とぞお許し下されたい。前川老より内容紹介の手はずのところ、かかる仕末と相成った次第、御諒察願い上げる。延引ながら御了解を得たい。

絵ハガキ（大東京）東京駅）。差出人名はないが、筆跡および『愛書趣味』編集の話題より、齋藤昌三と判断。『愛書趣味』清元研究』両方の話題が出ていることから、『愛書趣味』創刊の大正14年から『清元研究』終刊の昭和2年2月頃までの期間の書簡と推定される。

坂井華溪は『ひむろ』主宰。坂井華溪「みちのかたち」（複製）（『ひむろ』12・11、昭和12年11月）。『ひむろ』の当該号は小野文庫に所蔵（小野文庫335）。本報告書所収「忍頂寺務年譜データベース」の「昭和12/09/xx」項に「御影町の前川清二郎で開かれた陳書会例会に、最近入手した『みちのかたち』を出品。そのま

- 471 坂田将治 大正7/12/22 大正7/12/22 ハガキ 去る14日、撫順に安着、幸い至極健在、御安心を。さて、出発に際し栗部氏に面会をするはずだったが時間の都合で欠礼に打ち過ぎたため、貴兄よりよるしく伝えてほしい。いずれ詳細な手紙は後日差し出したい。
- 472 佐々嘉寿磨 (常磐津式 寿) 昭和2/6/24 昭和2/6/23 ハガキ 転居通知。
- 473 佐々幸男ほ か 昭和18/8/2 昭和18/8/5 ハガキ 佐々嘉寿磨(常磐津式寿)死亡通知。8月2日に死亡の旨の報告と葬儀の案内。
- 474 笹本寅 昭和14/4/4 昭和14/4/4 封書 用箋(「江戸読本社」名入り)2枚。先日は思いがけなく拝眉の栄を得、うれしかった。先日はお八ガキ感謝。原稿が間に合わない由、失望した。月末の次回締切までに執筆願いたい。今月15日過ぎに佐賀へ墓参りで帰郷、その途次に参上したい。
- 475 澤口泰憲 昭和19/5/30 欠落 封書 用箋(「大本山妙心寺大法会局」名入り)2枚。記念出版のことで御奔走感謝。この間、法然院へ電話したがお出ででなかったので、そのままになった。実は今回の出版の用紙、貴氏の力で確保して下さっているとのことだが、真実かどうか至急承知したい。書面が次回出京の際に電話を願いたい。4日前、釈師坂本へ出張し借用して帰ってきた。『七ヶ法門口訣』『山家要略』写字生を依頼して早速写本にしたい。『単伝語録』の方も目下照会中。なるべく早く万事解決しておきたい。
- 476 澤口泰憲 昭和19/6/11 XX/XX/XX ハガキ 前回の書面拝見、感謝。写字をする夫人が来て、昨日すでに第1回分を写し終わり持参、第2回分をお願い申しおくよう手配している。進捗状況の

ま前川清二に貸与」とあり。  
 なお、『みちのかたち』原本は、  
 忍頂寺文庫・小野文庫には所  
 蔵されていない。  
 差出人住所は「大阪亜鉛会社」。

483	澤田薫	なし	大正15 / 10 / 7	ハガキ	『江戸時代』送付、感謝。巻頭「信条」の文字意気壯、人意を強くするを 覚えた。
482	澤田薫	なし	大正15 / 9 / 19	ハガキ	『延寿清話』の礼状。
481	澤田薫	なし	大正15 / 1 / 1	ハガキ	大正15年賀状。
480	澤田薫	大正13 / 8 / 28	大正13 / 8 / 29	封書	大正13 / 8 / 28付…巻紙1枚。『延寿清話』3送付、感謝。この上、既 刊分未刊分の送付を乞うのは無心するようで心苦しいが、爾後引き続きの 御送付を願う。
479	澤口泰憲	昭和19 / 12 / 24	欠落	封書	巻紙1枚、払出通知票1枚。先日お邪魔したが不在だった。今回の三田村 先生の論文の件でたびたび上京してもらい感謝。甚だ些少なから金100円を 薄謝として献呈するので納めてほしい。他に何等用件もないのにわざわざ 御上京下さつて恐縮。金子は本日振替で送金しておく。
478	澤口泰憲	昭和19 / 7 / 21	昭和19 / 7 / 22	ハガキ	7月11日差出の書面拝見。種々労を取っていただき感謝。よい具合に印刷 所が見つかったので御休神を。この上は1日も早く原稿の完成を祈る。昨 日三田村先生とも面晤して帰った。これから法務会あり、いずれ後刻に詳 細を伝える。
477	澤口泰憲	昭和19 / 7 / 4	欠落	封書	報告。一度上京のついでに立ち寄ってほしい。なお写字料を御決定願いた い。来局の日時を前もってお報せ願いたい。 巻紙1枚。先日は参上して御厄介になった。その後、東京で三田村氏に会 い、種々印刷につき協議、三田村氏の手ではできないということで、あら ゆる方面に手を尽くした結果、ジャパンタイムス社で印刷製本を引き受け てもらうことになった。この種の印刷としては極めて低廉、送本も至極簡 単なもの由、種々便宜をはかつてくれることとなった。原稿が一番の問 題で、三田村氏・京都帝大の中村先生に遅くとも本年10月頃までに出して くれるよう伝えた。貴氏にもその点お含みの上、援助をお願いしたい。

小野文庫293『江戸時代』。創刊  
号は大正15年10月。消印が不

489	488	487	486	485	484
思文閣(田 中新)	波井清	柴田昔吉商 店	鹿田松雲堂 (鹿田静七)	鹿田松雲堂 (鹿田静七)	澤田薫
昭和20/11/25	昭和12/1/1	昭和22/5/18	xx/10/24	昭和12/12/28	なし
昭和20/11/26	昭和12/1/1	料金別納郵便(日 付なし)	xx/10/24	昭和12/12/29	なし(封筒欠)
ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	カード
書物発送案内。『万世御東京絵図』7円(送料40銭)、他の2点はすでに売却となった。	昭和12年賀状。	洋服屋の柴田高明をへちまクラブに推薦する旨の推薦状。	注文の書物代価の報告。いずれもこんにやく本中の珍本で入札落値が高価につき御了承願いたい。『ことしやみせん』20円、『美地之蛎壳』12円、『南品傀儡』12円、『当世女風俗通』25円、『遊子方言』10円、『婦美車紫鹿子』15円、『曾我糠袋』10円、『南門鼠』12円。	書物代金(15円15銭)の領収証(書名の記載はなし)。	「牛の角 蓼花草屋主人」の一文。「新年の御祝儀、丑年に因みました古 いお咄を」とあり、大正14年新春か。
小野文庫150『万世御東京絵図』。			忍頂寺文庫A128『許都洒美選』(複製)、忍頂寺文庫A55『美地乃蛎壳』、忍頂寺文庫A33『南品傀儡』、忍頂寺文庫A105『後編女風俗通』(複製)、忍頂寺文庫A68『婦美車紫鹿子』、忍頂寺文庫A96『曾我糠袋』。忍頂寺務『大江戸研究』の著者より(『書物往来』5、大正13年11月)に、これらの書物を「永田本残部入冊」で入手した旨が記される。これにより、本書簡は大正13年と推定される。		裏面に務書入れ「澤田薫氏」。

鮮明ながら、創刊号刊年より大正15年と判断。

- 490 思文閣(田) 昭和20/12/10 昭和20/12/10 八ガキ 書物発送案内。『幸神阡陌の主石』25円、『絵島の浪』8円(送料1円)。なお前号の『東京縮図』7円40銭が未納となっているので調べてほしい。
- 491 思文閣(田) 昭和21/2/xx 料金別納郵便(日) 八ガキ 古書籍即売会(於・大丸京都店)の案内。
- 492 思文閣(田) 昭和21/4/22 xx/xx/22 八ガキ 書物発送案内。『平かな英米通語』20円(送料40銭)、他の1点はすでに売却となった。
- 493 思文閣(田) 昭和21/5/10 昭和21/5/10 八ガキ 代金の領収証(20円40銭)。
- 494 思文閣(田) 昭和21/7/29 昭和21/7/29 八ガキ 代金の領収証(20円50銭)。
- 495 島金平 大正13/4/2 欠落 封書 野紙2枚。27日お手紙拝見。感冒で平臥のため返事が延引し申し訳ない。以下、務の父に関する話題。近々神戸へ行くのでその機会に会って話したい。
- 496 島金平 大正13/5/24 なし(封筒欠) 封書 巻紙1枚。先日の訪問では世話になった。その折に話したことについて、貴意の通りには運んでいない。愚鈍の段を恥し入る。
- 497 島田勇雄 なし 昭和13/12/3 封書 便箋5枚。本部長経理課の手伝いをしている。本月8日に自分は野戦に行くことになった。行先は不明、北でないことを願っている。再び皆さんに会えるのは早くして1年後、ただし、聖戦へ行けば生死は分からない。聖戦へ行ったら、度々お便りだけは下さるよう願う。時には読み物も送ってほしい。お菓子の慰問袋をお送り願えないのが残念。内地を去る運命を前に、皆さんの健康・幸福を祈る。「二伸」妹が来年田舎の女学校を卒業する。
- 『幸神阡陌の主石』、『絵島の浪』、『東京縮図』は、忍頂寺文庫・小野文庫に所蔵されていない。宛名面に務書入れ「万聞書秘伝」二〇・千五〇。
- 忍頂寺文庫H37『英米通語』。宛名面に務書入れ「信濃長野県小諸郡塩尻村母袋光雄氏」。書簡492(思文閣)に記載の品の代金と目される。
- 書簡495(島金平)との関連より、大正13年と推定。

社会経験をさせたいが、先生のお宅において監督・教育を願えないか。都合が悪い場合は、遠慮なく一笑に付してほしい。

498 島田勇雄 昭和14/1/1 欠落 封書

便箋1枚。青島より。12月20日乗船・出発、23日青島港着、24日上陸、25日小学校に1泊、26日青島市外の原口部隊本部に送られた。1月7日、15日頃出発。3ヶ月の予定。南方の山地へ行くことになると思う。詳細は折々に知らせる。ここでは食べ物にとて不自由する。先が思いやられる。

499 島田勇雄 昭和14/4/29 なし( ) 軍事郵便(日付) 封書

便箋5枚、写真1枚。今日はばかに暑い日だった。真夏への恐怖が心をかすめる。中国北部へ来た最初の夏はほとんどの者が赤痢にやられるので注意するよう古い兵隊が言ってくれる。5月といえば大学祭が思い出される。2、3日前に受け取った大学新聞にも記事があった。黄塵には悩まされる。顔は防塵眼鏡をしているから大丈夫だが、鼻がたまらない。マスクをすると思苦しくなるので取ってしまう。夕方になると口の中までざらつく。応召以来7ヶ月、自分もいろいろな点で変わりつつある。天長の佳節に際して。写真同封、裏に撮影時期を「昭和十四年二月末或は三月初め」と記す。便箋3枚。慰問の品々頂戴、申し訳ない。『松の葉』は返す返す精読するつもり。足の裏じゅう豆をつくり、足を引きずって歩いている。ひどくやせたが、体は大して弱っていない。緊張のせいだろう。一番困るのは本を入手しがたいことと、読了後の本の保管が困難なこと。本を汚くされるのが嫌なので、範囲を限って貸してやっている。読了後に本を捨てるのは大嫌い。事情によってはずっと持っていられずさびしい思いをすることが多い。岩波本で西鶴の物はほとんど集めた。近松も少々。これから西鶴・近松を研究しておきたいとも思う。何よりも専攻の方言を調べておきたいが、参考書の取り寄せが困難。また国の方へ言っているのに多くの書物なのでなかなか分からない様子で、困った。麗子さんはこの頃いかがか。

500 島田勇雄 昭和14/7/26 なし( ) 軍事郵便(日付) 封書

便箋6枚。中国南部へ来ている。12月16日に2ヶ月ぶり内地からの手紙

501 島田勇雄 昭和14/12/22 軍事郵便(日付) 封書



なし)

が受け取れるようになった。ましてこちらからは手紙を書くことなど夢にも思えないほどの数日だった。南国は今バナナ・パイアの実り時で、木の上に鈴なりになって見事。ここにはないが、ヤシも実っていた。残念なのは楽しみにしていた南十字星がどこか分からないこと。お分かりになったら位置を知らせてほしい。山国なので昼と夜の寒暑の差が大きい。危険で焚き火は厳禁されている。中国南部の兵隊は勇敢である。地の理に詳しい彼らが巧みに迫ってくる。こちらへ来てかなり中国語の面白い本を拾った。発音はだめだが、意味だけでも分かるようになりたい。文法もやっておきたい。10月17日に麗子さんのおめでたのニュースを聞いた。さぞその後は幸福にお暮らしと思う。御多幸を願う。

502 島田勇雄

昭和15 / 3 / 3

軍事郵便(日付 封書

なし)

便箋5枚。頻繁だった戦場使りが3ヶ月も途絶え、皆心配しているらしい様子。本人は相応に兵士としての務めを果たしている。ただ、戦いは生易しくない。命あってこうしてお便りできるのが嬉しい。死ぬ時はどう言って死のうかと考えたり、鉄兜で物を突いたり、塩もない米だけを食べたり、着の身着のままで藁の中で寝たりしたことが、今では懐かしい思い出である。とはいえ、この土地はずっと暮らしたいと思うほど気に入った。兵隊の生活も慣れてみればいいもの。勝手ながら神戸産のフルーツキャンディ、バターボール少々頂戴したい。空き家があると入り込んで本をあさっている。某家の新夫人になったとかいう人によろしく。

503 島田勇雄

昭和15 / 3 / 18

軍事郵便(日付 封書

なし)

便箋4枚。2月9日の貴札、3月13日入手、故国からの手紙は胸を打つ。こちらは閑暇も得ず、夜は明け方を許されないので便りも滞りがち、それにつれて来信も少なくなった。装具袋の中に突っ込んでいたお守りを肌につけるほどの戦いも経験した。弾に当たったらどうやって死ぬかを真剣に考えたりもした。今度の作戦については書きたいことが山ほどあるが、そうした報告を厳重に禁止されていて書けないのが残念。何かほしいものを

504 島田勇雄

昭和15 / 3 / 28

軍事郵便（日付 封書  
なし）

望めとのことなので、早速お言葉に甘える。三田村さんの『江戸読本』頂けるのがあったら頂きたい。ページ数も少なく小型のもので一読後捨ててしまっても惜しくないようなものがあつたら、自分の勉強のためにぜひほしい。部隊名が変更になった。6ヶ月くらい新聞を見ていない。欧州情勢や国内の様子について早見表や概略報告はないか。数日前、1年ぶりで慰問団を迎え、感泣した。

505 島田勇雄

昭和15 / 5 / 12

軍事郵便（日付 封書  
なし）

便箋2枚。官報落手、嬉しい。目下、中国の幣制問題、農村問題にかなりの興味を持っている。それに関した記事は切り抜きをしているので、引き続き送ってもらえれば幸甚。簡単な報告は追々するが、それまでに勉強しておきたいことも多々ある。麗子夫人に、南十字星の位置をお聞き下さい。便箋4枚。小包拝受、感謝。『好色一代男』『好色一代女』などはしばらく手をつけていないので、戦いの合間に再読するのもいい。川柳の字引は戦場のつれづれには満点。あれを見るにつけても自分の計画の1つであつた『曲輪語辞書』も、未完成でもまず作ってみるものの必要性を考えさせられる。『川柳語辞書』も今少し学究的なものを作る必要があると思ふがどうか。先生も少しずつ語彙を集めては。内地も煙草が全くなって、たまの配給しかないと何かで読んだ。煙草の欠乏は戦地だけではないらしい。私も国へ煙草と道具一式を頼んでおいた。こちらではマッチも切れた。たまに売っていても小箱1つで5〜10銭する。弟が結婚した。テントの外で戦友がさびしいメロディーの草笛を吹いている。

506 島田勇雄

昭和15 / 5 / 13

軍事郵便（日付 封書  
なし）

便箋4枚。杉山平助の火野葦平論を『中央公論』12月号で読んだ。オランダを英独のどちらが占領するかは時間の問題であり、そうした場合のオランダ領インドの帰属は重大なことになる。日本が世界大戦に引き込まれる可能性も発生してきそつた。この件に関する内地の判断世論をうかがいたい。サッカーを頂きたいことと、南十字星の位置と2点を頼む。

507 島田勇雄 昭和15 / 5 / 25 軍事郵便（日付 封書

なし）

便箋4枚。中国南部で女の発言権が大きいのは、産業形態に原因があるのではないかと考える。中部から南部にかけては稲作中心だが、これは北部における小麦栽培より人手を要するものであり、そのための労働力として女の価値が高まり、発言権が大きくなったのではないか。同じ条件でありながら、日本の女がその価値を強く主張しないのは仏教の力の大きさによると考える。また、南部と北部とでは民族も異なる。ただ、私としては経済的関係の影響を大きく言いたい。

508 島田勇雄 昭和15 / 6 / 12 軍事郵便（日付 封書

なし）

便箋3枚。食用蛙に属するものが近辺に多くいる。雨の夜などは鳴き声に悩まされる。大きな蛙が飛び出してくると、苦力は争って取り、1匹50銭くらいで売買するようだ。主として太ももの身を食べるようだ、皮も捨てないようだ。このあたりは物価がとて高い。苦力は犬や猫も食べる。ただ、調味品は大部分岩塩で済ませているよう、醤油は省の首都あたりでないと見られない。砂糖は貴重品扱い。我々が知っている中国料理は大会でのみ発達・賞翫されているのだから。中国文化が都会の文化であると言われるのも、また中国では封建的なものが最もよく残存しているのも、故なきではないようだ。

509 島田勇雄 昭和15 / XX / XX 欠落 封書

日付なし…便箋3枚。広島陸軍病院第一分院より。突然内地還送を命ぜられた。突然とはいっても事前に大体分かっていた。12日に命令、13日に台中発、17日に当病院へ収容。病気はもうすっかりいい。今日の診断でも近いうちに退院と言われた。7月25日頃から発熱、8月1日にマフリヤ三日熱に決定。一時班へ帰ったが微熱が続いた。9月初めに仏印進駐と決定して突然異動命令、野戦病院へ放り込まれた。海まで自動車で運ばれる道程は苦しかった。台湾でニュース映画で戦友や部隊長の様子を見た時は涙がこぼれた。近いうちに退院、追って召集解除になるので、再び会える日も遠くないと思っただけに楽しみにしている。

510 島田勇雄

昭和15 / 11 / 30

欠落

封書

日付なし・便箋4枚。臥床のつれづれに見た古い『文藝春秋』の広告欄で石川巖の名を見つけた。書名は『藤村書誌』、豪華版の本である。もちろん悪口を言えば、齋藤昌三氏をうまくつかまえて利用していると言えなくもないが、そうした問題以上にこの人の仕事には胸を打たれる。あの人の業績を過大に評価することはできないが、今のような状況下でしたことに感動させられた。病んでみて、そして度々ぎりぎりのところまでいってみると、自分が僅かでも人の記憶に残る仕事をやったということが、とても魂の慰安になるものと分かる。この頃はできるだけの時間を勉強にあてている。方言の語法調査の結果を次々級友へ送っている。去年の今頃は麗子さんの結婚の便り感慨深く頂いた。懐かしい。

便箋2枚。お手紙頂戴した。お身体が思わしくないとのこと、気がかり。

511 島田勇雄

昭和16 / 1 / 25

昭和16 / 1 / 25

封書

便箋3枚。家が狭いのは困る。帝大国文科の自分を含めた3人で一軒家を借りる案がある。今は借家難の時代である。方々へ頼んで家を探している。就職も問題だが、私立なら、就職先もなくはないらしい。でも、できれば官立か公立へ行きたい。原稿用紙のないのは困り果てた。神戸では入手できないだろうか。仕事は一向にはかどらない。いつか申し上げた雪印のバター、入手できるかと思っていた品は買いに行ってみると現物なしでがっかりした。知人にも頼んでおいた。本日、友人の妻が電車から店に行

昭和16 / 3 / 19  
欠落  
(封筒)

封書

列があるのをみつけ、途中下車して買って来てくれたが、小さいものしかない。近日中に送る。また手に入ったら送る。節米時代なので、遠からず朝はパン食にするつもり。東京は案外米はある。炭には困った。砂糖と炭はまだ配給がないので困る。私の写真が出来るので近日中に送る。

日付なし…便箋3枚。大阪は10日に出た。桑名で3泊、名古屋で2泊、上田で1泊、16日着京。住居は護国寺の近く、女子大寄宿舎のそば。家賃が35円もするが、家がとても小さい。友人夫妻と3人で少し詰めになっている。一番いい友達で、学生時代を思い出して楽しい。就職は少々無理をしても東京にいる。私立でもいい。いずれ4月から。阪大の長岡さんが言われたように、勉強することのためにお金がほしいと思う。東京で御入用のものはないか。

日付なし…便箋3枚、写真1枚。1月26日付の八ガキ拝受。渋谷君へは八ガキを出し、2、3日前返事があつた。目下卒業論文執筆中で、それが終われば会えると思う。友達の家には当分下宿人として置いてもらうことになっている。友人は新学期から国立に新設される学校へ勤める。自分もその女学校へ行くかもしれない。高野さんの御養子の関係で明年あるいは明後年に府立中学校へ行くことになった。それまではどこかへ腰掛で行くつもり。東京の友人が自分の就職で大わらわになつてくれている。桑名の友人宅で写した写真を送る(現物同封、裏面に「十六年桑名にて」と墨書)。お宅にある本で、後藤興善の山窩に言葉など書いた本の書名や発行所を教えてほしい。

日付なし…便箋4枚。就職の件では困らされた。関西へ帰ることも考えていたが、級友の紹介で急に安田工業の夜間部へ行くことになった。夜間なら昼間は大学の講義に出たり図書館巡りをしたりできる。ここに1、2年、高野さんの学校へ変わるまで居るつもり。体もやっと調子が出てきた。

一通り入用の本も揃ったので、基礎的な調査から始めている。元禄期の世話物狂言『心中千日寺』の分析を行っている。元禄期の狂言本・軽口本・評判記などの動詞を調査して夏頃までにまとめたい。その次が「せんぼ」、その次が長塚節『土』の常州方言、などなどやりたい仕事がたくさんある。花街語のカードも作っておきたい。小野夫妻へよろしく。

日付なし…便箋5枚。この頃は毎日日本の製本をやっている。大学院時代に写した、上方狂言本・歌謡・方言もの・遊里もの・浮世草子など80冊ほど作った。製本して書棚に並べると楽しい。表紙用の紙は丸ビルへ買いに行くが、今では大部分品切れ、買えるだけ買っておこうと思う。郷里から卵が届いたとのこと、今後とも入用の節は直接父へ申しつけてほしい。

3月には書物の整理に帰省したいと思っていたが、帰れるかあやしくなってきた。小野氏夫人の近況、御令孫の発育はいかがかが、御令閨によるしく。三田村氏『江戸百話』を書店へ注文したら品切れだった。拝借願いたい。『江戸百話』以外にも人形のことに触れているものがあつたら拝借したい。

日付なし…便箋3枚。昨日『江戸百話』拝受。早速「里訛り」「野呂間人形」などの項を抜き書き、拝眉の折に返却できると思う。友人の紹介で内職として辞書の編纂を手伝うことになった。1ヶ月30語、1年半ほどの予定。学校は新学期から行くはず。御上京の日はお決まりか。私も月末までに信州へ借りた本を返しがてら行って来る予定、また遅くなれば新学期の打合せもあるので、上京の予定が分かれば差し支えない頃に信州へ行って来たい。麗子さんのお身体はいかがかが。奥様や小野氏によるしく。

日付なし…便箋2枚。御上京が少し遅くなるとの八ガキ、拝受。私は21日、23日の予定で信州へ行く。その間に上京された場合は信州へ電報を頂戴したい（連絡先…上田市鷹匠町 飯島孝夫）。歌謡関係で製本したものは左記のとおり。入用のものがあれば写して差し上げてよい。『新町なげ

の書簡は、昭和16年2月12日付島田小市書簡（書簡518）と関連している可能性あり。

514 島田勇雄 なし 昭和17/2/5 封書

513 島田勇雄 なし 昭和16/6/18 ハガキ

ぶし』、『おとりくとき』(寛文3年3月吉日)、『御笑草諸国の歌』(上野帝  
国図書館本)、『はやり歌古今集』、『ちやつみ歌』、『粉引歌』(写本、天明  
7年)、『うたおんど大阪三十三番』、『うたおんど大ぶつくやう三段切』、『う  
たおんど心中三番続』、『むめや七ねん』、『御船歌話』、『話』に振り仮名…  
クドキ)集』(尾州、天保8年)、『くまのぶし』(六部)、『おとりくとき女  
庭訓』、『流行小唄集』(助六さんざぶし、恋路のふ火枕、ほんかいなぶし、  
江戸鹿子紫草紙、吾妻花娘道成寺、ほつ年世直し道成寺)。麗子さんのそ  
の後はいかがか。

日付なし…便箋3枚。秋になった。麗子さん、坊やはいかがか。今年の  
夏は帰省して、その途中お邪魔する予定でいたところ、例の召集騒ぎ、移  
動中に電報が来ることや応召した場合の後始末を考えて東京を動けなかつ  
た。残念。上京以来、旧『近世文学』同人がまた結束して論文集を出すこ  
とになり、その原稿でくたくたになっている。その後は国語学の方が2つ。  
これからはらくは現代大阪方言を研究したいと思つ。別に、絶版書の謄  
写印刷を始める計画もあつて、多用である。忙しくて自炊もおつくう。家  
があれば借りて妹を呼び寄せたいが、それもしくい。夜学も冬に向かう  
につれて苦しくなってくるだろう。

この他に顔写真1葉同封、裏に「昭和十六年一月中旬」の記載あり。

辞書の江戸語を引き受けてやっているのだが、佐藤氏『元禄文学辞典』が  
入手不能で困っている。関西で入手できるなら少々高価でも構わないので  
買い求めてほしい。以前の『近世文学』同人で論文集刊行会を作つた。そ  
の仕事で今夏は帰省できそうにない。近く御上京なさるなら満点なのだが。  
便箋2枚。数日前書留便で「御本、ふるしき、味の素」を送つた、受納さ  
れたい。プリントの方、思わしくないこと、申し訳なく思つ。期待にそえ  
ず残念。衣類の切符は身にこたえる。スプリングオーバー、レインコート、

島田勇雄

なし

xx / xx / 15

封書

座布団、丹前、これでは100点ではとても買えそつにない。前歯が折れたせいでこの月は月給の使途が予約済みとなった。

便箋4枚。過日参堂の際のおもてなし、出京の折の頂き物、感謝。神戸から名古屋までの汽車はものすごい混雑で、自分は通路に座って寝たが、大部分は立ち通しという始末だった。中央線はすいていた。上田には1時間ほどしかいらなかった。帰京後もあわただしくしている。『奈良朝文法史』の事務が残っているのと、書かねばならぬ原稿が2つほどできるので気持ちが落ち着かない。文庫本複製について藤田氏を訪ねた。会員となつてもらえそうな人を求めて。首尾はあまりかんばしくない。東京ではそうした人はあまり知らないとのこと。以前藤田氏蔵本を復刻した富永氏への紹介状をもらったので行ってみるつもり。その人が協力してくれば20〜30人集まる。その場合、集まるのは各地の好事家なので、動きやすい。動かないものと言えば先生の関係の方で固めていくより仕方ないだろう。50人くらいを中心にはいかがか。もっともそうすればいきおい高価なものにはなるかと思うが。藤田氏も言っていたが、余分は神田の大矢書店あたりに置いてもらって一般の人に売ってはどうかとのこと。会員数について見込みがたつまで本にしようとは思う。それとも100部か120部くらいとにかくこしらえさせるか。この件についてお手紙をいただきました。友達からの話では、家が1軒借りられそうだ。

島田勇雄

なし

欠落

封書

原稿用紙4枚。このたびは又々男子御出生、めでたく、羨ましく思う。小野氏へは先生からお祝いのご挨拶を伝えてほしい。近日御上京とのこと、久々に会えるのを楽しみにしている。郷里の友人が近日転宅、その古巣を譲り受けたいと考えている。実現すれば2月の中旬以後になる。先だつては、『上方』、『大阪詞』貸借、感謝。また、御送金たしかに入手した。今後こそちらで入手漏れの書籍があれば、知らせてもらえればできるだけのこと



519	島田清	xx / 10 / 9	xx / 10 / 9	封書	便箋3枚。「兵庫くどき総目録」惠贈感謝。補訂を依頼されたので、異同を調べて報告する。以下、兵庫くどきについての調査結果を列挙。	島田清は兵庫県六甲郡山崎高等女学校勤務、神戸史談会会員。
518	島田小市	なし	昭和16 / 2 / 12	ハガキ	勇雄が世話になっている。玉子を送るので受け取ってほしい。	島田小市は島田勇雄の父。
517	島田小市	昭和18 / 2 / 14	昭和18 / 2 / 14	ハガキ	勇雄が世話になっている。御注文のネーブルを本日発送した。ところどころに入れてあるのは「八束」という当地では喜ばれる果物、夏ミカンとよく間違えられるので一筆書いておく。	
520	島田小市	なし	昭和19 / 3 / 2	ハガキ	本日ネーブルを送ったので受け取ってほしい。	
521	島田俊枝	なし	昭和14 / 3 / 1	封書	便箋2枚 写真1枚。兄が世話になっている。卒業後にいずれお宅に伺いたい。	島田俊枝は島田勇雄の妹。
522	島田幹一	大正14 / 5 / 24	大正14 / 5 / xx	ハガキ	上海より。北京より帰参。	絵ハガキ（北京天壇一）。
523	島田幹一	大正14 / 9 / 11	大正14 / 9 / 11	ハガキ	京城より。奉天へ向かう。	絵ハガキ（朝鮮風俗）上流夫人の裁縫）。
524	島田幹一	大正14 / 10 / 17	大正14 / 10 / 20	ハガキ	中国より（消印は長崎）。	絵ハガキ（Chinese Garden）。
525	島田幹一	大正15 / 3 / 21	大正15 / 3 / 22	ハガキ	岐阜より。	絵ハガキ（岐阜長良川の遊船及鵜飼）。
526	島田幹一	大正15 / 12 / 1	大正15 / 12 / 3	ハガキ	長春より。	絵ハガキ（羊の放牧風景）。
527	島田幹一	昭和2 / 3 / 13	昭和2 / 3 / 14	ハガキ	長春より。	絵ハガキ（書齋に於ける老人）。
528	島田幹一	昭和2 / 11 / 12	昭和2 / 11 / 14	ハガキ	ハンブルグより。	絵ハガキ（Am deutschen Rhein）。
529	島田幹一	昭和3 / 1 / 1	昭和2 / 12 / 21	ハガキ	ベルリンより。昭和3年賀状。	絵ハガキ（Die besten Neujahrs

とはする。近頃は書籍入手難で困る。勤めは今、安田工業のほか、都立四中へ週2回行っている。市ヶ谷の駅で降りて八幡様の横へ入る。昔のことが懐かしい。先生が以前いた家などが借りられると申し分ないのだが。四中の生徒は都立でも指折りの学校だけに一段と立ち勝っている。しかし、まだ都立の専任にはなる気がしない。自分の勉強などなかなかできそうにない。自分は夜間部に籍を置いてゆつくり勉強したい。

546	島村幹一	なし	「蘆ノ湯」 図柄	ハガキ	芦の湯より。	絵ハガキ(箱根勝景) 塔之澤
545	島村幹一	xx / xx / 15	欠落	ハガキ	北京より。本年は3回北京へ往復した。今は秋で最もよい季節である。	絵ハガキ(Peking : Coal Hills)。
544	島村幹一	xx / 9 / 18	xx / 9 / 18	ハガキ	天津より。久しぶりに来て、各国租界の拡張に驚いた。明日上海へ向かう。	絵ハガキ(天津英国租界阜頭)。
543	島村幹一	xx / 7 / 26	xx / 7 / 26	ハガキ	満州から北京へ行った。	絵ハガキ(上海 正金銀行)。
542	島村幹一	xx / 4 / 19	欠落	ハガキ	北京扶桑館より。本日いっぱい滞在の予定。	絵ハガキ(北京万寿山排雲門)。
541	島村幹一	xx / 4 / 7	xx / 4 / 9	ハガキ	北京より。西太后が北京の昆明湖の畔に築造した万寿山である。	絵ハガキ(北京万寿山)。
540	島村幹一	xx / 4 / 4	欠落	ハガキ	北京セントラルホテルより。先月より当地に来た。	絵ハガキ(北京万寿山)。
539	島村幹一	xx / 3 / 2	欠落	ハガキ	南京より。過般帰国の際は相変わらず多忙で、遺憾。旧都南京に来た。	絵ハガキ(南京名所)明孝陵)。
538	島村幹一	なし	欠落	ハガキ	上海より。過日のハガキ拝受。出発の際は是非とも船名を打電してほしい。今回左記へ転宅した。当地へ来る時は逗留してほしい。	絵ハガキ(Chinese Garden)。
537	島村幹一	xx / 5 / 9	xx / 5 / 9	ハガキ	上海より。近日当地を出発、内地へ帰還の予定。例の件、お暇の節に先方へ通知しておいてほしい。	絵ハガキ(上海城内測字灘)。
536	島村幹一	xx / 2 / 24	欠落	ハガキ	3月中旬には帰神の途につく。 榛名丸船中より。暴風に翻弄されている。明日は再び上海へ上陸の予定。	絵ハガキ(N.Y.K. S.S. "HARUNA MARU.")。
535	島村幹一	昭和9 / 7 / 13	昭和9 / 7 / 14	ハガキ	奉天より。内地は大変な暑さの由、初めての東京生活に御一同様お変わりはないか。近日帰朝する。御家内御一統へよろしく御伝声を。	絵ハガキ(商隊)。
534	島村幹一	昭和9 / 5 / 26	昭和9 / 5 / 26	ハガキ	奉天より。	絵ハガキ(満州人の挨拶)。
533	島村幹一	昭和7 / 7 / 24	昭和7 / 7 / 24	ハガキ	花巻温泉より。	絵ハガキ(花巻温泉松雲閣洋室)。
532	島村幹一	昭和7 / 1 / 4	昭和7 / 1 / 4	ハガキ	房州小湊より。	絵ハガキ(房州名所)仁右衛門島)。
531	島村幹一	昭和3 / 3 / 22	昭和3 / 3 / 22	ハガキ	ロンドンより。ベルリン、パリを経由して来た。	絵ハガキ(London. Westminster Abbey)。
530	島村幹一	昭和3 / 2 / 6	昭和3 / 2 / 6	ハガキ	パリより。花咲く頃には内地へ帰国したい。	絵ハガキ(Petit Trianon)。

grusse)。

547	島村幹一	xx / 11 / 18	xx / 11 / 20	ハガキ	北京・東京旅館より。過日の会談は遺憾の極みである。北京の秋は朝夕は涼しいが日中は暖かい。	全景。 絵ハガキ（北京名勝 郊外蘆溝橋）。
548	島村幹一	なし	xx / xx / xx	ハガキ	北京・東京旅館より。御多忙のことと拝察する。迎春の帰省は見通しがつかない。例の若木納税の件、都合がつけば当方より打電の上、迷惑ながら左記へ行って受領の上、お取り計らい願いたい。受領先は「神戸市神戸区中山手通7ノ1 興和洋行 大西行雄」。電話帳に大西行雄または興和洋行で出ているはずなので調べてほしい。打電は26、27日頃を考えている。	絵ハガキ（北京北海八景 白塔）。
549	島村幹一	xx / 1 / 1	xx / xx / xx	ハガキ	北京・東京旅館より。年賀状。来月は一度帰るつもり。	絵ハガキ（北京）北海公園）。
550	島村幹一	なし	xx / xx / xx	ハガキ	北京・東京旅館より。帰国の際に途中若木へ立ち寄り寄るつもり。例の田中省吾氏は天津に在住の由。	絵ハガキ（北支）察咬爾・張家口全景）。
551	島本得一	昭和9 / 7 / 6	昭和9 / 7 / 6	ハガキ	過日東京の折には厄介になり、土産ももらい、感謝、無事帰宅した。渋谷氏へは昨日面会の節依頼の品を渡した。	絵ハガキ（白鶴美術館本館正面）。
552	島本得一	なし	昭和14 / 12 / 8	ハガキ	久しぶりで芳墨を見て痛快、小生も同感。自分独尊で時局も弁えず高価な無用物を物資不足の時代に作って得意がるのには憤懣。買入れを辞退した。大の字光る白雲山）。	絵ハガキ（妙義名勝）山腹に
553	島本得一	昭和15 / 9 / 30	昭和15 / 9 / 30	ハガキ	いろいろ御配慮感謝。10月は10日まで防空あり、13日の第2日曜に帰阪予定。会えれば好都合、時間と場所を知らせてほしい。自分が出向いても、来てもらっても、どちらも可。	絵ハガキ（参宮船「神風丸」）。
554	島本得一	昭和18 / 12 / 27	昭和18 / 11 / 28	ハガキ	大分寒くなつた。先般はいろいろ御配慮感謝。先般社用で帰阪、渋谷氏の所へは行ったが、そちらへは時間がなくて行けず、御容赦。当日11月8日は防空訓練で貴方は多忙と渋谷氏に聞いたので遠慮した。来月帰阪のときに申し上げたい。	絵ハガキ（長良川堤の桜）。差 出日付、書き誤りか。
555	島本得一	昭和20 / 9 / 4	欠落	封書	巻紙1枚。御令聞逝去の趣、驚いた。罹災後忙しく、また罹災後の御住所が不明で御無沙汰申し訳ない。昨日、渋谷氏から近況を聞いたので、とりあえず書中でお悔やみ申し上げる。私は幸い表記の隠居所のみ残り、妻と	務の妻の逝去の記事より、昭和20年と推定。

556 島本得一 昭和20/12/7 XX/XX/XX

ハガキ

兩人無事に暮らしている。来阪の折はお立ち寄りを。今月15日は在宅、お待ちしている。急用で不在の場合は前日に打電する。略地図を記す。

557 島本得一 なし なし

名刺

塩屋の親類へ行く序に伺った。都合がつけばちょっとお願いしたいことあり。消息を願う。

558 下川浩造 XX/XX/10 XX/XX/XX

ハガキ

大阪へ参り、遷宮後の伊勢神宮を拝したく、昨夜伊勢山田へ泊まった。昨日は内宮、今日は外宮へ参詣のつもり。

559 書士会同人 昭和1/12/30 昭和1/12/30

封書

便箋一枚(謄写版印刷)、名簿一冊。御諒暗中につき、賀詞は遠慮する。明年2月に『書史』発刊、投稿を募る(宛先は青木平七)。来年度より例会幹事は名簿順で回す。「書史会々員名簿」(全3丁袋とじ)を付す。

ハガキ料金が5銭なのは昭和20年4月から昭和21年6月まで。よって、本書簡は昭和20年と判断される。差出人住所が書簡555(島本得一)で述べられる「隠居所」と同じにつき、昭和20年以降。絵ハガキ(伊勢名所)倉田山公園徴古館。下川浩造は福岡の俗謡研究家。

「書史会々員名簿」を付す。会員は、青木平七、青山督太郎、荒木幸太郎、石割松太郎、石川留吉、伊藤一男、木村助次郎、黒崎貞枝、小西一四三、佐古慶三、鹿田文一郎、住田正一、高梨光司、高尾彦四郎、豊仲未迷、藤堂卓、南木芳太郎、中村正二郎、中尾熊太郎、忍頂寺務、平井櫻外、船越政一郎、本田敬之助、三宅吉之助、松本正治、森谷清松。

560 書物談話会 昭和4/5/XX 昭和4/5/22

封書

印刷物1点。第1回書物談話会(5月26日)通知。当番幹事は黒崎貞枝、木村助次郎、南木芳太郎、青木平七、鹿田文一郎。連絡先は鹿田松雲堂。

561 書物展望社 xx / 4 / 1

欠落

封書

xx / 4 / 1付…用箋(「書物展望社」名入り) 1枚。7代目の成田本に  
ついて5月号に執筆を依頼したい。執筆の場合は4月10日までに。

xx / 4 / 24付…用箋(「書物展望社」名入り) 2枚。承諾を得た玉稿、  
6月号誌上には是非掲載したい。ついては5月10日までに送付願いたい。

忍頂寺務「あしもふさよ身旅  
喰」(「書物展望」9'7、昭  
和14年7月)。雑誌刊年からは  
昭和14年と推定される。ただ

562 菅竹浦(稲 大正15 / 1 / 1

大正15 / 1 / 2

ハガキ

大正15年賀状。

し、小野麗子氏封筒書入れは  
「S-12 4-1」とある。昭和  
13年8月8日付齋藤昌三書簡  
(書簡46<sup>5</sup>)の内容と関連あり。

吉)

563 菅竹浦 なし

大正15 / 4 / 3

ハガキ

竹浦自筆の雪たるまの絵と俳句を認める。

564 菅竹浦 なし

大正15 / 7 / 25

ハガキ

竹浦自筆の須磨付近の絵。昨日はわざわざ『歌舞伎研究』をお届け、感謝。  
創刊号は残念だがいたし方ないこととあきらめる。これからも心がけおき  
ほしい。三田村氏への伝達感謝。雑誌代金は近日中に精算する。

565 菅竹浦 昭和5 / 7 / 9

昭和5 / 7 / 10

ハガキ

御高作の狂歌を面白く拝見、尻馬に乗って自分も折句式に作ってみた。「せ  
いしんをこめしぞうげのいんなればお気にあわぢと思はざりけり」「せい  
「ぞ」「ん」「あわぢ」に赤傍点。

絵ハガキ(男山ケイブルカー  
橋梁)。狂歌は、『清元研究』  
出版記念に昭和5年6月に山  
口幸三郎・川嶋禾舟・佐伯貞  
七・山本治平・横田照二・江  
見恒三郎・菅竹浦から務へ贈  
った象牙の蔵書印の印文「淡  
路静村文庫」にちなんだもの。  
小野文庫476『「淡路静村文庫」  
印贈呈目録』。書簡中で言及  
されている務作の狂歌とは、

575	菅竹浦	昭和13/5/24	昭和13/5/24	ハガキ
574	菅竹浦	昭和13/1/xx	なし(封筒欠)	カード
573	菅竹浦	昭和13/1/1	昭和13/1/13	ハガキ
572	菅竹浦	なし	昭和12/9/7	ハガキ
571	菅竹浦	昭和12/3/xx	昭和12/4/14	ハガキ
570	菅竹浦	昭和12/1/1	昭和12/1/1	ハガキ
569	菅竹浦	なし	昭和11/10/13	ハガキ
568	菅竹浦	昭和10/4/20	昭和10/4/19	ハガキ
567	菅竹浦	昭和7/1/1	昭和7/1/1	ハガキ
566	菅竹浦	昭和6/1/1	昭和6/1/1	ハガキ

昭和6年賀状。  
 昭和7年賀状。  
 丁重なる来示に接し恐れ入る。上京いたしたい用事もいろいろあるのだが、務めが多忙で意に任せず閉口。その後に入手したもので御高覧に供したいものもあり、いろいろ面白い話もあるがいちいち通報いたしがたく打ち過ぎていた。その後友人間で珍本を掘り出した話もある。また温泉の文献を収集している小澤から稀覯書を発見、200円あまりで漸く入手、目下写本をしている。最近には陳書会も開かれず皆様に会える機会がない。

『上方』所載の拙稿を御高覧下さった由、あれは全く意外の発見だった、大阪の連中も驚いていて「玉の主人」も鼻を高くしている。「貞柳」のものは土地柄もあって現品の発見もあり。明年は御帰神の由、大いに鶴首。小生は更に『狂歌史』完成のため上京したいと思っているが、叶わず遺憾。

昭和12年賀状。  
 転居通知。  
 残暑見舞。印刷文面中の「暑中」の文字を「残暑」と修正、出し遅れで申し訳ない旨を自筆で書き添える。  
 昭和13年賀状。  
 カード 上野公園『惜春賦』碑面の狂歌。  
 先日は失礼した。おかげさまで思いがけない眼福、その上貴重書を拝借し

この蔵書印の贈呈時によまれた、「賜はりし印は象牙の粹なれば普見簿冊のこしに押さん」。本報告書所収「忍頂寺務年譜データベース」の「昭和05/xx/xx」項を参照。

絵ハガキ(品川(東海道五十三次)広重筆)。消印の翌日の日付が差出日付として記されている。

絵ハガキ(安倍川(東海道五十三次)広重筆)。

576  
菅竹浦

昭和13 / 5 / 30

昭和13 / 5 / 30

ハガキ

577  
菅竹浦

昭和13 / 7 / 6

xx / 7 / 6

ハガキ

578  
菅竹浦

昭和13 / 10 / 9

昭和13 / 10 / 10

ハガキ

579  
菅竹浦

昭和14 / 1 / xx

昭和14 / 1 / 9

ハガキ

感謝。その節に約束の『潮来絶句』はどこかへしまいこんでまだ見つからず、見つかり次第届ける。拝借の書物は読了につき、これとともに持参しようと思っているが前記のような状態である。今週土曜の28日に再度綿屋文庫に行こうと思っている。これについて相談したいことあり、寸時も早く見つけ出したい。暇さえあれば搜索している。

昨夕は折角の御来駕かたじけなく、多勢のためゆるゆる話も拝聴できず残念。その節御尊覧に供すべき書物も打ち忘れ、天理行の勘定がそのままです。申し訳ない。近日中に書物とともに届ける。

神戸未曾有の水禍、御尊宅に損害はないかお伺いする。恩借の貴重書を返したいが交通難で延引、申し訳ない。一両日中に使いの者に持たせて返却、その節に『閨情鳥禪』秋 屋翁写本を同時に持参して見せる。

昨夜は御休養のところ長座し申し訳ない。その折に興味多き珍書数種拝見、その上秘蔵書を拝借、この上もない幸慶を得て満悦。その節お示しの屏風の写真の中にあつた春洋とは井上不鳴であることを思い出した。山陽晩年の門人で徳島の人、医学はシーボルトに就いて研鑽。子は百川姓。堀氏は神戸にいて物故、百川氏の令息が正人氏でかつて陳書会にも出席したことがあり、晩今西灘あたりに居住の様子。鷲尾氏が住所を承知で同氏より住所を聞きながら失念。右、思いついたまま御報告申し上げる。恩借の本は両三日中には間違いなく返上する。

昭和14年賀状。

いつぞや話した写本完成、持参して久しぶりに話をしたいが、近來例のダウンロップへ通勤のため日曜以外には寸暇を得難い。数日前京都頼原先生より来状、その中であなたに会いたいが機会を得難く困っていると申し越されている。京都へ行くことを希望するなら、自分も藤井先生への用向きがあるのでお伴をしたい。御都合はいかがか伺いたい。

神戸の水害から、昭和13年と判断。

587	菅竹浦	xx / 6 / 3	欠落	封書	<p>xx / 6 / 3 付・便箋 4 枚。先夜は失礼した。本日は丁重な手紙感謝。</p> <p>1・『磯千鳥』本年1月に東京の本屋からすでに入手、貞柳の五十回忌追善本であることを知り、珍しく感じたことから写真をとり、『上方』に発表予定、8月号に掲載か。</p> <p>2・御恵示の『めし合』、本を出して見たところ、お察しの通りそれに相違ない。ただ自分の本には跋がなく39丁となっている。務の本を見たい。</p> <p>3・『柳下草』は、もと所蔵していたが、いまは手許にない。</p> <p>4・『酒百首』はあったと思うが、名古屋の富田君が持って帰ったらしく手許にない。富田君にはほとほと閉口。31日夕刻帰宅したが、その際30冊あまりも持って行った。貸してくれというのに嫌だとも言えず閉口の至り。しかも本をぞんざいに扱うのではらはらする。御承知のようにならぬ。</p>
586	菅竹浦	昭和17 / 9 / 19	昭和17 / 9 / 19	ハガキ	<p>明日東京より濱田氏来神のはずが、本日急に変更し10月中頃まで延期する旨、通知あり。来月は時日切迫してからまたあらためて知らせる由。とりあえず急報申し上げる。なお恩借の本はひとまず返上すべきか、あるいはまた来月までお預かりしておいてよいがお伺いする。</p> <p>義一郎か。</p>
585	菅竹浦	昭和16 / 10 / 31	昭和16 / 11 / 5	ハガキ	<p>ダンロップへの出勤終了、自宅診療のみとなることの報告。</p>
584	菅竹浦	昭和16 / 1 / xx	昭和16 / 1 / 9	ハガキ	<p>昭和15年賀状。</p> <p>昭和16年賀状。</p>
583	菅竹浦	昭和15 / 1 / xx	昭和15 / 1 / 9	ハガキ	<p>明日東京より濱田氏来神のはずが、本日急に変更し10月中頃まで延期する旨、通知あり。来月は時日切迫してからまたあらためて知らせる由。とりあえず急報申し上げる。なお恩借の本はひとまず返上すべきか、あるいはまた来月までお預かりしておいてよいがお伺いする。</p> <p>義一郎か。</p>
582	菅竹浦	昭和14 / 3 / 30	昭和14 / 3 / 30	ハガキ	<p>先夜はわざわざ御来駕、お構いもせず失礼。その折に約束の京都行きについてただいま頼原先生から返事あり。鶴首して待つとのこと、猶又同時に一同を打ちつれて藤井先生宅を訪問の意向、藤井先生へは自分からも別に通知しておく。まずは御案内まで。</p>
581	菅竹浦	昭和14 / 3 / 24	昭和14 / 3 / 24	ハガキ	<p>玉葉拜見。近頃は午後5時以後は必ず在宅。午前中も同様。土曜日は午前中不在、午後1時頃から在宅。訪問を待っている。いずれ拝眉を期し近状を申し上げたい。</p>



菅竹浦

xx / 6 / 24

なし（郵送でな  
封書  
いため）

れている『酒百種』という狂歌本には暁月のものをはじめ他に2種あり。1つは大江廣海（天保2）のもので、他の1つがお示しのもの。天廣丸のものは稀本、自分が所持するものは恐らく廣海のもの。高くなければ買いたらよ。『磯千鳥』も珍本なので買つてはいいが。柏木遊泉のことは『狂歌栗葉集』があり、明石の系統はかなり明瞭になる面白いものがある。先日お話しした潮来も出てきたので近日中に持参したい。綿屋文庫の杉浦正一郎君の宅は大阪市住吉区である。御尊宅は市バスのどこで下車したらよいか。それと都合のよい折を指定してほしい。店の方でもよい。

xx / 6 / 10 付…便箋1枚。先夜は長時間お邪魔、珍書を拝見し眼福。それに気をとられ、折角の用事も忘れ、先日の勘定も致さず帰宅後に気づく有様、申し訳ない。恩借の書2冊『いそちどり』『酒百首』を返す、残り2種3冊は両3日猶予がほしい。近日中にまた訪問する。

便箋2枚、題簽模写（「たむけくさ」の薄様1枚。書籍永々拝借感謝。『元木あみ物語』は狂歌人の空阿弥とは別人の仮作物語である。『古今狂哥仙』は大いに得るところがあった。先般御消息の一肆でクロサキ文庫売立の際、『タムケ草』題簽を手控えに遊ばされた趣を承ったので、名古屋の富田君（同君はクロサキ市で入手したものである）に申し送り同書を借覧し直に模写しておいたものを別紙添付して送る。原本と寸分たがわぬものを作つて呈上する。やや色づいた和紙で台張して貼付すれば原本と近くなるだろう。近頃午後1時より5時までダンロップ医務室に在勤、当分適任者を得るまでの間のこと。

文中の「富田君」は、富田新之助か。忍頂寺文庫C 65『水無瀬の松風』の見返しに務書入れ「玖侶社記文庫には題簽あり「たむけ久佐」と記されたるを見る（昭和四年二月古書保存趣味の会）。『元の木あみ物語』、『古今狂哥仙』。ダンロップの記事より、昭和14年3月頃以降、昭和16年10月以前の書簡

菅野米二ほ  
昭和11 / 8 / 19なし（郵送でな  
ハガキ  
いため）

駒田彦之丞死亡通知。8月19日に死亡の旨の報告。

590 杉浦正二郎 なし 昭和13/7/14 ハガキ 水害の被害御甚大の趣、お宅様はいかがか。あの翌日神戸の両親宅へ見舞に行ったら、篠原は安全と聞き、お見舞いが延引した。何卒御安全でいたことを祈る。

591 杉本梁江堂 なし 昭和20/1/3 ハガキ 阪急百貨店で開催の「稀本珍籍古書展」(昭和20年1月5日~14日)の案内。

592 鈴木南陵 昭和18/12/9 欠落 封書 原稿用紙1枚。今般鹿谷法然院の件で御尽力のこと三田村兄より聞いた、感謝。小為替50円封入、御受領いただきたい。今後とも御助力よろしく。

封筒に記された差出人は鈴木。書簡も筆跡および内容から鈴木と三田村鳶魚の連名となっている。封筒に「書留」印あり。書簡<sup>1124</sup>(三田村鳶魚)に関連記事あり。小野文庫<sup>418</sup>(日記(昭和十八年・十九年))<sup>11</sup>、昭和18年12月11日に鈴木南陵より法然院費用として金50円が到着したとの記事あり。

593 鈴木南陵 なし 昭和10/7/7 ハガキ 瀧亭鯉丈の小法要を7月10日に営むので、参詣をお願いする。法案は岡本文弥、三遊亭円生。

差出人は鈴木南陵、柴田宵曲、野々村蘆舟、鳥居言人、石割松太郎、間民夫、服部普白、島田筑波、河竹繁俊、三田村玄龍、森銑三。

594 瀨川亀 大正14/3/23 大正14/3/24 ハガキ 『延寿清話』ありがたく拝領。散歩がてら私方へもお立ち寄り願う。

絵ハガキ(夜半かけて降り出でし雨にほうほうとふくろう啼けり君は眠りて 原阿佐緒)。

595 瀨川亀 大正15/5/4 大正15/5/4 ハガキ 『清元研究』の礼状。

596	瀬川亀	大正15 / 6 / 8	大正15 / 6 / 8	ハガキ	『清元研究』 惠贈感謝。「おはん」ことのほか興味深く拝見。	絵ハガキ（放送開始一周年記念 大正十五年六月一日）。
597	瀬川亀	大正15 / 9 / 30	大正15 / 9 / 30	ハガキ	『清元研究』送付、感謝。「玉兔」拝見した。	絵ハガキ（月夜の紐育）紐育市街の全景美観）。
598	瀬川亀	昭和8 / 1 / 1	xx / xx / xx	ハガキ	昭和8年賀状（満州国新京より）。	絵ハガキ（公主嶺）農事試験場に於ける羊の群れ）。
599	瀬川亀	昭和10 / 1 / 1	昭和10 / 1 / 1	ハガキ	昭和10年賀状。	絵ハガキ（珍しい湯の分売り）。
600	瀬川亀	xx / 1 / 21	xx / xx / xx	ハガキ	友人が自分の名刺を持参してゆくのので、よろしく頼む（大野麦風画を売る話か）。	絵ハガキ（満州情詩）。差出人住所は満州国新京であり、書簡598（瀬川亀）との関連から考えて昭和8年前後か。
601	瀬川亀	xx / 3 / 25	なし（切手剥落のため）	ハガキ	『清元研究』頂戴した、感謝	絵ハガキ（御教祖四十年祭記念博覧会）。絵ハガキの写真より、「御教祖」とは天理教祖のことであることが分かる。
602	関根正直	大正13 / 4 / 8	xx / 4 / 9	ハガキ	明治書院気付で御慮投の『延寿清話』拝受、面白く拝見。感謝。	明治書院気付で『延寿清話』を送っているとのことであり、関根の住所を務がまだ知らなかったことが窺われる。初めての送付だったか。また、大正14年5月23日付関根正直書簡（書簡604）によれば、関根は大正13年に転居しているとのことだが、本書簡では関根

603	関根正直	大正13 / 6 / 4	大正13 / 6 / 4	ハガキ	『延寿清話』送付感謝。中にも山白没年について先人の誤謬がわかり、ありがたかった。『忌辰録』改版の節には訂正したい。	の住所が移転前の本郷区森川町となっている。これらのことから、大正13年と推定。
604	関根正直	大正14 / 5 / 23	大正14 / 5 / 24	ハガキ	『延寿清話』惠贈、感謝。面白く拝見。昨年表記の住所に移転した。	
605	曾我友兄	大正9 / 5 / 30	大正9 / 5 / 30	ハガキ	小生出発の節には面会すべきところを、かれこれ手違いが生じ各方面へ失礼した。今回国際汽船へ入社、倫敦へ3年行く。	絵ハガキ(上海英租界海岸通)。上海から。消印は「30 / 5 / 20」、郵便料金から1920年と判断。
606	高岸拓川 (豊太郎)	大正13 / 12 / 19	大正13 / 12 / xx	ハガキ	谷中新堀真言宗補陀山養福寺の花尊(ママ)碑についての情報を知らせる。寛政4年、谷素外の建立。碑面の句の紹介。	
607	高岸拓川	なし	大正13 / 12 / 23	ハガキ	養福寺の花尊(ママ)碑について、抜き書きでは不足かと思ひ、とにかく全部貴覧に供する。別便の書留郵便で1冊子送付する。	絵ハガキ(東京勧業博覧会開會式記念)。
608	高岸拓川	大正14 / 3 / 21	大正14 / 3 / 21	封書	半紙2枚。光感寺玉菊碑の全文の写し。	
609	高岸拓川	大正15 / 3 / 10	大正15 / 3 / 11	ハガキ	4日付書簡6日落手、8日付ハガキ10日落手。どちらも別に返事は差し上げず、委細は拝芝の節に譲る。	絵ハガキ(相州三崎城ケ島水垂ノ遊船)。
610	高岸拓川	なし	昭和3 / 3 / 20	ハガキ	移転通知。	
611	高岸拓川	昭和10 / 5 / 26	昭和10 / 5 / 27	ハガキ	今日御尊来の折には折悪しく外出して失礼した。殊に思いの外の珍物御恵投、有難く存じ。左様の事とは知らず、拝顔の時お礼も申し述べず何とも恐縮。いつも御恩になるばかりで申し訳ない。此の次はゆるゆると来てくださるよう、またそのうち参上して改めてお礼を申し上げます。御令閨様御老人様へもよろしく。	絵ハガキ(十松や扇子店出陳)。
612	高倉観崖	なし	欠落	封書	巻紙1枚。画会開催が迫り、日々孤立運動を致しているところ、初見の地ゆえ思つように進捗しない。ついでは何卒有力な御後援を願いたい。文展出品期も目前に迫り、後日の成功如何も援助を待つほかない。絶大なる御	

613 高田蝶衣 大正13/5/16 大正13/5/16 封書

後援を伏して願ひ上げる。

野紙(「竹香書屋」名入り)3枚。過日は唐突にも早朝推参、失礼。面倒なお願ひ相済まない。快諾してもらひ、御芳情に感謝する。御多用中のところお世話くださった結果の返事、忝く拝承した。遺憾ではあるが、論なき事だ。早速津村老母へ通知した。とりあえずお礼まで。

614 高野辰之 昭和3/5/25 昭和3/5/26 封書

便箋6枚。本月20日付の書簡拝見。自分はずいぶん『落葉集』巻六の原蔵者の名を知り、『歌謡集成』解説に明記したかったところ、藤田君に事情があつてついに知ることができず、遺憾ながら大阪某氏蔵とした。『歌謡集成』刊行に関しては射幸心は全くない。材料提供のつもりで公刊した。『落葉集』は同情して助力してくれたもの、自分は藤田君には一度書面で懇願したのみ。このような行き掛かりがあるとは知らず、驚いた。藤田君とは日常的な行き来はない。藤田君は『読売新聞』に釈明の文を掲げたが、これも一昨夕伝え聞いたのみ。原蔵者の南木氏が不快に思召しているのは尤も。困つたことと思う。今後何かの機会に南木氏のことに触れる。自分も第2回配本の付録で謝意を述べる。お手紙で南木氏の住所が分かつたので第1回配本を郵送した。それに添えた書簡の文面をあわせて記す(以下、南木宛て書簡文面を引用する)。右の文面に足りない所を補足してほしい。

615 高野辰之 昭和4/1/1 昭和4/1/1 八ガキ  
616 高野辰之 昭和4/8/5 昭和4/8/5 封書

昭和4年賀状。

便箋2枚。城崎御避暑中のところ、自分が参上するためわざわざ帰神と承り恐縮。小生8月1日東京、静岡島田町に参り、それより山口県三田尻町へ講演に來た。芳墨は東京の留守宅より当地へ回送。御参示に随ひ8月8日に三宮駅へ行く。どうぞお構ひなく。仰せに任せ江戸ビルホテルへ行くが、駅までの迎えは遠慮する。東京出発の一兩日前田中治之助君と一緒に、よろしく申し上げてくれとのことであつた。

617 高野辰之 昭和4/8/11 XX/XX/XX 封書

便箋2枚、写真1枚。今回は非常の御歓待を蒙りお礼の言いようもない。写真1葉同封。写真裏面書入

626	625	624		623	622	621	620	619	618
高原慶三	高原慶三	高原慶三		高原慶三	高野辰之	高野辰之	高野辰之	高野辰之	高野辰之
昭和5/6/15	なし	昭和4/1/1		昭和2/xx/17	昭和12/1/1	昭和9/2/18	昭和9/2/15	昭和7/1/1	昭和5/1/1
昭和5/6/15	昭和5/1/5	昭和3/12/31		昭和2/xx/17	昭和12/1/1	昭和9/2/18	昭和9/2/15	昭和7/1/1	昭和5/1/1
封書	ハガキ	ハガキ		ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ
便箋2枚。『清元研究』贈呈に対する礼状。いずれ寸見と共に紹介のつもり。発句を添える。「清元の世界となりぬ釣葱(つりしのぶ)」。	昭和5年賀状。	昭和4年賀状。		無責任な原稿に対して懇切な書状に接し、恐縮。昨夜、南木君と会談、早速『書物往来』拝借の約束をした。12年前東京で故・好寿太夫より清元の手ほどきを受けたが長続きせず、4年ほど前まで清元太兵衛より教えを受け、この頃は一中節など西山吟平氏から習っているが、道楽気分がぬけない。将来御好誼を願う。	昭和12年賀状。	22日午後5時半より麻布区六本木大和田の会へは御出席あるよう田中治之助様へ申し上げておいた。御練り合わせおきを願いたい。園八のこともその席で御相談したい。	書面拝見。当分当地に御滞在とのこと、同好の士の近きに一人を加えたことを喜ぶ。土曜日、日曜日は不在。まことに勝手ながら、明16日なら早朝より在宅のはずなので、来訪を願えないか。午前10時頃より待っている。	ながら車中で認める。『歌舞伎劇に於ける隈取の研究』(小林玄勝著)の出版に關し、伊藤様を御紹介下さったこと、望外の大喜である。原稿を整理して郵送する。菅竹浦君、川嶋君、江見君、横田君、もう一方は名前を忘れたが、以上の人たちへよろしく。	雅友殊に古書癖同好の土をお引き合わせ下さり、感謝。さて、薬師寺に参り南大和の古蹟一巡を半ば終えたところで家族中に病人ありとの急電に接し、北国まわりをやめて直に帰京する。帰着したら万事蜻蛉集なので、失礼ながら車中で認める。『歌舞伎劇に於ける隈取の研究』(小林玄勝著)の出版に關し、伊藤様を御紹介下さったこと、望外の大喜である。原稿を整理して郵送する。菅竹浦君、川嶋君、江見君、横田君、もう一方は名前を忘れたが、以上の人たちへよろしく。

れ「Kobe Aug 8th 1929 At Toranoya Mr Takano Yokota Emi Kawashina Ninjoji Suga」。

書簡172(伊藤長蔵)と内容的な関連が認められるため、書簡中の「伊藤様」とは伊藤長蔵のことと推定される。

637	竹中恒夫 トシ	昭和17/2/22	昭和17/2/22	八ガキ	山口敬堂(幸三郎)死亡通知。
636	竹中政一	昭和13/1/1	なし(捺し忘れか)	八ガキ	昭和13年賀状。
635	武田信賢	大正15/9/18	大正15/9/18	八ガキ	『延寿清話』の礼状。
634	武田信賢	大正15/8/1	大正15/8/2	八ガキ	暑中見舞。
633	武田信賢	大正15/7/5	大正15/7/5	八ガキ	『清元研究』12の礼状。
632	竹末乾一	大正9/2/14	大正9/xx/xx	封緘八ガキ	大連より。過般は迷惑なお願いに応えてもらって感謝、お蔭で例の10万の利喰で、一方の損失を幾分回復した。急用で当地へ出発、報告もできずに失礼した。
631	竹柴二朔 トク	昭和3/6/xx	昭和3/6/29	八ガキ	撞球場開業の通知。
630	竹重徳芳	昭和15/6/10	なし(封筒欠)	カード	竹重虚心(隣一)死亡通知。
629	灌宜睦	昭和17/1/1	昭和17/1/1	八ガキ	昭和17年賀状。「謹迎大東亜戦大捷第一春」と題する漢詩を掲げる。 口町福蔵寺内。
628	高安月郊	なし	大正14/8/1	八ガキ	『延寿清話』の礼状、転居の知らせ。
627	高原慶三	昭和9/1/1	昭和9/1/1	八ガキ	差出人肩書き「大阪毎日新聞社」。

差出人肩書き「大阪毎日新聞社」。

差出人名「高安」、宛名面に務書入れ「月郊氏」。

差出人住所「神戸市兵庫区門口町福蔵寺内」。

務作の狂歌が書き入れられる。「発展のはの字を入れて玉つばき千代も八千代も当り続けよ」。竹柴二朔について、書簡886(坂東三津五郎(8代目))には「私方作者竹柴二作」とあり。

絵八ガキ(大連大棧橋全景)。三つ折にして通常の八ガキの大きさとする形状。宛名面上部に「封緘はかき」と印刷。

638 多田英光 大正13/6/4 大正13/6/5 八ガキ 『うた沢』が新年号以来休刊なので鈴木氏を鞭撻して本月から出版することに、目下編集集中。材料を収集している。貴御発刊の『延寿清話』を初めて見たのはちょうど在京中のことで、三田村鳶魚氏宛のものを崇文堂で見

た。三田村氏にお届けしたのも私である。『以毛図流』誌は我が同人の齋藤昌三氏である。第3号は大阪の須知狭風氏宅とうた沢社で見た。私にもぜひ創刊号から送ってほしい。実費を知らせてほしい。早速の御送惠、感謝。風俗史研究家の江馬務に会いに2、3日京都へ行っていたので、お礼が遅くなった。

639 多田英光 大正13/6/8 大正13/6/10 八ガキ 店舗移転の通知

640 辰巳屋書店 昭和12/4/26 昭和12/4/27 八ガキ 絵八ガキ（清水寺全景）

641 辰巳屋書店 昭和13/1/1 昭和13/1/5 八ガキ 絵八ガキ（南末修内司窯粉紅同粉青）

642 辰巳屋書店 昭和19/8/16 昭和19/8/17 八ガキ 暑中見舞。細見の希望値段の問い合わせ。

643 館岡鶴松 昭和15/11/1 昭和15/11/1 八ガキ 送金受領の報告。また必要な場合は用命してくれば送付する。

644 立脇泰山 昭和4/6/18 昭和4/6/18 封書 便箋2枚。お八ガキ、小生の立場上拝見した。玉川氏は去る3月の大阪の

会後は本人来ず。自分も同氏に金銭および画の迷惑を蒙っている。同氏の所在不明、手紙も参らず、自分も憤慨。聞くところによれば京都の方にいるとのこと。小生の出入りの者で京都の人が、先日玉川氏に京都で電車の中で会い、「南洲先生の書を求める人はいないか」と言っていたとのこと。在所は語らなかつた由。京都方面を搜索すれば本人の所在が知れるか。なお、甚だ失礼ながら、先日料金をまだ同人へ渡していない場合は、小生



645	田中香涯 (祐吉)	大正15 / 11 / 23	大正15 / 11 / 23	ハガキ	の方へ頂戴できれば幸甚である。 一昨日は御来訪、感謝。お言葉に甘え『端唄一夕話』の御恵とお願しいし、早速御送付、御厚情感謝。これを機縁に菅氏同様に御指導賜りたい。	『端唄一夕話』を務より田中へ譲渡。小野文庫 <sup>23</sup> 『はうた一夕話』。板本が小野文庫に蔵されることから、このとき譲渡したのは重複本もしくは新たに作成された写本と見るべきか。
646	田中香涯	昭和2 / 1 / 9	昭和2 / 1 / 9	ハガキ	月経の俗称についての御教示、感謝。『清元研究』 毎号御寄贈、感謝。	
647	田中菜	昭和11 / 7 / 18	昭和11 / 7 / 18	封書	便箋一枚。御来示の件、同様に遺憾千万である。只今名案の持ち合わせはないが、何か考えておくつもりである。	
648	谷本富	大正13 / 4 / 18	大正13 / 4 / 19	ハガキ	『延寿清話』の礼状。「梅の春」面白く拝見。	
649	玉川巳代治	昭和3 / 2 / 19	昭和3 / 2 / 19	ハガキ	昨夜突然の列車監督乗務と社用で青森へ来た。大雪で弱っている。1週間ほど滞在の予定。	絵ハガキ(青森) 寺町通り雪景。
650	玉川巳代治	なし	昭和3 / 12 / 23	ハガキ	本日前田表具店主人が参り、例の泰山画伯の絹本表具仕立、来26、27日頃に出来上がると申していたので、御承知下されたい。	絵ハガキ(帝国美術院第9回美術展覧会出品 意馬心猿 橋本関雪氏筆)。
651	玉樹香文房 (玉樹安造)	昭和14 / 1 / xx	昭和14 / 1 / 1	ハガキ	昭和14年賀状。	
652	玉樹香文房 (玉樹安造)	昭和20 / 6 / 2	昭和20 / 6 / 3	ハガキ	月末になると城崎の竹 氏を追憶、病気ではないだろうか。小村様と同様小宅も罹災、表記に只今在住、再起を企画している。淡路へ珍本を疎開させているだろうが、手許の虫食い本の手入れを手伝いたい。準備ができたら知らせてほしい。川嶋様は安泰か。同業の消息さえ不明である。明石・松井様方は御安全か。	
653	玉樹香文房	昭和20 / 9 / 15	昭和20 / 9 / 16	ハガキ	8月23日書状、いろいろ事情があつて、昨日受け取った。失礼した。再起	

(玉樹安造)

の考えはあるが、食糧難を考えると、家内の故郷である鳥取を今離れることは至難。由来300年伝来の家系を無くすのはかえすがえすも残念。城崎へはやはり毎月来られるか。その節電話で花房氏の消息を問い合わせた。こちらへは返事なし。

654 玉樹香文房 なし xx / 3 / 26

ハガキ 書を塞ぐため1丁お送りする。第2回は近々箱を調べて御送附する。

(玉樹安造)

絵ハガキ(近松二百年祭記念 絵はがき朝日新聞社発行 近松翁筆富士画讃 大阪 上神田 鶴刀自蔵)。

655 玉村晴朗 昭和18 / 5 / 20 欠落

封書

便箋2枚。蜀山人の評釈を編纂中、新資料を取り入れた大冊、近々完成、印刷にかかる運び。頼原退蔵、中村幸彦より寛政8年『会計私記』御所蔵と聞いた、著作に引用したいので拝借願いたい。天理図書館蔵『壬申掌記』は拝借して手許にあり、数日中に写し終わって返却する運び。

昭和18年6月15日付玉村晴朗 書簡(書簡656)との内容的な 関連から昭和18年と推定。

656 玉村晴朗 昭和18 / 6 / 15 昭和18 / 6 / 15

ハガキ

『会計私記』本日別便書留小包にて返却、感謝。御希望の拙著『秋色と秋色桜』は秋色句碑除幕式に七条老人の発行記念として贈呈したもので当方にはない。しかし折角の御希望なので、七条老人より貰って『会計私記』と同封した。

小野文庫230『秋色と秋色桜』。

657 塚本樽良 なし 昭和9 / 4 / 17

ハガキ

上京の趣、図書館の山村太郎氏より聞いていたところ、本日書状を受け取った。御在京御研究の趣、大慶に存ずる。

絵ハガキ(河内道明寺天満宮 神苑碧玉池ノ景(其一))。

658 辻本写真工芸社 大正13 / 1 / 1 大正13 / 1 / 4

ハガキ

朝鮮を一巡し、途中奉天に立ち寄り、一昨日当地新京へ。奉天、新京は活気に満ちている。数日後、ハルビンへ向かう。

絵ハガキ(奉天)史蹟に有名な天地廟陰陽仏。

659 津田隆 昭和8 / 4 / 7 昭和8 / 4 / 7

ハガキ

ハルビンより。満州の全貌を大体窺った。何をやるにもまだ少し時期が早いようだ。

絵ハガキ(完備せる東支鉄道 倶楽部)。昭和8年4月7日付 津田隆書簡(書簡659)との内

660 津田隆 昭和8 / 4 / 14 xx / xx / xx

ハガキ

ハルビンより。満州の全貌を大体窺った。何をやるにもまだ少し時期が早いようだ。

津田隆書簡(書簡659)との内

661	椿書林(喜多莞次)	昭和9/3/4	昭和9/3/5	ハガキ	川辺さんから『潮来舟』いただき、感謝。池長孟氏は博物館を建てることになり、近々「皇太子御降誕記念兵庫郷土博物館建地」の標柱を建てることになった。郷土史料についてお知らせ願う。	絵ハガキ(三の谷敦盛塚(あつめ塚なりと云ふ))。差出人の椿書林は陳書会と関わりあり。『陳書』1(昭和6年8月)〜5(昭和10年1月)の会員名簿に、椿書林「喜多康雅」の名が記載される。
662	坪内逍遙	大正13/6/3	大正13/6/3	ハガキ	『延寿清話』の礼状。	絵ハガキ(復興中の東京)浅草仲見世)。
663	坪田豊年	なし	大正7/7/18	ハガキ	先日はお伺いして失礼、途中水害で予定より遅れたが京城に着いた。	ハガキ裏面に自筆の絵。
664	坪田豊年	なし	大正7/7/25	ハガキ	本文なし。旅先からか。「朝鮮金剛山探勝記念」のスタンプあり。	絵ハガキ(外金剛五仙岩)。
665	坪田豊年	なし	大正8/5/16	ハガキ	先日は失礼。中央線にて木層(内田注・木曾か)北方の風光を眺めて一昨夜着いた。お手数ながら先般お願いした件、よろしく。	ハガキ裏面に自筆の絵。
666	坪田豊年	大正8/5/30	大正8/xx/xx	封書	巻紙1枚。先般は御多忙中お邪魔し、その節にお願いした照会状の件、お手数ながら御送付下されば幸甚の至り。横浜の方もあるので、是非御照会を願う。出京来徐々に会の件を相談している。多分7月上旬までに開会の都合である。	
667	坪田豊年	なし	大正8/9/29	ハガキ	院展も閉会に近づき、帝展の開会も目前、例年のことながら大晦日のように忙しい毎日。本年は仏画「如意輪観世音」出品、ほかに小品1点を添えたい。	絵ハガキ(第7回日本美術院展覧会出品 秋風五丈原 前田青邨氏筆)。
668	坪田豊年	大正11/8/15	大正11/8/16	ハガキ	残暑見舞と転居の通知。	ハガキ裏面に自筆の絵。
669	坪田豊年	なし	昭和7/1/2	ハガキ	昭和7年賀状。	
670	坪田豊年	なし	昭和12/8/3	ハガキ	暑中見舞。	ハガキ裏面に自筆の絵。

容的な関連から昭和8年と推定。

679	寺澤智了	昭和21/4/20	xx/xx/xx	ハガキ	
678	寺澤智了	昭和21/2/4	昭和21/2/5	ハガキ	
677	寺澤智了	昭和20/9/10	xx/9/10	ハガキ	
676	寺澤智了 (了)	昭和20/7/22	昭和20/7/22	ハガキ	
675	鶴岡春三郎	大正15/10/10	大正15/10/11	ハガキ	
674	鶴岡春三郎	大正15/9/29	大正15/9/29	ハガキ	
673	坪田豊年	xx/2/25	なし(郵送でな いため)	封書	
672	坪田豊年	xx/1/10	欠落	封書	
671	坪田豊年	昭和13/1/1	昭和12/12/30	ハガキ	

昭和13年賀状。  
 巻紙1枚。昨年未帰神来一度お伺いすべきは病人が絶えず遂に子供を失った。その後、妻も自分も感冒で臥床、とうとう一昨日妻も永眠。昨年未吉田様よりお届け下さった金子50円、並びに香料、また結構な柚味噌を御恵与に預かり、御厚情感謝。早速お礼に参上のはずが自分の体も元に戻らず、殊に取り込み中なので書面でお礼申し上げます。

先般は失礼した。勝手ながら、先日の会費残額をこの者に預けていただけると誠に好都合である。

未だ拝眉を得ていないが、自分は目下公用で当地大阪に来ていて約3週間滞在の予定。この機会に一度訪問したい。差し支えなければ来る3日(日)に参上したい。返事をもらえれば幸甚である。

先般、来阪の機会に訪問したいと申し上げたが種々の要務のため目的を達せられず、遺憾ながら又の機会に譲りたい。失礼を御容赦されたい。

久しく拝顔の栄を得ないうちに、国内と申すべきか、市情勢と申すべきか大いに変動したが、お障りはないか。この際、一層文献の保存、文化昂揚の必要を痛感し本月29日(日)午後1時より例のごとく陳書会を開催する。

本月15日(土)に陳書会を開催。神田氏の住所不明で案内できず、ついでの折に伝えてほしい。今後第3土曜日に定めたい。

2月の陳書会は16日(土)、史談会再開は翌日17日(日)。先月、和歌山の川嶋氏を訪問、暖かければ会に参加の予定。

今日の陳書会、書物は少なかつたが、来会者多く、淡路行きも希望者が多い。そのことについて、5月1日に松井博士と参上し、相談したい。

日付と曜日に対応、ハガキ料金から昭和20年と推定。

昭和21年4月13日付川嶋禾舟書簡(書簡<sup>328</sup>)に、4月20日の陳書会についての話題あり。4月20日に陳書会が開催ということと、ハガキ料金が5銭

688	寺澤智了	昭和22 / 3 / 17	XX / XX / XX	ハガキ	先日は陳書会に御出席、感謝。来月の陳書会、多分中谷氏宅、日取りは後	日付と曜日 の対応、ハガキ料
687	寺澤智了	昭和21 / 11 / 5	XX / 11 / 7	ハガキ	次 の陳書会は16日(土)、妙法寺で開催。川嶋様より原稿紙を預かっ てい る。	日付と曜日 の対応、ハガキ料 金から昭和21年と推定。昭和 21年10月22日付川嶋禾舟書簡 (書簡339)に原稿用紙を圖書 館長に預けたとの記事あり。
686	寺澤智了	昭和21 / 9 / 26	XX / XX / XX	ハガキ	今月28、30日、神戸市立図書館で神戸誌料小展あり。来月12日(土)に神 田氏宅で日吉古文至拝 ならびに神戸史蹟保存の協議あり。	日付と曜日 の対応、ハガキ料 金から昭和21年と推定。
685	寺澤智了	昭和21 / 9 / 2	XX / XX / XX	ハガキ	今月14日(土)に陳書会開催。神戸市立図書館使丁室で魚菜煮込会を川嶋、 神田、岡部、錦諸氏らと開く予定、会費10円程か。	日付と曜日 の対応、ハガキ料 金から昭和21年と推定。
684	寺澤智了	昭和21 / 7 / 31	XX / XX / XX	ハガキ	陳書会案内。8月8日(木)、谷勤兵衛氏邸内神田兵右衛門氏。	日付と曜日 の対応、ハガキ料 金から昭和21年と推定。
683	寺澤智了	昭和21 / 7 / 11	XX / XX / XX	ハガキ	陳書会案内。7月20日(土)、加藤通文氏邸。	日付と曜日 の対応、ハガキ料 金から昭和21年と推定。
682	寺澤智了	昭和21 / 6 / 4	昭和21 / 6 / 5	ハガキ	6月8日の日本マツチ会社における陳書会は会場主より当分延期の旨通知 があったので、例月通り会場を神戸市立図書館に変更して常のごとく開催 することに する。	日付と曜日 の対応、ハガキ料 金から昭和21年と推定。
681	寺澤智了	昭和21 / 6 / 1	XX / 6 / 2	ハガキ	陳書会例会御案内。6月8日(土)、会場・日本マツチ統制株式会社、加 藤氏所蔵本展覧。	日付と曜日 の対応、ハガキ料 金から昭和21年と推定。
680	寺澤智了	昭和21 / 5 / 4	XX / XX / XX	ハガキ	1日は急用が生じ、ようやく出かけたところが大倉山は暴風雨で洋傘破損、 電車も来ず、空しく引き返して失礼した。松井氏も遂に見えなかった。3 日正午に貴宅を訪問したが不在で、御帰郷かと思う。今月の陳書会は5月 12日、伊丹市の岡田利兵衛氏方。	昭和21年4月20日付寺澤智了 書簡(書簡679)と内容的な関 連があることから、昭和21年 と判断。

日連絡、通知がなければ、いつものように第2土曜日に神戸市立図書館。金から昭和22年と推定。

21日の彼岸中日の午前訪問したい。昨日史談会があった。

689 寺澤智了 昭和22 / 9 / 10 xx / xx / 11  
先日お邪魔した際には高説拝聴、珍味頂戴、感謝。龍華会は妙顕寺貫首を日付と曜日に対応、八ガキ料  
招いてかどや旅館で10時半頃から開催。当館では真偽不明ながら永徳、宗金から昭和22年と推定。

達等の屏風、支那焼等をお目にかきたい。陳書会は14日(日)、神田氏宅。

690 寺澤智了 昭和23 / 12 / 4 xx / xx / 7  
先日、多田氏邸で神戸龍華会開催。福田、池本と自分、多田の4人のみ参宛先住所、八ガキ料金から昭和  
加。多田氏依頼の「千種伊羅保」を『陶器大辞典』で調べた結果を報告。和23年と推定。

691 寺澤智了 昭和23 / 12 / 13 昭和23 / 12 / 13  
八ガキ拝見。日々の御編輯や頻々たる学会でお忙しい御様子。不日御帰宅の由、多分西須磨の留守宅だろうが、神戸龍華会を多田氏宅で15日過ぎから月末までの間に開く予定なので、僅かの滞在で淡路への旅行もあるだろうが、ぜひ出席して東京方面の御見聞談を願いたい。土日以外でも可。都合のよい日を知らせてほしい。

692 寺澤智了 昭和24 / 4 / 9 欠落  
八ガキ 4月18日(月)、神田氏宅、会費5円。都合がつけば出席の上、東京の話切手部分が切り取られており、  
を聞かせてほしい。文章に欠落あり。宛先住所、  
日付と曜日に対応から昭和24  
年と推定。

693 寺澤智了 昭和25 / 11 / 27 昭和25 / 11 / xx  
八ガキ 陳書会案内。12月3日(日)、神田氏宅、会費30円。  
日付と曜日に対応、八ガキ料  
金から昭和25年と推定。

694 寺澤智了 昭和26 / 3 / 8 昭和26 / 3 / 8  
八ガキ 病気見舞。快方に向かったとのこと、およろこび申し上げます。静かな環境  
で静養を願う。拝顔に支障ない、気候のよい頃に伺いたい。

695 寺澤智了 xx / 4 / 29 xx / xx / 30  
八ガキ 25日に突然の参上の際はめでたき御食卓につかせていただき恐縮、感謝。  
引揚者のアパート、野崎通は満員。県へ問い合わせたところ、西宮の武川  
地方事務所へ尋ねよとのこと。6日まで暇がないので県の知り合いに頼ん  
でおいた。序があれば御令嬢がそこを訪問なさるのも一案かと思つ。  
八ガキ料金が50銭につき、昭和22年か23年。15銭八ガキに  
35銭分の切手を追加で貼つて  
おり、料金改定直後の昭和22  
年4月の可能性が高いか。

696	天祥院	昭和19 / 4 / 28	なし	封書	用箋(「大本山妙心寺大法会局」名入り)2枚。法然院は来月3日は終日都合がよい由、御足勞願いたい。自分なり他なりが伴するつもりだ。中村氏の都合がよければ同道願いたい。	封筒に「速達」「速達便」スタンプあり。小野文庫274『法然院誌/附忍激上人行状記』。
697	典籍学会	昭和23 / xx / xx	料金別納郵便(日付なし)	封書	印刷物1点、連絡用ハガキ1枚。典籍学会の結成と『ビブリア』1発刊の通知、創刊号内容予定目次を掲出する。中村幸彦による書入れあり。先ごろお耳に入れた書誌学がここまでできた。案内状を2、3同封するので御好を勧誘願いたい。	封筒宛名は中村幸彦の筆跡。『ビブリア』創刊号内容予定目次には頼原退蔵、石田幹之助、泉井久之助、神田喜一郎、川瀬一馬、栗田元次、森銃三、田中謙二、富永牧太、木村三四吾の名あり。
698	天理図書館	昭和13 / 7 / xx	昭和13 / 7 / 26	ハガキ	『日本文化』14「江戸文化特集号」の出版案内。	封筒宛名は中村幸彦の筆跡か。目次には藤井乙男、頼原退蔵、野間光辰、中村幸彦、鹿島正二、仙田正雄、杉浦正一郎、富永牧太の名あり。小野文庫333『日本文化』(14、22号)。
699	天理図書館	昭和21 / 1 / xx	欠落	封書	印刷物2点。「教祖六十年祭記念 近世文学未刊本展覧会」(昭和21年1月26日~2月18日)の案内と、同展覧会の目録。	封筒宛名は中村幸彦の筆跡。
700	天理図書館	昭和21 / 6 / 29	欠落	封書	用箋(「天理図書館」名入り)1枚。送金書。「諸国遊里細見類 二十五部代」として「金八百円也」とあり。	
701	東林書房	なし	昭和3 / 12 / 4	ハガキ	龍谷大学教授・禿氏祐祥編『書目集覧』の出版案内。	
702	富永牧太	なし	昭和18 / 5 / 5	ハガキ	中村幸彦を通じてのパンフレット類寄贈に対する礼状。	小野文庫241 母袋未知庵『川柳楠公記』。小野文庫蔵本には献辞あり。重複分を天理図書館
703	富永牧太	昭和18 / 5 / 19	欠落	封書	印刷書面(印刷された定型文の空欄に個別の事項を墨書)1枚。『神戸市医師会沿革史』1冊、『川柳楠公記』1冊の寄贈に対する礼状。	

704	富永牧太	昭和21/10/21	欠落	封書	用箋(「天理図書館」名入り)1枚、印刷物1点。中村幸彦を通じての『翠泊(マ)志』1冊、外3部寄贈に対する礼状。「開館十六周年記念 大和古地誌展覧会目録」(昭和21年10月18・30日)を同封。	へ寄贈したか。 同封の展覧会目録記載の会期より昭和21年と判断。天理大学附属天理図書館蔵『翠箔志』(忍頂寺務旧蔵)。仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書目』では『翠箔志』の項目に取り消し線を施した上で、「原本天理寄贈」と書入れがなされる。
705	富永牧太	昭和22/4/25	欠落	封書	野紙(「天理図書館」名入り、縦罫、B4版、22行)1枚。中村幸彦を通じての「三田村高野」先生の御書翰「寄贈に対する礼状」。	
706	豊仲未迷	大正15/1/1	大正15/1/11	ハガキ	大正15年賀状。	
707	中尾方一	昭和13/5/21	昭和13/5/25	ハガキ	転居通知。	
708	中尾方一	昭和13/10/18	昭和13/10/19	ハガキ	『江戸読本』御通知感謝。先夜、三田村氏を初めて訪ねて「相撲の話」を拜聴した。『江戸読本』も購読を申し込んだ。	絵ハガキ(人形3体の写真、キャプション「中尾巨山蔵」)。
709	永田秀次郎	なし	大正4/1/2	ハガキ	大正4年賀状。	
710	永田秀次郎	大正6/11/14	大正6/11/14	ハガキ	彦根より。御厚遇に感謝。久しぶりに遇った人が多く、大いに面白かった。	絵ハガキ(参謀総長 上原大将、北軍司令官 秋山大将、南軍司令官 大谷大将)。
711	中谷保一	昭和26/2/10	昭和26/2/10	ハガキ	病気見舞。	
712	中谷保一	昭和26/8/9	昭和26/8/9	ハガキ	残暑見舞。病気の様子をうかがう。	
713	中村吉蔵	昭和26/4/6	なし(捺し忘れか)	ハガキ	『延寿清話』の礼状。	
714	中村桂風	昭和26/6/10	昭和26/6/10	ハガキ	有益な記事を『金曜』に掲載、感謝。菅竹浦逝去の由、遺族の住所や命日を知りたい。書籍商勤務時に菅に世話になった。	
715	中村正二郎	昭和14/3/3	昭和14/3/3	ハガキ	今回左記の本を入手した、入用ならば御一報を。『新小竹集』(貞享3年版、	『新小竹集』は忍頂寺文庫・



716 中村幸彦 昭和18 / 3 / 7 昭和18 / 3 / 7 八ガキ

宇治加賀掾道行集）小本1冊、200円。複製された京大本『小竹集』の次に  
位するもの、珍書と思う。  
拝借の書類の撮影終了。返却の訪問の日取りの相談。淡路人『益齋詩稿』  
をその折に持参する。  
関西大学図書館中村幸彦文庫  
蔵本の識語より、昭和18年3  
月から秋にかけて、務より中  
村へ『酔問漫語』『翠箔志』『淡  
路詞』の貸与、『北川蜆売』『倡  
売往来』『月花餘情』の譲渡、  
『風俗七遊談』に関する教示  
等があったことが分かる（関  
西大学図書館 web OPACによ  
る）。

717 中村幸彦 昭和18 / 3 / 17 欠落 封書

巻紙1枚。先日はお邪魔して珍書を貸してもらい感謝。急いで筆写中、今  
しばらく借りたい。扇合の花扇の事、荒木田尚賢の栗田土満宛書簡中に記  
載あり（以下、本文を引用）。『松屋筆記』にもあり。俳書『月の夜』は綿  
屋文庫になし。植田春海の事、今後留意する。  
仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書  
目』には『俳諧月の夜』の記  
載があつて、「二十二年十一月  
岡田譲渡」と書入れあり。中  
村の自宅住所が昭和18年10月  
の転居以前のものであること  
から昭和18年と推定。植田春  
海の件、書簡728（中村幸彦）  
と関連あり。

718 中村幸彦 昭和18 / 4 / 21 昭和18 / 4 / 21 八ガキ

珍書を恵与・恩借感謝。24日に京都を訪ねて下さるとのことだが、岩瀬文  
庫訪問を計画して23日夕刻に出立予定。23日で支障ある場合は、24日  
の予定を変更してほしい。『遊戯三昧』の義、ゆるゆるで結構。26日まで  
に京都へ帰る。  
中村へ蔵書を譲渡。

719 中村幸彦 昭和18/5/14 昭和18/5/14

ハガキ

珍書を恵与感謝。13日所用で天理へ行き、大阪へ回り、本日帰宿して書簡に接したが、本日も京で用事がある。電報を出したが天理へ出かけた後だつたら失礼した。16日は頼原先生在宿につき、光来願う。自分も同伴する。「いせさんぐう」は、その折にいただくことで結構。

720 中村幸彦 昭和18/5/15 昭和18/5/15

ハガキ

頼原先生、16日は午後用件ができたとのこと。

721 中村幸彦 昭和18/5/16 昭和18/5/16

ハガキ

ハガキ・電報拜見。折角の予定が駄目になり残念。14日の天理は失礼した。留守の者よりも書物を預かった由、書面が来た。借りた書物は頼原先生御所望につきそちらへ行っている。しばらくお貸し願いたい。

中村へ蔵書を譲渡。忍頂寺文庫G125<sup>8</sup>『伊勢/参宮道しるべ』、忍頂寺文庫G197<sup>15</sup>『伊勢参宮いたこぶし』など関係あるか。宛名面に「速達」スタンプと、速達料金分の切手の貼付。

722 中村幸彦 昭和18/5/26 昭和18/5/26

ハガキ

『会計私記』その他稀書類30日に返却に行く。先日は書籍類を図書館へ寄贈感謝。

このときに頼原へ貸与された書物の中に忍頂寺文庫H26『淡路詞』が含まれていたと目される。京都大学頼原文庫蔵『淡路詞』識語「昭和十八年五月十七日頼原謙三写 時年八十」「忍頂寺氏蔵本ニヨリ写畢」（『語文』70参照）。関西大学図書館中村幸彦文庫蔵『淡路詞』識語「昭和十八年五月十一日写了 原本 忍頂寺務先生 御所蔵」（関西大学図書館 OPAC にある）。中村が頼原への貸与の仲介役となっていたことが分かる。小野文庫143『会計私記』。関西大学図書館中村幸彦文庫蔵『会計私記』識語「原本忍頂寺静

723 中村幸彦 昭和18/7/31 欠落 封書 巻紙1枚。学期末で図書館急を要する事があつて御無沙汰している。古義堂文庫目録作成のため丹波市に仮宅。拝借の書、写了せず、頼原先生分もあわせて今しばらく貸してほしい。預かった洒落本2種、綿屋文庫には既

724 中村幸彦 昭和18/8/16 昭和18/8/17 八ガキ 俳書は頼原先生の手許にて今しばらく借りたい。の四季をよんだ立派な屏風があり、折を見て調べたい。六双2ツの大和月を推定。

725 中村幸彦 昭和18/8/27 欠落 封書 巻紙1枚。一昨夜は遅くまで失礼。鈴木重胤屏風歌、別紙を同封する。全歌3行万葉仮名。誤読もあるかと思う。川嶋様ともどもの御光来御一覽を待つ。すぎ焼の事、新村出『南蛮更紗』にも『料理談合集』以外の文献は引かれていない。鹿田松雲堂、差し支えなければお伴をお許し願いたい。

726 中村幸彦 昭和18/8/30 昭和18/8/30 八ガキ 鈴木重胤屏風歌の件、解読不明分を判読の報告。翻刻は2行に書いたと思つが、各歌は3行書きであると報告。

727 中村幸彦 昭和18/9/3 昭和18/9/3 八ガキ 9月6日に川嶋氏とともに来訪の件、了解。

村翁所持コレモ転写本也 昭和十八年五月廿六日令写一校了」(関西大学図書館 web OPAC による)。天理図書館の寄贈の話題、書簡703(富永牧太)と関連あり。

中村へ蔵書を譲渡。鈴木重胤屏風歌の話題は書簡725・726(中村幸彦)と関連あり。この点と学期末という話題より、年月を推定。

鈴木重胤屏風歌の話題は書簡723・726(中村幸彦)と関連あり。書簡中にある「別紙」は現存せず。

鈴木重胤屏風歌の話題は書簡723・725(中村幸彦)と関連あり。余白に務書入れ「世田谷区代田一丁目六五二二ノ樹下快淳氏」。樹下が重胤を研究していることによるか。

728	中村幸彦	昭和18 / 10 / 1	昭和18 / 10 / 2	ハガキ	指教いただいた植田春海の事を書いた抜刷を送る。頼原先生が借りた書籍、今しばらく貸してほしいとの伝言。	から昭和18年と推定。
729	中村幸彦	昭和18 / 10 / 9	昭和18 / 10 / 9	ハガキ	転居通知。左京区田中西高原町へ移転。	印鑑(「忍頂寺」「小野」「忍頂寺蔵書章」)の試し捺し多数あり。
730	中村幸彦	昭和18 / 11 / 13	欠落	封書	巻紙1枚。お祝いの品落掌。私にとつては何よりの書、御配慮深謝。生涯愛蔵する。三田村先生からもお祝いを頂戴した。一面識の私などへの心づかい、感佩。よろしく御鳳声願う。	書簡731(中村幸彦)との関連より昭和18年と推定。中村の略年譜『中村幸彦著述集』15、中央公論社、平成元年)によれば、中村は昭和18年11月18日に結婚。関西大学図書館中村幸彦文庫蔵『月花餘情』識語「昭和十八年十月我等結婚記念トテ忍頂寺静村先生ノ被恵妻也 菜色子」(関西大学図書館 web OPAC による)。
731	中村幸彦	昭和18 / 11 / 26	昭和18 / 11 / 26	ハガキ	先日御光来の際は取り込み中で失礼した。本日妙心寺へ行き、三田村先生から種々話を承った。内祝いのお品を送ったので笑納願う。	
732	中村幸彦	昭和18 / 12 / 22	昭和18 / 12 / 22	ハガキ	本日、妙心寺法会局より手当受領。至らぬ手伝いにも関わらず、先生および三田村氏の配慮に感謝する。	
733	中村幸彦	昭和19 / 1 / 15	欠落	封書	巻紙1枚。年頭の挨拶。旧冬に話した写真撮影のことについて、費用の相談。頼原先生にお目にかけて『花裏』の俳書2冊、郵送で返却。その他『すい言葉』数葉は今すこし貸してほしい。	頼原退蔵への「粹言葉」貸与の話題が書簡214・215(頼原退蔵)と関連することから、昭和19年と推定。
734	中村幸彦	なし	昭和19 / 3 / 17	ハガキ	陽明文庫の写し物、腹痛や何やと遅くなり心配をかけたが、一部本日直接三田村先生宛てに送った。腹痛も治り、次々急ぎたい。	本報告書所収「忍頂寺務年譜データベース」の「昭和19 /

735	中村幸彦	昭和19/4/17	昭和19/4/18	ハガキ	一昨日は御紹介・御案内いただき感謝。おかげで仁斎の一資料を得た。石田元季先生遺書、次第に到着、今月末までに皆来るはず。何卒一度来訪を。28日に法然院へ参上するつもりだったが、27日に突然当日に大掃除せよとの通知、何分人手が少ないのでとつとつ失礼した。写本、出来た分だけ下命の通り三田村翁へ届けた。	3/18「項に「中村より書。陽明文庫の件。」とあり。
736	中村幸彦	昭和19/5/30	昭和19/5/30	ハガキ		
737	中村幸彦	昭和19/7/7	昭和19/7/8	ハガキ	三田村鳶魚蔵の細見類目録の送付、感謝。富永館長と相談、わけてもらうことに相定め、館長より直接翁と打ち合わせするようにつかまつた。御配慮、深謝。	三田村鳶魚旧蔵吉原細見の天理図書館への譲渡。書簡738(中村幸彦)と関連あり。
738	中村幸彦	昭和19/8/4	欠落	封書	原稿用紙(「天理図書館研究調査室」名入り)2枚。三田村鳶魚の細見の代価について、館長も決定しがたく、務に見積もってもらいたい。先般の話のように1冊20円見当でよいが、自分としては多少色艶をつけるべきかとも思う。また写本類中に鳶魚の編集および書入れのもの多く、これらは写本とは別にすべきかとも思う。お手数だが細見類1束、写本類1束で計いくらという程度の金額を示してもらえれば幸甚である。	三田村鳶魚旧蔵吉原細見および写本類の天理図書館への譲渡。書簡737(中村幸彦)との関連から、昭和19年と推定。用紙裏に務書入れ(2枚とも)書目の一覧と値段付け、計算の跡あり。
739	中村幸彦	昭和19/11/8	昭和19/11/8	ハガキ	一昨日富永館長帰館、細見類のことを相談したら、ぜひ頂戴したいのとこのだったので、とりあえず御一報申し上げる。	務旧蔵吉原細見の天理図書館への譲渡。書簡741(中村幸彦)と関連あり。
740	中村幸彦	xx/xx/8	昭和19/xx/xx	ハガキ	飛電頂戴したが、既に昼下がりのことで失礼した。次回の時間は都合のよいよう指示してほしい。	
741	中村幸彦	昭和20/2/11	昭和20/2/11	ハガキ	細見類のこと、長々となって申し訳ない。徴用出頭令に接し、取り紛れ返事ができかねていた。館長から返事が行っているものと思うが、失礼を許してほしい。出頭令の方とはかく試験は受けたがまだ何の通知もない。	務旧蔵吉原細見の天理図書館への譲渡。書簡739(中村幸彦)と関連あり。

742 中村幸彦 昭和20/3/2 昭和20/3/2

その後、奥様の様子はいかがか。細見の代金の件、遅くなったが来週7日の水曜に持参する。ただし、空襲警報発令の場合は遅くなる。

宛名面に「速達」スタンプと、速達料金分の切手の貼付。消印やや不鮮明だが、吉原細見譲渡の話題が書簡741（中村幸彦）と関連することから、昭和20年と判断。

743 中村幸彦 昭和20/4/16 XX/XX/XX

ハガキ ゲールツ先生の抜書をご恵送、感謝。20日に御光来の予定の由、実は20日は教祖生誕週間で休館、予定を変更されたい。『色里名所』等のみの儀であれば私より訪ねるので差函を願う。

ハガキ料金5銭。ハガキが5銭なのは昭和20年4月から昭和21年7月まで。務が篠原南町に居住していたのは昭和20年8月まで。教祖生誕週間の話題より、4月と考えられる。以上より、昭和20年4月と推定。

744 中村幸彦 昭和20/xx/13 XX/XX/XX

ハガキ 空襲の見舞状。

ハガキ料金5銭。ハガキが5銭なのは昭和20年4月から昭和21年7月まで。空襲の記事と合わせて、昭和20年と判断。

745 中村幸彦 昭和20/12/19 XX/12/19

ハガキ 川嶋翁からの手紙で近況を伺った。長々の御無音、失礼した。自分は去7日に丹波市へ転居してきた。

中村の略年譜（『中村幸彦著述集』15、中央公論社、平成元年）によれば、丹波市への転居は昭和20年12月。また、ハガキ料金が3銭なのは昭和19年4月から昭和20年4月にかけての時期。これらの点より、

746 中村幸彦 昭和21/10/21 欠落

封書

巻紙1枚、印刷物1点。『翠泊(マミ)志』外2部、落筆、感謝。御下命の製書物寄贈の話題は書簡704(富永牧太)と関連する。また、社長と相談すると持ち帰った。勝手に取りはからったこと、お許しを。返事が来次第、一度参上してその折に製本も持参しようとのびのびになっていたが、まず製本類を送る。「大和古地誌展覧会目録」(昭和21年10月)同封。

昭和20年と判断。

747 中村幸彦 昭和21/10/28 欠落

封書

便箋(罫線なしの和紙に墨書)2枚。玉稿出版の件、積善館より出版したいと連絡あり。許可願いたい。詳細を先方と打ち合わせた上で御意向を伺いたい。題はどうするか、版型・頁数・新規の書き加えをどうするか、箇々の論文の配列をどうするか、など。

748 中村幸彦 なし 昭和21/11/4 ハガキ

出版の許可、感謝。題名および追加の分のは出版社と相談する。製本代のこと、心がけ無用のところ、配慮いただき恐縮。今回に限り、製本の者に渡すことにする。

749 中村幸彦 昭和21/11/15 欠落 封書

便箋3枚。積善館との相談の結果の報告。書名は先生御立案の『近代歌謡考説』とする。内容の配列も御立案に基づき、「歌謡考説」と「静村随筆」とにし、歌謡関係13章を前者、以下を後者とする。希望として、伝記的な洋一「近代歌謡考説」とその

本報告書所収の飯倉洋一「近代歌謡考説」とその周辺」に翻刻あり。天理大学附属天理図書館蔵『翠箔志』(忍頂寺務旧蔵)。仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書目』では『翠箔志』の項目に取り消し線を施した上で、「原本天理寄贈」と書入れがなされる。

750 中村幸彦 昭和22 / 1 / 16 xx / 1 / 17 ハガキ  
頼三樹三郎書簡と紅蘭未亡人書簡の文章は除きたいというが、中村の案としてこれを随筆の中に加えたい。追加分として、珍書の翻刻を頼みたい。原稿作成は預かっている分を写し取って印刷所へ回したく思うので、私の方で作らせてもよい。先生の手許で作ってもらえればこれにこしたことはない。積善館編集長の石田忠弘氏が会いたいといっているので引き合わせたい。内容や配列について積善館で作成した目録を送る。  
15 銭ハガキ。ハガキが15 銭なのは昭和21年7月から昭和22年4月までであることから、昭和22年と判断。本報告書所収の飯倉洋一『近代歌謡考説』とその周辺に翻刻あり。

751 中村幸彦 昭和22 / 4 / 20 欠落 封書  
便箋2枚、名刺1枚。一昨日、積善館の秋本氏が玉稿を返却に来た。出版事情・経営事情から出版は断念、申し訳ない。玉稿は下命通りそのまま私が預かる。  
「株式会社積善館 常務取締役 石田忠弘」の名刺同封。  
出版断念の話題より、昭和22年と推定。本報告書所収の飯倉洋一『近代歌謡考説』とその周辺に翻刻あり。

752 中村幸彦 昭和25 / xx / 27 昭和25 / xx / 27 ハガキ  
古長六郎という弁護士より、譲渡してもらった三田村氏写本類のことで不可解な書状が来た。仲介者であるお立場から一応の様子を伺いたく、都合をききたい。  
宛名面に「速達」スタンプあり。切手部分が切り取られており、文章に欠落あり。小野文庫401『「自筆草稿」』に関連資料所収。「天理図書館」名入り原稿用紙。枚に、「古長弁護士ヨリ申込ノ書目」と題して



753 中村幸彦 昭和26/8/20 昭和26/8/20 ハガキ

先日は病臥中に失礼した。御下命の「寿司」の原稿まつまりかね次回までお待ち願いたい。「紀伊殿の閨秀歌人達」という論文を送る。

書名を列挙、などの記号を付す。一枚目に務自筆で、印十七冊 昭和二十五年十一月二十九日送付」と記し、同日の郵便局スタンプのおされた三田村宛「特殊郵便物受領証」を挟み込む。これにより、昭和25年と推定。

754 中村幸彦 昭和26/8/28 昭和26/8/29 封書

原稿用紙（「天理図書館」名入りA5版200字詰）1枚、B4版400字詰原稿用紙2枚。拙稿へ早速の配慮、感謝。「すし」の事も、できれば御覧を願いたい。偕楽園陶器のこと、「南紀徳川史」に2条あったので同封してお目にかける。

755 中村幸彦 昭和26/9/2 昭和26/9/3 ハガキ

『金曜』最近号惠送感謝。伊勢音頭の研究拝読。一昨日はお世話になった。拙稿について西村様から本日書面をいただき恐縮。

756 中村幸彦 XX/2/22 欠落 封書

XX/2/22付…便箋2枚、メモ1枚。昨日は長々と失礼。書籍拝見および御馳走にあずかり、感謝。『下職原』『遠目鏡跡追』などがまだちらつく。今後ともよろしく願う。手帳のページを破り取って記したメモ1葉を同封する。「新内 歌澤 清本 常盤津 神田祭 東山 山姥 火、金」、用紙には11月5日（金）～11日（木）の予定表が印刷されている。昭18/3/26付…ハガキ。下命の『吉原酒呑童子』本日送付した。わざわざ御来訪までもなく、御入用の本はこの後も御下命願う。明日27日山村氏より先生宅訪問の誘いを受けたが雑事により失礼する。

忍頂寺家蔵『静村文庫書目』

757	中村幸彦	xx / 5 / 21	xx / 5 / 21	ハガキ
758	中村幸彦	xx / xx / 22	xx / xx / 22	ハガキ
759	中村幸彦	xx / xx / 1	xx / xx / 1	ハガキ
760	中村幸彦	xx / 5 / 2	xx / 5 / 2	ハガキ

御書面拝見、丹波市へ転居後は毎日登館、いつでも光来あれ。ぜひ泊りがけで来てほしい。

27日に川嶋氏と来館、待っている。川嶋氏下命の素麺のことについての調べができていない。詫びを伝えてほしい。

積善館より打ち合わせが来た。写真は多く入れるようにと先方が希望。玉稿類、既に先般の指示通りに順序並び替えを終えた。

『針の供養』のこと、お知らせ感謝。この書は京大研究室に1本を蔵し、先年、滑稽文学全集の翻刻に校合したのでこれでこのたびは済ますことにした。銅脈のことも何とかでつちあげた。

の『朱雀遠目鏡跡追下』の欄には「昭和二十年 中村贈呈」と書入れがあり、後に中村幸彦へ寄贈されたことが分かる。忍頂寺務「朱雀遠目鏡跡追」（『陳書』5、昭和10年1月）。宛先住所の表記、務使用のスタンプ印の文面と一致（例、小野文庫418『日記』裏表紙見返し）。内容より中村と交流を持ち始めた初期と目される。中村が丹波市へ転居した後なので、昭和21年以降。

ハガキ料金15銭。ハガキが15銭なのは昭和21年7月から昭和22年4月まで。本報告書所収の飯倉洋一『近代歌謡考説』とその周辺に翻刻あり。

仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書目』の『針の供養』の欄には「二十五年 天理」と書入れあり。ハガキ料金50銭。ハガキが50銭なのは昭和22年4月か

761	中村幸彦	xx / 10 / 9	欠落	封書	<p>裁断した和紙3枚。一昨夜の宿り、風情もなく失礼した。写真12枚出来上がったので、送付する。図版として所収の順序番号を考えておいてほしい。寄託の件は本館ではまだ一度もなく、様子不詳。京都図書館の寄託願いの様式を示す。</p>	<p>昭和23年7月まで。</p>
762	半井桃水	大正13 / 12 / 14	大正13 / 12 / 15	ハガキ	『延寿清話』の礼状。	
763	半井桃水	大正15 / 1 / xx	大正15 / 1 / 2	ハガキ	大正15年賀状。	
764	成富武夫	なし	欠落	ハガキ	<p>誠一君の帰省中はしばしばお邪魔した。突然社命で本月5日当地に来了。出発の挨拶ができず失礼した。暑気も甚だしくなく、お蔭で元気に暮らしている。</p>	<p>絵ハガキ (BATU PAHAT JOHORE)。「新嘉坡にて」とあり、シンガポールから。</p>
765	南木芳太郎	大正14 / 1 / 1	大正14 / 1 / 1	ハガキ	大正14年賀状。	
766	南木芳太郎	大正14 / 5 / 22	大正14 / 5 / 22	ハガキ	『延寿清話』の礼状。御紹介の『清元研究』も申し込みたいと希望。	
767	南木芳太郎	なし	大正14 / 7 / 10	ハガキ	『清元研究』創刊号御送付にあずかり感謝。実は過日紹介された折に早速直接半年分申し込んだので、今後は御配慮は無用。斯界の研究雑誌が神戸より生まれるなどとは大江戸更に顔色なし。「梅の花」註釈面白く拝見。	
768	南木芳太郎	大正14 / 7 / 14	大正14 / 7 / 14	ハガキ	<p>いつも何かと寄贈、感謝。河竹氏の『狂言作者心得書』は幕内研究として洵に好資料、愛蔵してほしい。順三逝つて十余年、その温かな佛に接し、今さら懐かしみを覚える。順三没後大阪に良師匠がいないのは残念。</p>	
769	南木芳太郎	大正15 / 1 / 1	大正15 / 1 / 1	ハガキ	大正15年賀状。	<p>絵ハガキ (国性爺合戦)。</p>
770	南木芳太郎	昭和1 / 12 / xx	昭和2 / 1 / 2	封書	印刷物1点。夕霧遺物展覧会(昭和2年1月6日、於・吉田屋)の案内(兼・入場券)。	<p>大阪新町九軒・吉田屋の封筒宛名面に「南木芳太郎」の朱印。</p>
771	南木芳太郎	なし	昭和2 / 2 / 17	封書	印刷物1点。内藤鳴雪一周忌の追懐会(昭和2年2月20日、於・高津神社)の案内。	
772	南木芳太郎	昭和2 / 3 / 9	欠落	封書	<p>用箋(「春元商業株式会社」名入り)3枚。多用で返事が遅れ申し訳ない。鳴雪忌は非常に盛会だった。来宅の件、いつでも差し支えない。近頃思わぬ判断。</p>	<p>鳴雪忌の話題から昭和2年と判断。</p>

773 南木芳太郎 昭和3/1/1 欠落 ハガキ

ぬ用事が突発的に起こっており、不在でも不都合かと思う。可能な日を選んで通知したい。夕霧の行年の22歳説は近松『夕霧阿波鳴渡』による。この件、本年1月9日発行『サンデー毎日』にも書いた。示教願いたい。

昭和3年賀状。

絵ハガキ（新板竹田大からくり  
龍宮玉取之図切組とつらつら）。

774 南木芳太郎 昭和3/5/20 なし（封筒欠） 封書

B4版400字詰原稿用紙3枚。『落葉集』の件。竹山人からも再々手紙あり、藤田徳太郎の不徳を激しく批判していた。自分は何か行き違いでもあったのかと、冷静に穏便な返答をしたが、実際は、藤田氏の不徳はさておき高野氏のやりかたも面白くない。原本所蔵者が分かっているから明らかにせず、献本もないのは藤田氏以上の横着と、内心少なからず憤慨している。藤田氏からの申し訳の手紙には、高野氏に事情を話したので同氏から挨拶があるとおったが、未だに手紙はない。呆れていた矢先に貴下からの手紙があり、高野氏の本意もほぼ了解した。自分の本心としては、何人の手によってであろうと完本が翻刻されることは本望なので、誠意の一端を示してくれば悪感情は氷解する。そのあたりはしかるべく取りはからい願いたい。えびや節について示教を願いたい。『古本屋』所載の「ふるほにや、にさつかへや物語」面白く読んだ。

『古本屋』5、昭和3年5月  
の話題から、昭和3年と判断

775 南木芳太郎 昭和3/10/xx 欠落 封書

印刷物1点。河竹能進・勝諺蔵父子の追慕会（昭和3年10月27日、於・天王寺茶臼山、雲水寺）の案内。

絵ハガキ（絵本玉かつら）。

776 南木芳太郎 昭和4/1/1 昭和4/1/1 八ガキ

昭和4年賀状。

巻紙1枚。『清元研究』惠贈、感謝。予て連載時より、いつか纏めれば斯道愛好者の参考便宜に資すると希望していた。再見の喜び、深く感謝。関西における江戸学研究者の氣勢を示すべく、一層の御健在を祈る。

778 南木芳太郎 昭和5/12/23 欠落 封書

便箋1枚、印刷物1点。玉稿を給わり、お蔭で創刊号を飾ることができた。しかし、20日発行の予定が送れ、25日に発行すべく目下印刷中。出来次第『上方』創刊号の案内を同封。『上方』創刊号の話題から昭和

送付する。湯朝竹山人の現住所を知っていたら、雑誌を送りたいので知らせてほしい。『上方』創刊号のチラシを同封。

5年12月と推定。本報告書所収「忍頂寺務年譜データベース」の「昭和05/12/25」項に「南

木芳太郎に湯朝竹山人宿所不明の旨を伝える」とあり。

『上方』2の原稿の話題。

779 南木芳太郎 昭和6/1/8 昭和6/1/8 ハガキ

13氏の氏名は次の通り。飯島保作氏、渥美清太郎氏、大谷正信氏、渋谷義春氏、嘉納純氏、高岸豊太郎氏、坂東襄助氏、廣田金松氏、若月保治氏、石川巖氏、大曲省三氏、石橋五郎氏、伊藤長蔵氏。2月原稿の切は12日とする。「東山絵巻その二」を頂戴できれば結構。

780 南木芳太郎 昭和6/1/15 昭和6/1/15 ハガキ

原稿拝受、感謝。石川巖氏のハガキも大いに参考になり、嬉しく拝見した。えびや節正本到着、洵に珍しい。暫時拝借、写真複製製の上で返却するので猶予を願う。

781 南木芳太郎 昭和6/6/15 昭和6/6/15 ハガキ

昭和7年賀状。印刷物1点。『上方』100号の原稿依頼（百人随筆集）。

782 南木芳太郎 昭和7/1/1 昭和7/1/4 ハガキ

クリスマスカード。お手紙とても興味深く、大変面白く味わった。ここハ

783 南木芳太郎 昭和14/4/1 欠落 封書

ードは、学校はとても厳しく、常に忙しくしている。1929年に帰ること

を望んでいる。もし時間があれば手紙を書いてほしい。

SCHOOL OF BUSINESS ADMINISTRATION,  
HARVARD UNIVERSITY  
CAMBRIDGE, MASS.)。消印

「BOSTON, MASS.」。本文は  
英文で綴られる。書簡<sup>1349</sup>(わ

たる)と筆跡が似通う。消印

784 E. W. Nishio なし 昭和2/xx/xx 封書

785 西野 大正 12 / 7 / 7  
XX / XX / 7  
ハガキ 会社設立の祝い状。

786 西野 なし  
XX / XX / 5  
ハガキ 酷暑見舞。

787 西村 實一 昭和 21 / 11 / 22  
欠落 封書 便箋1枚。5日から同封のような会を催している。君に12月中頃に何か話をしてもえればと思うが、気が向くか。一度御参遊を。その節、詳しい打ち合わせをしたい。書籍が助かって何より。

同封物は現存せず。

788 西村 實一 昭和 21 / 12 / 29  
XX / XX / XX  
ハガキ 先日御来訪下さったのに講演会があつてゆるゆるとお話もできず残念。県の緑地協会が創立、文芸方面の専門委員に君を推薦した。新春になつて暇ができたらまた御参遊を。菅竹浦著の『狂歌史』を古本屋で見つけたら御一報を。

789 西村 實一 昭和 22 / 1 / 14  
昭和 22 / 1 / 14  
ハガキ 本年は一度君に講演を頼みたい。次に、本日松井博士来訪、ちよつと書物のごことで君の意見を承りたい。詳しい話は自分が聞いているので、元ブラの帰りにでもちよつと立ち寄つてほしい。末尾に松井佳一より自筆のメッセージ、今度の震災でひどくやられたとのこと。

の差出地も共通している。「に  
しおわたる」なる同一人か。  
務が昭和20〜23年にその住ま  
いに身を寄せた、西尾類蔵の  
縁者である可能性があるか。

絵ハガキ（宇治川電気株式会  
社発行）。宛名「今井・岡田・  
忍頂寺様」、今井および岡田に  
合点が付される。表面に「  
〜〜」とあり。

絵ハガキ（日本アルプス）御  
花畑より槍ヶ岳を望む）。宛名  
「川崎・今井・忍頂寺・岡田  
各位」。

790 西村貫一 昭和22/7/xx 欠落

封書

印刷物3点。報告。「関西文化協会」を「全日本文化協会」と改める。

「全日本文化協会会員規約」。「全日本文化協会会員名簿(1947年夏現在)」。

791 西村貫一 昭和23/11/6 欠落

封書

便箋1枚、印刷物2点。去る金曜日、岡田利兵衛氏宅で第55回金曜会に出席。長田君は欠席。昨日の第36回で長田君に会い、君のハガキを見せて古活字の話をしたところ、この活字は慶長時代の物と比べるとずっと新しく、気が進まぬという意見。何だったら自分から洪沢君にでも話してみようか。返事を下さるときは見本を和紙でも1、2字届けてほしい。それとも自分が洪沢君に紹介状を書くか。長田君は見込みはない。そちらの都合はどうか、達者か。金曜会は相変わらず。県が文化章を出す相談を受けたので君を推薦したが駄目だった。へちま会員から富田碎花君と池長孟君が出た。君は思い込んだ仕事をしていてうらやましい。便箋裏面に研究会の予定らしき情報。「全日本文化協会会員規約」と「全日本文化協会会員名簿(1947年夏現在)」を同封。

「長田君」は長田富作か。「全日本文化協会会員名簿」には、元大阪府立図書館長で専門は書誌学とあり。古活字というのは、小野文庫<sup>419</sup>『手帳(昭和二十二年度)』に、「正保三年木活也」の記載とともに捺されている「寺」字の活字と関連があるか(本報告書所収の青田寿美「忍頂寺文庫・小野文庫所蔵資料押捺蔵書印一覧」参照)。西村貫一「思い出すまゝ」(『金曜』3・10、昭和26年11月)に「兵庫県で文化賞を出すと云ふ事になったのは二年前の事だったと思ふ。相談を受けたので、僕は隠れたと云ふか、忘れられた人達をその度推薦して来た。その一人に忍頂寺君はいつも這入っていた(2ページ)とあり。

792 西村貫一 昭和25/12/18 欠落

封書

印刷物1点。へちま倶楽部・金曜会の忘年会の案内。

802	801		800	799	798	797	796	795	794	793
西山吟平	西山吟平		西山吟平	西村貫一	西村貫一	西村貫一	西村貫一	西村貫一	西村貫一	西村貫一
なし	昭和5/6/17		昭和3/2/1	昭和26/8/29	なし	なし	昭和26/4/13	なし	なし	昭和26/2/4
昭和10/1/1	昭和5/6/17		昭和3/2/1	昭和26/8/29	昭和26/7/3	昭和26/6/xx	昭和26/xx/xx	昭和26/2/13	昭和26/2/12	昭和26/2/6
ハガキ	ハガキ		封書	ハガキ	封書	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ
昭和10年賀状。	『学藝往来』送付感謝、面白く拝見した。		だ。湯朝氏にもよろしく。	新顔が有効に働いてくれている。 B4版五線譜1枚。過日は失礼した。その後、東京の知人と伊豆方面へ行き、2、3日前に帰宅。伊豆から手紙を出したく、名刺までもらいながら失礼してしまつた。今後とも斯道のために力添えを頼みたい。長いこと会いたく思っていたので嬉しかった。夕霧忌に吉田屋で会えたのは良い記念だ。	病気の由、長いこと会えておらず、一度顔を見たい。良くなつたら出てきてほしい。金曜会を御地で寺でも借りてやろうか。金曜の空気、面白い。	長田富作(元大阪府立図書館長)著『註解 南坊録』(金曜茶道研究部発行)の発行と頒布の案内。宛名面に手書きのメッセージ、くらぶの会誌に載せる写真を来る8日(金)に撮るのでぜひ出席してほしい。 便箋1枚。へちまも6年を迎え、金曜も200回、めでたい。長田・忍ちゃん両君が出席できないのが残念だった。その後いかがか。三上雅清君死去。立派な覚悟をして心静かに死なれた、感心している。	長いものを書いてほしい。	講演会案内。佐野博(元共産党主領)、2月16日(金)、於・へちまクラブ。風流艶笑会案内。桂米団治・桂米朝、2月17日(土)、於・へちまクラブ。病気はいかがか。本日あなたの懸物をお使いの人に手渡した。金曜も本年になつて初めて黒字になつた、喜んでほしい。26号の後記に君の事を書いておいたが、見てくれたか。僕の2つの話はどうだったか。あなたもぜひ	風邪を引いていないかと案じている。いよいよ新年号が出る。安心してほしい。先日のお懸物をほしい人がある。代価を通知してほしい。本人に通知して返事をする。	



803	日本近世文学会	昭和26/10/10	昭和26/10/10	封書	印刷物2点。日本近世文学会発足のお知らせ(附・入会申込書)および「日本近世文学会会則」。	
804	忍頂寺務 (本人宛)	大正11/12/6	大正11/12/6	ハガキ	12月5日に神戸を出発、6日11時過ぎに横浜着予定の旅程をタイムテープ ルで記録。	絵ハガキ(Golden Gate San Francisco)。
805	忍頂寺務 (本人宛)	なし	大正12/4/4	ハガキ	本文なし。	絵ハガキ(大和)談山神社 廟拝所。
806	忍頂寺務 (本人宛)	なし	大正12/4/4	ハガキ	本文なし。	絵ハガキ(大和)談山神社。
807	忍頂寺務 (本人宛)	なし	大正12/4/4	ハガキ	本文なし。	絵ハガキ(大和)談山神社 (印刷不鮮明、「頭」か)。
808	忍頂寺務 (本人宛)	なし	大正12/12/25	ハガキ	12月23日に神戸を出発、24日午前に横浜に着くまでの旅程をタイムテープ ルで記録。「旅券取調厳シク入港二時ヲ過グ」とあり。	絵ハガキ(Yosemite Valley)。
809	忍頂寺務 (本人宛)	なし	昭和14/11/14	ハガキ	11月14日、熱海から「桜」に乗車する。「空を見ぬ一日はさびし梅花の花」。	絵ハガキ(熱海露木(旅館))。
810	忍頂寺務 (本人宛)	なし	xx/10/22	ハガキ	偕楽園鴛鴦香爐に関する説明。	絵ハガキ(偕楽園鴛鴦香爐)。 絵ハガキの仕様および本文の 記し方が書簡810〜813(忍頂寺 務)で共通する。
811	忍頂寺務 (本人宛)	なし	xx/xx/xx	ハガキ	鉄良の書に関する説明。大正2年秋舞子に滞在中に揮毫。	絵ハガキ(鉄良の書の掛軸、忍 頂寺先生属「鉄良」と署名)。 絵ハガキの仕様および本文の 記し方が書簡810〜813(忍頂寺 務)で共通する。
812	忍頂寺務 (本人宛)	なし	xx/xx/xx	ハガキ	句仏上人の画に関する説明。本年1月1日の『大阪朝日新聞』に所載との こと。狂歌を付す。	絵ハガキ(句仏上人の画)。絵 ハガキの仕様および本文の記

813	忍頂寺務 (本人宛)	なし	日付部分印字欠 け	ハガキ	赤膚山木白三番叟置物に関する説明。	し方が書簡810～813(忍頂寺務)で共通する。
814	忍頂寺務 (本人宛)	なし	xx / 11 / 9	ハガキ	11月9日午後3時長崎着、西川旅館に宿泊。正午頃より降雨、困り入る。	絵ハガキ(赤膚山(あかはだやま)木白三番叟置物)。絵ハガキの仕様および本文の記し方が書簡810～813(忍頂寺務)で共通する。
815	野崎左文 (本人宛)	なし	大正14 / 9 / 9	ハガキ	柿沼君の紹介で『延寿清話』6・7恵贈、感謝。なお、「平秩東作」の「平秩」はやはり「へづつ」と訓じた方がよい。狂歌師戯号の出所について調べたものを参考までにお送りする。	絵ハガキ(鮎の絵柄)。宛先住所より大正11年頃か。
816	野崎左文	大正14 / 9 / 28	大正14 / 9 / 28	ハガキ	拙稿「狂号のいろく」は古い記録から咄嗟の間に抜書きしたもので、文をなさない所もあるが、貴誌の埋め草として役に立つのなら登載して差し支えない。	
817	野崎左文	昭和3 / 1 / 1	昭和3 / 1 / 4	ハガキ	昭和3年賀状。	
818	野田雄宏	昭和10 / 3 / 9	昭和10 / 3 / 9	ハガキ	奉天から近況報告。暖かくなって川の氷も解け、柳がなびいている。	絵ハガキ(ラマ教の霊地熱河の印象)。
819	野田雄宏	昭和10 / 9 / 18	昭和10 / 9 / 18	ハガキ	過日は忙しい中を失礼した。日光の温泉へ来た。素朴な風趣である。	絵ハガキ(鬼怒川温泉)くろがね橋附近の絶勝)。
820	野田雄宏	昭和15 / 9 / 17	昭和15 / 9 / 18	ハガキ	鳴子温泉より。北海の旅を終え、仙台の旧友を訪ね、兩名を携えて宮城・秋田の県境へ。	絵ハガキ(鳴子峡)。
821	野田雄宏	昭和15 / 10 / 16	昭和15 / 10 / 16	ハガキ	天童温泉より。旅行先からの近況報告。	絵ハガキ(史蹟名勝地山寺(山形県)奥之院)。
822	野田雄宏	昭和18 / 3 / 8	昭和18 / 3 / 8	ハガキ	一昨日離京、雪の大沼公園を車窓に眺め、駒ヶ岳の雄峰を仰ぐ。内地を離	絵ハガキ(北海道大沼公園)。

823 野田雄宏 昭和23/12/28

欠落

封書

れた長閑な気持ち。  
半紙1枚。ハガキ落筆。年末に帰省とのこと。明春は久々でゆっくり会いたい。

824 野田雄宏 なし

昭和25/7/12  
(東京中央局)

ハガキ

梅雨が明け本格的な暑さがやってきた。朝鮮戦争の話題。

昭和25/7/13

(神戸中央局)

825 野田雄宏 xx/12/18

xx/xx/xx

ハガキ

燕京より。過日来北満の旅を終え、万里の長城へ行った。

絵ハガキ(北京北海)。

826 野間光辰 なし

昭和13/7/10

ハガキ

阪神間大水害の見舞状。

小野文庫<sup>360</sup>『山茶評判/吉原歌仙』(務写)、小野文庫<sup>364</sup>『吉原よぶこ鳥』色里名所独案内

827 野間光辰 なし

昭和13/9/13

ハガキ

8月中に返却に行くべきところ新しい獲物も持参したいと思い延び延びになつてしまった。ついでには返却かたがた『茶屋雀』『五大力菩薩手鑑』等を拝見に行きたいので都合を知らせてほしい。最近、『難波証』の返答書

原よぶこ鳥』色里名所独案内』(務写)、忍頂寺文庫H26『淡路詞』、小野文庫<sup>359</sup>『京大坂茶屋雀/諸分調方記(色茶屋頻早顔)』(務写)。天理大学附属天理図書館蔵『五大力菩薩手鑑』

やその先行書の秘伝書を見た。『吉原人たばね』『吉原用文章』も近々入手のはず。

(忍頂寺務旧蔵、仙台忍頂寺家蔵、静村文庫書目)の該書の欄には、昭和二十四年野間寄贈と書入れあり。『五大力菩薩手鑑』は、忍頂寺務「花街本に就て」(『書物往来』12、大正14年9月)に紹介あり。

828 野間光辰

昭和15/5/1

昭和15/5/1

ハガキ

26日付の貴翰を昨夜拝見。27日より上洛、28日藤井先生のお伴で石山へ行

9月)に紹介あり。

836	835	834	833	832	831	830	829
服部善四郎	—	—	—	野間光辰	野間光辰	野間光辰	野間光辰
大正13/12/21	xx/9/13	大正12/1/15	大正12/1/14	なし	xx/3/8	昭和18/1/25	昭和17/5/25
大正13/12/21	xx/9/13	大正12/1/xx	大正12/1/14	xx/10/10	欠落	昭和18/1/25	昭和17/5/xx
封書	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	封書	ハガキ	ハガキ
便箋3枚、年次不明11月28日付務宛江本正男書簡（便箋8枚、封筒欠）同封。我が祖嵐雪に関する質問への回答。嵐雪の伝記を述べる（越後でなく淡路の出身である等）。淡路へ帰省の折には来遊もらえれば系図を見せた	芦原温泉より。当地温泉は相変わらず満員盛況。每晚南蛮式の盆踊りで賑やか。今夜帰宅の予定。	今日一寸三越を調べてみたが皆孔雀のお尻のような髪なので直ぐに帰った。三木の加藤に会った。明日は火曜日の食堂会があるので来いと云ったが、東京の食べ物はごめんと断っておいた。	宿がなくて閉口。昨日魚河岸で立ち食い、なかなかうまい。ただ、酒はま	もらった手紙を妻が紛失、申し訳ないが、用向きを再度知らせてほしい。	便箋1枚。拙稿「評判記年表」について有益な御教示、感謝。『吉原六方』を半紙本としたのは全く思い誤りで、京大に仙果写本があつてその他のものは未見だったので、ありがたく思う。今後とも御教示願いたい。	『陳書』恵投、感謝。玉稿、三樹三郎の書簡は面白く拝読。陳書会のことや洒落本のこと、高話承りたい。	初めて承知した。『吉原雀』只今東京より借り出して写本中。
		絵ハガキ（皇居一重橋）。	絵ハガキ（THE TOKYO STATION HOTEL）。		野間光辰「初期遊女評判記年表」（『日本文化』14、昭和13年7月）か。小野文庫 <sup>333</sup> 『日本文化』（14、22号）。差出年は昭和14年以降か。		

842	英十三	大正15 / 4 / 7	大正15 / 4 / 7	封書
841	英十三	大正15 / 1 / 30	大正15 / 1 / 30	封書
840	英十三	大正14 / 10 / 29	大正14 / 10 / 30	封書
839	英十三	大正14 / 3 / 10	大正14 / 3 / 10	封書
838	英十三	大正13 / 11 / 30	大正13 / 11 / 30	ハガキ
837	英十三(田中治之助)	大正13 / 11 / 15	大正13 / 11 / 16	ハガキ

い。江本正男書簡には、服部嵐雪碑の碑文の写しと『淡路国名所図会』の出版情報が記される。

『延寿清話』を毎号寄贈感謝。予て湯朝君から話を聞いている。旧拙著『歌沢茶話』を別便で送る。大正10年の刊行だが7、8年以前に執筆のものが大部分である。  
・小野文庫には所蔵されず。

『延寿清話』5の礼状。

大正14 / 3 / 10付…便箋2枚。『延寿清話』6落掌、感謝。『うた澤』本月号の記事、興味深く拝見した。雑誌『郊外』師走号・1月号は御寄贈しただろうか、もしお手元になれば送るので知らせてほしい。「小唄銀ピラ考」なる駄文を郊外社へ寄稿、多分4月号に掲載。出来したら送る。大正14年2月。

大正14 / 9 / 4付…ハガキ。別便で約束の原稿を差し出す。不適當と思つたら遠慮なく返却してくれてよい。採用の場合は掲載の『延寿清話』を3、4冊ほど実費で分けてほしい。

便箋2枚。『延寿清話』を恵送下さる由、感謝。到着したら岩井町師匠と岡野知十に送りたい。近日上京の由、会つのを楽しみにしている。日時の都合を知らせてほしい。

便箋3枚。出張で返事が遅くなった。湯朝君より15、6日に上京と聞いた。17日(日)は在宅につき、電話をくれるよう同君に依頼した。高野斑山博士も一緒に会食すべく、引き止めて電話を待っていた。その後、湯朝君からハガキが来て宿泊の場所を知って電話したが、今朝退京と聞き、遺憾であり残念である。来月、歌舞伎「かさね」鑑賞を兼ねて上京してはいいか。差支えがあれば、3月20日(土)と決めておきたい。高野斑山氏・岡野知十氏・岩井町の菊之助師匠などに紹介したい。自分もよく関西へ出張するが、最近旅行も怠げがちである。機会があればぜひお会いしたい。

大正15 / 4 / 7付…便箋2枚。風邪の由、容体はいかがか。会つた際に

843 英十三 大正15/9/17 大正15/9/17 (淀橋局)、大正15/9/19 (三宮局)

は、岡野氏親子・清元菊之助氏およびちょうど在京中の西山吟平氏と引き合わせる手筈だったが、残念。西山君、菊之助君の演奏などにぎやかである。『郊外』を別便で発送する。  
大正15/3/31付ハガキ。東京での面会の日時の相談、4月6日を提案。西山吟平、岡野かほる等にも引き合わせる。  
『延寿清話』10拝受、感謝。御上京の折にはお目にかかりたい。

844 英十三 昭和2/3/24 昭和2/3/xx 封書

A5版200字詰原稿用紙5枚。『清元研究』誌上で力作を拝見している。本月号「夕ぎり」を拝見して思いついたことを記して差し出す(以下、200字詰原稿用紙4枚分の考証)。  
忍頂寺務『夕ぎり』註釈(『清元研究』20、昭和2年2月)の話題より、昭和2年と推定。

845 英十三 昭和2/8/13 昭和2/8/13 ハガキ

ハガキ感謝。北海道から両3日前に帰京、たまった仕事に追われ返事が遅くなった。『郊外』8月号から3号にわたる執筆を引き受け、弱っている。これがまとまったら一中節の評釈は打ち止めにしようかとも思っている。

846 英十三 昭和8/3/1 昭和8/3/1 封書

便箋1枚。ハガキ感謝。親切お礼申し上げます。『都羽二重懐中扇』は自分も先年1本を得た。なかなかの珍書である。いわゆる『古板都羽二重拍子扇』より少々古く、享保中葉の刊行と思う。面白いことには初代河東半太夫分離後の初めての作と言われる「松の内」がこの書の冒頭一中節の語り物として見えている。折角の御厚志ながら右様の次第、一中の貴重文献として御手許にお置き願いたく思う。『酒中花』はもはや大分続いたので今後はどうしようかと考えている。  
忍頂寺文庫G5『都羽二重懐中扇』。忍頂寺務「一中節の古板本に就て」(『書物展望』13、昭和18年3月)に本書の紹介あり。務が英へ譲渡を申し出たか。

847 英十三 昭和9/3/2 昭和9/3/2 封書

便箋1枚。先夜は失礼した、酩酊が過ぎたことをお詫びする。珍しい摺物を恵送、感謝。長く珍藏する。『春色八大伝』摺物合封をお受け取り願いたい。事前に連絡をもらえれば待っている。今度は自宅でゆっくり話を伺  
『春色八大伝』は、小野文庫135『(英十三関係資料)』の中の1点に含まれる(「甲戌新曲

848 英十三 昭和9/4/1 昭和9/4/2 封書

便箋1枚。昨日は丁寧な御挨拶、感謝。留守にしている申し訳ない。自分も一度出かけたかと思いついて忙しくて失礼している。工場の仕事なので日曜以外は祭日も出社の次第。新居の住み心地はいいか。恰好の家がなくて申し訳ない。

849 英十三 昭和11/4/15 昭和11/4/16 封書

便箋1枚。恵送の『陳書』落筆、貴稿「一中節稀観本」拝見。玉稿によって、この2種の稀観本は永く世に残ることとなり、うれしい。最近、永年経営の会社が他社と合併し、専務として整理をしているため忙しくて閉口。お預かりの古細見もそのままになっていて申し訳ない。

850 英十三 昭和13/1/1 昭和13/1/1 八ガキ

昭和13年賀状。お歳暮の礼を書き添える。

851 英十三 昭和13/8/13 昭和13/8/13 封書

昭和13/8/13付・便箋4枚。しばらく東北を旅行していた。家族の鎌倉移転で鎌倉から通勤している。水害お見舞い申し上げる。遅くなって申し訳ない。永々恩借の一中の本について大いに研究させてもらったが、論文を書く暇がない。ただ拝見しただけだが、独断で言うと、菅野宇太夫、都序遊とも古くからある名で寛政の創作ではないと思う。以下、菅野、序遊などについての考証。一中の文献について、せめて目録を作るだけでも何かの参考になると思う。本はひとまず別便にて返却する。

xx/6/8付・便箋2枚。御送付の本3冊今朝落手。正徳4年の曆浄瑠璃の作者「菅野」とあるのはなかなか興味ある問題である。以下、5代目一中の伝記や菅野、序遊、山彦新次郎などについての考証。

便箋4枚。先日は折角の御上京にもかかわらず何の風情もなく失礼した。『陳書』10、落筆。「正徳四年一中節正本」並びに「音曲びんがてう」面白く拝見。以下、一中節についての考証。先日、文政刊行の『俳諧鼠の道行』という本を辰巳屋から買った。巻頭に其角の「鼠の道行」という浄瑠璃

忍頂寺文庫G22「一中節正本集其二」中の「甲午年玉福貴曆」(菅野太夫・作)が、このときの貸与資料の中が含まれる。この書簡の内容は、忍頂寺務「正徳四年一中節正本」(『陳書』10、昭和14年4月)

忍頂寺務「正徳四年一中節正本」(『陳書』10、昭和14年4月)と記されている。

論考の執筆年次は、「(昭十三、十二)」と記されている。

本

本

本

本

本

854 英十三

昭和15 / 1 / 1  
昭和23 / 9 / 27

昭和15 / 1 / 1

ハガキ  
封書

昭和15年賀状。  
便箋2枚。ハガキ拝見。久しぶりの御上京、懐かしい。10月1日(金)に御来訪はいいかが。夕食を差し上げたい。以下、交通案内と連絡先電話番号を記す。  
本をまとめて買い入れたのも何かの因縁だ。  
と推定。『よすがの緒(一中譜史)』は忍頂寺文庫・小野文庫に所蔵されず。

855 英十三

昭和24 / 8 / 3

昭和24 / 8 / 4

ハガキ

ハガキ昨夕拝見。1週間かかっているには驚いた、まだ駄目であることだ。手鞠唄の原稿は記録としては無雑でも自分の耳だけは誤りないと思ひ、送った次第。増田様は上京の由、まだお見えにならないので、もう帰ったのではないが、残念。御上京の折にはお目にかかりたい。一中や河東などに入っている古謡について、先年町田君からの依頼で、稽古の度に來てもらって五線譜にとつたことがある。しかし、實際どのようなふうなうたわっていたかはなかなか分からない。

856 英十三

昭和25 / 1 / 28  
(便箋)、昭和25 / 1 / 29 (封筒)

欠落

封書

用箋(「北莊産業株式会社」名入り)3枚。今月の『金曜』に拙稿を2編も掲載して下さり、恐縮。新年号の『文芸春秋』で、久保田万太郎が「四畳半」という随筆の中で私が昨年出した『小唄百千鳥』跋文を引いてほめてくれた。活字になると妙な所で反響がある。昨秋書いた『江戸小唄選釈』はすでに年末に脱稿したが、そのままになっている。誰か篤志家の出版者はいないだろうか。邦楽協会にでも話せばすぐにまとまるが、自分としては芸を食い物にする連中には頼みたくない。一中は三派名ばかり残っていないが、そのうち菅野、宇治が細々残るばかり、都はこれで終わりではないか。吉田幸三郎氏と先日会ったところ、ぜひ三派合同会を毎年開きたいから骨を折ってくれと頼まれたが、自分としては自信がない。神戸の西村さ



857 英十三

昭和25 / 2 / 11

欠落

封書

んから一度金曜会へ遊びに来いと手紙が来たが、忙しくて行けない。日本の文化を世界化せねばならない、江戸文化はルイ王朝と並ぶ大きな人類官能最高峰である。他の国民のセンスにないものがある。

用箋(「北荘産業株式会社」名入り)2枚。ハガキ感謝。今度の『金曜』は「都踊くどき」御執筆の由、楽しみにしている。自分の原稿は自賛が過ぎたようだ。『金曜』にお話し下さって万一損をかけたら申し訳ないので、御配慮無用に願っておきたい。菅野のぶ師の件は考えてみよう。伝記というでなしに憶い出話といった楽に読めるようなものが出来たら送る。おのぶ師に最も近く教えを受けた大槻能舞代さんという琴の師匠を訪問して話を聞こうと思う。この人は大槻如電氏の三男の末亡人である。先日、古曲鑑賞会の吉田幸二郎氏から一中三派合同大会への協力を求められた。派内の内輪の問題もあるが、なんとかまとめてみたい。昨晚吉右衛門が久保田万太郎の司会で小唄を放送した。やはり結構だった。

858 英十三

昭和26 / 1 / 5

昭和26 / 1 / 5

ハガキ

新春お祝い申し上げる。病気の由、知らずにいて失礼した。浪人しているので、ラジオの司会や邦楽コンクールを手伝って忙しく過ごしている。昨年、年末『江戸小唄の話』という小著を出版した。別便で送る。

859 英十三

昭和26 / 1 / 22

昭和26 / 1 / 22

ハガキ

恵送の『野分集』、『紫紅友』落掌。こんな本を頂いては申し訳ない。『野分集』は、能六斎の『端唄一夕話』とともに、自分が『歌沢茶話』を書く前に刊行された註釈書として大いに珍重していたが、大震災で焼けてしまったので、頂いて大喜びである。芝草の『紫紅友』は初めて拝見した。愛蔵する。『金曜』への寄稿は考えておく。何か書いたら必ず差し出すので、しばらく猶予を願う。『江戸小唄の話』、増補・訂正したいことが次々と出てくる。小唄の逸話のような話があったら教えてほしい。

860 英十三

昭和26 / 1 / 27

昭和26 / 1 / 29

ハガキ

『端唄一夕話』たしかに頂戴した。感謝。拙著は手許にあるので、早速増田さんにお送りする。関西には知人が少ないので希望の方がいれば宣伝を渡す。小野文庫<sup>123</sup>はうた一夕話。

願う。順三からの御覚え書、ぜひ拝見したい。本には載せなかった小唄にまつわる話をぼつぼつ書いている。何か材料があったら教えてほしい。

861 英十三 昭和26/2/24 昭和26/2/25 ハガキ

病気の由、驚いた。軽くない病気なので、療養に専念なさるよつ。『金曜』の「初代団十郎殺し」面白く拝見した。早く快復してこつした御執筆が願えるよう念じている。島田筑波君も同じ病気で寝たきりという話を最近聞いた。気の毒である。『金曜』で拙著をたくさん注文してもらい、また誌上で紹介してもらって恐縮である。

862 英十三 xx/11/28 日付部分印字欠 ハガキ

19日付ハガキ拝見。『延寿清話』1・2お書き入れの底本を恵送、感謝。『歌沢茶話』御旧蔵の由、恐縮である。遠方に知己を得てうれしい、将来とも交誼のほどを願つ。

863 英十三 xx/5/23 xx/5/23 封書

便箋1枚。『陳書』うれしく拝見。こちらは俗事に忙しく、非常時統制で原料難にも苦しめられ、古書漁りや古曲研究は手がつかない。先日さる所で遠州公の短冊を偶目、「刈り残す田の面の庭のむら雀求めある身は騒がじの世や」、今更に興深い。

864 英十三 xx/6/1 欠落 封書

便箋2枚。『陳書』恵送、感謝。一中に関する古文献としては故・樋口素堂翁の書き止め、ついで高野斑山の編著のほかは材料がないところへ次々に珍籍の御発見、有益。一中節は三派合わせても家元は10名に遠く、これでは肝心の曲が今にも絶えてしまふような心持もする。江戸における一中節の消長を知り得たなら、従来の学説を根本から覆すことにもなると思つ。

板本が小野文庫に蔵されることから、このとき譲渡したのは重複本もしくは新たに作成された写本と見るべきか。書簡975(増田五良)と内容的な関連あり。

書簡975(増田五良)と内容的な関連あり。  
『歌沢茶話』の話題、書簡837(英十三)から続く内容か。その場合、差出年は大正13年。『陳書』を5月に送付していることから、昭和13年か(『陳書』9、昭和13年5月)。なお、封筒は昭和13年8月13日付英十三書簡(書簡851)と同じ品、便箋は同じく書簡851に同封の6月8日付書簡と同じ品。

865 濱田義一郎 昭和17/11/8 欠落

封書

小野文庫143 『会計私記』

866 濱田義一郎 昭和17/12/18 欠落

封書

小野文庫143 『会計私記』。『会

便箋2枚。拝借の『会計私記』は本月20日頃までに写了の予定、友人に依頼するか往復夜行で参上するつもりである。なお、三穂崎に関する御示教感謝。細見は所持せず、調べる手段がないため、初めて知った。三穂崎については雑誌『伝記』の「南畝判取帳」と題する連載で少し書いておいた。同連載の第2回に島田氏女香を三村竹清の説のごとく第二の妾と書いたのは、『会計私記』によりいささか疑念を抱くに至った。『会計私記』については写了後ゆっくり調べ、いずれお許しを得て『書物展望』にでも発表したい。昨日、上野図書館70年記念展で、南畝が青山堂に与えた『四季帖』と称する筆蹟を集めたもの等を見た。

昭和17/12/18付…投函したつもりが、読みさしの雑誌から手紙が出てきて驚いた。申し訳ない。この翌日、すなわち15日(ママ)に書留小包で川嶋氏へ送った。

曜日の対応より、昭和17年と推定。

867 濱田義一郎 昭和18/3/7

昭和18/3/7

封緘ハ

小野文庫357 『遊戯三昧』(務写)、

ガキ

小野文庫380 『壬申掌記』(務写)。

『会計私記』に関する小考を書こうとしながら、正月以来多忙だったり猩紅熱で入院したりでそのままになってしまったが、雑誌に投稿したお知らせをするとともに無音を詫びたい。天理図書館における御所見・御垂示拝見。『壬申掌記』はかつて杏花市川左団次の所蔵だったことを永井荷風の随筆で知っていたが、その後のことは初めて知った。『遊戯三昧』はどんな本か全く知らなかった。松葉屋に「はじめてあそぶ」の「あそぶ」は特殊の意味であろう、出入りはずっと前からしていたと思う。右二書はぜひとも筆写したい。南葵文庫に喜三二の『東海道中記』と同文庫の南畝関係

868 濱田義一郎 昭和18 / 3 / 24 昭和18 / 3 / 25 封書

のものを見てみたいと思う。目下軟禁中で健康は常と変わらないのだが病室の外へ出られず、思うに任せられない。

便箋3枚。漸く本復、19日に軟禁を許された。1ヶ月寝込んだため疲労が甚だしく、夕刻に帰宅すると疲れて何もできない。昨日、神田で『清元研究』を発見、かつて学生時代に帝大図書館で一読したが所持していなかったので、買って拝見しているところである。天理図書館にはぜひ夏に行ってみたい。中村清(マ)彦氏の名前は古川柳研究会で聞いたことがある。あちらでは畑違いの素人の意味で、「伯亭」と称して客員程度に入れてもらっている。熱心な連中で感服する。『会計私記』恩借後、勉強を怠り申し訳ない。近いうちに執筆して『書物展望』へ寄稿したい。

869 濱田義一郎 昭和18 / 4 / 16 欠落 封書

便箋3枚。微恙の際はお見舞感謝。お蔭さまで退院後、経過もよく、体力もほぼ恢復。俗務が多忙で閉口、読書も思うようにできない。先日漸く短いものを1篇書いた。『書物展望』に寄稿。掲載の際は1本お目にかける。忙しくて夏までは綿屋文庫訪問は望めない。僅かに古川柳研究の同人たちと川柳を少し勉強している。また、黄表紙の復刻されているものの解釈を試み、自分が礎稿を作って川柳研究家たちに回して知恵を借りている。これは少しまとまってから高評を仰ぎたい。菅先生にはお会いになったか。お会いになったらよろしく伝えてほしい。いよいよ4月18日が接近、いささか緊張している。そちらもさぞかしのことと思う。

870 濱田義一郎 昭和18 / 4 / 29 欠落 封書

便箋4枚。4月24日の芳書および『遊戯三昧』の写し拝受。お賤のことで新事実がわかった。気になることを書きつけ、御示教を仰ぎたい。期間長門万里が瀬川のところへ遊びに行くことがあったようだ。4月12日焉馬嘶の会は武蔵屋権三のもとで開かれたようだ。「恋のぬかるみ」というくらいで中年の恋というほどの心境だったようだ。洪水の事はお賤追悼の歌にもたびたび現れている。身請けは7月15日頃と思われる。安永6年『郭中

小野文庫<sup>357</sup>『遊戯三昧』(務写)。

小野文庫本は松筵旧蔵・綿屋文庫所蔵の大田南畝自筆本の写しで、昭和18年4月書字校合と記されており、写本作成後すぐに濱田へ貸与している

871 濱田義一郎 昭和18/7/11 欠落

封書

掃除』は南畝の作ではないかという気がする。『四方のあか』上巻の「山 ことが分かる。手閑居記」は逍遙楼のことではないか。南畝の蓄妾がかなりゴシップの種になっていたようだ。その家を江戸川辺と御批定になったが、「山手閑居記」の記事と符合する。最後に「辺以再誌」とあるのは何だろうか。なお、雑誌『伝記』に「南畝判取帖」という拙稿を連載したが、お賤のことに触れたところ、玉林晴朗という人が更に「大田南畝と浄栄寺」という稿を出してだいぶはつきりしてきた。

872 濱田義一郎 昭和18/7/28 欠落

封書

便箋2枚。『書物展望』に寄稿の拙稿が掲載されたので、別封で御高覧に供する。蜀山人は大体このあたりで止筆のつもり。もっとも資料だけは見たいと思う。綿屋文庫訪問は依然として本年度の予定ではあるが、達成可能か否か疑問、心細くなってきた。

(便箋)、昭和18/7/29 (封筒)

B5版200字詰原稿用紙3枚。最初書き始めたのが長すぎるらしいので縮小したところ、ますます出来ないものとなった。玉林氏よりお願いがあったとのこと、多少予想していた。自分は文学史の観点からのみに絞って扱う立場である。夏に予定していた綿屋文庫訪問は未だ疑問。8月上旬は金沢と与謝へ行く筈なので、ついに行けるとよいと思っている。旅程が許せばそちらを訪問したい。行けるとすれば7日頃になると思う。そちらも定めしいろいろ不自由だと思う。紙関係のものは多少都合出来ると思う。ノートなどのようなものが御所望なら申し越し願う。

873 濱田義一郎 昭和18/8/11 xx/8/12

ハガキ

御芳書感謝。去る5日東京発、金沢・山中などを経て京都へ、のち神戸・丹波へ向かう予定だったが、食事等の不自由と酷暑で旅程を短縮、京都から帰京した。実は丹波市も、すでに蜀山人については一切止筆と心に定めたことであって急ぐことではなく、又の機会を待ちたい。

874 早川石松 昭和26/3/5 昭和26/3/6

ハガキ

久しぶりのお便り感謝。御不快の由、お見舞申し上げる。快復して当地(城崎)へ御遊浴にお越しいただきたい。早川石松は兵庫県城崎の人。

875	原田棟一郎	大正13 / 5 / 26	大正13 / 5 / 27	封書	便箋4枚。冊子惠贈感謝。玄人はだしの力作、感服。友人の岡田次郎が先般来個人雑誌『焦点』を発行しているが、資力がなく困っている。京大・内藤湖南博士が幾分か助けになるだろうと得意の書を揮毫してくれた。賛助員になってくれれば内藤博士の書を進呈する。『焦点』を1部お目にかけるので、よろしく頼む。
876	原田棟一郎	昭和6 / 12 / 9	欠落	封書	用箋(大阪朝日新聞社用箋、名入り)1枚。時々御高著で名前を拝聴して懐かしく思っている。ついては井上君とも語り合い、一度晚餐でも御案内したい。都合をお伺いする。
877	原田棟一郎	昭和6 / 12 / 15	昭和6 / 12 / 15	ハガキ	早速の返事、恐れ入る。来る19日午後6時からどうか。もし差支えがなければ同日午後6時前に新聞社の方へ立ち寄ってほしい。一緒に行く。
878	原田棟一郎	昭和8 / 1 / 1	昭和8 / 1 / 1	ハガキ	昭和8年賀状。
879	原田棟一郎	昭和9 / 1 / 1	昭和9 / 1 / 1	ハガキ	昭和9年賀状。
880	原田棟一郎	昭和10 / 1 / 1	昭和10 / 1 / 1	ハガキ	昭和10年賀状。
881	原田棟一郎	昭和17 / 12 / xx	なし(封筒欠)	カード	就任挨拶状。朝日新聞社を辞して、神戸新聞社社長に就任した。
882	板龍齋	なし	昭和7 / 1 / 6	ハガキ	昭和7年賀状。
883	坂東三津五郎(7代目)	大正15 / 1 / 1	大正14 / 12 / 31	ハガキ	大正15年賀状。
884	坂東三津五郎(7代目)	昭和2 / 3 / 8	昭和2 / 3 / 10	ハガキ	地震見舞。

「富士乃屋龍齋」の署名を印刷。

- 888 坂東三津五郎〔8代目〕 大正15 / 9 / 28 欠落 封書  
 印刷物1点。坂東八十助改め6代目義助襲名の挨拶状。
- 885 坂東三津五郎〔7代目〕 昭和3 / xx / xx 昭和3 / 5 / 13 封書  
 助〔3代目〕 代目〔八十目〕〔義助〕6
- 886 坂東三津五郎〔8代目〕 大正14 / 4 / xx 欠落 封書  
 助〔3代目〕 代目〔八十目〕〔義助〕6  
 日付なし…便箋2枚。私方の作者竹柴二作の手を経て河竹繁俊氏より『延寿清話』拝借。父・三津五郎も興味を持った。震災で稽古本などの舞踊に関する書籍焼失、先日も富本稽古本を他からもらったがすでにあるものと同じものだったので、お申し越し次第送る。今後、雑誌を発行の節には送ってほしい。  
 大正14 / 4 / 27消印…ハガキ。雑誌受領、感謝。
- 887 坂東三津五郎〔8代目〕 大正14 / 5 / 23 欠落 封書  
 巻紙1枚。昨夜『延寿清話』7拝受。清元の「文屋」と「喜撰」の条に父・三津五郎の談話について誤謬を含むとの説はその通りである。三津五郎に経緯を尋ねたところ、『演芸画報』の記者に話したのはそうではないと思うとの回答。演芸記者は忙しい幕間に芝居部屋へ談話を聞きに来て原稿を作り、確認なしに掲載するので誤りや飾りが多い。役者も迷惑している。  
 萌黄の蚊帳の御説を、非常に父が喜んでる。  
 400字詰原稿用紙2枚。「台所唐人」という語について、もし分ければ御教示願いたい。また、佐々醒雪『俗曲講釈 江戸長唄』中に大変な間違いがある。書簡910（廣田星橋）との内容的な関連より、大正15年と推

895	坂東三津五郎(8代目)	昭和5/5/29	欠落	封書
	(便箋)、昭和5/5/20(封筒)			
894	坂東三津五郎(8代目)	昭和5/2/19	昭和5/2/19	封書
893	坂東三津五郎(8代目)	なし	昭和5/2/9	封書
892	坂東三津五郎(8代目)	なし	昭和5/1/7	ハガキ
891	坂東三津五郎(8代目)	昭和4/12/21	昭和4/12/21	封書
890	坂東三津五郎(8代目)	昭和2/8/3	昭和2/8/4	ハガキ
889	坂東三津五郎(8代目)	昭和2/7/26	昭和2/7/26	ハガキ

ある。先生から何か発表してもらえないか。41ページの3番の評釈中の「淀村淀五郎」は「3世三津五郎」、「倭仮名七文字」は「倭仮名色七文字」と、それぞれあるべきものである。

早速の返事、感謝。浴衣1反を送る。これは三津五郎格子と呼ぶもので、毎年同じに続けて作らせている。歌舞伎の衣装・化粧の絵ハガキ。稽古場での写真か。

雑誌『芝居』を送付した。当月より「古今舞踊細見」の執筆をすることになったが、都合上、瘦谷亭案山子の筆名を用いた。

便箋2枚。清元「再春松種時」の問答の終わりの詞章の「こなたこそ」の意味・出所について教示願いたい。

昭和5年賀状。

日付なし…便箋2枚。いろいろ探したが、「北州」「おはん」「おそめ」「卯の花」「双六」だけはどうしてもない。写真の裏に印があるのは、家にも一枚しかないものなので返却願いたい。他は全部差し上げる。以下、各曲の写真の衣裳の解説。

日付なし…便箋1枚。「山帰り」「夕ぎり」「吉原雀」「神田祭」はまた後から送るが、「卯の花」「双六」はない。「卯の花」は昨年大阪で新しい振り付けで演じられたらしい。「おそめ」は6代目の所を随分探してもらったが、ない。

便箋2枚。早々に写真返却、感謝。複写原板まで送付いただき、恐縮である。今月の芝居の父の写真を送る。東京の芝居の方のことでできることがあったら仰せつけてほしい。

便箋3枚。『清元研究』恵与、感謝。雑誌を製本させて所持していたが、それでも欠けがあった。単行本になってうれしい。また、私こときの者の写真をのせてもらって恐縮である。



904	日野彌三郎	昭和14 / 1 / 1	昭和14 / 1 / 22	八ガキ	昭和14年賞状。
903	日田光敏・ 日田勇作	昭和14 / 1 / 1	昭和14 / 1 / 1	八ガキ	昭和14年賞状。
902	東田清三郎	なし	昭和12 / 7 / 26	八ガキ	暑中見舞。
901	坂東三津五郎(8代目)	xx / 12 / 25	xx / 12 / 25	八ガキ	返事、感謝。父も喜んでいた。初代の追善本を拝見できるのを楽しみにしている。早稲田の博物館に安田本の長唄稽古本900余冊あり、心丈夫である。もつとも、いずれ安田家へ返すそうだが。
900	坂東三津五郎(8代目)	xx / 9 / 22	欠落	封書	400字詰原稿用紙2枚。昨日『延寿清話』拝見、感謝。毎月の『清元研究』もうれしい。昨日の十五夜は中州で眺めた。音羽屋の弟子の音蔵老人の話の紹介2題(三舛最中、かんづめの牛の佃煮)。11月頃大阪へ行くかもしれない、その節は御教示にあずかりたい。今月父が家元と「山姥」の金太郎を演じたが、風邪で休んでいる。家元もやはり病気で休んでいる。明日、高輪へ行くはずである。私も4、5日前まで入院していた。森田・坂東の系図はまだ完成していない。次々に出てくる材料が多く整理がつかない。「振付師列伝」はこの発行で、何かの内に出ているのか教えてほしい。
899	坂東三津五郎(8代目)	昭和15 / xx / xx	欠落	封書	印刷物1点。東宝から松竹へ移籍するに際しての挨拶状。
898	坂東三津五郎(8代目)	昭和14 / 1 / 1	昭和14 / 1 / 1	八ガキ	昭和14年賞状。
897	坂東三津五郎(8代目)	昭和13 / 1 / 1	昭和13 / 1 / 1	八ガキ	昭和13年賞状。
896	坂東三津五郎(8代目)	昭和12 / 1 / 1	昭和12 / 1 / 1	八ガキ	昭和12年賞状。

歌舞伎の衣装・化粧の絵八ガキ。余白に8代目坂東三津五郎による書入れ「此写真はあや 三番です」。

絵八ガキ(東田吉次「明治時代の代大川」)。

差出人住所「兵庫県津名郡野島村江崎」。

905 日野彌三郎 xx / 4 / 16 八ガキ 在京中に一度会いたかったが、遂に果たせず残念。御出京の節には知らせ

てほしい。 神社。

906 廣田健一郎 昭和 8 / 12 / 23 八ガキ 廣田星橋（廣田金松）死亡通知。

ほか

907 廣田星橋 大正 15 / 2 / 24 封書 便箋 2 枚。「三社祭」「北州」中の詞章についての質問に対する回答。余白

（金松）

に、老婆心で申し上げるが、唄の文句をあまり理屈詰で解釈するとかえつ

て作者の意を傷つけることになるとの意見を添える。 便箋 2 枚。風邪の由、大切に。面会の際には大失礼をした。実は大黒屋で

少々腹案があったが、芸者に落着きを望むのは時代錯誤か。私は意義ある

会合にしたい気がした。まだまだ話もたくさんあったが、時間もなく、翌

朝は帰神と承ったので御迷惑かと思つた。また貴誌のことについても伺

いたいこともあり、しみりした話もしたいと胸中で思つていたが、思うに

まかせなかつた。また書信で委細を申し上げる。自分には思い過ぎの癖

があるので、それを含んで御交誼を願う。その後、湯朝君より八ガキが来

た。過日申し上げた拙稿の義は最早相認めかけているが藤尾君の返事を待

っているところだ。

909 廣田星橋 大正 15 / 5 / 11 大正 15 / 5 / 11 封書

便箋 3 枚。過日、御光来の際には失礼した。いつぞや一寸お話し上げた

ことと思つたが、中村勘三郎の一家たる系統の太鼓打の家、六郷新三郎と申

す長唄の雛子は今年 71 才だが、音曲界の事にはなかなか通達している人物

で、常の芸人とは違つて丹念に斯道のことを調べている。実地に音曲を演

る者の話ゆえ、紙上の論拠を捉えるのとは違つて要領を得ることは申すま

でもない。今は閑暇の人で在宅のみの様子ゆえ、御出京の折は一遍同道し

たい。御質問には究竟の人であるので、参考の材料としてよい。貴君のこ

とも先方へ話しておく。近日湯朝氏にも紹介するつもりである。右宅へ昨

日参り、今日芸道の頽廃を大分攻撃し面白く思つた。悪口が多く、宗家の

910 廣田星橋 大正15/10/26 大正15/10/26 封書

ことも論壇にのぼった。宗家が幼稚の折の話で面白いこともあったが、発表するには障りがある。

巻紙1枚。「台所唐人」の踊りのこと、八十助氏よりは何らの訪問も受けていない。この踊りは今の師匠たちはあまり知らない。私は未だ詞曲の本も知らない。しかし、これが吉原の幫間に行われたことは確実である。以下、「台所唐人」についての考察。中国人料理人の風体を興味がつて作った浄瑠璃が遣ったものとする。次に、原稿の採否の話題。先だつての拙稿はたぶん落第だろう、成否について聞かせてもらえればありがたい。私の懇意な上野東照宮境内の貸席茶屋「梅川楼」方へかねて『清元研究』購読者として送付を願っているが、その代金計算書を私まで届けてほしい。また、先だつてお送りくださった『江戸時代』はあまり他人の投稿などは歓迎しないだろうか、知らせてほしい。

911 廣田星橋 昭和2/3/15 昭和2/3/15 封書

便箋2枚。地震について何の障りもなかったとのこと、安心した。本日サNDER毎日社より振替にて「異人さんの恋」稿料金52円振出伝票が来た。右についてお手数をかけたので電車料として金20円を送る。現金が到着次第、失礼ながら郵便小為替で送るので査収されたい。右拙稿は3月6日・13日発行の2回に掲載、掲載分5冊届くところが未着、今日13日分は買い求めたが、6日分は売切れだった。お手数だが、工夫して回してもらえればありがたい。代金は遠慮なく勘定してほしい。原稿をついでの際に先方へ回してほしい、近日短編物も差し出すつもり。先日『江戸時代文化』4月号を差し出した、落手のことと思う。

912 廣田星橋 昭和2/4/1 昭和2/4/1 封書

便箋2枚。本日八ガキ拝見。その後、拙稿を差し出したので落手のことと思う。高原君へは本日挨拶状を差し出しておいた。御地の新聞社の内情が分からないのだが、手数料を支払う慣例や、掲載の上は原稿推薦者に謝礼を渡す習慣はあるのだろうか。教えてほしい。「主水の白糸」のことはも

919	廣田星橋	昭和3 / 11 / 24	昭和3 / 11 / 24	ハガキ	<p>とより当て推量である、高説をはやく伺いたい。</p> <p>便箋3枚。サンデー社返却拙稿は実は妙な材料ゆえ、同社に向かないのはもつともである。高原君の御書の趣、昔の芝居咄を認めたい。相変わらずの御配慮、感謝。次に、仰せの通り原稿作者の名は本名にする。右に相当の原稿紙を送る。御地にも相異なる権威の社があると思うので、原稿の向け方も難しいであろう。また『サンデー毎日』の原稿字数の件も解決。</p> <p>便箋1枚。今日、ハガキ拝受、原稿者の趣承知した。5月1日の『サンデー毎日』に「団十郎と古娘」掲載、稿料金24円の伝票が来た。だんだんと拙稿掲載を重ねるようになるに随い、高原君へ微志を品物にて送ってはどうか。当方より礼状はこれから出す。現品であればどのようなちよつとしたものが実用向きか。</p> <p>便箋3枚。拙稿「たつき大工菊五郎」の稿料伝票が来た。高原氏へ微志の贈り物をしたく、何かと考えたが名案もないので、やはり反物か何かとも思う。それとも怪しき反物などはかえって失礼だろうか。御教示を願う。</p> <p>便箋2枚。息子の不在中神田の店へ出ていて筆を執る暇がなかった。これから執筆、脱稿次第差し上げる。この頃『清元研究』の内情はいかがか。発刊はきまつたのか。余り長引くようなら、いずれも気抜けのした拙稿はよろしからずと思うので、原稿を戻してもらって他へ回すことを考えたい。</p> <p>古びた拙稿2種は朝日新聞社へ回して下さるとのこと、ありがたい。</p> <p>その後、拙稿をしばらく差し上げていない。神田の店へ移転してから雑用に取り紛れ筆がはかどらない。高原様へもよろしく伝えてほしい。</p> <p>お手数をかけた拙稿は『サンデー毎日』へ掲載され、本日1冊受け取った。相変わらずお手数を煩わせるが、8月12日掲載の分、7冊送付してほしい。</p> <p>相変わらず筆硯に親しんではいるが、忙しいのみで追われている。いつぞや歌舞伎座の丸岡氏が貴君の著書を発表するつもりだとの話も聞いたが、</p>
918	廣田星橋	昭和3 / 8 / 11	昭和3 / 8 / 10	ハガキ	
917	廣田星橋	昭和3 / 2 / 29	昭和3 / 2 / 29	ハガキ	
916	廣田星橋	昭和2 / 7 / 27	昭和2 / 7 / xx	封書	
915	廣田星橋	昭和2 / 7 / 1	昭和2 / 7 / 2	封書	
914	廣田星橋	昭和2 / 4 / 29	昭和2 / 4 / 30	封書	
913	廣田星橋	昭和2 / 4 / 3	昭和2 / 4 / 5	封書	

920 廣田星橋 昭和3 / 11 / 29 昭和3 / 11 / 30 八ガキ

921 廣田星橋 xx / 12 / 13 xx / xx / xx 封書

いがかが。多忙ゆえ執筆に骨折りのことと思う。また拙稿を送るので、高原様へ送ってほしい。『江戸文化』の不足分は差し上げたことと思う。

御申し越しの『江戸文化』の件、私が直接右編輯員に面会の上申しつけおいたので、今度こそは間違いなく届くと思う。お買い求めになるという義は見合わせてほしい。これまでの怠りは六合館店員の失念によるものである。また相変わらず2月2日の分(拙稿掲載)7冊お求めいただきたい。

xx / 12 / 13 付…半紙2枚。『清元研究』11月号到着。内容拝見、「台所唐人」の踊りは大抵の踊りの師匠に尋ねても知らぬのは余り出なかつたせい  
か、見物受けでも悪かつたか、何しろ稽古本が遺つて居ぬとは困つたものだ。小石川伝通院の坂東三津江さんの大師匠が生きていたら分かるだろう。帝劇の伊坂梅雪氏に聞いたら分かるかもしれない。しかし、八十助氏がもう尋ねているかもしれない。「台所唐人」は「でない」と唐人「は無論洒落なれどこれを「ダイドコロ唐人」と読まれては閉口、「ダイドコロ唐人」というのが江戸訛り。以下、この踊りについての解説ならびに「文屋」の詞章についての説明を記載する。かねて『清元研究』へ連載の拙稿「鳥羽や天の助」は余り切れ切れで恐縮、藤尾君へ誤解なきよう言伝てたのむ。

xx / 1 / 16 日付…便箋3枚。14日付の書簡、『江戸時代』新春特別号とともに到着。拙稿について御世話になる、万事宜しく。今後も御地および京阪方面へ拙稿を広めたい。一遍御地へ相伺い一廻したいと内心目論んでいるが、難しい。その際には御迷惑だろうが、同趣味の因果因縁と諦めて御世話を願う。藤尾君へもよろしく。まだ面識はないが、高原様へもよろしく。『清元研究』の内容については、専門的流儀の雑誌ゆえ年を経るに随つて記事の行き詰まるきらいがないともいえない。雑種の記事を載せたらどうか。冒頭へは貴君の評釈を出すことを定めてある方が価値を認めるように心得る。どうも冒頭に「追分研究」のよつなものを掲げるのは不得

922 廣田政之進 なし 昭和2 / 1 / 15  
 八ガキ  
 寒中見舞  
 策に思う。評釈の後へ雑種の記事を面白おかしく載せていくようにでもしてはどうか。内容を進歩させないと読者にあきらまれるかと、老婆心まで。「鳥羽や天の助」も藤尾君があまり気の進まぬようなら何とかケリをつけて他の作と取り換えるなど工夫する。

923 弘仲定潔 大正10 / 12 / 27 欠落  
 封書  
 野紙(「毛利家」名入り)2枚。「梅の春」に関する問い合わせへの回答。作者は毛利家11代元義公で、文政10年の初春に上木、頒本したことなどを説明。

924 弘仲定潔 大正14 / 8 / 30 欠落  
 封書  
 野紙(「毛利家」名入り)1枚。「梅の春」について、数年前に敷写にしたことを思い出した。原本は麻布の御別邸にあり。翠竹女史は多分浦岡酒楽と称する女性と推測される。

925 弘仲定潔 大正14 / 9 / 3 大正14 / 9 / 3  
 八ガキ  
 毛利家11代元義公の墓所についての説明。品川・泉岳寺にあり。  
 926 福井菊三郎 大正15 / 12 / xx xx / xx / xx  
 封書  
 印刷物1点。別封の著作『日本陶磁器と其国民性』の送付状。

絵八ガキ(種彦「富士裾つかれの蝶とり」表紙)。

差出人署名は「毛利元雄家扶」。筆跡・内容から弘仲定潔と判断。忍頂寺務「清元『梅の春』の作曲年代」(『延寿清話』2、大正13年4月)および「梅の春考」(『芝居とキネマ』4-3、昭和2年3月)に本書簡の全文を翻刻掲載する。

忍頂寺務「『梅の春』原刻本の発見に就て」(『書物往来』15、大正15年1月)および「梅の春考」(『芝居とキネマ』4-3、昭和2年3月)に本書簡の紹介・引用あり。

別封の著作は忍頂寺文庫・小野文庫に所蔵されず。忍頂寺務「延寿清話」(『サンデー毎日』大正15年7月18日号)の、

942	富士崎放江	なし	欠落	封書	便箋2枚。『延寿清話』の礼状。去月末に上京、従吾所好社を訪れ、お噂
941	富士崎放江	昭和5/1/1	昭和5/1/1	八ガキ	昭和5年賀状。
940	富士崎放江	昭和4/1/1	昭和4/1/1	八ガキ	昭和4年賀状。
939	富士崎放江	昭和3/1/1	昭和3/1/1	八ガキ	昭和3年賀状。
938	富士崎放江	昭和2/1/1	昭和1/12/31	八ガキ	昭和2年賀状。
937	富士崎放江	なし	大正15/9/18	八ガキ	『延寿清話』11の礼状。
936	富士崎放江	大正15/1/1	大正15/1/1	八ガキ	大正15年賀状。
935	富士崎放江	なし	大正14/3/11	八ガキ	い。4、5日前、会津若松へ行った。
934	富士崎放江	大正14/1/xx	大正14/1/1	八ガキ	大正14年賀状。
933	(和一郎)	なし	大正13/6/11	八ガキ	『延寿清話』礼状。
932	藤井源一	昭和21/5/23	昭和21/5/24	八ガキ	藤井乙男死亡通知。
931	藤井乙男	昭和13/1/xx	昭和13/1/4	八ガキ	昭和13年賀状。
930	藤井乙男	昭和12/1/xx	昭和12/1/2	八ガキ	昭和12年賀状。
929	藤井乙男	昭和11/1/xx	昭和11/1/1	八ガキ	昭和11年賀状。
928	藤井乙男	昭和9/1/1	xx/xx/xx	八ガキ	昭和9年賀状。
927	藤井乙男	昭和8/1/1	なし	八ガキ	昭和8年賀状。

五世清元延寿大夫がかつて三井物産に勤めていたことを述べる一節に「三井の福井菊三郎氏の直話によれば」とあり。藤井乙男は淡路島洲本町出身。

絵八ガキ（猪苗代湖畔長浜付近柳小島）。大正13年6月6日付齋藤昌三書簡（書簡448）に、富士崎への『延寿清話』送付を依頼する記事あり。

絵八ガキ（会津名所院内松平家御廟）。

絵八ガキ（福島競馬倶楽部）。

943	藤澤衛彦	昭和14 / 8 / xx	昭和14 / 8 / 18	ハガキ
944	藤田徳太郎	なし	昭和11 / 4 / 20	ハガキ
945	藤田徳太郎	なし	昭和12 / 9 / 27	ハガキ
946	藤田徳太郎	なし	昭和13 / 2 / 18	ハガキ
947	藤田徳太郎	なし	昭和13 / 6 / 10	ハガキ
948	藤田徳太郎	昭和13 / 7 / 15	昭和13 / 7 / 15	ハガキ
949	藤田徳太郎	なし	昭和14 / 4 / 23	ハガキ

を聞いた。23日、石川氏と矢来倶楽部に古本市を漁った。別便で小著を送る。これはその筋より頒布禁止の敝令に接したものであるので含みおきを。拙号は放江である。『書物往来』5冊にはかなり誤植あり。校正の神様の御存在を疑う。

転居通知。「日本伝説学会」とともに移転。有栖川宮記念学術奨励金による「日本伝説話の採集整理研究」を行う。明治大学に勤務。

『陳書』惠贈感謝。歌謡研究の援助金（務書入れ…日本学術振興金 昭和11年4月決定）を受け、来月から大橋図書館内に研究室を設置、助手と共に研究に着手する。蔵書について便宜を願いたい。来月中に助手と参上する。

長々恩借の御蔵本別便にて返送。徳島のもの、最も珍しいと思う。他は2、3、類本を発見した。なお、委細の研究は他日発表したい。 絵ハガキ（鬼怒川温泉ホテル）。

『陳書』ありがたく拝見。別送の雑誌、袋に入るだけ5冊送る。ぜひ歌謡に関する文章をいただきたい。「伊勢音頭」の未翻刻物の活字化でも結構だが、こつという性質の雑誌は毎号かなりの欠損なので、同好の士に吹聴願いたい。「尚々書」太田氏出征の話聞いた。 小野文庫<sup>345</sup>『民謡研究』（全5冊）か。

『陳書』ありがたく拝見。歌謡に関する紹介が多く、有益。「酒造り歌」に関しては1部購入致したく、鷲尾氏に問い合わせを差し出した。太田氏御紹介の兵庫節は古本屋の目録で知っていたが入手できなかったものである。近日（来週中）歌謡に関する小著を上梓、出来したら1部送る。

水害で難渋のことと思しながら、お見舞も申し上げず失礼した。本日はハガキと書留小包確かに頂戴。22、23日頃帰京の予定で信州の山奥へ。いづれ帰京後御挨拶申し上げます。

『陳書』拝受。多年内容を知りたく思っていた書の御紹介、感謝。私はその後俗務多端、一昨年夏から始めた中学校教科書の仕事が忙しく、専門の研究がほとんどできない。しかし、今年の秋からは大いにやりたい。田



950 藤田徳太郎 なし 昭和15/7/1 ハガキ

中さんへも御無沙汰で申し訳ない。5月末頃に歌謡に関する編集書が出来  
るはずなので、出来たらお送りする。

951 藤田徳太郎 xx/5/2 欠落 封書

懇切な読後感を頂き、銘謝。種々の御教示、甚だ有益。何かの折にまた発  
表させてもらいたい。佐渡の新穂村は私も行ったが、廣大寺のことは聞き  
もらした。下関の兵庫口説の事は興味深い。故郷の下関では、自分の子供  
の時までは盆踊りも盛んで兵庫口説を三味線に合わせ踊ったものだが、今  
は絶えた。その口説の原本はいつか私も一覽したい。今夏は7月中旬から  
8月にかけて京都・奈良・高野山で暮らすので、会える機会があると思う。  
便箋1枚。過日御来訪の節は真に失礼、何のもてなしもなく失礼した。病  
気が全治したらお邪魔して御蔵書を拝見の栄を得たい。

952 藤田徳太郎 なし 欠落 封書

便箋3枚。過日の会では失礼した。御帰神の話聞き、聊か残念。実は、  
小生の『近代歌謡の研究』という書を一昨年からやってきたが、この4月  
に漸く刊行されるため、出来たら1冊持ってあがつて、その上で次の研究  
を進めるために御蔵書について調査させていただきたい念願を持っていた  
ので、今後神戸でもよろしく御好誼を願う。右書は出来たらお手元へお贈  
りする。御挨拶に伺うべきところ、入試で多忙につき失礼する。

953 藤田徳太郎 xx/xx/2 欠落 封書

便箋3枚。いよいよ神戸へ到着したことと思う。御願いした本を早速貸与、  
感謝。このうち2部は小生の所にも類似のものがあつたが、他の3部は新  
しいもの。その後、田中氏ともう一度赤坂で会つた。赤坂の老妓に小生の  
俚謡の本を若干貸与。何でもよい替歌をいろいろ得たいとのこと。小著。近  
代歌謡の研究』は4月中に出来るはずのところ、約1ヶ月遅れそう。出来  
たら送る。本日当地は大変な雨風だが、高野博士の還暦の会が上野精養軒  
である。折柄、山村太郎君上京、今夜の会にも出るとのこと。

954 藤田徳太郎 xx/xx/7 欠落 封書

便箋2枚、尾崎久弥書簡2点を同封。御蔵書御送付感謝。待望の書。伊賀  
の沖森書店の目録で見たが入手できなかったもの。歌謡研究の書を校正中。

11月中には出来の見込み、出来たら送る。古代のものも含むので固い感じがするかと思うが、近世の歌謡についてもいろいろあるので一覧願いたい。

尾崎久弥書簡

xx / 9 / 5 付…半紙2枚。度々の手紙感謝。先日市場君が

xx / 9 / 5 付尾崎久弥書簡は、

来た。貴下を訪問したが不在だったとのこと。先月よりお願いすべき儀、生憎貴下の御住処失念のため市場君へ申しやったのは、例の小生企画の『洒

内容より大正14年と推定される。

落本集』の材料のことである。自分の考えでは江戸版だけ100種ほど（未翻

刻のもの）、京大坂本30種ほどを輯めたい。市場君と自分の蔵書で未翻刻のものはやっと20種ほどで、心細い。貴下蔵本のうちの未翻刻物だけの全

書目を知らせてほしい。翻刻のため借りられるものとして。かねて半年以上借りている名古屋の写本2冊はまだ拝借している。これは名古屋本の代

表として入れたい。いつも『清元研究』送付、感謝。尚、『大江戸清元

話』の先々月「三つ蒲団」の御研究拝読。尚、先々月竹山人君来名の折、貴下がアルプスを登る途中に名古屋に立ち寄るとの話聞いたが、この計画は止めたのか。

尾崎久弥書簡

xx / xx / 22 付…B5版<sup>250</sup>字詰原稿用紙（「尾崎用箋」名入り）6枚。先日御送付の洒落本御蔵目録拝見。以下、『江戸軟文学大系』

xx / xx / 22 付尾崎久弥書簡は、

全18巻の構成案を述べる。自分は洒落本を担当、材料が不足しているが、貴下の蔵書は大いに力になる。京大の蔵書も使いたいが、館外貸出不可。

xx / 9 / 5 付書簡に続く内容であること、書簡<sup>274</sup>（尾崎久弥）との内容的な関連から、

貸出しを尾崎の恩師・石田元季を通じて藤井乙男へ頼んでいるが、貴下からも頼んでもらえないか。御堂文庫本、先日目録では15種が選定されていたが、上作・下作を問わず全部包容したい。筆耕を雇って書写させるの

大正14年か。11月の大阪行の話題は、書簡<sup>274</sup>（尾崎久弥）

で、少しずつ（10冊くらいずつ）順に送ってほしい。口絵は写真師に撮らせる。なお、坪内氏の意見により翻刻済みの作品も代表作は入れるつもり

で中止になったと述べられているものと重なるか。

なので、既翻刻物の目録も示してほしい。校合と挿絵のために入用。編纂

について、江戸の中を吉原・深川と分けるか、作者別にするか、年代別に

955 藤野辰次郎 なし  
 大正8 / 10 / 23  
 ハガキ  
 するか、配合よくまぜるか、どうするのがよいか。自分の考えとしては、  
 雑然と面白いもの、上作・下作をませて最後に年表をつけるつもり。なお、  
 賛助として貴下の名を借りたい。なお、最近11月1日に大阪で売立がある  
 との内報あり。その折にこの用を兼ねて下阪し、貴下にも会いたい。既翻  
 刻物の目録、どれがよいものか選択についての意見もほしい。『娼妃地理  
 記』はどこかに蔵本がないか。尚、小誌『研究』11月号は全部洒落本書目  
 にあてる。この書目によって原本収集をしたい。貸与は、江戸物を先にし、  
 京阪物は最後にしてほしい。『追伸（xx / 23付）』この手紙を投函せずにい  
 たところ、石田氏より、藤井氏は四女の大病などで頼めない、館長へ頼ん  
 ではどうかと断りの返答あり。貴下には京大図書館の本を借りる手だては  
 ないか。どうしても2、30種は入用。

956 藤野辰次郎 大正8 / 11 / 15  
 大正8 / 11 / 15  
 ハガキ  
 御珍藏の品お送り下さり、感謝。人にも見せている。10点とも至極結構。  
 句仏上人の賛、ちよつと読み下せない、御教示を仰ぎたい。先日来上京の  
 際に帝展を見物、やはり努力の作が多く楽しかった。  
 第4回御撮影分恵与、感謝。昨今かれこれ混雑しているものと察する。近  
 々また上京する。

957 藤野辰次郎 大正10 / 6 / 14  
 大正10 / 6 / 14  
 封書  
 巻紙1枚、用箋1枚、別紙巻紙1枚。先般は小野同道で伺って厄介になり、  
 感謝。別紙の事、懇意の人の娘さんの縁談について協力を願いたい。

958 扶桑書房 昭和22 / 3 / 31  
 欠落 (三宮局)とも  
 封書  
 便箋1枚、印刷物2点。注文の品売り切れにつき、代金30円を小為替で返  
 金する。扶桑書房刊行物リーフレットと森谷書店「古典新集書目」(全3  
 枚)を同封。

絵ハガキ(池上秀畝氏筆「細  
 雨(其一)」) 帝国美術院第一回  
 美術展覧会出品。  
 絵ハガキ(川村曼舟氏筆「海(日  
 没する前)(其二)」) 帝国美術院  
 第一回美術展覧会出品。

森谷書店目録にチエックマー  
 クが3点、うち2点が小野文  
 庫に所蔵される(小野文庫223  
 『残月集』、小野文庫250『増補  
 /浪速のしほり』)。

959 船越政一郎 大正13 / 7 / 4 大正13 / 7 / 5

封書

巻紙1枚。大田南畝はいよいよ大田であることが確定、大いに嬉しい。以下、毛詩大田の章を引用して、「南畝」号の出典を論じる。ただし、先人同説を述べた者があるかもしれないので発表を見合わせている。続いて、「平秩東作」の号についての考察、書経に出典があるとする。『延寿清話』の記事について言いたいことがあるが、後便で。「追伸」かつて大阪堂島に住んで、「臨摸に長ぜり」との評判があつた忍頂寺梅谷は貴下の所縁か。

960 船越政一郎 大正13 / 10 / 9 大正13 / 10 / 17

八ガキ

転居通知

巻紙1枚。『延寿清話』5、恵贈感謝。8世団十郎が死んだ家に関わる怪談については、過般『難波津』に発表したが、あれは紙数の制限で短くしたために少し要を得ていない点があるので、後便で委細を申し上げる。

961 船越政一郎 大正13 / 11 / 30 大正13 / 11 / 30

封書

封書

B5版400字詰原稿用紙1枚。「三十二相」について御示教感謝。『延寿清話』5の8世団十郎変死の凶宅に絡んだ怪談を同封、参考にしてほしい。『延寿清話』4、「狩谷掖斎」の表記に誤植あることの指摘と、その号の由来の解説。

963 船越政一郎 大正14 / 5 / 23 欠落

封書

巻紙1枚。『延寿清話』7、恵贈感謝。「初代延寿大夫略年表」拝見。文政8年5月26日の記事に登場する「乗物町」という地名についての考察を述

この書簡の内容を、小野文庫296『延寿清話』の第1冊に務自筆で書入れ。  
書簡962（船越政一郎）と関連あり。8代目団十郎旧宅に関する怪談は、船越の名で『延寿清話』6（大正14年3月）に掲載。  
書簡961（船越政一郎）と関連あり。「三十二相」についての話題は、船越が編輯人となっている雑誌『難波津』5（大正13年6月）の「編輯後記」で紹介されている務からの書簡と関連。その後も意見交換を続けていたものか。8代目団十郎旧宅に関する怪談は、船越の名で『延寿清話』6（大正14年3月）に掲載。

973	増田五良	なし	昭和23 / 12 / 28	ハガキ	金曜会は絶えることなく続いている。11月末の時は高安六郎氏に話をして	増田五良はへちま倶楽部会員。
972	前川守一	昭和18 / 10 / 4	昭和18 / 10 / 4	ハガキ	前川清二死亡通知。	
971	細川賀茂	昭和3 / 11 / 4	昭和3 / 11 / 4	ハガキ	御研究の冊子、寄贈感謝。竹山人氏へもよろしく。	
970	へちま倶楽部	なし	昭和26 / 6 / 15	ハガキ	金曜会200回祝賀会(6月23日)の案内。西村貫一の筆跡で、出来たら来てほしい、寄贈のキス200匹を野外で天ブラにするという旨のメッセージあり。	筆跡は西村貫一。
969	へちま倶楽部	なし	昭和26 / 4 / 8	ハガキ	夫婦との懇談会(4月14日)の案内。	
968	へちま倶楽部	なし	昭和26 / 2 / 28	ハガキ	虹之助の移動教室。	
967	へちま倶楽部	なし	昭和26 / 2 / xx	ハガキ	ドイツ式のハムとソーセージを紹介する。	
966	船越政一郎	大正15 / 9 / 30	欠落	封書	巻紙1枚。『延寿清話』、久々にて落筆、感謝。暁鐘成についての情報提供。	
965	船越政一郎	大正14 / 12 / 13	大正14 / 12 / 13	封書	巻紙1枚、B5版400字詰原稿用紙1枚。その後、岡野知十『湯島法楽』と いう本の「ものにはひ」という一文中に、千束其爪(3代目蘭洲)のこ とが書かれているのを発見したので、書写して送る。『湯島法楽』は明治 38年〜41年の間の作品を集めたもので、「千束其爪の事蹟」よりも以前の 執筆である。「ものにはひ」の一節を書写した原稿用紙1枚を同封。	筆跡は西村貫一。
964	船越政一郎	大正14 / 11 / 1	欠落	封書	大正14 / 11 / 1付…巻紙1枚。『延寿清話』9、惠贈感謝。英十三『小 唄閑話』に絡んで、小唄「筆のかさ」についての考察を述べる。また、「蘭 洲の代々」に関して、意見を述べる。	判断。 『延寿清話』9(大正14年10 月)の刊行年より大正14年と 判断。

974	増田五良	昭和26 / 1 / 1	昭和26 / 1 / 4	ハガキ
975	増田五良	昭和26 / 2 / 17	昭和26 / 2 / 17	ハガキ
976	増田五良	昭和26 / 4 / 3	昭和26 / 4 / xx	ハガキ
977	増田五良	昭和26 / 7 / 8	昭和26 / 7 / 9	ハガキ
978	増田五良	昭和26 / 7 / 18	昭和26 / 7 / 19	ハガキ
979	増田五良	昭和26 / 8 / 23	昭和26 / 8 / 23	ハガキ
980	増田五良	昭和26 / 9 / 2	昭和26 / 9 / 2	ハガキ
981	増田五良	昭和26 / 9 / 9	昭和26 / 9 / 10	ハガキ

もらい、盛会。会からポケット型の『海光』という小冊子を出そうという話が出ていて、自分と長田氏が編集を担当する。1月末には創刊できそうである。ついでに、貴方が『読書展望』に『寄稿用に書いた「よしこの節に就て」の原稿を載せてもよいか。

昭和26年賀状。冬山に大悲の眉の重ねり今宵阿弥陀の越え給ふは何所。黒木鶴足氏より冬山の句をいただき、蛇足を付けたとの旨を書き添える。

『金曜』第3巻初号は明日発送する。英十三氏新著『江戸小唄の話』は会で10部お受けした。

『金曜』26誌代受領。その後体調はいかがか。中谷氏も血圧高く用心が必要とのこと。また短いものでも寄稿してほしい。次号の編集が終わったら上京の予定、校正等遅れるかもしれない。

本月2日、三上雅清氏逝去。癌であった。見舞の際、金曜会は楽しかったと言われ、同人によろしくとも言われた。『金曜』29は御覧になったか。会計はやや楽になった。長田先生から久しぶりに原稿をいただけそうだ。

先日、中谷氏久々に来会、血圧も下がったと元気だった。玉稿の御送付、感謝。30号は編集済みなので次号に掲載する。

ただ今、中村氏原稿およびハガキを落手した。雑誌31号出来、本日発送する。貴稿原文、印刷所からまだ届かない、しばらく待つてほしい。次号分として、長田翁の原稿20余枚その他が集まっている。今回の中村氏ものは33号(10月)の巻頭に掲載したい。遅すぎる場合は、繰り上げる。

御静養中にもかかわらず雑誌の件で心づくし賜り、感謝。次号校正本日終了。14日頃発行の見込み。くれぐれも御自愛願う。

貴稿本日落手。32号は来週木曜までに発行。今度は長田翁の長い文を掲げた。中村氏へは西村氏とともに礼状を出したところ、折り返し挨拶のハガ

忍頂寺務「よしこの節」(『金曜』1.1、昭和24年1月)。「金曜」はもともと『海光』というタイトルの予定だったらしい。

切手部分が切り取られており、文章に欠落あり。書簡860(英十三)、書簡861(英十三)と内容的な関連あり。

992	松井佳一	昭和26/9/14	昭和26/9/15	ハガキ
991	松井佳一	昭和23/12/26	昭和23/12/26	ハガキ
990	松井佳一	昭和21/7/3	xx/xx/xx	ハガキ
989	町田嘉章	昭和11/1/1	昭和11/1/1	ハガキ
988	町田嘉章	昭和8/1/1	昭和8/1/1	ハガキ
987	町田嘉章	昭和3/1/1	昭和3/1/7	ハガキ
986	町田嘉章	大正15/1/1	大正15/1/8	ハガキ
985	町田嘉章	大正14/6/xx	大正14/7/3	ハガキ
984	町田嘉章	なし	大正14/xx/28	ハガキ
983	町田嘉章 (博三)	大正14/3/9	大正14/3/9	封書
982	町田嘉章	大正13/3/25	xx/xx/xx	ハガキ

キを頂戴した。明朝上京。雑誌は1ヶ月ずつ遅れているので、年内に第3巻12号完結のため、特集号を考えてみる。

『延寿清話』1の礼状。

B4版600字詰原稿用紙2枚。『延寿清話』毎号患贈感謝。第6冊「友志互見」を拝見して申し訳なく思った。お詫びする。湯朝氏を通しての『うた澤』誌上での御意見も面白く拝見。自分は清元の三味線弾きの芸歴逸話を調べた手稿を持っている。天保以降については、少しはまだ知られていない新材料を古老から聞いて筆記したものあり。寺や子孫を訪ねて調査したものもあるが、東京中がほとんど灰になった今では不可能な調査となってしまう。もし入用なら『延寿清話』に投稿してもよい。貴意を伺いたい。『延寿清話』7落手、感謝。約束の「清元芸人列伝」そのままになっていて申し訳ない。目下多忙のため猶予を願う。

印刷文面。東京放送局で和楽の曲目編成の手伝いをする事になったのに伴い、三味線五線音譜応用の教習所の稽古日・時間を変更する通知。

大正15年賀状。

昭和3年賀状。

昭和8年賀状。

昭和11年賀状。

転居通知。兵庫県水産試験場長を辞し、日本合同真珠株式会社で日本真珠研究所を主宰、金魚と淡水魚の研究を続けている。

御教示感謝。10月頃上京の予定だったが中止、御依頼の本も用立てできず、気にかかっている。先日、西村君から新年に帰神と聞いた。帰神の折にはぜひ会いたい。

今日久しぶりに神戸へ行って承ったが、御病気とのこと、心配している。

993 松井佳一 xx / 7 / 15

欠落

封書

全快を祈っている。今日は久し振りで中谷保二氏と面会した。巻紙一枚。『未摘花通解』はまだ入手できていない。ぜひ分けてほしい。なお、もし小生関係のもので金魚・鯉・鯉などに関するもので不用のものがあつたら譲ってほしい。「追伸」過日米東京の三田平凡寺氏が西村君方へ滞在、会いたいと言っている。

仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書目』には「九樽道人方壺散史『未摘花通解』」の記載があつて、「昭和十八年七月 松井氏へ譲渡ス。」と書入れあり。このことにより、本書間は昭和18年と推定される。

994 松井佳一 xx / 11 / 15  
995 松岡 大正 8 / 1 / 17

なし  
大正 8 / 1 / 19

ハガキ  
封書

先日は失礼した。書物についてお手数をかけている。御親切感謝。巻紙一枚。栗村氏は本日突然上京、先刻会見した。ニューヨーク為替は1ヶ月延期の件、銀行へ打合せ済み。フエロタンクステン品質の件など相談したい。三崎工場一覽を勧めているが同行難しい。アメリカカマツニサイキョーンネスへ、このマツニの意味判断できかねる、マッチの意味か。マッチは、グリユータート氏先年同様希望あり。値段は一昨年と同様だが品は不足のため強気の趣と聞く。同氏は解禁日時に開始したい意向。工場新築5、6月頃取りかかる。硫化鉱買入れ先あり、相談したい。渋谷君によるしく。過日拝受の玉稿『江戸往来』4へ掲載したので、送付する。活字印刷と違い、校正ができないので、誤植などのあつた場合は御諒願いたい。

絵ハガキ（鉄道開通当時ノ広重ノ錦絵）。忍頂寺務「センボ追考」（『江戸往来』1、4、昭和2年12月）。

996 松川弘太郎 なし  
997 松澤重太郎 昭和 12 / 1 / 1  
998 松澤重太郎 昭和 12 / 4 / 15

昭和 2 / 12 / 7  
昭和 12 / 1 / 1  
昭和 12 / 4 / 15

ハガキ  
ハガキ

昭和12年賀状。帰神を慶ぶ。私は3月限りで閑地に就いた。計35年間兵庫県立の中学に奉仕した。埼玉県熊谷の振出しを加えると38年になる。さして目覚ましいこともせずには終わった。淡路の調査を行つて目録でも作りたいたいと考えているが、往復に不便だから、一寸のことにはいかないだろう。



999	丸岡勇二郎	昭和5/1/1	昭和5/1/3	八ガキ	昭和5年賀状。	「歌舞伎座内丸岡勇二郎」とあり。忍頂寺務『清元研究』(春陽堂、昭和5年)について、当初は丸岡が昭和3年秋頃に出版を請け負ったが、結局実現せずに終わっている。
1000	三上雅清	昭和23/2/7	xx/2/7	八ガキ	昨日御下問の大阪門司間黒鉛運賃は1トンあたり350円、場合によっては300円でもいいとのこと。闇船の方がさらに安い場合もある。大阪より下りの荷物は僅少につき300円で喜んで積むとのこと、門司から大阪への運賃もほぼ同様とのこと。運賃の他、積地と揚地の人夫賃が1トンあたり100円くらいとのこと。昨日は記憶違いのことを言って恥ずかしい、恐縮に感じる。	八ガキ料金が50銭なのは昭和22年4月から昭和23年7月までの期間につき、昭和23年と判断。
1001	三河屋旅館	なし	昭和15/4/5	八ガキ	印刷文面。花の見ごろの案内。	絵八ガキ(桜花一目三万本の名所箱根小涌谷温泉 三河屋旅館附属鳳来園附近)。
1002	三河屋旅館	xx/1/1	xx/12/31	八ガキ	年賀状。	絵八ガキ(相州箱根小涌谷温泉 三河屋旅館)。
1003	三島廣吉	なし	大正6/12/17	八ガキ	この間は御多中にお邪魔して恐縮に思う。殊に育英会醸金取りまとめ方を御快諾、感謝。向後一層の力添えを願う。安倍君よりもよろしくとのこと。	絵八ガキ(三島医院邸宅)。差出人住所「淡路洲本」。
1004	水谷不倒 (司彦)	大正14/9/13	大正14/9/13	八ガキ	『延寿清話』惠贈、感謝。「酔余小言」中、平秩東作のことがあり、その前に何か記していたようだが、それは第何冊か。その号がお手許にあれば拝見したい。雑誌は頂戴するに及ばない。当該記事を一読したら返上する。御無理を願った雑誌、早速に惠投感謝。	
1005	水谷不倒	大正14/9/18	大正14/9/20	八ガキ		差出人住所「兵庫県武庫郡大社村(香櫨園)字森具」。
1006	溝江高信	大正13/5/3	大正13/5/3	封書	巻紙1枚。先般は御研究の雑誌惠贈感謝。お蔭をもって非常に参考になる。お申し越しの一中につき別冊『一中発祥地』を一部同封する。18日に京都・明福寺で法養を営み正午より一中節会開催。御清聴を願う。	「中発祥地」は忍頂寺文庫・小

1017	1016	1015	1014	1013	1012	1011	1010	1009	1008	1007
三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚 (玄龍)	三田村鳶魚
昭和2/3/22	昭和2/1/31	大正15/9/24	大正15/9/20	大正15/7/24	大正15/7/17	大正15/5/22	大正14/7/29	大正14/6/24	なし	大正13/2/28
昭和2/3/23	昭和2/1/31	大正15/9/26	大正15/9/21	大正15/7/24	大正15/7/17	大正15/5/23	大正14/8/1	大正14/6/24	大正14/6/19	大正13/2/28
ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ
『歌舞伎研究』丸岡氏より執筆の依頼があったのでお世話をしてほしい。	『雑文穿袋』返却の通知。	『雑文穿袋』貸与感謝。拝見次第返上する。	竹浦先生に大阪の狂歌に関する執筆を希望したい。宿所を失念のまま尊台へ申し上げる。『雑文穿袋』を借覧したい、近日鶴岡春三郎氏が上阪するので同氏が参上する。南木文庫とは誰のことか知りたい。	高文御投恵、万謝。菅君の分は林若樹君が近く狂歌に関するものを同じもので発表のはずなので困っている。『日本人』(内田注:『日本及日本人』か)へ回してはいかがか。指図を願いたい。	『彗星』へ掲出のための高文1篇を御無心申し上げる。本月31日までに御投与下されば幸甚である。	5月は御上京と御面晤の時を楽しみにしている。	『彗星』を呈上したが御覧下さったか。何か一篇御寄送をお願いしたい。	拙著御覧下さり満悦、心付があれば聞かせてほしい。定めて発明があるう。今夏は広島へ行くかもしれないので、会える機会もあるだろうと楽しみにしている。	『延寿清話』7にちなんで注進する。以下、諸文献からの鯨に関する記事の抄出。	今朝、崇文堂より『大江戸之研究』拝受、お礼まで。来月島原の八文字見物に行く折にお目にかかりたいものだ。
忍頂寺務「三升紋の新考察」	忍頂寺文庫A71『雑文穿袋』。	忍頂寺文庫A71『雑文穿袋』。	大正15年10月10日付鶴岡春三郎書簡(書簡675)によると、上阪は叶わなかったとのこと。	伝言を感謝する旨の記載あり。	忍頂寺務「酒のお江戸」(『彗星 江戸生活研究』1、6、大正15年8月)。				『延寿清話』7(大正14年4月)の「酔余小言」第1項、ナマズに関する説への意見。	野文庫に所蔵されず。

1028	三田村鳶魚	昭和6/7/27	昭和6/7/27	ハガキ
1027	三田村鳶魚	昭和6/5/7	昭和6/5/8	ハガキ
1026	三田村鳶魚	昭和5/9/29	昭和5/9/28	ハガキ
1025	三田村鳶魚	昭和5/1/1	昭和5/1/1	ハガキ
1024	三田村鳶魚	昭和4/1/18	昭和4/1/19	ハガキ
1023	三田村鳶魚	昭和3/9/19	昭和3/9/19	ハガキ
1022	三田村鳶魚	昭和3/7/9	昭和3/7/9	ハガキ
1021	三田村鳶魚	昭和3/1/1	昭和3/1/1	ハガキ
1020	三田村鳶魚	昭和2/10/27	昭和2/10/28	ハガキ
1019	三田村鳶魚	昭和2/6/28	昭和2/6/28	ハガキ
1018	三田村鳶魚	昭和2/5/10	昭和2/5/10	ハガキ

『清元研究』1および12を紛失、御才覚下されたく、御無心申し上げます。  
『慧星』に何か書いてほしい。

去る26日『慧星』別集として西鶴輪講を始め『一代男』にとりかかった。  
やがて分冊で発行のつもり。心付があったら聞かせてほしい。毎度ながら  
『慧星』に寄稿を願いたい。先日霞亭君入札物の内で『色茶屋諸分車』が  
上方書肆の手で落札された。錦地で収蔵の御仁について情報を聞きたい。  
市河翁が先般物故、こちらはちょっと困っている。

昭和3年賀状。

『西宮昔噺』落掌、感謝。

毎度のお世話ありがとうございます。鶴首している。

新刊高美珍重に存じ奉る。お礼から欲が出て、今月はぜひ『慧星』に何か  
書いてほしい。

昭和5年賀状。

珍しい書物を御投恵、感謝。

先日2世義太夫の墓のことを相認めて南木君へ呈覧したが、尊台はお申し  
聞きになったか。

珍書恵投、多謝。折柄、『今昔』へ御加勢を願ひ上げる。昨日より『浮世  
風呂』輪講を始めた。

（『歌舞伎研究』12、昭和2年  
5月）。

三田村鳶魚の日記の昭和6年  
4月15日に「今夜、急に思ひ  
より巻紙に認め、明朝、南木  
氏へ」とあり。

三田村鳶魚の日記の昭和6年  
7月27日に「忍頂寺氏、諸分  
重宝記到来」とあることによ  
り、昭和6年と判断。書簡中  
に「折柄今昔へ御加勢願上候」

三田村鳶魚

昭和6/8/8

昭和6/8/8

ハガキ

『花車』珍しく拝見、連中へも見せよつと思つ。暫時拝借したい。毎度いろいろお世話ありがたく、感謝する。

とあるのは、『今昔』の発行元が、第2巻第8号(昭和6年8月)より、上田泰文堂から島田筑波個人へ変更になることを踏まえての言。小野文庫359『京大坂茶屋雀ノ諸分調方記(色茶屋頻早顔』(務写)。

三田村鳶魚

昭和7/6/1

昭和7/6/1

ハガキ

別封で『細見図』を返上する。来5、6日に満州見物へ出発、途上拝晤で

「随筆吉原細見(その二)」(『今昔』2/11、昭和6年11月)に「神戸の忍頂寺務氏が遠く所蔵の新改吉原細見花車を送り越し、愚考を求めらる、此の細見図に題筆ありて、花車といふ名題なること分明なり」とあり。忍頂寺文庫・小野文庫には所蔵されず。仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書目』では該書の項目に取り消し線を施した上で、「昭和十九年三月タツミヤ売却一〇〇」と書入れがなされる。

三田村鳶魚の日記の昭和7年

きること楽しみにしている。

1031 三田村鳶魚 昭和7/6/9 八ガキ

出発の節はいろいろお世話下さり感謝。天気もよく船中は家にいる通りである。お礼まで。

6月1日に「細見図を忍頂寺氏へ返送」とあり。昭和7年6月7日、神戸から満州へ出発する三田村鳶魚を務・菅竹浦らが見送っている。『語文』70所収の青田論参考照。

1032 三田村鳶魚 昭和7/6/19 八ガキ

大連神町の土肥顯氏方より調査資料の印刷物を送るので保管を願う。今朝出発の際に依頼したので、多分2、3日中に出荷するだろう。お請け取りになったら、長春満洲屋方笠木良明気附で御一報を願う。

絵八ガキ（奉天神社）。写真の面にも文あり。差出地は奉天駅前武蔵屋（鳶魚の日記にも記載ある旅館）。土肥氏より荷物が25日に着いた旨の務の書入れあり。

1033 三田村鳶魚 昭和7/6/24 八ガキ

昨朝到着、当分長春富士町四ノ二八満洲国県参事会館内に寄宿する。気付郵便物の保管をお願い申し上げる。

絵八ガキ（長春城内北大街）。

1034 三田村鳶魚 昭和7/7/15 八ガキ

明後日出発のつもりでいる。またまたお世話をお願い申し上げる。西宮百太夫および『武庫千鳥』のこと、お心添え下されたい。

絵八ガキ（朝鮮風俗 河辺の涼み）。昭和7年7月19日、満州より神戸へ帰港。三田村鳶魚の日記の昭和7年7月19日に、鳶魚、務、多田覚の3名で西宮神社に行き、社司・吉井太郎に面会したこと、『武庫の川千鳥』を借用したことの記載あり。翌7月20日夜には三田

1043	1042	1041	1040	1039	1038	1037	1036	1035
三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚
昭和9/9/24	昭和9/4/17	昭和9/3/14	昭和9/2/15	昭和8/1/1	昭和7/8/12	昭和7/8/25	昭和7/7/27	昭和7/7/24
昭和9/9/25	昭和9/4/18	昭和9/3/14	昭和9/2/15	昭和8/1/1	昭和7/8/12	昭和7/7/xx	昭和7/7/28	昭和7/7/24
ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ

昭和8年賀状。  
西鶴輪講の案内。2月18日午後1時、『万の文反古』<sup>1</sup>。  
西鶴輪講の案内。18日午後1時、『万の文反古』<sup>2</sup>。  
西鶴輪講の案内。22日午後1時、『万の文反古』<sup>3</sup>。  
昨夜は清談、快哉に存じる。拝見の俳書中に「亀山」という者があれば、御抄示願いたい。紀国屋2代目文左衛門の号は「亀山」である。宝暦の末に出家してからは明西と名のり、安永四年に死去。

唯今帰宅した。憚りながら御休神下されたい。  
大名の踏み倒しについての請願が明治23年の帝國議會に出て大騒ぎとなつたことがある、このお調べは面白いだろうと思つた。  
満州国見学往来に際し世話になつたことへの礼状（印刷文面）。  
錦地は東京より涼しいように新聞で眺めている。『武庫の川千鳥』<sup>4</sup> 読了、返送する。よろしくお願い申し上げる。

村鳶魚を務・川嶋禾舟・菅竹浦・太田陸郎ら陳書会会員や南木芳太郎が囲む会合が開かれる。『語文』70所収の青田論考参照。忍頂寺文庫H55 吉井良秀『武庫の川千鳥』（大正10年7月）。著者の吉井良秀は吉井太郎の父で西宮神社神職。

差出日は印刷されたもの。  
絵ハガキ（南満州鉄道会社製・天辺の月）。忍頂寺文庫H55 吉井良秀『武庫の川千鳥』（大正10年7月）。

この回、務は参加せず。  
この回、務は参加せず。  
三田村鳶魚の日記の昭和9年9月23日に「月よし、忍頂寺氏を訪ふ、其著潮来舟を貰ひ帰る」とあり、昨夜の「清談」とはこのことを指す。

1045 1044  
三田村鳶魚 昭和10/1/1  
三田村鳶魚 昭和10/1/1  
三田村鳶魚 昭和10/1/15  
ハガキ 昭和10/1/1  
ハガキ 昭和10/1/15

1046  
三田村鳶魚 昭和10/10/16  
三田村鳶魚 昭和10/10/16  
ハガキ 昭和10/10/16  
信州へ参り昨夜帰宅、何よりの品を拝受、お礼申し上げます。瓦板の御返却、  
拝受した。  
したいと思う。『八卦 方』を見つけたので、このことを話したい。

1047  
三田村鳶魚 昭和10/10/31  
三田村鳶魚 昭和10/11/1  
ハガキ 昭和10/11/1  
お留守のところへ恩借2点返上しておいた。またまた寺へ出かけるので、  
帰宅後に参上したい。

1048  
三田村鳶魚 昭和10/11/11  
三田村鳶魚 昭和10/11/12  
ハガキ 昭和10/11/12

昨夜はお邪魔いたし、いろいろお世話になった。その節に拝見の享保21年  
細見のうち、朝日如来はどこにあるか写し落とした。何卒お聞かせ下され  
たい。また『豊あし原しら浪くとき』を拝見したい。唯今恩借の分を返上  
に推参する節にお見せ下されたくお願い申し上げます。

1050 1049  
三田村鳶魚 昭和11/1/1  
三田村鳶魚 昭和11/1/1  
三田村鳶魚 昭和11/1/29  
ハガキ 昭和11/1/1  
ハガキ 昭和11/1/29

昭和11年賀状。  
写本で結構なので、『下職原』写しを拝借したい。これを写した後、逐次  
拝借して写したい。お暇の節に御来話を。

三田村鳶魚の日記の昭和10年  
10月31日に「夜、忍頂寺氏に  
ゆく、不在、借用瓦版二点留  
置」とあり。

三田村鳶魚の日記の昭和10年  
11月10日に「忍頂寺氏に往く、  
瓦版十点借りて帰る」とあり。  
忍頂寺文庫G175,6,13「新板  
豊あし原しら浪くとき」。書簡  
中にある「享保廿一年細見」  
とは、天理大学附属天理図書  
館蔵『所縁櫻』（享保21年春、  
忍頂寺務旧蔵）のことか。

三田村鳶魚の日記の昭和11年  
1月28日に「忍頂寺氏へ瓦版  
十一一点返却、下職原のうつし  
をかりる」とあり。務旧蔵『吉

1051

三田村鳶魚 昭和11 / 2 / 28

昭和11 / 2 / 28

ハガキ

来日曜日(1日)午後1時頃に参上する。

原下職原』は後に赤木文庫へ流出。『語文』70所収の青田論  
参考照。

1052

三田村鳶魚 昭和11 / 3 / 12

昭和11 / 3 / 12

ハガキ

先日お願いした御蔵書の拝見に、15日午後1時頃より山田氏同伴で参堂するので、よろしくお願い申し上げます。

三田村鳶魚の日記の昭和11年3月15日に「山田清作氏を訪ひ、同道、忍頂寺氏に往き、いとなみ六方、色男栄万蔵を借りて帰る」とあり。  
三田村鳶魚の日記の昭和11年4月14日に「忍頂寺氏より陳

1053

三田村鳶魚 昭和11 / 4 / 14

昭和11 / 4 / 14

ハガキ

『陳書』恵投、多謝。拝借物の返上に参堂するつもりが寒さに怯み御無沙汰している。暖気次第夜分にて。

三田村鳶魚の日記の昭和11年4月14日に「忍頂寺氏より陳



1054 三田村鳶魚 昭和11/5/3 昭和11/5/4

ハガキ

この頃は毎日外出に取紛れており、是非お訊ねしたいと思いつながら拝借物を抱えて御無沙汰している。明後夜か明後々夜に参上したい。

書六号到来」とあり。

1055 三田村鳶魚 昭和11/6/7 昭和11/6/7

ハガキ

昨夜は外出中にお出で下さり、失礼した。細見4冊落掌。なお、昆布先刻賞味、結構である。お礼申し上げます。

三田村鳶魚の日記の昭和11年5月5日に「忍頂寺氏に往く、吉原下職原、新やくはらい、十二段、以上三点借り、甚孝記、傾国乱髪一点返済」とあり。

1056 三田村鳶魚 昭和11/7/15 昭和11/7/16

ハガキ

『当世坐持話』2、14、三下りのめりやすの「座がより哥」が分からない。教えてほしい。19日にはお邪魔したい。

三田村鳶魚の日記の昭和11年6月6日に「不在中、忍頂寺氏来朝、先日の細見返済あり」とあり。

1057 三田村鳶魚 昭和11/7/19 xx/7/20

ハガキ

今日参堂の儀を申し上げていたが、雨のため出かけなかった。明日よりまた小石川の寺へ参るため、26日以後参上したい。その節、『坐持話』を持参する。高教を仰ぎたい。申し訳まで。

7月19日に務訪問の予定であったことと、『当世坐持話』の話題より、昭和11年と判断。

1058 三田村鳶魚 昭和11/8/7 昭和11/8/7

ハガキ

唯今帰宅した。『吉原六方』の挿画の写しが出来たので返上に何つつもり。『古鑑』御ゆるりと御使用下されたい。米山堂お願いの瓦版のこと、何分にもよろしく。

忍頂寺文庫H13『いとなみ六方』(「よしはら六方」、「当世こつた揃」、「いとなみ六方」を収める)。忍頂寺務「ふるほにや、にさつかへや物語」(『古本屋』5、昭和3年5月)に、蟹行堂主人(内田注…荒木書店主人の荒木伊兵衛)の好意で平出文庫本の写本を得た旨

1060 1059

三田村鳶魚 昭和12 / 1 / 1  
三田村鳶魚 昭和12 / 3 / 5

昭和11 / 12 / 31  
昭和12 / 3 / 5

ハガキ

昭和12年賀状。  
日和に美濃紙の裏打ちをいたしたく、先度用紙をお見せ下さった、あの紙の名と買ったところをお教え下されたい。お尋ねいたしたく御都合を伺い上げる。

が述べられる。忍頂寺務「いと  
なみ六方（特別附録・江戸  
時代文芸資料）」（『東京新誌』  
2、3、昭和3年5月）、「いと  
なみ六ほう」（『陳書』2、昭  
和7年1月）、「吉原六方とい  
となみ六方」（『江戸時代語研  
究』1、2、昭和10年4月）に  
本書の紹介・翻刻あり。『古鑑』  
は『洞房古鑑』、6月15日に鳶  
魚から務へ貸借。

1061

三田村鳶魚 昭和12 / 5 / 21

昭和12 / 5 / 22

ハガキ

お手製のお品、只今落筆、感謝。数日後に呈覽する『日本人』（内田注）『日本及日本人』か）には幾分の血気があるだろうか。果たして老健を証することができるか否か。

三田村鳶魚の日記の昭和12年  
5月21日に「忍頂寺氏より手  
製の煮山椒一壺届く、感謝す  
べし」とあり。

1062

三田村鳶魚 昭和12 / 8 / 24

昭和12 / 8 / 24

ハガキ

『翠箔志』只今届いた。過分の眼福、多謝。少時拝借し、早速に返上する。

三田村鳶魚の日記の昭和12年  
8月24日に「忍頂寺氏より翠  
箔志届く、懇情多謝」とあり。

1063 三田村鳶魚 昭和12/9/14 昭和12/9/14 八ガキ 『金銀御製造控』ほか2点落掌、感謝。早速写してから返上する。

1064 三田村鳶魚 昭和12/9/24 昭和12/9/24 八ガキ 『価帖独案内』、『仮宅色歌仙(マ)』、横本値段付安永細見2冊、天明細見2冊、只今届いた、感謝。少時拝借する。

天理大学附属天理図書館蔵『翠箔志』(忍頂寺務旧蔵)。仙台忍頂寺家蔵『静村文庫書目』では『翠箔志』の項目に取り消し線を施した上で、「原本天理寄贈」と書入れがなされる。三田村鳶魚の日記の昭和12年9月14日に「忍頂寺氏より金銀御製造扣、陳書、神戸事変と滝善三郎、以上三点郵致、いつも親切」とあり。『金銀御製造控』。

1065 三田村鳶魚 昭和12/9/28 昭和12/9/28 八ガキ 恩借7点を別封で返上する。お礼申し上げます。

1066 三田村鳶魚 昭和13/1/1 昭和13/1/1 八ガキ 昭和13年賀状。

1075	1074	1073	1072	1071	1070	1069	1068	1067
三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚	三田村鳶魚
昭和13/10/13	昭和13/9/14	昭和13/9/4	昭和13/8/8	昭和13/7/9	昭和13/6/29	昭和13/6/7	昭和13/5/23	昭和13/3/19
昭和13/10/13	昭和13/9/14	昭和13/9/4	昭和13/8/8	昭和13/7/9	昭和13/6/30	昭和13/6/7	昭和13/5/23	昭和13/3/21
ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ	ハガキ
来18日京都へ参り、3日滞在の予定、あるいは一寸お目に掛かりに出か	『江戸読本』5の巻頭言、御投与をお願い申し上げます。勝手ながら来月3日まで届くよう御配慮下さい。	『大日』を呈覧する、お閑の節にお読み下されば大慶。『江戸読本』題言10月分をお願いいたしたく、当月末までには是非御筆願う。	恩借品2点、別封で返上する。御都合にて来月にも御執筆をお願い申し上げます。	貴書を拝見して安心した。山田氏へ芳情を伝えておく。	『為替方月勘定』ほか1点落筆、御芳情に感謝。暫時拝借する。これは何藩であるか。	恩借の書物4点、別封で返上する。つまらぬものながら見当たるままに同封して呈上する。	例の香味、『陳書』とも拝受、多謝。恩借の書物も手間取って申し訳ない。写したら返上する。	御懇書拝受、その上珍書4冊恩貸、毎度ながら感悦。
	本『1、6、昭和13年11月』	本『1、6、昭和13年11月』	三田村鳶魚の日記の昭和13年8月8日に「借物二点、忍頂寺氏へ返送」とあり。	三田村鳶魚の日記の昭和13年7月6日に「忍頂寺氏へ洪水見舞の電報」、昭和13年7月9日に「忍頂寺氏、無難のよし来書」とあり。	三田村鳶魚の日記の昭和13年6月29日に「忍頂寺氏より御為替方月勘定之留白門新柳記届く」とあり。『為替方月勘定』。	三田村鳶魚の日記の昭和13年6月6日に「忍頂寺氏へ借物四点返送」とあり。	三田村鳶魚の日記の昭和13年3月19日に「珍本四点、忍頂寺氏貸与」とあり。	三田村鳶魚の日記の昭和13年3月19日に「珍本四点、忍頂寺氏貸与」とあり。

1076 三田村鳶魚 昭和13/10/16

昭和13/10/16

(中野昭和通局)

昭和13/10/17

けるかもしれない。『江戸読本』の連中同道につき、どうなるか。京都に着いたら連絡する。

当地出發19日午前9時のツバメに変更したので、間にあいかね、残念である。

1077 三田村鳶魚 昭和13/10/21

ハガキ

事情があつて京都市は取り止めた。いろいろ御配慮、多謝。

1078 三田村鳶魚 昭和13/10/31

ハガキ

高文早速拝受、感謝。すぐに連中へ渡す。御礼まで。

1079 三田村鳶魚 昭和13/12/12

ハガキ

宝曆14年春『富士の袖』入手、これで大夫の問題たしかになり、雀庵の説の確認が出来た。一涉次第御覧に入れたい。『江戸読本』7、差し上げたと思う。8では久々に清元の研究を楽しみにしている。

1080 三田村鳶魚 昭和13/12/21

ハガキ

『富士の袖』御返附、『志家位名見』貸与、あわせて落筆。後者は如何にも珍物、誠に眼福と喜んでゐる。勸読次第返上する。この暮れは珍しい書物を買えた。世間の恩恵、ありがたい。

三田村鳶魚の日記の昭和13年10月16日に「忍頂寺氏より神戸陳書會、十九日例集へ出席の打合せあり、十九日出發なれば間に合ふまじきよし返事」とあり。

三田村鳶魚の日記の昭和13年10月20日に「夜、笹本氏来り、京都市見合せにすることなる」とあり。

忍頂寺務「巻頭言」(『江戸読本』16、昭和13年11月)

三田村鳶魚の日記の昭和13年12月10日に「大阪、宮本より富士の袖、丸岡藩道中御供頭勤方各一冊届く」とあり。

三田村鳶魚の日記の昭和13年12月14日に「忍頂寺氏へ、吉原通返送、富士の袖を貸す、同封」、昭和13年12年21日に「忍頂寺氏より富士の袖返付、志家位名見貸与、これは珍物なり」とあり。忍頂寺文庫F 37

1081 三田村鳶魚 昭和14/3/15

昭和14/3/15 八ガキ 山田氏より借り受けたのでお届けする。ゆるゆると御覧下されたい。御用

濟の節は山田氏へ御返附を。

『吉原/女郎/評判 志家位  
名見』。

1082 三田村鳶魚 昭和14/3/26

昭和14/3/26 八ガキ 勝手ながら次号へ掲載したいので、清元原稿を急いでお遣わし下されたい、

そのつもりで締切を設定している。

忍頂寺務「忍逢春雪解」(『江戸読本』2・6、昭和14年5月)。  
三田村鳶魚の日記の昭和14年3月26日に「浜家熊雄氏、静村氏の手紙持参にて来訪あり」とあり。

1083 三田村鳶魚 昭和14/4/26

昭和14/4/26 八ガキ 昨日締切の清元研究を急いでお遣わし下されたい。勝手の儀で恐れ入るが、是非お遣わしのほどお願い申し上げます。あるいは少しでもよい、くれぐれ

もお願ひ申し上げます。

忍頂寺務「忍逢春雪解」(『江戸読本』2・6、昭和14年5月)。  
三田村鳶魚の日記の昭和14年4月28日に「忍頂寺氏よりの書物五点、笹本氏持参により預置、忍頂寺氏原稿間に合す、鈴木氏へ依頼状出す」とあり。  
忍頂寺務「忍逢春雪解」(『江戸読本』2・6、昭和14年5月)。  
三田村鳶魚の日記の昭和14年4月29日に「忍頂寺氏より木のめの佃煮到来」とあり。

1084 三田村鳶魚 昭和14/4/29

昭和14/4/30 八ガキ 別封落掌した。なお、別包して好物をお遣わし下さり、御懇情ありがたく

お礼申し上げます。

1085	三田村鳶魚	昭和14/5/11	昭和14/5/11	ハガキ	来月は増頁のほすにつき、清元研究を御送与願い上げる。図彙は「百人一首のお茶ひき」、「都々一つ系の扇歌」、右2点にいたしたく解説を御無心する。図彙は若いものを取り合わせたい。左様にお心添えお願い申し上げます。	忍頂寺務「道行旅路の嫁入（上）」・「江戸図彙 都々一坊扇」・「江戸図彙 お茶を挽く」(『江戸読本』2・7、昭和14年7月)。
1086	三田村鳶魚	昭和14/5/22	昭和14/5/23	ハガキ	清元研究ありがたく拝受した。続々の御援助をお願い申し上げます。『七遊談』お見せ下さり、感謝。少時拝借する。	忍頂寺務「道行旅路の嫁入（上）」(『江戸読本』2・7、昭和14年7月)。 三田村鳶魚の日記の昭和14年5月22日に「忍頂寺氏より清元研究及び七遊談冊一」(ママ)届く」とあり。
1087	三田村鳶魚	昭和14/6/3	昭和14/6/3	ハガキ	珍肴をお遣わし下さり、感謝。ありがたく賞味した。	三田村鳶魚の日記の昭和14年6月2日に「忍頂寺氏より木の芽のつくだに届く」とあり。
1088	三田村鳶魚	昭和14/6/28	昭和14/6/28	ハガキ	解説落掌、御筆芳感謝。チャラ金のこと、お心添えお礼申し上げます。	「江戸図彙 都々一坊扇」(ママ)・「江戸図彙 お茶を挽く」(『江戸読本』2・7、昭和14年7月)。 三田村鳶魚の日記の昭和14年6月28日に「静村氏より図彙原稿届く」、昭和14年7月2日に「忍頂寺氏、チャラ金二片送付」とあり。
1089	三田村鳶魚	昭和14/7/25	昭和14/7/26	ハガキ	笹本氏より申し上げた図彙解説および清元研究、勝手ながら折り返し送附下さるようお願い申し上げます。	
1090	三田村鳶魚	昭和14/8/12	昭和14/8/12	ハガキ	当月、御迷惑ながら是非御寄稿をお願い申し上げます。解説は残り2点分を	忍頂寺務「歌へすく餘波大

1091

三田村鳶魚

昭和14/8/26

昭和14/8/27

ハガキ

お遣わし下されたい。また『七遊談』の中より妾を出したく、この分も同様に願ひ上げる。9月号昨日出来、只今は御入手と思う。図彙解説、手際怪しく間に合わせた。清元の方、何分にもお願い申し上げます。

津繪「『江戸読本』2、10、昭和14年9月」か。

忍頂寺務「歌へすく餘波大津繪」(『江戸読本』2、10、昭和14年9月)か。三田村鳶魚

の日記の昭和14年8月23日に「忍頂寺氏より江戸図彙解説間に合はぬよし申来る、よつて二種の解説を草す」とあり。

1092

三田村鳶魚

昭和14/8/28

昭和14/8/28

ハガキ

御執筆、感謝。唯今届いたので早速通達する。また、祝小判等お心入ありがたく、お礼申し上げます。

忍頂寺務「歌へすく餘波大津繪」(『江戸読本』2、10、昭和14年9月)か。三田村鳶魚の日記の昭和14年8月27日に「今昼、忍頂寺氏より百足小判等郵致」とあり。

1093

三田村鳶魚

昭和14/9/18

昭和14/9/18

ハガキ

別封にて『遊婦里会談』ほか5点返上する。御查收願う。

三田村鳶魚の日記の昭和14年9月17日に「静村氏へ返送包裏、遊婦里会談、志家位名見、百人一首、都々逸つゑ、北国順礼唄方便、仕方俳諧各一冊」とあり。忍頂寺文庫A40『遊婦里会談』。

1094

三田村鳶魚

昭和14/9/28

昭和14/9/28

ハガキ

清元原稿落掌、お礼申し上げます。拝借物はなお2点残っている。今月の解説が済んだので来月早々に返上したい。先日笹本へお申し聞きの由につき、右申し上げる。

忍頂寺務「色増艶夕映」(『江戸読本』2、11、昭和14年10月)か。三田村鳶魚の日記の昭和



1095

三田村鳶魚 昭和14/10/23

昭和14/10/23

ハガキ

別封で『吉原大黒舞』、『七遊談』を返上する。毎度ながら清元原稿をよしくお願い申し上げる。

14年9月28日に「忍頂寺氏より清元原稿届く、直に柴田氏へ」とあり。

忍頂寺務「歳旦 豊春名集寿

(上)」「江戸読本」3・1、

昭和14年12月)か。三田村鳶

魚の日記の昭和14年10月22日

に「忍頂寺氏へ七遊談一冊、

吉原大黒舞一冊返送、右、明

朝發送」とあり。忍頂寺文庫

F21『吉原大黒舞』。本書につ

いては忍頂寺務「花街本に就

て」(『書物往来』12、大正14

年9月)に紹介あり。『七遊談』。

忍頂寺務「歳旦 豊春名集寿

(上)」「江戸読本」3・1、

昭和14年12月)か。

1096

三田村鳶魚 昭和14/11/29

昭和14/11/29

ハガキ

高文お送り下さり、感謝。御多般の中、一人に思う。先度はなお一度お目にかかれることと楽しみだったが、惜しいことだった。来春にもなれば機会もあるだろうか。

昭和15年賀状。当年も江戸読本の御寄稿何分宜しく。

『女意亭有嘶』とともに3点落掌、拝借する。早速に読了し御返済する。

このうちから江戸図彙へ出したいと思う。御懇志千万感謝、清元研究のこと、何分お願い申し上げます。

1098

三田村鳶魚 昭和15/2/28

昭和15/3/2

ハガキ

昭和15年賀状。当年も江戸読本の御寄稿何分宜しく。

『女意亭有嘶』とともに3点落掌、拝借する。早速に読了し御返済する。

このうちから江戸図彙へ出したいと思う。御懇志千万感謝、清元研究のこと、何分お願い申し上げます。

三田村鳶魚の日記の昭和15年

2月28日に「忍頂寺氏より、

女立思々々亭有嘶、男女不躰

形、諸国色里働帳独案内、計

三点見せてくれる」とあり。

忍頂寺文庫E33『堺町萱屋町

役者/女房小娘評判 女意亭

1105	三田村鳶魚	昭和16/8/3	昭和16/8/3	ハガキ	再往の御書面、ありがたく拝見。10日出立で錦地へ向かうので、その上は
1104	三田村鳶魚	昭和16/8/1	昭和16/8/1	ハガキ	御迷惑なことをお願いしたところ、早速御高配下さり、感謝。子供が風邪の様子につき一両日後に出発時日を定めた。何分よろしく願ひ上げる。「行間の尚々書」神戸高商のことは幸田成友氏より承った。多分、県立の新校ではないかと思う。同氏が大黒の子孫より貰い受けるとか、江戸の大黒の家に伝存する書類全部ということである。
1103	三田村鳶魚	昭和16/1/1	昭和16/1/1	ハガキ	三田村鳶魚の日記の昭和16年7月21日に「大黒長左衛門の事は資料不十分にて深入出来ず」、昭和16年7月26日に「神戸高等商業校の長左衛門書類に付、忍頂寺氏へ依頼状出す」、昭和16年8月24日に「忍頂寺氏より神戸商大の大黒長左衛門文書につきて返事あり」とあり。小野文庫 <sup>385</sup> 『大黒屋関係文書』と関連あるか。
1102	三田村鳶魚	昭和15/9/7	昭和15/9/7	ハガキ	涼暑不定、御様子を伺い申し上げる。しばらく御無音で御加減いかがかと、老人臭くなつて妙に気に掛かるまま拝呈する次第。
1101	三田村鳶魚	昭和15/5/9	昭和15/5/9	ハガキ	恩借の細見2点を別封で返上する。御都合にもよるが、なるべく清元研究をお遣わし下さるようお願いしたい。
1100	三田村鳶魚	昭和15/4/5	昭和15/4/5	ハガキ	筆を願っている。
1099	三田村鳶魚	昭和15/3/27	昭和15/3/28	ハガキ	昨日山田清作氏来話、製本のことを話しておいたので、直接遣わしてよい。享保細見2冊落掌、芳情感謝。この頃写しものが多く、手遅れになつてい

有嘶。

三田村鳶魚の日記の昭和15年4月5日に「忍頂寺氏より享保細見二冊貸与」とあり。

三田村鳶魚の日記の昭和15年5月9日に「細見二点、静村氏へ返送」とあり。

お世話をかけるが平にお願い申し上げます。出発の節はまた連絡する。

1106 三田村鳶魚 昭和16/8/5 昭和16/8/5

ハガキ 懇々のお世話、感謝。前便で申し上げたとおり10日出発に決まった。夜の列車のもりである。荊妻をつけて差し遣わすので、何分よろしくお願い申し上げます。

1108 1107 三田村鳶魚 昭和16/9/17 昭和16/9/18  
三田村鳶魚 昭和16/9/27 昭和16/9/29

ハガキ 一昨夜に入浴、10日ほど繁多であるので、その後にもまた連絡する。いろいろのお世話になり、感謝。お陰様で先刻安着した。委細は後に申し上げます。「行間の尚々書」銀坐函面も届いた。御芳志感謝。令内へよろしく。

昭和16年8月5日付三田村鳶魚書簡(書簡<sup>1106</sup>)との関連から昭和16年と推定。三田村鳶魚の日記の昭和16年8月10日に「夜、広居をつれて八重、神戸に向ふ、此兎、帰満に船室を得ること難く、忍頂寺氏の世話をうける」とあり。

三田村鳶魚の日記の昭和16年8月10日に「夜、広居をつれて八重、神戸に向ふ、此兎、帰満に船室を得ること難く、忍頂寺氏の世話をうける」とあり。

差出人住所「妙心寺小方丈内」。三田村鳶魚の日記の昭和16年9月7日に「忍頂寺氏より銀座役所向届く、折返し聞合せを出す」、昭和16年9月25日に「妙心寺を出て神戸に向ふ、忍頂寺氏の家に投ず、旧債八十円、残額三十円返済、是にて完済、これは大成経購入の時に借用せし旧債にて、足掛四年目に返済出来たる也」、昭和16年9月27日に「忍頂寺氏の家を出て帰京の

1109 三田村鳶魚 昭和16/11/17 昭和16/11/17

ハガキ 過日、偶然『浪速叢書』10を見ていたところ、454頁に忍頂寺静村という淡路の画家のことが載っていた。如何にも奇妙に思ったので、御存知のことではあるが申し上げる。小子の再入洛あるいは年内にあるだろうか、先方次第である。よんどころない寒さの辛抱を要することになるかもしれない。それは来月初めか。かなりのところはお断りするつもりである。去る6日に入洛、只今帰宅した。年末は多用で差し控えていたが、明春入洛の節に拝芝を得たい。

1110 三田村鳶魚 昭和16/12/20 昭和16/12/21

ハガキ 毎度結構な品を差し遣わし下さり、感謝。「追記」濱家君へお礼状を認めましたが、それを見失ってしまった。同君へ御口誼願い上げる。22日に帰宅。この度は家族がお世話になり、お礼申し上げます。恩借の2冊は荊妻が持参して返上する。また、急がないので御都合のよい節に『緯学源流興廃考』のこと、白雲堂へお聞き合わせ下されたい。

1111 三田村鳶魚 昭和17/1/1 昭和17/1/1

ハガキ 折角のお出でに残念なことであった。大東出版社の校正が出たため急に帰京し、この度も一向に見物できなかった。老後に閑日なきこと、実にお恥ずかしく思う。濱家君へよろしく御伝声を願う。白雲堂の儀、くれぐれもお願い申し上げます。

1112 三田村鳶魚 昭和17/1/15 昭和17/1/16

ハガキ 白雲堂のこと、面倒をかけた。お礼申し上げます。

1113 三田村鳶魚 昭和17/5/24 昭和17/5/25

ハガキ 三田村鳶魚の日記の昭和16年11月17日に「先日、大阪訪碑録中ニテ、淡路ノ画家ニ忍頂寺静村ト云フガアルヲ知り、面白ケレバ神戸へ通ス」とあり。

1114 三田村鳶魚 昭和17/5/29 昭和17/5/29

ハガキ 三田村鳶魚の日記の昭和17年4月21日に「白雲堂より入手し得ざりし緯学源流興廃考につき、忍頂寺氏へ手紙」とあり。

1115 三田村鳶魚 昭和17/6/9 昭和17/6/10

ハガキ 三田村鳶魚の日記の昭和17年4月21日に「白雲堂より入手し得ざりし緯学源流興廃考につき、忍頂寺氏へ手紙」、昭和17年6

途に上る」とあり。

1123	三田村鳶魚	昭和18/12/5	昭和18/12/6	ハガキ	御助勢、感謝。写しかけ陽明一点(「於御前演舌仕候心覚」、三三七八	小野文庫 <sup>379</sup> 「紙衣膳 万里砂(ほ
1122	三田村鳶魚	昭和18/11/10	昭和18/11/10	ハガキ	御助勢、万謝。先便で申し上げたとおり、抜き写しに変更した。中村君の御慶事を祝う。自分は段取りを立てた上で帰京する心づもり、月末あるいは来月初めにもなるだろうかと思うので、中村君の御援助を願えれば十分と思う。なおまだ御相談したいことはあるが、13日に会う機会に譲る。	差出人住所「京都花園妙心寺町智勝院内」。「中村君御慶事」は中村幸彦の結婚(昭和18年11月18日)を指す。本報告書所収「忍頂寺務年譜データベース」の「昭和18/11/13」項に「智勝院の鳶魚を訪い、十四日夜まで滞在し仕事を手伝う」とあり。
1121	三田村鳶魚	昭和18/11/8	昭和18/11/8	ハガキ	御来援、感謝。昨日お願いした分は抜き写しにしたい。まず、巻頭にある『元亨宗論』だけ御筆劣下さるようお願い上げる。御都合がつけば時々御入来願えないだろうか。	差出人住所「京都花園妙心寺町智勝院内」。
1120	三田村鳶魚	昭和18/10/26	昭和18/10/27	ハガキ	御来援を願いたい。	差出人住所「京都花園妙心寺町智勝院内」。
1119	三田村鳶魚	昭和18/10/18	昭和18/10/19	ハガキ	23、24日に入洛。大阪天王寺へ行く用事があるので月末に会えるかと思う。	差出人住所「京都花園妙心寺町智勝院内」。
1118	三田村鳶魚	昭和18/4/16	昭和18/4/16	ハガキ	結構な品を御恵与、御芳情に感謝する。	三田村鳶魚の日記の昭和18年4月15日に「忍頂寺氏よりカウナゴ到来」とあり。
1117	三田村鳶魚	昭和18/1/24	昭和18/1/25	ハガキ	『陳書』御送付、感謝。一両日暖かく大喜びである。只今より入洛を楽しみにしている。京都の春を久々に楽しみたいと思う。	三田村鳶魚の日記の昭和18年1月24日に「忍頂寺氏より陳書十四輯到来」とあり。
1116	三田村鳶魚	昭和18/1/1	昭和18/1/2	ハガキ	昭和18年賀状。	月9日に「忍頂寺氏より返事あり」とあり。

三田村鳶魚

昭和18 / 12 / 6

昭和18 / 12 / 8

ハガキ

一法然院2点、智勝へ預けておくので、受け取ってほしい。このうち陽明の方、早くほしい。完成したら当方へお送り下されたい。雑率院の分は『紙衣膳』よりお始め下されたい。『万里砂』の貸出し、天祥院へお申し聞きを願う。法然院と同様、梅素薫のこと、河竹繁俊氏へ書面を差し出したので、返事があり次第申し上げる。昨夕帰宅の御報告まで。

定めている御迷惑のことと思う。今日、鈴木南陵氏来話、法然院のことを相談したところ、是非御尽力を願うとの旨であり、同氏よりも手紙を差し上げる。また、いろいろ御費用もかかるので、両人で50円を拵えてお送りするので、別途支出の分に御使用願いたい。天祥院および法然院に代をほどよく使ってほしい。

三田村鳶魚

昭和18 / 12 / 15

昭和18 / 12 / 15

ハガキ

お手紙拝見。早速『万里砂』借出しのこと、天祥院へ通しておいた。俗「俗」の「字」、ペン書きの上に墨で重ね書き、下の字は判読できず（僧ゆえ御面倒と思う。この間中村君へ30円ほど差し上げておくよう天祥院へ申し伝え

か』。  
 書簡592（鈴木南陵）に関連記事あり。小野文庫418『日記』昭和十八年・十九年（『）の昭和十八年12月10日に鳶魚より書簡（6日付）が届いたとの記事、昭和十八年12月11日に鈴木南陵より法然院費用として金50円が到着したとの記事あり。三田村鳶魚の日記の昭和十八年12月7日に「忍頂寺氏へ雑用金五十円送ることを相談し、南陵氏と分担に定め、金二十五円渡し、同氏より発送する事とす」とあり。本書簡の差出日付は6日だが、鳶魚の日記にもとづけば、実際は7日に書かれた可能性もあり。

小野文庫418『日記』昭和十八年・十九年（『）の昭和十八年12月12日に鳶魚と南陵へ書簡を

た。陽明文庫の写しかけ、御便宜を願う。この分当方へ御送附願う。智勝と御談合次第で、宿所は御適宜にと思う。「追記」12日付のお手紙拝見。万事よろしくお願い申し上げます。

出したとの記事あり。三田村鳶魚の日記の昭和18年12月14日に「忍頂寺氏手紙あり」、昭和18年12月15日に「忍頂寺氏より手紙あり、天祥院へ申通ず」とあり。

年未御用多の折、格別の御助勢、感謝。陽明文庫の写し物を御投与、落掌した。中村君のこと、天祥院へ督促する。それはそれとして小生よりもお車代を差し上げたいと思っている。「追記」用紙は天祥院にお申し聞きの上、取り次いでもらって請け取ってほしい。

小野文庫<sup>418</sup>『日記（昭和十八年・十九年）』の昭和18年12月20日に中村幸彦書写『於御前演舌仕候心覚（陽明文庫蔵）を鳶魚に郵送したとの記事、昭和18年12月23日に鳶魚へ写し物10枚（中村氏写）を送ったとの記事、昭和18年12月26日に天祥院より書、紙200枚を受け取ったとの記事あり。三田村鳶魚の日記の昭和18年12月23日に「忍頂寺氏より写し物十枚届く、中村氏の筆也」とあり。

去る4日より当寺のお世話になって写し物着々と進捗している。今度で皆済とはならないが、精々作業を行おうと思う。法然院が頻りに気になる。

差出人住所「三島市沢地龍澤寺内」。小野文庫<sup>418</sup>『日記（昭和十八年・十九年）』の昭和18年2月14日に鳶魚より書簡が届いたとの記事あり。

1126 三田村鳶魚 昭和18/12/23 昭和18/12/23

ハガキ

1127 三田村鳶魚 昭和19/2/11 昭和19/2/12

ハガキ

- 1128 三田村鳶魚 昭和19/2/19 昭和19/2/19 八ガキ 御助勢、万謝。法然院のこと格別の御才覚を願えればこの上ない。来月入洛の折の居所のことを心配している。只今慈雲公へ手紙を出した。この返事次第である。4日以来当寺にいたので、お届け物は留守宅の方だと思つ。寺内」。
- 1129 三田村鳶魚 昭和19/3/5 昭和19/3/6 八ガキ 『紙衣膳』、『唱語故実』落掌、感謝。今後御出来の分は当方へ直送を願う。疎開で龍澤寺中へ引き移るつもりである。このことの都合は後便で申し上げる。随つて入洛は予定より遅れる。入洛後のことを打ち合わせたいが、逗留をつめるつもりなので会所でもどこでもと思つ。返事があり次第申し上げる。「追記」昨日帰毛。多少疲れたので、今日と明日は休養する。
- 1130 三田村鳶魚 昭和19/3/15 昭和19/3/15 八ガキ 13日付お手紙拝見。この間は落胆した。しかし、何はともあれ法然院に着手出来れば、めでたい。お国のため三部神道全書取得は大切なことと思つ。
- 1131 三田村鳶魚 昭和19/4/12 昭和19/4/12 八ガキ 9日付貴札拝見。先日申し上げたとおり妙心寺へ通しておいたが、坂本行は不都合の由、そうであれば貸出のほがなく、その趣を直に妙心寺へ伝えて、その上で申し上げるようにする。川越市の住所が決定次第、早速申し上げる。それまではお手許へお留め置き願つ。この間は半月連続して移転準備でまごまごした。御慰笑下されたい。
- 1132 三田村鳶魚 昭和19/5/5 昭和19/5/5 八ガキ 今日、妙心寺より澤口泰憲師を差し遣わすと連絡あり。先日愚札で申し上げたことへの返答である。法会は延期せず云々、是非とも予定の如く取り計らつてくれとのこと。貴台へ相談してくれるように話しておいた。澤口師は明日帰洛のはずなので、早速話をしてみてほしい。法然院のことも同師が引き受け幹旋すること。「行間の尚々書」白雲堂に『仏教年表』がある由、送らせ下されたい。代金は早速送る。
- 1133 三田村鳶魚 昭和19/5/17 昭和19/5/17 八ガキ 重ね重ねの御迷惑、感謝のほかない。お手紙を封入して妙心寺へ遣わした。早速取り計らいがあるかと思つ。拙生疎開もいろいろ支障があつて、半上落下の有様で腰かけているようで家に居ながら落ち着かない。
- 1134 三田村鳶魚 昭和19/5/24 昭和19/5/24 八ガキ 一路平安、胸をなでおろした。御尽力、感謝。「七十二冊」は手許に持ち消印不鮮明だが、小野文庫<sup>418</sup>



1135 三田村鳶魚 昭和19/6/12 昭和19/6/12

ハガキ

合わせている。「七十二伝」はこの大成経とは別の秘書である。「伝」はこの「七十二伝」を承けるための手続である。左右軒手簡をお写し下さる由、御送付を待つている。中村氏のこと、出来の分の枚数をお聞かせ下さい。拙生より妙心寺へ申し通せばもちろんのこと、なお澤口師に写し物をお見せして相談してもらつと好都合と思つ。坂本貸出のことは、上野より交渉を継続している。

『樹下散稿』1・4、『拳一明三』、『際録』、『法淵繁興略記』、御送付いただいたものが届いた。『樹下散稿』2はどうしたか。3は欠けている由であるが、2は未写であれば早速写して下さるようお願いしたい。

1136 三田村鳶魚 昭和19/7/22 昭和19/7/22

ハガキ

『神道大事』落筆。時節柄御尽力、何とも申しようもない。如何にもお申し聞きのとりの次第であつて、御迷惑恐れ入る。当分お休み下さりたい。

『水月ものはなし』、早速御返済する。他に細見を見るのに最も必要なものを同封し呈上するのでお請け取り下されたい。前便に申し上げたとおり御発見の儀、喜ばしい。高説に従えば法然院も頼みにならないこととなる。しかし、『神道大事』は「靈宗静心伝」のことと思つ。忍激上人はこの伝

までは受けられたものと考えるので、この伝書はあるべきはずである。もしあれば、これは珍重ものであり、これだけが心残りである。

今朝、小包を一つ差し出した。これは御返済品および呈上ものである。なお御依頼すべきものがあるため、再度小包を差し出すつもりである。明朝天理図書館へ発送するつもりなので、何分よろしくお願い申し上げます。

1137 三田村鳶魚 昭和19/7/25 昭和19/7/26

ハガキ

絵ハガキ（水郷の趣味 潮来出島の月）。郵便料金が3銭なので昭和19年以降、宛先住所から昭和20年8月以前。話題より昭和19年と判断。

『日記（昭和十八年・十九年）』と話題が符合するので昭和19年と判断。  
忍頂寺文庫 A 137・1} 3 『水月ものはなし』。『諸家来信抄三』（『書物往来』6、大正14年1月）掲載の務書簡に、『水月ものはなし』を大正14年1月11日に大阪で入手したとの報告あり。  
絵ハガキ（水郷の趣味 利根川の渡頭）。天理図書館への細見譲渡の話題か。本報告書所収「忍頂寺務年譜データベース」の「昭和19/07/25」項に「鳶魚、務に宛て『水月ものはなし』」

1138 三田村鳶魚 昭和19/9/23 昭和19/9/24 ハガキ 16日、叡山よりの借物10冊を澤口師へ渡した。中村氏のこと、お申し聞きのように取り計らう。法然院のこと、承った。適宜のお計らいを願う。天理図書館のことは、先日館長より書面があり、月末までに送金するのと。いろいろお世話になり、万謝。

1139 三田村鳶魚 昭和19/10/3 昭和19/10/4 ハガキ 去る30日、天理図書館の使者あり。一封恵与され受領した。お礼申し上げる。中村君へ写し物の出来た分を送るよう先日お願いしたところ、まだ届かない。車代少々を今日送る。写し物のお礼は寺より出されるはず。急ぐことではないが、申し聞いたまま申し送る。

1140 三田村鳶魚 昭和19/10/31 昭和19/10/31 ハガキ 先般は御厚情、感謝。只今くりひろげて涉読、深く感嘆している。御起居如何か。御家族のことも御心労と思う。知友在京の人々に病者死者が多く困ったことである。

1141 三田村鳶魚 昭和19/11/5 昭和19/11/6 ハガキ 令聞御病気の由、御心配のことと思う。御大切になされたい。法然院のことは、時間もあるので御放念下されたい。松茸中毒、早速に快復して喜ばしく思う。晏然と暮らしている。知友中に大分異変がある様子であるが、よく分らず案じている。時々のお便りを願い上げる。

1142 三田村鳶魚 昭和20/1/4 昭和20/1/4 ハガキ 先日、多田氏の来信で令室御全快の由を知った。只今御手札により、いよいよ御安康とのこと、喜ばしく思う。寒気はなかなか強く、初雪も去月一寸ほど降り、近年には珍しい。しかし、病妻もとにかくどうにか凌いでおり、ありがたき仕合せと申っている。「絵ハガキ表面」今更に何か祈らんにしへゆ守らせ玉ふ伊勢の大神

1143 三田村鳶魚 昭和20/3/3 昭和20/3/3 ハガキ 三島市沢地龍澤寺内へ転居する。

1144 三田村鳶魚 昭和24/7/16 昭和24/7/16 ハガキ 野間君は待ぼうである。恩借の1点は延引、浅草寺と寿光院と。嶽師とより借入のため、手遅れになり申し訳ない。暫時猶予を願う。京大吉田君

1145 三田村鳶魚 昭和24 / 11 / 2 昭和24 / 11 / 4 ハガキ

の覆刻もこのところ信頼できる様子。松尾氏の子息帰還、大喜びである。当方は今春末より老妻が心臓喘息を発し、時々発作で日々慌たしい。御上京とても閑談の余裕がない。貧乏と病人を両手に抱えて苦勞している。貴方の優游と差引もならず、誠に娑婆は不自由なものである。

1146 三田村鳶魚 昭和25 / 3 / 6 昭和25 / 3 / 6 ハガキ

たびたびお尋ね下さり、感謝。病妻の転地加養で葉山へ去月来逗留、4、5日前に帰栖。明後日は湯河原へ出かける予定。ハガキ左下隅に書入れ「march 1926」。務によるものか。

1147 三田村鳶魚 昭和13 / xx / 19 昭和13 / xx / 19 ハガキ

御煩用中と思い寄らずにいろいろお願い申し上げ、恐縮。いずれにしても御閑暇次第のこととしてお願いする。伊原青々園、長谷川如是閑両君へお願いして来月来々月とも巻頭へ御筆券下さることになった。2 銭ハガキ(武将のデザイン、赤印刷)。昭和13年9月14日消印三田村鳶魚書簡(書簡<sup>1074</sup>)で『江戸読本』<sup>5</sup>の巻頭言を依頼しており、それに関連しての書面であれば、昭和13年9月か。

1148 三田村鳶魚 昭和19 / xx / 21 昭和19 / xx / 22 ハガキ

20日付お手紙拝見。妙心寺の様子を見たく思う。雑荃院の写し物は打ち切つてほしい。法然院への連絡は何ともならない。そつであれば、これもそれまでのことである。老生の一期の計画は水泡に帰した。愴懷御慰察願いたい。三島まではあまりに遠いので、諸友の勧告に従い川越図書館へ移ることにした。来月初めまでに相済ませる。御東来の御都合がつかないとのこと、御尤のことながら残念である。それも是非なし。

昭和19年1〜3月のいずれか。昭和19年3月5日付三田村鳶魚書簡(書簡<sup>1129</sup>)では三島の龍澤寺へ疎開する意志を示しており、その後、昭和19年4月12日付三田村鳶魚書簡(書簡<sup>1131</sup>)で川越の住所連絡について言及していることから、本書簡は昭和

1149

三田村鳶魚

XX / XX / 8

XX / 11 / 9

ハガキ

先刻丸岡氏が参ったので相談した。年内に校正を出すと申し聞いた。同氏より賣方へ書面を差し上げるように言っている。

19年3月か。

1150

三田村鳶魚

XX / 1 / 1

XX / 1 / XX

ハガキ

賀状。

三田村鳶魚の日記の昭和3年11月8日に「丸岡勇次郎」とあり、昭和3年か。昭和3年であれば忍頂寺務『清元研究』を出版する計画についての話題と目される。1銭5厘ハガキ（菊のデザイン、青印刷）。消印の年次のスタンプ（印字欠け、不完全）は、「3」と判別しがたい。

1銭5厘ハガキ（武將のデザイン、緑印刷）、昭和5年9月29日付三田村鳶魚書簡（書簡<sup>1026</sup>）までは菊のデザインのハガキであり、それ以降。また、1月1日の務の居住地を考えると、昭和10年以降は東京市ヶ谷へ転居していることから、昭和6～9年間の賀状。消印とともに「中野町宛の通信は新町名地番で」とのスタンプあり。昭和5年9月29日付三田村鳶魚書簡（書簡<sup>1026</sup>）までは住所が「中野町打越」、昭和6年5月7日付三田村鳶魚

1152

三田村鳶魚

XX / 1 / 1

XX / XX / 1

ハガキ 賀状。

1151

三田村鳶魚

XX / 1 / 1

XX / 1 / 1

ハガキ 賀状。

書簡(書簡<sup>1027</sup>)からは「中野町文園」と町名が変更しており、昭和6年5月7日付三田村鳶魚書簡(書簡<sup>1027</sup>)にはやはり「中野町宛の通信は新町名地番で」のスタンプあり(以降のハガキにはこのようなスタンプはない)。以上より、昭和6年の賀状か。

1 銭5厘ハガキ(武將のデザイン、緑印刷)、昭和5年9月29日付三田村鳶魚書簡(書簡<sup>1026</sup>)までは菊のデザインのハガキであり、それ以降。また、1月1日の務の居住地を考えると、昭和10年以降は東京市ヶ谷へ転居しており、昭和6、9年の間の賀状。昭和8年の賀状は存在し、また別の年次不明の賀状(書簡<sup>1150</sup>)が昭和6年のものである可能性があることから、本書簡は昭和7年もしくは昭和9年の賀状か。

2 銭ハガキ(武將のデザイン、赤印刷)。ハガキのデザインよ

三田村鳶魚

XX / XX / 12

なし(捺し忘れか)

ハガキ

今日、濱家様御夫婦御息がお出でになった。御伝言千万感悦。私はまたまた入洛する都合となった。23、24日頃出発のつもり。今度は20日ほどの逗留予定である。あるいは御助勢を願うようになるかもしれないと思う。委細は入洛後に申し上げる。

り昭和13年以降と判断される。昭和13・15・16年の賀状はすでに存在し、また昭和15年後半ごろからハガキの紙質が悪くなっていることを考慮すると、昭和14年の賀状か。

三田村鳶魚

XX / XX / 7

欠落

封書

巻紙1枚。中村幸彦から住所を聞いた。自分は11月28日に東京へ戻ったが、本月中に埼玉豊岡町の親戚別宅へ移る。著書の刊行を計画している。出版屋の小川恭一が世話をしてくれる。援助を願いたい。土に埋めていた書物は大半が無事であった。京都の写し物は鈴木好太郎方で法然院の『神道大事』が焼けた以外は無事。中村氏より蔵書が無事と聞きうれしい。気の毒な人は大勢いる、妙心寺記念刊行物の情報。多田氏の所在が分からない。

昭和21年1月以降のものとは推定される。

三田村鳶魚

XX / XX / 29

なし(捺し忘れか)

ハガキ

越格の御尽力、お礼の申し上げようもない。御措置下さり、各方面首尾よくいっている。自身はともかく尊台にまでこのように御苦労をかけるのは、全く将来を思う故のことである。この段、幾重にも御懺察下されたい。

1169	宮武外骨	大正 13 / 12 / 10	欠落	封書	半紙1枚。「忙中のおワビ」と題し、前半に無沙汰を詫びる文面を印刷。
1168	宮武外骨	なし	大正 13 / 6 / 14	ハガキ	御研究の発表誌、恵投感謝。
1167	三宅雪嶺	昭和 11 / 2 / 19	昭和 11 / 2 / 18	ハガキ	印刷文面。鈴木梅四郎を推薦する旨の選挙勧誘。
1166	三宅吉之助	昭和 13 / 1 / 1	xx / 1 / xx	ハガキ	昭和 13 年賀状。
1165	三宅吉之助	昭和 11 / 1 / 1	昭和 11 / 1 / 24	ハガキ	昭和 11 年賀状。
1164	三宅吉之助	昭和 8 / 4 / 10	昭和 8 / 4 / 11	封書	印刷物2点。小冊子作成にあたっての寄稿依頼状。裏面に務自筆で文案が記される。福良竹亭識「三宅君の五十の賀を祝ひて」。
1163	三宅吉之助	昭和 5 / 1 / 1	昭和 4 / 12 / 31	ハガキ	昭和 5 年賀状。
1162	宮尾しげを	なし	昭和 21 / 12 / 26	ハガキ	地震見舞。
1161	宮尾しげを	なし	昭和 14 / 3 / 21	ハガキ	大日本雄弁会講談社発行『名作物語 孫悟空』の宣伝。
1160	宮尾しげを	昭和 14 / 1 / 1	昭和 14 / 1 / 2	ハガキ	昭和 14 年賀状。
1159	宮尾しげを	昭和 13 / 1 / 1	昭和 13 / 1 / 1	ハガキ	昭和 13 年賀状。
1158	宮尾しげを	昭和 11 / 1 / 1	昭和 11 / 1 / 1	ハガキ	昭和 11 年賀状。
1157	三村書店	昭和 14 / 9 / 20	昭和 14 / 9 / 20	封書	半紙1枚、伝票2枚。9月20日前製本代金6円10銭領収。本日出来上がったので書留で送付する。計25冊とあったが、実際は24冊である。帙は、寸法を取って送ってもらえればできる。ぜひお願いする。薬袋紙、多少色が異なっていたが、よろしいか。伝票2枚同封。
1156	三田村八重	昭和 17 / 5 / 10	昭和 17 / 5 / 11	ハガキ	先日はお邪魔してお世話になった。拝借の傘と下駄は一両日中に小包で送る。多田様にどうぞよろしく。
					絵ハガキ（大本山妙心寺法堂 天井の画竜（国宝））。差出人住所「妙心寺小方丈」。
					「三村書店和洋製本部」からの書簡。製本を発注していたことが確認される。伝票に挙げられた書名のうち、『陰名考』は小野文庫に所蔵される（小野文庫 <sup>377</sup> ）。
					ハガキに貼られた切手が15銭であることから、昭和21年と推定。
					虎の図柄、宛先住所およびハガキ料金が2銭であることから、昭和13年と推定。
					絵ハガキ（上越南線倉沢第二鉄橋）。

1179	母袋未知庵	昭和14 / 1 / 15	欠落	封書
1178	母袋未知庵	昭和13 / 12 / 18	昭和13 / 12 / 19	ハガキ
1177	母袋未知庵 (光雄)	昭和13 / 10 / 3	昭和13 / 10 / 4	ハガキ
1176	母袋未知庵	昭和13 / 9 / 28	昭和13 / 9 / 28	封書
1175	三好米吉	大正15 / xx / xx	大正15 / 2 / 1	封書
1174	三好米吉	大正13 / 12 / 25	大正13 / 12 / 24	ハガキ
1173	宮永東山	大正9 / 9 / 17	欠落	封書
1172	宮武省三	昭和14 / 1 / 1	欠落	封書
1171	宮武省三	昭和13 / 4 / 8	昭和13 / 4 / 15	ハガキ
1170	宮武省三	昭和11 / 1 / 7	昭和11 / 1 / 10	ハガキ

後半に一筆記入する空白スペースあり。『延寿清話』送付の礼を記入してある。

転居通知。

転居通知。

印刷物2点。昭和14年賀状。「昭和13年の随筆」と題する目録印刷物紙片。

印刷物1点。「御披露」と題し、京都深草に陶窯を築いたことを案内。自身について、日本支那古陶器の研究をしてきたと述べる。

「外骨先生歓迎の古書交換と忘年会」の案内状。12月28日、西区西長堀白髪橋北詰・岸松館にて開催とのこと。

印刷物2点。年賀状を出さなかったことの挨拶。「懐中宝船」と称する印刷物の紙片。

便箋2枚。吉原細見に関する御教示感謝。「紅葉狩」が能から離れて歌舞伎化したのはいつ頃か尋ねたい。今、戸隠山鬼女退治のことを調べている。

「紅葉狩」の件、御垂示感謝。『舞踊劇集』しばらく拝借する。

書物永々と拝借感謝、別便で送った。本年は貴地の兄の家(国玉通1丁目)で越年する。松の内は御在宅か。電話番号を知らせてほしい。

昭和14 / 1 / 15付・便箋2枚。過日は御馳走になり、また珍本恵与感謝。神戸滞在中にもう一度お邪魔するつもりだったが、四国で1日遊びすぎてそのまま上京、残念である。白猿の信州来演の事、調べてみた。共古翁記念文集『趣味と嗜好』に河竹繁俊氏の一文あり。『身旅喰』のことは出て

いるが『遊行やまざる』『遠く見』の記述はない。恵投本はなおよく調べて、いずれ信州の雑誌か新聞に紹介したいと思っていた。東京の友人の農学士の話に、徳川義親侯が宗春侯の伝記を調べており、当時の細見

本と見るべきか。母袋へ譲渡

『遊行やまざる』を務より母袋へ譲渡。忍頂寺文庫C35『ハ遊／行／やまざる』。板本が忍頂寺文庫に蔵されることから、

このとき譲渡したのは重複本

もしくは新たに作成された写

本と見るべきか。母袋へ譲渡

高原 志賀山四十八池。

絵ハガキ(国際スキー場志賀

高原 志賀山四十八池)。

高原 志賀山四十八池)。

高原 志賀山四十八池)。

高原 志賀山四十八池)。

高原 志賀山四十八池)。

高原 志賀山四十八池)。

高原 志賀山四十八池)。

高原 志賀山四十八池)。



- 1180 母袋未知庵 昭和14/5/4 欠落 封書  
 便箋3枚。このたび『古川柳研究』という雑誌が創刊され、『柳多留拾遺』の輪講を載せるに際し礎稿を自分が担当することになった。音曲に関する句について、垂示を願いたい。以下、疑問点を問い合わせる(「来たさの」「三を下げ」「をせをせ」の各語句について)。大阪の『三味線草』という雑誌は毎月手許に行くか。行っていないければ、拙稿掲載の最近号を送る。知庵に与える旨の詞書を頂きたい。
- 1181 母袋未知庵 昭和14/5/10 昭和14/5/11 ハガキ  
 早速の御教示感謝。別便にて拙稿を送る。
- 1182 母袋未知庵 昭和14/5/15 昭和14/5/16 ハガキ  
 「きたさの」について御教示感謝。富山房百科学『邦楽舞踊辞典』を求めた。先生の説が引いてあり懐かしく思った。
- 1183 母袋未知庵 昭和14/8/10 xx/8/11 ハガキ  
 文化13年吉原細見入手。別便で送るのでコレクションに加えてほしい。すでに所蔵していたら返送してほしい。『古川柳研究』誌をお手許に届けるよう言っておいた。同誌へも寄稿してほしい。
- された本は、書簡<sup>1196</sup>(母袋未知庵)によれば、後に早稲田大学演劇博物館へ寄贈されたとのこと。
- 小野文庫<sup>319</sup>『三味線草』114 (昭和14年4月)、表紙書入れ「忍頂寺先生恵存」拙稿掲載、印記「未知庵」。
- 絵八ガキ(長野県赤穂公民実業学校創立二十周年記念発行「校旗 現校舎全景」)。小野文庫<sup>319</sup>『三味線草』114(昭和14年4月)、表紙書入れ「忍頂寺先生恵存」拙稿掲載、印記「未知庵」。
- 絵八ガキ(七久保村北村ヨリ城山及南駒ヶ岳空木岳ヲ望ム)。  
 絵八ガキ(千人塚上二城ヶ池ノ涼ヲ満喫ス)。八木敬一・丹羽謙治編『吉原細見年表』(日本書誌学大系<sup>72</sup>、青裳堂書店、平成8年)によれば、文化13年秋『新吉原飯宅入細見五葉

1189	母袋未知庵	昭和14/10/21	昭和14/10/22	ハガキ	「どこい〜」につき御垂示感謝。『江都二色』には西洋のシーソーのよ	絵ハガキ（明媚なる諏訪湖畔
1188	母袋未知庵	なし	昭和14/10/14	ハガキ	先に依頼した「白浪五人男」と山田流琴曲「江島曲」貸与の件、こちらで間に合ったので御放念願う。「三冊もの」という語は、「わ印」の本のことを言うのだと人から教えられた。しかし、これは「わ印」に限定されるのか、草双紙などについても用いた語ではないのか、御垂示を願う。今度、拙稿「川柳江の島土産」が単行の小冊子になる。	小野文庫 <sup>239</sup> 母袋未知庵『川柳江の島土産』昭和15年6月。
1187	母袋未知庵	昭和14/9/29	昭和14/9/30	ハガキ	「かぶる」について御垂示感謝。右は『古川柳研究』の「川柳語彙私見」に入れるが、御垂示を得た旨を付記しないことについて了承願いたい。	絵ハガキ（長野県赤穂公民実業学校創立二十周年記念発行「福岡実習地開墾記念」）。
1186	母袋未知庵	昭和14/9/21	欠落	封書	昭和14/9/21付…便箋2枚。『江戸読本』の玉稿いつも面白く拝見。10月号「歌へす〜餘波大津繪」冒頭は「雪の日や船頭殿の顔の色」の句の文句取ではないか。「世之中諸事天文」にある「かけひま」はどんな意味で、どんな漢字をあてるのか。娼家の雇い人の使い込みのことが。昭和14/9/22付…ハガキ。『湊川』ありがたく拝受。川嶋氏へ礼状と拙稿掲載誌を送った。芝居道のことば「かぶる」は、客が入りで大失敗するという意でよいか。語源は何で、どんな漢字をあてるか、御教示願う。	忍頂寺務「歌へす〜餘波大津繪」(『江戸読本』2、10、昭和14年9月)。
1185	母袋未知庵	昭和14/9/12	昭和14/9/13	ハガキ	恵与の清元全集拝受、感謝。「川柳江の島土産」という旧稿を整理しているのでお願いした次第。欧州の戦争も、当地のような山奥には影響ない。	絵ハガキ（千人塚上二城ヶ池ノ涼ヲ満喫ス）。小野文庫 <sup>239</sup> 母袋未知庵『川柳江の島土産』(昭和15年6月)。
1184	母袋未知庵	昭和14/8/27	昭和14/8/28	ハガキ	今、江の島について調べている。「白浪五人男」弁天小僧の台詞を知りたい。戯曲全集を貸してほしい。山田流筆曲「江の島曲」の歌詞も教えてほしい。	絵ハガキ（千人塚城ヶ池スケートリング）。

松』の母袋未知庵旧蔵本は現在個人蔵で、務の旧蔵印は確認されないとのこと。

1196	母袋未知庵	昭和15 / 2 / 15	欠落	封書	昭和15 / 2 / 15付…便箋4枚。新年早々「どこい〜」御教示いただいたが、この項目は拙稿「川柳辞彙私見」に発表済みのことと思ひ、次稿に付記として「忍頂寺翁御垂示に依れば云々」と書くつもりでいたが、よく見ると雑誌の都合で未発表だったので、まったく私見の資料のように原稿を訂正した。了承願いたい。昨春頂戴した白猿の『遊行山猿』は早稲田演劇博物館へ綿谷雪君を通じて寄贈した。了承願いたい。『川柳辞彙』6に ついて疑問点を別紙に書きぬいた、御垂教を願う(「こもんとり(五文取)」
1195	母袋未知庵	昭和15 / 1 / 16	昭和15 / 1 / 17	ハガキ	昨夜、旅から帰宅。1月5日付ハガキ拝誦。「どこい〜」の御教示感謝。いづれ雑誌に載せたい。どんなに高い酒でも水が入っていて、ある程度以上はいくら飲んでも酔わない。田舎にはビールが全く配給されない。禁酒しようかと思つ。
1194	母袋未知庵	昭和15 / 1 / 1	昭和15 / 1 / 2	ハガキ	昭和15年賀状。
1193	母袋未知庵	昭和14 / 11 / 16	昭和14 / 11 / 17	ハガキ	『古川柳研究』新年号の原稿に先生を推薦した。川柳に関係なくて結構。ぜひお願いしたい。
1192	母袋未知庵	昭和14 / 10 / 26	昭和14 / 10 / 27	ハガキ	25日付ハガキ拝受。河東の現状を本で見るとよりも如実に何って、感謝している。
1191	母袋未知庵	昭和14 / 10 / 24	昭和14 / 10 / 25	ハガキ	河東節の現状は『邦楽舞踊辞典』でよく分かった。こちらでろくに調べもしないで何って申し訳なかつた。
1190	母袋未知庵	昭和14 / 10 / 23	昭和14 / 10 / 24	ハガキ	曾我狂言の台詞かなにかに五郎時致を「鎌倉の二番生(ば)え」と呼ぶことはないか。川柳の解釈のために確認がほしい。 橋本館浴場。

うな絵はない。角力の人形の絵がこのように画かれている(図解)。あるの風光。  
いはこれが「どこいどい」ではないか。『川柳辞彙』517頁下段「くされ」の解釈はあれでよろしいのだろうか。

1202	母袋未知庵	昭和16 / 6 / 17	昭和16 / 6 / 17	ハガキ	「をせく」の三味線」につき御垂示感謝。なるほど、「をせく」の騒ぎ唄」 絵ハガキ（南洋拓殖株式会社
1201	母袋未知庵	昭和16 / 6 / 7	昭和16 / 6 / 8	封書	便箋2枚。勤労奉仕が始まって忙しい。私も来月には父親になる。一昨年「をせをせ」の句について質問し、洒落本『玉の轍』の記事を御垂示いただいたが、それ以外の記述も見出した（以下、用例の列挙）。「サツサヲセヲセ」は深川に限ったようだが、その歌謡は「甚句」と断定してよいか、また何甚句か。それから猪牙舟の掛け声から発生したと捉えてよいか。長唄清元の「吉原雀」の合いの手はヒントになるか。
1200	母袋未知庵	昭和15 / 11 / 29	昭和15 / 11 / 30	ハガキ	「鯛の三ツ道具」、わざわざ実物を御送付いただき感謝。『古川柳研究』に三ツ道具について書いたが、実物が分からなかったので尋ねた。学校の囁託の画家に頼んで絵にしてもらい、正月号拙稿のカットに入れようと思つた。便箋2枚。勤労奉仕が始まって忙しい。私も来月には父親になる。一昨年「をせをせ」の句について質問し、洒落本『玉の轍』の記事を御垂示いただいたが、それ以外の記述も見出した（以下、用例の列挙）。「サツサヲセヲセ」は深川に限ったようだが、その歌謡は「甚句」と断定してよいか、また何甚句か。それから猪牙舟の掛け声から発生したと捉えてよいか。長唄清元の「吉原雀」の合いの手はヒントになるか。
1199	母袋未知庵	昭和15 / 11 / 24	昭和15 / 11 / xx	ハガキ	酒間の興にこれを探し出す遊びがあるそうだが、どんな形の骨なのか。ために探してみたが、骨の数が多く分からなかった。図示して教えてほしい。 勝景。
1198	母袋未知庵	昭和15 / 11 / 10	昭和15 / 11 / 11	ハガキ	『川柳辞彙』中の疑問につき早速の御教示感謝。お蔭で疑団が氷解した。鯛の頭部に鋤・鎌・鎌に似た3つの骨があつてこれを「鯛の三ツ道具」と呼び、酒間の興にこれを探し出す遊びがあるそうだが、どんな形の骨なのか。ために探してみたが、骨の数が多く分からなかった。図示して教えてほしい。 「模擬実践 果樹園実習」。
1197	母袋未知庵	昭和15 / 2 / 19	昭和15 / 2 / 20	ハガキ	御高教感謝。「サガリ」は小生の推測を裏書きする沢山の例を示してもらい、喜んでいる。「サゲ銭」と「サガリ金」とは別のものだと思う。なお考えてみたい。 業学校創立二十周年記念発行

「さがり」「さがりとり（下取）」「さげせん（下銭）」。手漉き草木染めの便箋・封筒をもらったのを、少しお分けする。

昭和15 / 11 / 6付・便箋1枚。公務が忙しく、『古川柳研究』連載の「川柳辞彙私見」も第8・9・10・11冊と4冊分ためてしまった。別紙疑問事項にお書きこみの上、御垂示願いたい（同便箋に務自筆で「大蛇丸」「大刀身代」「昼三」「昼夜三分」「女郎屋の掟」「天人斯うかいな」「にぎりめし」「にこにりの廟」と項目を列記）。『江戸読本』の廃刊はいかなる故か、残念に思う。

とは甚句のことだろうと思う。いずれ『古川柳研究』に載せたい。

パラオ本島鳳梨農場（直営事業）。

1203 母袋未知庵 昭和16/6/17

欠落

封書

野紙（「長野県赤穂公民実業学校」名入り）2枚。「をせをせ」の件に引き続き、次のことについて御垂示を願いたい。以下、『川柳辞彙』より抜き出した項目を列挙（「ぼたもち（牡丹餅）」、「まんやはちろべえ（万屋八郎兵衛）」、「みほゑもん（三浦右衛門）」）。

1204 母袋未知庵 昭和16/6/24

昭和16/6/26

ハガキ

22日付芳書拝受、御垂示感謝。「ぼたもち」の句の詠句年代は孫引きのため不明。紀文と奈良茂と張り合ったときの大饅頭の俗説は思いついたが、これではないようだ。10月の玄猪（いのこ）の行事ではないだろうか。作業（直営事業）。

1205 母袋未知庵 昭和16/7/6

昭和16/7/7

ハガキ

今月26日より末日まで母校商大での講習を受講予定。その節お邪魔したいが、その頃は御在宅か。平茶屋遠望。

1206 母袋未知庵 昭和16/7/19

昭和16/7/19

ハガキ

今月末は貴地に何うのを楽しみにしていたが、母校の講習会はその筋よりの命により（鉄道輸送関係か）中止の旨、本日通知があった。残念ながら貴地へ行くのは取りやめとする。17日に長女が生まれた。絵ハガキ（日光薬師堂ノ鳴滝）。

1207 母袋未知庵 昭和16/12/27

昭和16/12/28

ハガキ

昔、信州から冬期江戸へ出稼ぎした「信濃者（おしな）」はどれくらいの給銀を貰ったものか。これに関する文献はないか。御垂示を願う。絵ハガキ（鞍山北二條町）。

1208 母袋未知庵 昭和17/1/6

昭和17/1/7

ハガキ

新春を賀す。信濃者の給銀に関し、貴重な文献の御垂示感謝。お示しものは、冬期だけ出稼ぎのいわゆる「おしな」ではなく、永年住みこみの奉公人の給銀かと思う。2分は月額とすれば余りに高すぎ、年額とすれば安すぎるようである。なおこれにつき考えてみたいと思う。拙著『楠公記』は昨年製本屋の誤綴でたまたま改綴中。そのうちに送る。生患存著者（印記「未知庵」）とあり。

1209 母袋未知庵 昭和17/9/21

昭和17/9/22

ハガキ

早速『金儲花盛場』並びに瓦版唄本5冊御貸与感謝。撮影が済むまでしばらくお貸し願いたい。絵ハガキ（長江岸風景 湖口市 街の石鐘山より展望する 長江支流沿岸の詩的風景）。忍頂寺

1215	母袋未知庵	昭和23 / 11 / 26	欠落	封書	便箋3枚。東京へ研究においてになったとのこと、羨ましい。あいかわらず長野県庁で働いている。御下問の『未摘花』の句、数が多いので困っている。古いノートを調べて送る。仕事多忙につき返事が遅れるかもしれない。『未摘花』全4冊はすでに研究し尽くされている。大曲駒村『未摘花通解』も刊行されていて、全句の解釈が載っている。終戦後、『未摘花』の復刻本がたくさん出たが、京都古川柳研究会から出たものには全句に短注が付されている。先生が御関係の研究会はどういう方々の集まりか分からないが、『未摘花』を今更改めて研究するのは無駄な努力ではないだろうか。研究する場合も、大曲の『通解』を読んだ上で訂正・補足をする方がよいのではないだろうか。苦心して新たに解釈ができたとしても、先人がはるか以前に立派に解釈済みのものであるかもしれない。『柳多留』にとが分かる。宛先住所より昭
1214	母袋未知庵	昭和21 / 12 / 22	昭和21 / 12 / 23	ハガキ	地震見舞。今朝の新聞で貴地の地震被害の大きさに驚いた。
1213	母袋未知庵	昭和21 / 1 / 24	xx / xx / xx	ハガキ	新しい途が開けるのではないかと希望を持っている。旧臘初旬に生家に戻った。ここに永住するつもりである。長野県庁内の渉外課に通訳として勤務している。そちらの住所は川嶋先生から聞いた。
1212	母袋未知庵	昭和19 / 5 / xx	xx / xx / 6	ハガキ	3月で松本商業学校を退職、新設の「紙統制株式会社」に入社した。昨年はお互いに嫌な年だった。今年は、生活はますます苦しくなったが、
1211	母袋未知庵	昭和18 / 4 / 30	昭和18 / 4 / 30	ハガキ	移転通知。赤穂農商学校から松本商業学校へ転任。
1210	母袋未知庵	昭和18 / 1 / 14	昭和18 / xx / xx	ハガキ	『風来六部集』の件につき、わざわざ菅先生方まで御足労いただき、感謝。お蔭様で、本日同先生よりお送りいただいた。

文庫B38『金儲花盛場』。瓦版  
唄本。  
絵ハガキ（長江岸風景 倒影水  
に映えて得も言へぬ 漢陽城外  
の古琴台）。

1216

母袋未知庵

昭和23 / 12 / 3

XX / XX / 3

封書

しても同様である。「追記」京都本希望の場合の連絡先の案内。なお、大曲本が京都本を見た上で、改めて私に御下問するようにしてほしい。今朝になって大曲本を1冊のみ大曲から寄贈されていたのに気がついた。別便で送る。

野紙(「長野県」名入り)1枚。11月末日付の書簡拝受。折角の御下問を全部断つたようなことになり、恐縮。たくさんまとめてでなく、10句か15句ずつに分けて御遠慮なく尋ねてほしい。現在、「川柳辞彙補訂」という原稿を書いている。大曲駒村編『川柳辞彙』の誤謬を指摘するもので、当時雑誌に発表した拙稿の2、3倍の量になってB6版200ページ以上になるだろう。来年の夏か秋頃刊行予定。出版屋に頼まれての内職である。その中で疑問がたくさん出てくる。いずれ先生や三田村先生の助力を仰ぎたい。

1217

母袋未知庵

XX / 1 / 25

XX / 1 / 26

ハガキ

『柳多留』の中に、初代清元延寿太夫を「太夫坊」と表した例あり、どういう理由でこう呼ばれたのか。また、この呼称は川柳に詠まれるほどに珍しいものだったのか。御垂示を願う。

差出人住所が長野県赤穂町となつてることから、昭和18年4月よりも以前。また、ハガキ代金が2銭であることから、昭和12年4月以降。

1218

母袋未知庵

XX / 1 / 29

XX / XX / 29

ハガキ

太夫坊延寿斎につき御垂示感謝。『柳多留』45編は文化5年、同85編は文政8年の刊行である。前句は富本を、後句は清元の延寿斎を詠んだものと思つ。

絵ハガキ(娘々祭 隆盛を極める 迷鎮山娘々祭の全景 其四)。差出人住所が長野県赤穂町となつてることから、昭和18年4月よりも以前。また、ハガキ代金が2銭であることから、昭和12年4月以降。

1219

母袋未知庵

XX / 9 / 25

XX / 9 / 25

ハガキ

芝居の「文七元結」、自分も先年6代目のを見物したが、この脚本の簡単な解説を御垂示願いたい。今、手許に『歌舞伎細見』その他がないので、

絵ハガキ(南洋拓殖株式会社 南洋拓殖挺身隊ヤップ島開墾

面倒をお願いする。文七は信州飯田の人で、同地に墓もある。其角『五元集』にこの人を詠んだ句がある。

作業（直営事業）。差出人住所が長野県赤穂町となつてゐることから、昭和18年4月よりも以前。また、八ガキ代金が2銭であることから、昭和12年4月以降。

忍頂寺文庫C1『悼東作翁夷曲歌』。

本日、第一ホテルに川嶋翁訪問、『悼東作翁夷曲歌』拝借、御厚志感謝。1週間ほど拝借願いたい。多年探索していたが、図らずも眼福を得た。本の形のよさに驚いた。誰の考案でこのような風変りな追悼集ができたのか、東作が狂歌界に人望のあつたことが分かる。

御秘蔵の書、お蔭様で写本を作った、感謝。昨日返上したので御査収を願う。ありあわせの小著1部同封する。

『琴水小稿』郵送・貸与感謝。一步も動かさずして稀覯書を次々と見られて幸せ。全部を写したく、2週間ほど拝借したい。

便箋3枚。詰らぬ書物お目にかけてところ、とんだ御心配に預かり、篠崎

一の書簡数々頂戴、恐縮に思う。このほど後藤松陰の文2編を五弓久文自筆本にて写し取った。そのうちの1つに篠崎小竹のことも見える。これらの人のこと、念頭にあり、不思議なことと思う。ただし、かような御心配に預かつては、何とも心苦しい。過日は天理図書館の南畝ものをご覧になった由、ついで濱田氏の一文『書物展望』にて通読した。

『書物展望』記事に関する言説より昭和18年と推定。

1224 森銑三 昭和20/4/8 昭和20/4/9 八ガキ

珍本御入手のお便り嬉しく拝見。天の加護で生命を全うできた場合は、他日御地へ参上して拝見したい。ただいま1日を単位としてその日その日を送っている。御地も油断できない御様子、くれぐれも御用心を。返事が遅れて申し訳ない。川嶋翁はいかかと思ひながら、まだ伺いもしていない。

1220 森銑三 昭和18/5/6 昭和18/5/7 八ガキ

1221 森銑三 昭和18/5/14 昭和18/5/14 八ガキ

1222 森銑三 なし 昭和18/5/22 八ガキ

1223 森銑三 昭和18/8/8 欠落 封書



1225 森銃三 昭和21/1/9 昭和21/1/9

ハガキ

新年を賀す。三田村翁旧臘文園26の旧居へ帰った。去る6日久々に参上。元気で何より、貴兄と連絡が取れず困っているとのこと。小生より手紙を出すすと約束して帰ったところ、追いかけて来信があり、よろしくとのこと。当地闇市が盛んだが、高値なのに驚く、手も足も出ない。

1226 森銃三 昭和21/5/16 xx/xx/xx

ハガキ

磐瀬三郎氏は小生の知人で、読書人である。このたび御地須磨区西垂水町235小松三雄氏方へ転居されるにつき、貴兄を訪問するよう勧めておいた。参上の節はよろしく。三郎氏父君は磐瀬玄策翁である。『江戸年代記』の編者である。三郎氏も趣味の人、話も合うのではと思う。昭和21年と判断。

1227 森銃三 xx/4/26 欠落

封書

便箋2枚。東作の「佐二兵衛」、遅くなって申し訳ないが、別紙に写して御覧に入れる。これは古く『日本及日本人』の埋草に出ていた写し置きのものなので、誤植が心配である。林若樹氏所蔵の東作自筆のもの、ただいまどこにあるのだろうか。できれば改めて現物より写して御覧に入れたい。珍本いよいよ御報道に預かり、ありがたく思う。そのうち、川嶋翁上京の折にでも眼福を得たい。便箋2枚目に「佐二びやう衛」写し。差出人住所が「本郷区駒込」につき、昭和20年以前（昭和20年11月13日付川嶋禾舟書簡（書簡328）に森が豊島区長崎町へ転居した記事あり）。

1228 森銃三 xx/12/14 欠落

ハガキ

御芳書拝受、御示教感謝。川嶋翁からもいろいろお教えに預かった。奎堂は今一度書き直さねばならぬものである。その折、訂正に及びたい。橋本香坡の『西遊詩稿』、またまた頂戴痛み入る。広告、ことに珍しい。この人のこともまだまだ調査が行き届かない様子。『西遊詩稿』を務より森へ譲渡。差出人住所が「本郷区駒込」につき、昭和20年以前（昭和20年11月13日付川嶋禾舟書簡（書簡328）に森が豊島区長崎町へ転居した記事あり）。

1230 1229 森井一雄 大正14/7/15 大正14/7/18  
森井康雄 昭和18/6/6 昭和18/6/7

ハガキ

暑中見舞。立山頂上より。スタンプ「立山頂上日本アルプス」。先日失礼した。その節は種々指示をもらい、参考本まで拝借、恐縮である。帰京早々延寿太夫も亡くなり、何かとまごついた。いずれ時を見て実施するが、今日の流派の動きが一番大切だと思う。何かとお骨折りを願う。6月は「うかれ坊主」、歌詞も上品になってはいるが、これだけは元のま

舞台写真をハガキに使用（文面より、「うかれ坊主」か）。

1231	森井康雄	昭和18/11/2	欠落	封書	までやってもらいたかった。以下、配役の紹介を述べる。 用箋(「財団法人大日本興行協会」名入り)4枚。菊輔氏下阪が遅れたので会える時期がまたのびた。小生の出張も商工省・農林省の廃合があつて出かけられず、残念。雑誌の方はなかなか原稿がまとまらない。計画のみで実現困難で困っている。注釈原稿はいつ頃送られる見込みか知りたい。延寿太夫追悼号はなかなか集まらず残念。明治・大正・昭和の3代に分ければ話の筋が通らない。古い太夫は大概忘れていた有様で、誠に骨を折る。一番面白い日光時代からの話と人形町時代からの話を第1に掲載したい。現在の稽古というものは太夫を作る稽古であり素人に教えるものでないと の意見もあり。それに対して何か執筆願いたい。何か一つ最初と巻頭を飾るものをお送り願いたい。春陽堂の件、承知した。別のものを一つ考えてほしい。小唄集の如きものは如何か。巻初に掲載する批評は集まっている。 13日当地出發、京城・新京へ。26日頃神戸着の予定。御都合を伺つた上で 参上したい、久しぶりにて拝眉、楽しみにしている。幸四郎73才の「文屋」、 ますます軽妙で円熟しきつた感あり。初栄太夫・柏太夫等にて三味線は正 寿郎、得 の三千歳も羽左はお家芸だが仁左の三千歳は冷たい感じのする 女郎で、ちょっと心中しがたいことだ。今月の木挽町はドモ又が一番好評。 便箋2枚(「森本便箋」名入り)。年頭の挨拶、改年間もなく他所に行つて いて遅くなった。年来ウワサのみで打ち過ぎていたが、今年はぜひ会つて 御示教願いたい。同封の画会は親交ある氏の個人展である。栄町を通過の 折にお立ち寄り願いたい。押売などはしない、御高覧を得れば光栄である。 東上の趣は坂井兄から伺つていた。当地御在住の間も御無沙汰続き、引つ 越してしまうとなると、何だか名残惜しい。相変わらず御指教を願いたい。 祝御健勝。御移居、早速御通知、感謝。当年は珍しき寒さのお花見で、酒 のやれぬ連中はマントの襟を立てて花の樹の下で震えていた。 宮址)。
1232	森井康雄	xx/5/12	xx/5/12	ハガキ	舞台写真をハガキに使用(文 面より、「文屋」か)。
1233	森本清	昭和9/1/12	昭和9/1/13	封書	画会の案内は現存せず。務が 美術品を収集していた様子が 看取される。
1234	森本清	昭和9/2/19	昭和9/2/19	ハガキ	絵ハガキ(京都松尾西芳寺丸 葉の柳(行基菩薩御手植)。
1235	森本清	昭和9/4/17	昭和9/4/17	ハガキ	絵ハガキ(史蹟の吉野 吉野朝 宮址)。

1247	山口敬堂	昭和9/1/22	昭和9/1/24	八ガキ	寒気見舞申し上げる。賀状感謝。東京へ御転勤の由、遠方へ隔たれ、会見務より山口敬堂に向けて、「古稀
1246	山口敬堂 (幸三郎)	昭和8/1/1	昭和8/1/3	封書	便箋1枚。「恭賦 御題朝海」と題を示して漢文を認める。
1245	山口敬堂	昭和6/2/15	昭和6/2/15	八ガキ	転居通知。
1244	山口	大正13/3/28	大正13/3/28	八ガキ	清元延斎吉追善会有志一同からの、追善会参加に対する礼状(印刷文面)。 差出人住所「長崎諏訪町」。姓のみ記載。
1243	やぶ忠	昭和7/1/1	昭和7/1/3	八ガキ	昭和7年賀状。
1242	柳屋支店	なし	昭和3/11/14	八ガキ	旧店舗新築落成し従来の場所へ復帰したことのお知らせと、展覧会の案内。 「現代諸名家短冊展」(11月18・19日)、「浮世絵展覧会」(11月21・22日)。
1241	森谷書房	昭和3/1/1	昭和3/1/1	八ガキ	昭和3年賀状。
1240	森谷書房	なし	欠落	封書	印刷物1点。古書目録(「古典新集書目」)、追加も含めて全4枚。
1239	森谷書房	昭和21/4/27	欠落	封書	領収書1枚。書籍代として13円領収。 書簡 <sup>1238</sup> (森谷書房)と対応する。
1238	森谷書房	なし	昭和21/4/16	八ガキ	出荷案内。『須磨日記』12円、『東京見物』5円、『万葉伊勢物語』15円。 『東京見物』、『万葉伊勢物語』に取り消し線、返品したらしい。『須磨日記』12円と郵便料金1円で計13円という旨の書入れあり。忍頂寺文庫H70『須磨日記』。書簡 <sup>1239</sup> (森谷書房)と対応する。
1237	森谷書房	なし	昭和20/10/29	八ガキ	出荷案内。『軽口春の遊』25円。 忍頂寺文庫B101-5『軽口春の遊』。
1236	森本清	昭和12/4/15	昭和12/4/15	八ガキ	お手紙ありがたく拝見。よくお帰り下さった。市ヶ谷の桜も結構だが、上方の花はまた格別である。これからはお近くでいろいろお教えを受けることができると思う。いずれお目にかかってから万々申し上げる。(全景)。 絵八ガキ(大和吉野山 中干本)

1254	山口敬堂	昭和13 / 8 / 26	昭和13 / 8 / 26	ハガキ	近來衰病と老懶のため外出していない。氏遺稿印行出来につき一本送る。他からも送られて重複した場合は、人に与えてほしい。
1253	山口敬堂	昭和12 / 4 / 15	昭和12 / 4 / 16	ハガキ	禾舟君にもしばらく会っていない。
1252	山口敬堂	なし	昭和11 / 1 / 2	封書	便箋1枚、印刷物1点、「丙子新年」と題する漢文を認める。五言絶句（乙亥孟冬十一月七十一翁敬堂自題」と傍書）と顔写真を掲載の印刷物を同封。務の帰神を喜ぶ短歌を記す。また拝姿の機もあるだろうと楽しみである。
1251	山口敬堂	昭和11 / 1 / 1	昭和11 / 1 / 1	ハガキ	
1250	山口敬堂	昭和10 / 1 / 1	昭和10 / 1 / 1	ハガキ	昭和10年賀状。
1249	山口敬堂	昭和9 / 4 / 6	昭和9 / 4 / 9	ハガキ	『賀寿俳句集』御恵送感謝。この上のお願ひ、恐れ入りながら何か1首御祝下されたく、楽しみにしている。
1248	山口敬堂	昭和9 / 2 / 5	欠落	封書	寺文施之東京」と題する漢文を認める。 『賀寿俳句集』御恵送感謝。この上のお願ひ、恐れ入りながら何か1首御祝下されたく、楽しみにしている。

の機も少なく相成るかと思心残り。26日陳書会へ参り御会見を得たいが何分老人ゆえいかかと心配している。先日愚弟が来て、貴兄は同窓の先輩だと話していた。『遠山雲如詩集』に忍頂寺士業氏の吟詠唱和を見受けた。これは梅谷のことか、別人か。士業について話を聞きたい。聴秋とは親交のあった人のよつである。以下、「古稀自述」と題する漢詩を掲出。古稀を迎えるにつき、寿言を請いて記念に版行するつもり、1首賜りたい。便箋2枚。『雲如集』の像詩篇、写しを送る。参考になれば結構。広業先生の遺稿があれば見たい。所蔵していないか。これは淡路先輩の伝を集めるためである。数篇の抜き写しでも結構。2枚目の便箋に「奉送忍頂寺文施之東京」と題する漢文を認める。

「忍頂寺務年譜データベース」の「昭和10 / 01 / 07」項を参照。寿詞（昭和9年12月）。

務より山口敬堂に向けて、「古稀に喜に米も祝へや長き春」の句が贈られている。本報告書所収「忍頂寺務年譜データベース」の「昭和10 / 01 / 07」項を参照。忍頂寺文庫D55「敬堂先生古稀寿詞」（昭和9年12月）。

1255	山崎晋次	大正 8 / 8 / 24	大正 8 / 8 / 27	ハガキ	御無沙汰していて申し訳ない。目下スイス旅行中、11月初旬に帰朝の予定。ベルンにて。	絵ハガキ (BERN. Weltpostenkmal und die Alpen.)
1256	山崎麓	昭和 6 / 1 / 1	昭和 6 / 1 / 2	ハガキ	昭和 6 年賀状。	
1257	山崎麓	昭和 12 / 1 / 1	昭和 12 / 1 / 1	ハガキ	昭和 12 年賀状。	
1258	山崎麓	昭和 13 / 1 / 1	昭和 13 / 1 / 1	ハガキ	昭和 13 年賀状。	
1259	山田清作	昭和 12 / 5 / 24	昭和 12 / 5 / 24	封書	巻紙 1 枚。稀書複製会叢書『吉原下職原』出来、1 部送付する。珍書の出現に会員一統満足。御厚情感謝。なお第 10 期で終局とせず続行に奮起せよと三田村翁より言われ、熟慮中。続行の場合は何分御援助を願いたい。	務旧蔵『吉原下職原』は後に赤木文庫へ流出。『語文』70 所収の青田論参考照。
1260	山田清作	昭和 13 / 7 / 14	欠落	封書	昭和 13 / 7 / 14 付…便箋 1 枚。豪雨の被害がなかったとのことと安心して、決定の節あらためてお願い申し上げる。	
1261	山田清作	昭和 14 / 3 / 20	昭和 14 / 3 / 20	ハガキ	昭和 13 / 7 / 1 付…便箋 2 枚。稀書複製会会費拝受。会報紙上に申し述べたとおり、来る秋より複製の新会期を開始したく、書目選定中である。ただ今のところ元禄以前ものは相当に多く心当たりがあるが、それ以後のものが乏しい。あれはと目指しても紙数が多すぎるとか画が少ないとかで困っている。御多忙中恐縮だが、もし召しがあれば御教示願いたい。希望としては、文字の余りに細かいもの、画の少ないもの、遊女評判記、野郎評判記は避けたい。三田村翁にも久しく会っていない。	書簡 1081 (三田村鳶魚) と内容的な関連あり。
1262	山中豊	昭和 26 / 7 / 26	昭和 26 / 7 / 27	ハガキ	暑中見舞。	
1263	山中豊	昭和 26 / 8 / 6	昭和 26 / 8 / 6	ハガキ	御返事感謝。相変わらず仕事をやっている。ラジオを聞いたりレコードを集めたりして、いろいろと町田氏その他に指導を受けて研究している。「へちまは」(カギカッコは原文ママ) 以前英十三氏より『小唄の話』の本を	

- 1264 山村太郎 昭和4/10/21 昭和4/10/21 八ガキ 借りて見せてもらった。その節、なかなか面白いものだった。研究の材料になるものがあつたら通知してほしい。
- 1265 山村太郎 昭和5/9/23 昭和5/9/24 八ガキ 八ガキ拝見した。種々お手数感謝。お言葉に甘え、お手数ながらお送り下さるようお願いする。過日祖父の供で上高地へ行った。紅葉に雄大な風景、誠に愉快。秋雨でアルプスを望めず残念だった。久しく失礼している。過日伺ったところ御不在で残念。来る26日(金)晴天なら伺いたい。御在否はいかがか。
- 1266 山村太郎 昭和5/11/27 欠落 封書 昭和5/11/27付…巻紙1枚。例の積徳堂の現本拝見、雑事で延引し、心ならずも失礼していた。本日松本へ参り藤田君の求められなかつた道念流踊口説お求めのよし、感謝。前書と同様拝見したい。来月参上したい。xx/12/8付…B5版200字詰原稿用紙(採葭堂原稿)名入り)1枚。一昨日は失礼した。貴本を拝借、感謝。その節に話した小生架蔵本目次を送る。
- 1267 山村太郎 昭和6/11/16 昭和6/11/16 八ガキ 過日依頼したグロリアの件、その後いかがか。小生直接面談すべき機会がある節は御一報しだい参上する。その後、東京の藤田君よりも一度問い合(阪城公園)。わせの手紙が来た。なるべくなら相談だけでも取りまとめたい。事実の出版は来春でよい。この点確實の上東京へも再度返答したい。
- 1268 山村太郎 昭和8/4/15 昭和8/4/16 八ガキ 写本の早口うたせ御架蔵の御通知感謝。ぜひ拝借したい。過日小包落手、返事が延引し恐縮である。本月上旬図書館にて「近畿善本展覧会」あり、御覧になるか。拝眉の節、目録1部持参する。
- 1269 山村太郎 昭和8/5/19 昭和8/5/20 八ガキ 久しく失礼している。来る5月25日(木)夕刻お邪魔したい。御都合はいかがか。例の京都帝大本道念節新資料あり。写真を持参したい。御都合御一報を待つ。
- 1270 山村太郎 昭和9/4/22 昭和9/4/22 八ガキ 27日大祭にて休館ゆえ、天長節をかねて上京したい。29日の祭日に久々に お邪魔したい、何とぞ御在宅願う。市電は本村町で下車すればよいか。
- 絵八ガキ(上高地田代池)。  
絵八ガキ(箱根名所) 溪流の  
美掬すべき木質の風色)。  
絵八ガキ(奈良ホテル)。  
絵八ガキ(日向青島) 島の西  
岸に景趣を添ふる檳榔樹 遙か  
に弥生橋を望む)。  
絵八ガキ(大分県川登風連鍾乳  
洞(旧洞) 天上界と瑠璃の池)。

1279	山村太郎	昭和13 / 9 / 25	欠落	封書	巻紙1枚。御帰神以来一度会いたいと思いつながら失礼をしている。過日はお便り感謝。近日伺いたいと思いつながら何かと家事多忙にて伺えないかも
1278	山村太郎	昭和13 / 7 / 6	日付部分印字欠	ハガキ	一昨日来の風水害殊に悲惨の極みである。御尊家様御一同様は無事か。お見舞い申し上げます。
1277	山村太郎	昭和13 / 5 / 23	昭和13 / 5 / 23	ハガキ	昨日は『陳書』9拝受、感謝。いたご歌本の玉稿有益に拝見。例の浅田経師屋(京都の)はその後参上したか。御来阪の折があればお立ち寄りを。
1276	山村太郎	昭和13 / 1 / 22	昭和13 / 1 / 22	ハガキ	友人・野間光辰氏を同道の上一度お伺いしたいが御都合はいかがか。28日(金)・29日(土)は小生宿直ほか用があるので、26日(水)・27日(木)頃にお邪魔したい。差し支えなければ、お返事に時日を指定されたい。久々でお伺いしたい。
1275	山村太郎	昭和13 / 1 / 1	昭和13 / 1 / 1	ハガキ	昭和13年賀状。
1274	山村太郎	昭和13 / 9 / 28	昭和12 / 9 / 29	ハガキ	ただ今早速御返送にあずかり恐縮。実は早くお伺いしたかったところ、6月より打出に参り、9月22日帰阪、吾が祖父(83才)が病気で入院中と何かと多忙で延引し、失礼した。10月にはぜひお会いしてお求めの貴本も拝見したい。
1273	山村太郎	昭和12 / 4 / 15	昭和12 / 4 / 16	ハガキ	今般御帰神の由、御通知感謝。お近くにてまたまた時折拝眉を得られれ何かと好都合に思つ。一度折を見てお会いしたい。篠原南町とは灘区の方か。道順を教えてほしい。
1272	山村太郎	昭和12 / 1 / 1	昭和12 / 1 / 1	ハガキ	昭和12年賀状。
1271	山村太郎	昭和9 / 5 / 4	昭和9 / 5 / xx	ハガキ	過日上京の折はお邪魔して、殊に降雨中を御足勞願い恐縮している。拝借の傘は隣家(軍刀家)へ翌日返しておいたので受け取ってほしい。州白浜)。

絵ハガキ(好色尾花狐あとおひ、山村太郎の住所・氏名入り)。宛名面には山村自筆で「昭和十三年九月廿八日夜」とあり。ここでは昭和12年という消印の記載に従って配列を行った。

絵ハガキ(好色尾花狐あとおひ、山村太郎の住所・氏名入り)。小野文庫所蔵の野間光辰の書簡は昭和13年以降のもののみ、このときに山村が務と野間を引き合わせたものか。

絵ハガキ(朝鮮森林帯分布図)。神戸の水害の話題から、昭和13年と判断。

しれないので、例の都踊口説1冊本日書留便にて御覧に入れる。いずれ10月にはぜひとも伺いして種々御指導いただきたい。

御送付の兵庫口説落手。数日間拝借したい。いろいろお手数感謝。

絵八ガキ(好色尾花狐あとおひ、山村太郎の住所・氏名入り)。

永々拝借の貴本ただ今別便にてお送りした。『古銭づくし』1冊御贈呈下さりお礼申し上げます。

絵八ガキ(おぢは土持ちひのきしん)。『古銭づくし』を務より山村へ譲渡。忍頂寺文庫G<sup>137</sup>1『古銭づくし』。板本が忍頂寺文庫に蔵されることから、このとき譲渡したのは重複本もしくは新たに作成された写本と見るべきか。

絵八ガキ(国立公園日本アルプス上高地)牧場)。

過日は久々に来訪下さり感謝。その節は失礼した。昨日はまたお話の『陳書』<sup>10</sup>御惠贈、感謝。珍書の御紹介有益に拝読した。貴本早速お送り下さり、正に落手した。御高志感謝。病中ゆえノートにやや時間がかかるため、当分拝借したい。『かしく名残捨手綱』は異本なので御返納の折に同封する。御承知のほどを。

忍頂寺文庫G<sup>128</sup>5『かしく名

残捨手綱』、また、別に忍頂寺文庫G<sup>127</sup>『はやりおんどひやうごぶし』中の1冊として合綴もされている。小野文庫<sup>373</sup>はやり音頭兵庫ぶし』(務写)にも詞章が収録されている。

絵八ガキ(国立公園日本アルプス上高地)河童橋より見た

1280 山村太郎

昭和13/11/29

昭和13/11/29

ハガキ

1281 山村太郎

昭和13/12/3

昭和13/12/3

ハガキ

1282 山村太郎

昭和14/4/21

昭和14/4/21

ハガキ

1283 山村太郎

昭和14/6/30

昭和14/6/30

ハガキ

1284 山村太郎

昭和14/7/10

昭和14/7/10

ハガキ

兵庫口説の返送落手。受取の報告まで。



1285	山村太郎	昭和15/3/8	昭和15/3/9	ハガキ	沖森の目録の歌祭文と兵庫口説の本、お宅に参りました由、差し支えなければ拝見したい。貸借をお願いする。	絵ハガキ（南山城一休寺庫 る穂高岳）。
1286	山村太郎	昭和15/8/26	昭和15/8/26	ハガキ	来る28日の夜、藤田学兄の都合よろしき由、夕食後にお伺いしたい。	絵ハガキ（汕頭安平路（民国 二十九年））。
1287	山村太郎	昭和18/4/19	昭和18/4/19	ハガキ	過日は失礼した。その節拝借の本3冊、誠に延引恐縮である。本日書留便にて返納するので、御查收願う。なお、その折に拝見した、『道念末流風流隅田川』1冊、『新板日本山づくし』1冊を、差し支えなければ拝借願いたい。勝手なことながら、御郵送いただきたい。	忍頂寺文庫G125,9『風流隅田 川』、忍頂寺文庫G125,10『新 板日本山づくし』。
1288	山村太郎	昭和18/5/13	昭和18/5/13	ハガキ	たびたび御無体申し上げ恐縮。『ざくろ天神』1冊お返しに参上すべきはずのところ、警報発令のため、誠に勝手ながら書留便にてお送りする。何とぞお受け取りを。御面倒、感謝。お礼かたがた御通知まで。	絵ハガキ（齋盆（高安出土）（中 河内郡 岩本文一氏蔵）。忍頂 寺文庫G47,1『新/板 ざく ろ天神』。忍頂寺務「ざくろ天 神」『陳書』4、昭和9年2月）。
1289	山村太郎	昭和19/8/3	XX/XX/XX	ハガキ	過日は何かとお世話になり、感謝。おかげ様で珍しい所に御案内いただき、終日心身を休められ、よい保養となった。花房氏は不在だったが昼食を御馳走になり、要々はうまくいったこと、誠に好都合である。宿泊料お立替、お手数をかけ恐縮である。いかほどであるか。お返事をいただきたい。	ハガキ代金が3銭なのは、昭 和19年4月から昭和20年4月 までの期間であるため、昭和 19年と判断。
1290	山村太郎	昭和20/11/2	欠落	封書	B4版罫紙（「陸軍」名入り）2枚。ハガキ拝受、感謝。雑用多忙で返事が延引し、恐縮である。去る3月13日夜の大阪初の空襲にかかり、芦屋で8月6日の最後に罹災、前後2度身をもって逃れた。2月末より衣料と図書を疎開すべく準備していたが運輸不便で都合がつかないまま空襲を迎え、無一物となった。収集していた歌謡書、西鶴その他浮世草紙など全部烏有に帰し、放心状態。芦屋市弟宅に一同仮寓したところ、8月に再度罹災。9月中旬、図書館を退職した。宇陀郡の山奥で野菜などの物資はある	罫紙の「陸軍」に取り消し線 を施す。宛先住所と戦災の話 題より、昭和20年秋と判断。

1297	山村太郎	xx / 5 / 17	欠落	封書	が、阪神間なみの間値である。藤田学兄は気の毒だった。昨年来連絡がつかず案じていたが、新聞にて下関市で戦災死したことを知った。お見舞もしないままとなっている。家族は下関市にいると思うが住所不明。玉樹も罹災後会っていない。その他、友人知人の疎開先も不明のまま、皆さまには御無沙汰をしている。雑用多々あつて阪神間に出向くので伺いたい気持ちはあるが、交通不便で、そのため数日分の食糧をもつて行くことを思うと出かけにくい。11月になって少しは交通が緩和したらぜひお会いしたい。
1296	山村太郎	xx / 12 / 26	欠落	封書	大阪大学法文学部図書室への就職と転居の通知。
1295	山村太郎	xx / 6 / 27	xx / xx / xx	ハガキ	御近況の貴書拝見。今春来御病臥の趣、少しも知らず失礼した。御自愛願う。立売堀戦災後、打出にて再度遭い、終戦後別府市に移り、今日なお家族はそちらにいる。このたび就職はしたが、なかなか家がなく困っている。生駒には大福寺といったか寺があり、父が懇意にしていたが、住職が変わっているかもしれない。いずれお見舞に参上し、積もる話をしたい。
1294	山村太郎	昭和 27 / 1 / 1	昭和 27 / 1 / 1	ハガキ	転居通知。
1293	山村太郎	昭和 26 / 10 / xx	昭和 26 / 10 / 22	ハガキ	昭和 27 年賀状。明 2 日、少々で伺いたい。
1292	山村太郎	昭和 26 / 7 / 7	昭和 26 / 7 / 7	ハガキ	久しく拝借の写本、兵庫うたせ本ただ今郵便小包にて御返送したので、受け取り願いたい。来月上旬、一度お会いしたい。
1291	山村太郎	昭和 26 / 6 / xx	昭和 26 / 6 / 23	ハガキ	巻紙 1 枚、紙片 1 枚。その後公私雑務に追われがちで、先日拝借の貴本まだ写せていない。延引し、恐縮。年内も日わずかで到底できかねるので、勝手がましいが差し支えなければ新春までお貸し願いたい。務自筆で山村の住所と肩書き（文学士 大阪府立図書館在勤）を記した紙片を同封する。便箋 2 枚。過日來館の折は失礼した。その節、美味なる品御惠贈、感謝。御退館の際、小生書庫に行っていて不在にしており、失礼した。配給品に比して味がよく、毎日賞味している。ありふれた品だが、日向宮崎産の干切大根少々郵送する。御笑納願う。

1298	山村太郎	xx / 9 / 26	日付部分印字欠	ハガキ	先般は夜分お伺いし、失礼した。その折拝借の本、とつくに返納すべきところ、例の写真を同封したく思い延引していたが、なお今日に至っても写真が出来上がらず、あまりの延引も失礼と思い、貴本のみただ今書留便でお送りしたので、御査収願いたい。写真は出来上がり次第、1部贈呈する。出か。	絵ハガキ(三重県立図書館)。
1299	山本恵一ほか	昭和10 / 6 / 3	なし(封筒欠)	カード	山本治郎死亡通知。	
1300	湯朝竹山人	大正14 / 8 / 14	大正14 / 8 / 14	ハガキ	函館より短信を呈し御返事および雑誌等函館へお届け下さるようお願いしたところ、旅程変更になったので、今日以後の郵便物は本郷の石川君の従吾所好社気付にてお届け願ひ上げる。旅行中執筆大儀ゆえ9月末帰京までこれにて失礼いたしたく、お許し願ひたい。北海道小樽途中。	絵ハガキ(江差港湾の一部(熊本商店発行))。
1301	夕霧会	昭和2 / 12 / xx	昭和2 / 12 / 26	封書	印刷物2点。第2回夕霧雑談会(1月6日午後4時、新町九軒吉田屋)の案内。「夕霧大夫のふみ」(吉田屋蔵版)複製。	夕霧会のメンバーとして、高安六郎、木谷蓬吟、南木芳太郎の名が記される。
1302	夕霧会	昭和3 / 12 / xx	欠落	封書	印刷物1点。第3回夕霧雑談会(1月6日午後4時、新町九軒吉田屋)の案内。	夕霧会のメンバーとして、高安六郎、木谷蓬吟、南木芳太郎の名が記される。
1303	祐田善雄	昭和18 / 4 / 13	欠落	封書	昭和18 / 4 / 13付…巻紙1枚。先日参上の折には奇書珍籍を拝見、感謝。一中節正本4冊借覧をお許し下さり、今からノートをとるのが楽しみである。稀覯書につき、できれば全文書写したい。許可を願ひたい。昭和18 / 4 / 13付…ハガキ。今朝差し出した礼状に一中節正本4冊とあるのは誤記で、実際は6冊である。お詫ひする。昭和18 / 6 / 22消印…ハガキ。書物を長々拝借し、おかげで全文書写できた、感謝。木・金・土の3日間のうちに返却に行く。先日とは奇書拝見、眼福。拝借の書物2冊を別便で書留小包で送る。長々拝借感謝。来月にまた訪ねる。	
1304	祐田善雄	昭和19 / 8 / 15	昭和19 / 8 / 15	ハガキ		

1305 祐田善雄

xx / 6 / 23 (封筒)、xx / 10 / 23 (便箋)

封書

便箋2枚。封筒差出人は祐田だが、書簡は祐田の妻によるもの。明24日に拝借の本を返却に行く予定だったが、急病のため行けなくなり、別便の書留小包で送った。回復次第、お詫びとお礼に伺いたい。

封筒と便箋で差出日付が異なるが、本文中に梅雨時である旨が述べられており、6月23日が正しいと考えられる。

1306 横山岩吉

昭和9 / 2 / 19 欠落

封書

便箋2枚。東京に御滞在の御通知に接し拝承した。その後御無沙汰、失礼。この4月上旬子供の学校のため上京するので、ぜひお会いして先般御迷惑をおかけしたことのお詫びを申し上げたい。こちらはまだ降雪があるが晴天の日は割合暖かい。当地を通過する折があればぜひ遊来願いたい。

差出人住所「青森県上北郡浦野館村字八幡 東北牧場」。宛先住所より昭和9年と判断。

1307 横山岩吉

昭和15 / 1 / 1 昭和15 / 1 / 1

ハガキ

昭和15年賀状。

1308 吉井良尚

昭和14 / 3 / xx なし(封筒欠)

カード

改名の挨拶。父・良秀が逝去、跡目相続を機に旧名・太郎を良尚と改める。御健祥であるか。無沙汰の義お赦し下されたい。さて、例の様仙の代、長沼氏より確かに落掌したので、御承知下されたい。また、例の博文公筆、先方へかけ合い120円に話を取り決めたがいかがか。是非ともお買い上げを願いたい事情あり。市価よりは余程安いので、何分折り入って願ひ入れる。

1309 吉田潔

なし

ハガキ

改名の挨拶。父・良秀が逝去、跡目相続を機に旧名・太郎を良尚と改める。御健祥であるか。無沙汰の義お赦し下されたい。さて、例の様仙の代、長沼氏より確かに落掌したので、御承知下されたい。また、例の博文公筆、先方へかけ合い120円に話を取り決めたがいかがか。是非ともお買い上げを願ひ入れる。市価よりは余程安いので、何分折り入って願ひ入れる。

絵ハガキ(第8回文部省美術展覧会出品 橋本関雪筆 南国(其一))。

1310 吉田潔

なし

ハガキ

桃太郎の人形の写生。近頃伏水で出来た人形の写生、絵は難しい。

1311 吉田潔

なし

ハガキ

線香立の写生。昨夜は失礼した。これは木米作線香立の写生である。御笑覧下されたい。酔筆も一寸可笑しいものである。

1312 吉田潔

なし

ハガキ

饅頭食いの人形の絵。饅頭食いの人形を1つだけ写生した。

1313 吉田潔

なし

ハガキ

助六の人形の絵。飛んだりねたりの助六である。御笑覧下されたい。

1314 吉田潔

昭和22 / 1 / 17

ハガキ

『江戸名勝詩』『すきや風呂』代金27円受領の通知。

忍頂寺文庫C26『狂/歌すきや風呂』宛名面に務書入れ「paid 28 / 6」。

1315 吉田書店

昭和22 / 6 / 19

ハガキ

注文書籍送付と代金の通知。『多代句集』3冊60円、『神の苗』1冊80円、送料10円、計150円。『者千句』、『早苗のみ』は売れてしまった。悪しからず御諒承願つ。

3『晴霞句集』(外題「多代句集上(下) / 辞世集」)、忍頂

1322	1321	若月保治	なし	昭和4/1/XX	昭和2/11/26	ハガキ	お変わりなくて何より。御返事まことに恐れ入る。お礼申し上げます。
		若月保治	なし	昭和4/1/XX	昭和4/1/1	ハガキ	昭和4年賞状。
1320		若月保治	なし	昭和2/11/20		ハガキ	御無沙汰している。此節は研究は如何か。私は近松の全訳をやり出し第1巻が近く出来る。御知人に御紹介下されたい。高田四十平さんの住所を御存じではないか。俳句でも少し送ってもらおうと思っている。湊川神社とかにと永田さんが話していたのが数年前。御存じだったら知らせてほしい。
1319		陸軍恤兵部	明治37/12/XX	明治37/12/19		ハガキ	明治37年における成業は、中学教育を終え専門教育に移り、日露戦役は第一期を了え第2期作戦となり、まさに平和の戦争が開始されようとしている。熱心に学術や作戦法を研究し、列強間の強国であり東洋の盟主である帝国の驍将となれ。
1318		吉田鏗次郎 (浅野誠次)	なし	XX/XX/XX		ハガキ	その後御無沙汰している。内地は酷暑の様子、お変わりないか。当方到着以来達者、御安心下されたい。
1317		吉田書店	昭和26/7/XX	昭和26/7/19		ハガキ	暑中見舞。「新収書略目」を掲載。
		(浅野誠次)					寺文庫D29『神の苗』。 宛名面に書入れ「婚礼仕様袋 一 改正香道秘伝 二 四十 八手最手(セキトリ)鏡 一 交易問答 一 香道階級目録」。 忍頂寺文庫D31『留守の琴』。 小野文庫419『(手帳)昭和二十 二年度』に、昭和22年10月 3日の記録として「吉田書店 送金250。」と記載あり。
		吉田書店	昭和22/10/7	XX/XX/XX		ハガキ	『俳書 留守の琴』1冊代金250円受領の通知。

1341	1340	1339	1338	1337	1336	1335	1334	1333	1332	1331	1330	1329	1328	1327	1326	1325	1324	1323
和 田 萬 吉	和 田 萬 吉	和 田 萬 吉	和 田 萬 吉	和 田 萬 吉	和 田 萬 吉	和 田 萬 吉	和 田 萬 吉	和 田 萬 吉	和 田 辰 雄 ほ	若 月 保 治	若 月 保 治	若 月 保 治	若 月 保 治	若 月 保 治	若 月 保 治	若 月 保 治	若 月 保 治	若 月 保 治
昭 和 6 / 1 / 1	昭 和 5 / 1 / 1	なし	大 正 15 / 10 / 8	大 正 15 / 9 / 17	大 正 14 / 10 / 31	大 正 14 / 7 / 24	大 正 14 / 3 / 13	大 正 13 / 12 / 7	昭 和 9 / 11 / 21	なし	昭 和 12 / 1 / 1	昭 和 11 / 1 / 1	昭 和 9 / 1 / 1	なし	昭 和 8 / 1 / 1	昭 和 7 / 1 / 1	昭 和 6 / 1 / 1	昭 和 5 / 1 / 1
昭 和 6 / 1 / 1	昭 和 5 / 1 / 1	昭 和 3 / 1 / 1	大 正 15 / 10 / 9	大 正 15 / 9 / 18	大 正 14 / 11 / 1	なし	大 正 14 / 3 / 13	大 正 13 / 12 / 7	「 駒 込 局 市 内 郵 便」、 日 付 なし	xx / 4 / xx	昭 和 12 / 1 / 1	昭 和 11 / 1 / 1	昭 和 9 / 1 / 1	昭 和 8 / 6 / 30	昭 和 8 / 1 / 1	昭 和 7 / 1 / 1	昭 和 6 / 1 / 1	昭 和 5 / 1 / 1
ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	封 書	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ	ハ ガ キ
昭 和 6 年 賀 状。	昭 和 5 年 賀 状。	昭 和 3 年 賀 状。	菅 竹 浦 君 御 発 刊 の 『 江 戸 時 代 』 創 刊 号 惠 贈 感 謝。	『 延 寿 清 話 』 11 の 礼 状。	『 延 寿 清 話 』 9 の 礼 状。	『 延 寿 清 話 』 8 の 礼 状。	『 延 寿 清 話 』 6 の 礼 状。	『 延 寿 清 話 』 5 の 礼 状。	和 田 萬 吉 死 亡 通 知。	『 延 寿 清 話 』 の 礼 状。 久 し く 消 息 を 聞 か な か つ た が、 御 勉 強 の 趣 を 御 高 贈 の 『 延 寿 清 話 』 で 承 知 し た。 羨 ま し い こ と と 思 う。 帰 郷 の 折 に で も い つ か お 目 に か か り た い。	『 延 寿 清 話 』 の 礼 状。 久 し く 消 息 を 聞 か な か つ た が、 御 勉 強 の 趣 を 御 高 贈 の 『 延 寿 清 話 』 で 承 知 し た。 羨 ま し い こ と と 思 う。 帰 郷 の 折 に で も い つ か お 目 に か か り た い。	『 延 寿 清 話 』 の 礼 状。 久 し く 消 息 を 聞 か な か つ た が、 御 勉 強 の 趣 を 御 高 贈 の 『 延 寿 清 話 』 で 承 知 し た。 羨 ま し い こ と と 思 う。 帰 郷 の 折 に で も い つ か お 目 に か か り た い。	『 延 寿 清 話 』 の 礼 状。 久 し く 消 息 を 聞 か な か つ た が、 御 勉 強 の 趣 を 御 高 贈 の 『 延 寿 清 話 』 で 承 知 し た。 羨 ま し い こ と と 思 う。 帰 郷 の 折 に で も い つ か お 目 に か か り た い。	30 年 ぶ り に お 声 を 聞 い た。 そ の 翌 朝 秋 庭 君 が 来 て、 あ な た の こ と な ど い ろ と 話 し た。 御 上 京 の 折 は 立 ち 寄 っ て ほ し い。	昭 和 8 年 賀 状。	昭 和 7 年 賀 状。	昭 和 6 年 賀 状。	昭 和 5 年 賀 状。

『延寿清話』1（大正13年3月）の礼状か。ハガキの大きさが小さい点、4月の差出である点から推測される。その場合は大正13年。

1342	和田萬吉	昭和7/1/1	昭和7/1/1	ハガキ	昭和7年賀状。
1343	和田萬吉	昭和8/1/1	昭和8/1/1	ハガキ	昭和8年賀状。
1344	和田萬吉	xx/11/17	欠落	封書	巻紙2枚。御高著出刊の都度惠贈を蒙り忝い。多大の興味をもって拝読し、受益少なからず。厚くお礼申し上げます。頒送の節、小生の宛所に「東京音楽学校」の肩書があるが、同校に関係はない。結局転送ということになるので、今後は左記の私宅宛にお願ひしたい。第一回以来の御惠本、感謝。
1345	渡辺霞亭	なし	大正13/4/17	ハガキ	『延寿清話』2の礼状。『江戸清話(ママ)』感謝、大変面白く拝見した。第1冊があれば御惠贈願ひたい。まとめて置きたいと思うので。
1346	渡辺霞亭	大正13/4/21	大正13/4/21	ハガキ	『延寿清話』1、惠贈感謝。
1347	渡辺霞亭	大正14/10/30	大正14/10/30	ハガキ	『延寿清話』9の礼状。
1348	綿谷雪	昭和8/1/1	昭和8/1/1	ハガキ	昭和8年賀状。
1349	わたる	なし	昭和3/12/4	封書	クリスマスカード。
1350	BURUSSELS MUNICIPAL COUNCIL	なし	大正12/xx/xx		「Fifth Official Commercial Fair」(1924年4月)の案内。
1351	差出人名なし	大正6/12/28	大正6/12/29	ハガキ	27日夜行にて出発、本朝当地着。御多幸なる御迎年を祈る。
1352	差出人名なし	昭和10/1/1	昭和9/12/31	ハガキ	昭和10年賀状。

絵ハガキ(大阪城(天守閣跡))。  
絵ハガキ(安芸(三津 鸚鵡石))。

署名「wataru」。消印

「BOSTON.MASS.」。書簡784  
(E.W.Nishio)と筆跡が似通う。消印の差出地も共通。「に  
しおわたる」なる同一人か。  
務が昭和20〜23年にその住ま  
いに身を寄せた、西尾類蔵の  
縁者である可能性があるか。  
ブリュッセルからの書簡。

絵ハガキ(箱根・富士屋ホテル)。

ハガキ絵柄は「南淡の風俗」。

し

1353 差出人名な 昭和11/7/14 昭和11/7/14 八ガキ 明15日帰宅、翌16日出務する。御通知まで。

家族の名と年齢が列挙されるが、名字ならびに差出人本人の名が不明。淡路の人間からか。消印は「兵庫・」、不鮮明で判読できず。  
絵八ガキ（箱根・富士屋ホテル）。

1354 差出人名な xx/2/21 なし（封筒欠） 封書 便箋2枚。The Hollenden ホテルから。「神戸高商の東氏」「柴田氏」「ポーン氏」「貴君の英文」「タイプライター」などの語が見えるが、判読困難で全体の文意はつかめず。  
Cleveland JAMES H. THOMPSON, MANAGER. J.

1355 差出人名未 明治40/8/22 明治40/xx/22 八ガキ 久しぶりで洋服を着た。夏の暑さを感じている。昨日天神橋あたりで泳いだ。だが、流れは急で水は濁っていて早々にやめた。明後日には再びコートにボールをにらんでお目にかかる。  
絵八ガキ（大阪天神橋）。「Sugar」と署名があるが、素性は不明（「佐藤」姓の者か）。内容より、神戸高商の友人か。

1356 差出人名未 なし 大正9/12/29 八ガキ 賀状。  
絵八ガキ（BUSINESS SECTION OF CHICAGO, LOOING EAST OVER CHICAGO RIVER）。シカゴからの書簡。

1357 差出人名未 大正10/1/1 大正10/1/7 八ガキ 賀状。  
判読

差出人の肩書は「露領浦潮斯徳 松田銀行部」とあり、ロシアのウラジオストツクからの書簡。消印2種あり。ロシアの消印に「191218」神戸の消印に「10.17」がある。



1358	差出人名未 判読	大正12 / 3 / 14	大正12 / 3 / 14	ハガキ	東京では失礼した。10月16日に当地に着いた。ロンドンにて。	絵ハガキ (LUDGATE HILL AND ST. PAUL'S FROM LUDGATE CIRCUS)。ロンドンからの書簡。
1359	差出人名未 判読	昭和4 / 8 / 3	昭和4 / 8 / 3	ハガキ	城崎からの御発信、感謝。島本君は7日頃になる由。当地26日の雨にも大して恵まれず、今夜山神社で雨乞いをするとのこと。10日過ぎに帰るつもり。酒井家にて。	絵ハガキ (紀伊湯崎温泉場崎の湯夕照)。
1360	差出人名未 判読	なし	昭和5 / 2 / 27	ハガキ	震災直後のまだ何も無い頃以来なので、ほとんど見当がつかない。一昨夜銀ブラからホテルへ帰るのにも迷って同じところを回ってしまった。	絵ハガキ (丸の内ホテル)。
1361	差出人名未 判読	昭和9 / 2 / 22	xx / 2 / 22	ハガキ	御来訪感謝。月初より当地に来ている。月末に帰京、3月1、2日頃にぜひ来宅下されたい。お返事は森の住所へ。アルバムの件で御相談をぜひしたい。	絵ハガキ (伊豆熱海温泉) 水口園)。宛先住所より昭和9年と判断。
1362	差出人名未 判読	昭和9 / 4 / 8	xx / xx / xx	ハガキ	英文。とても静かな旅である。あなたが忙し過ぎないことを願っている。	絵ハガキ (Raffles Museum)。シンガポールからの書簡。
1363	差出人名未 判読	なし	昭和15 / 4 / 8	ハガキ	過日御来訪、深謝。薬学会にて東上、遥かに御健康を願い上げる。	絵ハガキ (大東京) 豪壮なる議事堂)。
1364	差出人名未 判読	なし	日付部分印字欠	ハガキ	英文。判読困難。	絵ハガキ (Nippon Yusen Kaisha S.S. "YOKOHAMA MARU")。
1365	差出人名未 判読	なし	xx / xx / xx	ハガキ	退屈のぎに箱根へ出かけた。芦の湖の水は相も変わらず静かで碧い。閑所で使用した住所の印を押して絵ハガキ別封でお目にかける。封筒が一枚しかないため、濱家先生宛に送る。庭先をこそそはいまわる「山ガ二」を追いまわすのにも飽きた。月末には帰る。	宛名は「忍頂寺務 全琴代様」。絵ハガキ (箱根名勝箱根芦ノ湖の倒富士)。

附・小野文庫422〔忍頂寺務宛書簡〕差出人氏名リスト

凡例

一 本リストは、大阪大学附属図書館蔵小野文庫422〔忍頂寺務宛書簡〕に所蔵される忍頂寺務宛書簡計一三六五点の差出人氏名を五十音順に配列して一覧にし、各差出人から差し出された書簡の目録整理番号を示したものである。

一 差出人氏名の表示方法は、書簡目録の方針に準じた。差出人氏名について、他の項目との関連から注記が必要と判断した場合は、その差出人に関する情報を（ ）内に「」で示した。

一 書店からの書簡で、店主名が併記されているものについては、書店名を主たる項目として立て、店主名はその後ろに（ ）に入れて示した。ただし、店主名からも当該書簡にたどりつけるよう、店主名も見出しとして示し、書店名の項目を参照項目として「」の後ろに示した。

一 連名で差し出された書簡については、二名連名のものは両名の氏名を「・」でつないで示し、三名以上のもは筆頭の差出人氏名のみを示して後ろに「ほか」と記した。

一 連名書簡の二番目以降の差出人については、それぞれの差出人の項目において、連名書簡の項目を参照項目として「」の後ろに示すことで、各差出人の氏名から当該書簡にたどりつけるようにした。ただし、死亡通知の差出人名として親族名・友人名等を列挙している例については、このような扱いをとらなかった。

一 死亡通知については、誰の逝去を知らせているかという情報を、差出人名の後ろに「」に入れてあわせて示した。また、故人の氏名も項目を立て、死亡通知の差出人氏名を参照項目として「」の後ろに示すことで、故人の氏名からも当該書簡にたどりつけるようにした。

\*

\*

\*

\*

\*

【あ】

青木泰	1	秋田信太郎		渥美清太郎	10	有山麓園	28
青柳秀雄	2	「秋田佐喜子ほか」		天野謙二郎	22・23	飯島花月（保作）	30
青山督太郎	5	秋庭太郎	7・8	天野正一	24	飯塚友一郎	61
「齋藤昌三・青山督太郎」		朝倉無声（亀三）	9	天野泰三郎	25	井口政治	71
秋田佐喜子ほか（秋田信太郎死亡通知）	6	浅野誠次		荒木	26	池上幸二郎	77
		「吉田書店（浅野誠次）」		荒木伊兵衛書店	27	池田松華（叢雲、立堂）	79
							137

池長孟	138	伊原敏郎	189	大曲駒村遺著顕彰会	257	喜田哲郎	370
伊三次	139	磐瀬三郎	198	岡信吉	258	北田彦三郎	371
石井貴一郎	140	内田治ほか〔内田良平死亡通知〕	199	小笠原久恒	259	木谷蓬吟	372
石川巖	148	内田誠	200	岡松茂	260	樹下快淳	377
石谷柑圃	148	内田良平	201	岡村清道〔清元栄寿太夫(5世)ほか〕	261	木村三四吾	381
〔大谷繞石(正信)・石谷柑圃〕		〔内田治ほか〕	202	か〔清元栄寿太夫(4世)死亡通知〕	262	清元梅吉(3世)	382
石塚清	149	内田魯庵(貢)	203	〔清元栄寿太夫(5世)ほか〕	263	清元栄寿太夫(4世)	385
石橋開蔵	150	江口良橋	204	岡本綺堂(敬二)	263	〔岡村清道(清元栄寿太夫(5世)ほか)〕	386
石橋鎌太郎	151	江戸時代文化研究会	205	尾崎久弥	272	〔清元延寿太夫(5世)・清元栄寿太夫(4世)〕	388
石割夕きほか〔石割松太郎死亡通知〕	152	頼原退蔵	207	尾崎行武	284	ほか	389
石割松太郎	153	〔石割松太郎ほか9名〕	215	片与利	285	〔清元延寿太夫(5世)・清元栄寿太夫(4世)〕	387
〔石割夕きほか〕	154	大阪亜鉛鉱業株式会社〔塩見政次死亡通知〕	216	勝本清一郎	287	清元栄寿太夫(5世)ほか〔清元延寿太夫(5世)死亡通知〕	387
〔鈴木南陵(好太郎)ほか10名〕	155	大阪朝日会馆	217	嘉納純	288	〔岡村清道(清元栄寿太夫(5世)ほか)〕	389
石割松太郎ほか9名	155	大阪朝日新聞社学芸部	218	河合たね	290	清元延壽吉	388
磯ヶ谷紫江	169	大阪国史会	219	川口一郎	291	清元延壽太夫(5世)	389
市場	170	太田幸子・泰	220	川嶋禾舟(右次)	292	〔清元栄寿太夫(5世)ほか〕	390
伊藤述史	171	太田保一郎	221	河竹繁俊	359	清元延壽太夫(5世)	391
伊藤長蔵	177	太田泰	222	〔鈴木南陵(好太郎)ほか10名〕	358	清元延壽太夫(5世)・清元栄寿太夫(4世)	391
伊藤継郎	178	〔太田幸子・泰〕	230	川辺賢武	366	清元佐登美太夫	392
伊藤櫛堂	180	太田陸郎	231	関西彩壺会	368	清元太兵衛	394
稲垣寛一	181	大竹健二	232	岸本稲蔵	369	清元千歳太夫	395
稲垣仁山	182	大谷繞石(正信)	242	〔石割松太郎ほか9名〕		清元延益きぬ	396
井上熊太郎	183	大谷繞石(正信)・石谷柑圃	243	喜多莞次		九樽道人	398
井上堅	184	大曲駒村(省三、九樽道人)	244	〔椿書林(喜多莞次)〕			399
井上書店	188		256				

			「大曲駒村（省三・九樽道人）」		
黒岩経雄					400
黒木勲蔵					401
黒崎貞枝（奈良之助）					408
「石割松太郎ほか9名」					
「黒崎羊太郎ほか」					
黒崎羊太郎ほか					409
黒崎羊太郎ほか（黒崎貞枝（奈良之助） 亡通知）					死
慶吉		410			411
小泉迂外		412			416
小泉迂外・なつを					417
小泉なつを					417
「小泉迂外・なつを」					
河野孝二郎					
「石割松太郎ほか9名」					
弘文荘（反町茂雄）		418			420
神戸史談会		421			429
神戸文化懇談会					430
古在由直					431
古書交換同好会		432			434
小寺融吉・清水和歌					435
古典文庫		436			437
後藤捷一		438			439
小西一四三					440
駒田彦之丞		441			446
「菅野米二ほか」					
【七】					
齋藤昌三		447			467
齋藤昌三・青山督太郎		468			469
坂井華溪					470
坂田将治					471
佐々嘉寿磨（常磐津式寿）					472
「佐々幸男ほか」					
佐々幸男ほか（佐々嘉寿磨（常磐津式寿） 死亡通知）					473
笹本寅					474
佐谷孫二郎					474
「石割松太郎ほか9名」					
澤口泰憲		475			479
澤田薫		480			484
塩見政次					485
「大阪亜鉛鉱業株式会社」					486
鹿田松雲堂（鹿田静七）					486
鹿田静七					486
「鹿田松雲堂（鹿田静七）」					
柴田音吉商店					487
柴田宵曲					487
「鈴木南陵（好太郎）ほか10名」					
渋井清					488
思文閣（田中新）		489			494
島金平					495
島田勇雄					496
島田清		497			516
島田小市		518			520
島田筑波					517
「鈴木南陵（好太郎）ほか10名」					
島田俊枝					521
島村幹一					522
島本得一		551			557
清水和歌					550
「小寺融吉・清水和歌」					
下川浩造					558
書史会同人					559
書物談話会					560
書物展望社					561
新興古書会					561
「弘文荘（反町茂雄）」					
菅竹浦（稻吉）		562			588
菅野米二ほか（駒田彦之丞死亡通知）					589
杉浦正二郎					590
杉本要					591
「石割松太郎ほか9名」					
「杉本梁江堂（杉本要）」					
杉本梁江堂（杉本要）					592
鈴木南陵（好太郎）					592
鈴木南陵（好太郎）ほか10名					496
瀨川龜					594
関根正直		602			604
曾我友兄					605
反町茂雄					605
「弘文荘（反町茂雄）」					
【八】					
高岸拓川（豊太郎）		606			611
高倉觀崖					612
高田蝶衣					613
高野辰之		614			622
高原慶三		623			627
高安月郊					628
高安六郎					628
「石割松太郎ほか9名」					
瀧宜睦					629
竹内文平					629
「石割松太郎ほか9名」					
竹重虚心（隣一）					631
「竹重徳芳・トク」					630
竹重トク					631
「竹重徳芳・トク」					630
竹重徳芳・トク（竹重虚心（隣一）死亡通 知）					631
竹柴二朔					631

竹未乾一		津田隆	659・	中村不二尾		濱田義一郎	865
武田信賢	633	椿書林(喜多莞次)	661	「辰巳屋書店(中村不二尾)」		早川石松	874
竹中政一・トシ	636	坪内逍遙	662	中村幸彦	716	原田棟一郎	881
竹中恒夫(山口敬堂(幸三郎)死亡通知)	637	坪田豊年	663	半井桃水	762	板龍齋	882
竹中トシ		鶴岡春三郎	674	成富武夫	764	坂東三津五郎(7代目)・坂東三津五郎(8代目)(養助(6代目)・八十助(3代目))	885
「竹中政一・トシ」		寺澤智了(了)	676	南木芳太郎	783	代目(養助(6代目)・八十助(3代目))	888
多田英光	638	天祥院	696	E.W.Nishio	784	坂東三津五郎(8代目)(養助(6代目)・八十助(3代目))	890
辰巳屋書店(中村不二尾)	640	典籍学会	697	西野	786	坂東三津五郎(8代目)(養助(6代目)・八十助(3代目))	901
館岡鶴松	642	天理図書館	698	西村實一	787	「坂東三津五郎(7代目)・坂東三津五郎(8代目)」	886
立脇泰山	643	東林書房	701	西山吟平	800	「坂東三津五郎(7代目)・坂東三津五郎(8代目)」	890
田中香涯(祐吉)	645	常磐津式寿	702	日本近世文学会	804	「日田光敏・日田勇作」	903
田中菜	647	「佐々嘉寿磨(常磐津式寿)」	705	忍頂寺務	815	東田清三郎	902
田中治之助		富永牧太		野崎左文	818	日田光敏・日田勇作	
「英十三(田中治之助)」		豊仲末迷		野田雄宏	825	日田勇作	
田中新		鳥居言人		野々村蘆舟		「日田光敏・日田勇作」	
「思文閣(田中新)」				「鈴木南陵(好太郎)ほか10名」		日野彌三郎	904
谷本富	648			野間光辰	826	廣田健一郎ほか(廣田星橋(金松)死亡通知)	906
玉川巳代治	649			【は】		廣田星橋(金松)	907
玉樹香文房(玉樹安造)	651			間民夫		「廣田健一郎ほか」	921
玉樹安造	654			「鈴木南陵(好太郎)ほか10名」		廣田政之進	922
「玉樹香文房(玉樹安造)」				服部善四郎	833	廣田健一郎ほか	925
玉村晴朗	655			服部善四郎	836	弘仲定潔	927
塚本梢良	657			服部善白		福井菊三郎	926
辻本写真工芸社	658			「鈴木南陵(好太郎)ほか10名」	837	藤井乙男	931
				英十三(田中治之助)	864		
				中村吉蔵	713		
				中村桂風	714		
				中村正二郎	715		
				【な】			
				中尾方一	707		
				永田秀次郎	709		
				中谷保一	711		
				中野康章	712		
				「石割松太郎ほか9名」			
				中村不二尾	660		
				「辰巳屋書店(中村不二尾)」			
				中村幸彦	716		
				半井桃水	762		
				成富武夫	764		
				南木芳太郎	783		
				E.W.Nishio	784		
				西野	786		
				西村實一	787		
				西山吟平	800		
				日本近世文学会	804		
				忍頂寺務	815		
				野崎左文	818		
				野田雄宏	825		
				野々村蘆舟			
				「鈴木南陵(好太郎)ほか10名」			
				野間光辰	826		
				【は】			
				間民夫			
				「鈴木南陵(好太郎)ほか10名」			
				服部善四郎	833		
				服部善四郎	836		
				服部善白			
				「鈴木南陵(好太郎)ほか10名」			
				英十三(田中治之助)	837		
					864		

